

新書太閤記

第四分冊

吉川英治

青空文庫

露のひぬ間

九死に一生を得、しんがり殿軍の任を果して歸つた将士が、京都に歸りついた第一夜の望みは、

「とにかく寝たい！」

それだけだった。

君前に報告を終つて、さが退つて来る途中からもう藤吉郎は、
「寝るのだ寝るのだ」

と、居眠りながら歩いていた。

それが、四月三十日の宵であつた。翌る朝、ちよつと眼がさめ

たが、また寝てしまった。午ひるごろ揺り起されて、粥かゆを喰べたが、その味もまだ美味うまいと感じるだけで夢うつつだった。

「また、お寝やすみですか」

側の者も、呆あきれ顔した。しかし、さすがに二晩目は、宵のうちに眼がさめて、大欠伸おおあくびを一つすると、それから体をもて余してしまった。

「おい、幾日か、きようは？」

そんなことを訊いたりした。

次の間の詰つめぎむらい侍が、

「二日でございます」

と、答えると、

「えッ、では明日は三日か」

と、驚いた顔した。

「二日か。ではもう御主君にも、お疲れは癒え^いたろう。……いや、心の疲れはどうかかな？」

独り言をもらしながら起ち上がって、持て余した体を室外へ運んで行つた。

皇居を造営し、將軍の新館も信長が建築したものであるが、まだ信長自身は、洛中に館^{やかた}を持つていない。上洛のたびに寺院住居である。そして幕下の諸将は、境内の末院を宿舎としていた。

藤吉郎は、その一院を出て、久しぶりこの世の美しい星を仰いだ。もう五月になるかと思う。

「生きているな。この体」

と、ぴちぴち意識する。何だか非常にうれしいのである。

夜中だが、信長に眼通りを願った。待っていたようである。すぐ会った。

「藤吉郎、何がうれしいのだ。非常にそちは爽やか^{さわ}そうに、にこにこしておるではないか」

「これが欣^{うれ}しくなくて何といたしましょう——と、彼は答えた。

「日頃は、この生命など、有るとも持っていると、ありがたくは覚えませんが、死中から拾ってみると、なんとも、愛^{いと}しくて、
歡^{よろこ}ばしくて、生命^{いのち}のほか、何物も要^いらない気がいたします。——
こうして、燭^{しよく}の明りを見られるのも、殿のお顔を仰がれるのも、

生きていればこそと、勿体なく、ただありがたく思われまして」

「ううム……そうよのう」

「殿の御心懷は」

「残念でならぬ……」

「まだ、遠征の惨敗を、苦にしておられますか」

「信長、初めて、敗戦の辱はじと苦い味を知った」

「道理で、すこし茫然とお見うけ申されます。それがしのように、お考えなされませ。どこに、敗北の苦味くみを嘗なめないで、大事をなした者がありましようや。一町人の経営といえども、そんな甘やかされた生涯があるものではありません」

「そうか。そちの眼にも、信長の面おもてがそう見えたか。馬腹、一鞭むち

当てねばならんな。——藤吉郎、身仕度せい」

「えッ、身仕度して？」

「岐阜^{ぎふ}へ帰るのだ」

自分の考えは、信長を超えていると、密^{ひそ}かに誇っていると、信長の思慮はまた、自分の思慮の先へ出てくる。

急遽、岐阜の本城へ帰る必要はある。いろいろな意味で、それは急を要する。

（——が、どう帰るか？）

その方法を疑っていたが、信長は、空想家であるかと思うと、強力な意志の実行家でもある。

その晩のうちに、藤吉郎その他、わずか三百にも足らぬ小勢を

ひきつれ、夜どおしかけて京都から脱出してしまった。

疾風の^{はや}迅さだ。そんな迅速な行動すら、もう誰からともなく洩れていた。

一行が、大津越えにかかる頃である。まだ短^{みじ}夜^{かよ}も明けない逢^お坂^{うさ}山の木立の上に、鉄砲を構えて、信長のすがたを待っている怪僧があつた。

不意に、駒が狂い出した。

暁^{ぎようあん}闇をつんざいて、鉄砲の音がどこかで響いたのである。

「——あッ？」

駈けつづく家臣達は、すぐ信長の身を^{きづ}気遣った。同時に、眼を四方に馳せて、

「曲くせもの者さがを探し出せ」

と、騒ぎ立てた。

信長は、鉄砲の音にも気づかなかったのだろうか、もう半町も先へ駆け越している。

かなた 彼方から大声で、家臣たちを振り向きながら呼んでいた。

「捨ておけ、捨ておけ」

主君の一騎のみ遙かに先へ立ってしまったので、ぜひなく下手人を打捨てて、人々の馬群はちやひようごれはまた急ぎだした。

池田勝三郎、蜂屋兵庫、木下藤吉郎などが追いついて、

「殿、殿、どこもお怪我けがは？」

たす 訊ね合うと、信長はやや駒ゆるを緩めながら、片手の袖を高く翳かざし

て示しながら、

「命めいは天にある——」

と、いった。

小さい弾痕の穴がその袖を貫いていた。

後に判明したことであるが、その折、大樹こずえの梢から信長を狙撃そげき

した下手人は、伊勢朝熊山あさくまやまの円通寺の法師で、百発百中といわれる鉄砲の名手だったという。

——命は天にある！

しかし信長は、その言葉を消極的には持たない。命を天に待つて安閑としてはいない。

信長は知っている。——いかに今、自分の身が、天下の群雄か

ら、嫉視しつしされ羨望せんぼうされているかをである。

尾張二郡の小城から、尾濃二州へ羽翼うよくをのばしたくらいでは、まだ世間は、多分たかに多寡たかをくくつていたであろう。

だが、中原ちゅうげんに出て、令を京都から発したとなると、俄然、

天下の諸豪は、心穏やかでないにきまつている。

なんら彼とは、宿怨かくも関わりもない九州の大友、島津、中国の

毛利、四国の長曾我部ちようそかべ。——遠くは北辺の上杉、伊達だてなどに至る

までが、挙こぞつて、反感か、邪視じゃしか、冷嘲れいちようか、いずれにしても、

好意は示していない。

いや、そこらの動揺は、まだ当然といえよう。危ないのはむしろ

近くの親戚などだ。甲斐かいの武田信玄など、もう姻戚いんせきの誼よしみな

どは顧みていられないように、頻りと策動の気はいが見える。北条家も油断ならない存在である。

平時の姻戚外交などが、いかに弱きずない絆であるかは、江州ごうしゅう小谷だにの浅井長政がもう立証している。——先ごろ北征の日、ふいに旗を立てて、朝倉義景とむすび、信長の退路を脅おびやかした最大な敵は、北江州の浅井だった。その浅井長政には、信長の妹が嫁とついでいるのである。——が、女の髪の毛で、男児の雄図ゆうとは左右できない。

三好、松永の残党は依然として、うるさい暗闇の伏敵だし、本願寺門徒は、その宗教上の組織と宣伝力を用いて、各地に、反信長の烽火のろしを準備している。

敵。敵。敵。

天下は挙げて信長の敵と化したかの觀がある。信長が、突然、岐阜をさして歸つたのは、賢明だった。

——命は天にある。

この言葉を穿はきちがえて、もし彼がもう半月も、京都に安閑としていたら、すでに歸る郷土も家もなかったかも知れない。

が、彼は無事に、岐阜城へ歸つた。それから約一月余りを経た六月の半ばだった。

「宿直とのいツ。宿直の者ツ」

まだ、短夜も明けていないのに、彼の寢所から、呼び立てる声がした。稲葉山から長良川ながらがわの空をかけて、頻りと、時ほととぎす鳥の

啼く四更しこうの頃であつた。

夜半よなかでも、不意に、むつくと寢床のうえに起き直つて、思いも

よらぬ命令を下すことがまある。

信長の宿直衆とのいしゆうたる者は、それに馴れていたが、時には油断へ

水をかけられて、うろたえた態ていを殿に見られる場合がないでもない。

「はッ、——何ぞお召し？」

と、今は早かつた。

「軍議をひらく。今からだ。即刻集まるように、信盛のぶもりに計らえ

と申せ」

信長は、もう寢所を出てゆく。あわただしく、小姓や近習きんじゆの

足音が追う。

夜半か、明け方か、眠たげな近習の頭にはよく分らない。まだ暗いことは確かで、外には星が鮮^{あき}らかだ。

「ただ今、燭^{あかり}を灯します。お待ちください」

近習は、狼狽^{さか}している。が信長はもう裸体になって、湯殿にはいつていた。そして旺^{さか}んに水を浴び、体を拭きこすっている。

ここよりは、表方の狼狽はもつとひどい。城内には、佐久間信盛、坂井右近、木下藤吉郎などいたが、その他の諸将は多く城下を固めていた。それへ、召しの使いを飛ばす。一方、広間を浄^{きよ}め、燭を配らせる。——いや、そう指図する自身がまだ顔も洗わずにいたのに気づいたりする。

諸將は、出揃った。

信長の爽やかな面おもてに、白い燭ろうが映えて見える。彼は、一同を見わたしながら唇くちを開いた。黎明れいめいと共に、自分は出馬する決心である。目標は、小谷の浅井長政を討つにある。——この席は軍議の席であるが、その根本の目的に、異論や諫止かんしはゆるさぬ。ただ、その作戦上の範囲内で、何か、献策があらば聞こう。

こう信長が決心のほどを闡明せんめいすると、諸將はみな、何か心を強く搏うたれたようにしんとしてしまった。

小谷の浅井長政には、信長の妹のお市いちの方が嫁かたいでいる。そればかりでなく、信長は、妹むこ婿の長政を、隣邦の抑えとする政策以上に、心から眼をかけていた。日頃、長政をよく愛している信長

の真情を、諸將はみな知っていた。

京都へも、よく長政を招いて、見物させ、また、

（これは、小谷の妹^{むこ}聶でござる）

と、將軍家の周囲を始め、会う人ごとに紹介^{ひきあわ}せたりして、長政も、自分と共に引き上げていた。

信長の近習が、信長の世話ばかりやいていると、

（妹聶も、見てやってくれよ）

と、いう程であった。

朝倉攻めの遠征の際、信長が、その妹聶の小谷城へは、何の沙汰もせず^ずに立ったのは、由来、浅井と朝倉の両家は、織田家と結ぶ以前から、不侵略国として親密な関係にあるので、妹聶の立場

を思い、むしろ好意的に、中立国としてその位置を保たせてやるためであつた。

ところが。

敵国深くへはいった信長の、征旅せいりょの苦境を知ると、果然その妹いもうとは、鉾ほこを逆さかしまにして、信長の背後おびやを脅かし、織田軍をして、あの退敗を余儀なくさせたのである。

先頃、京都から帰つた信長の胸には、その妹いもうとの処置が考えられていたに違いない。

折も折、ゆうべ深更に、信長の手へ密報がはいった。鯰江なまづえの

六角承禎じょうていが、観音寺城の残党や門徒僧を用いて、土民一揆の

火の手を諸所に挙げ、その混乱に乗じて、小谷の浅井勢と呼応し

て一挙に信長を屈伏させてみせると、露骨に活動しだしているという知らせなのであった。

その軍議が終ると、信長は、諸將をつれて本丸の庭へ出た。そして実証を指さして見せた。

遠い闇に、一揆いつぎの火は、旺さかんに空を赤くしていた。それは、単なる土民の一揆でないことを、信長は、諸將に説き明かして、

「いざ、立とう！」
と、うなが促した。

空はようやく明けかけていた。

それが、十九日のことだった。

次の日には。

信長以下、岐阜を発した兵馬は、近江おうみに侵入していた。

いたる所の門徒一揆を破りながら、佐々木六角と浅井長政との連環れんかんを、次々に、踏みつぶしていた。そして、二十一日にはもう、浅井の本城小谷へ迫っていた。小谷の出城、横山城を囲んでいたのである。

疾風電撃しつぷうでんげき。

——信長勢が。

と、敵が耳に眼に知る時は、もう潰乱かいらんされていた。備える間などないし、崩れて、次陣を布しく違いともなかった。

大雨の雨脚あまあしが、雲と共に、野を掃いてゆくようだった。

けれど、その席卷せっけんぶりにも、限りがあつた。横山城に当たると、

ここは越前と江北の要路で、敵には、重要な地点だった。さすがに、頑として、手ごたえがある。

おおのぎとさのかみ

大野木土佐守は、朝倉家のうちでも名だたる驍将だ。その

大野木勢に、野村肥後の精銳が扶けて、

おと「陥せるものなら陥してみよ」

と、その堅^{けん}壘^{るい}を誇っていた。

時は、六月の大暑。

転戦また転戦をかさねて来た寄手の勢は、眼鼻もわからぬほど黒くなっていた。すると、二十二日の頃、

「大挙、越前の朝倉勢が、山越えして、小谷の救援にやってくる
！」

との報がはいった。

次の、詳報に依ると、

——越前の援軍は、総勢一万余騎、朝倉孫三郎景健かげたけを主将として、魚住左衛門、小林端周軒はしゅうけん、黒坂備中守などの錚々そうそうたる將僚をそろえ、その兵卒らは声を合わせて、

こんど大寄おおよせ越ゆるなら

故郷くにのみやげになに持とか

近江おうみざらしよ

あの君に。

否とよ

われの持つものは

鑓やりの穂先に織田が首

織田信長が茶筌ちやせんくび首。

と、誰が陣中で作つたか、俗歌の節をつけて謡うたいながら、旗鼓きこど堂々、大寄山をこえ、野村、三田村方面をさして来るとのことだつた。

横山城は、所詮しよせん、急激に陥ちそうもない。——退路を遮断されたら、ふたたび越前の木目峠きのめとうげの死地に立つ。

「龍ヶ鼻まで退しりぞけ」

信長は、急に退いて、ここで対策を練り直した。

ちようどその日だつた。

信長が、心のうちに、待ちかねた徳川家康が、五千の兵を率い

て来援に着いたのは。

よほど欣うれしかったとみえ、信長はその時陣頭で、黒の薄い陣羽織に、塗りの大笠おおがさをいただき、左に扇を持ち、右手に杖を持つて、何か指揮していたが、

「おおッ」

と、家康のすがたへ、遠くからその扇を振って迎えた。

この気強い味方を迎えると、信長は自身、案内に立って、眼前の戦場の地形、敵の布陣、越前の援軍の情勢などを説明して、

「これに処す御意見は」

と、たずねた。

家康は、言下に、

「姉川を挟んで、野戦に勝敗を決するしかありませんまい」

と、答えた。

信長の思うところもそれだった。家康は、自身、先陣を承ろうと進んで希望した。信長は謝して、

「それにしては、お手勢だけでは少ない。わが直属の兵を割さいて、参加させよう」

と、いった。

「いや、大兵は要りません。……左様、然らば御意にあまえて、
稲葉一鉄いなばいつてつの一隊を拝借しましょうか」

家康は、そう答えた。

家康の眼に選ばれた稲葉一鉄は、武門の誉れと、手兵一千をさ

げて、三河勢に合体した。

信長はまた、家康に、

「これは、源氏にゆかりのある一槍です。源家の末裔たるあなたに贈ろう」

と、「為朝」という銘のある鎧を彼に与えた。

織田軍には、徳川家の援軍が来て加わった。

浅井方にもまた、朝倉勢の加勢がそこまで来ていた。

藤吉郎は、横山攻めには遅れて、後から参陣した。

彼は、浅井方の荊安城、長比（長競）城、不破郡松

尾山の長亭軒の城など、味方にとって、最も怖るべき後方

の諸城を陥し、前線と岐阜との通路と、その安全を確保するため

に、遅れたのであつた。

それらの厄介な敵は、多くが江州ごうしゅうと美濃の境に蟠踞ばんきよして
いた。

苅安城は、坂田郡上平寺、長比たけくらべの城も同郡の長久寺村、
長亭軒ちやうていけんの城は、不破郡松尾山にあつた。

信長の目的地とは、かけ離れた後方だし、山岳重ちやうじよう疊じような横道
である。

そんなものを、一城一城、気にかけて相手にしていたら、目的
の小谷城へ懸かるには、半年の余も費やしてしまうであろう。

で、大野木山の関門や、そこらの城砦じやうさいには、藤吉郎の手勢
を残して、信長の本軍は、遮二無二しや、敵方の本城地へ肉薄して来

たものだ。った。

だから信長は、

「本軍が、小谷を陥おだにすまでは、小勢なりとも、あの男のこと、後うしろ方は固く抑えているだろう」

と、安心していた。

ところが、その藤吉郎の木下勢は、信長が龍ヶ鼻へ退陣してから程なく、長浜を立て、これへ参加し、すぐ信長を営中に訪ねて、

「願わくば、次の決戦には、木下勢に先鋒の第一陣を仰せつけられますように」

と、願い出たので、信長は驚くよりも、後方の敵を、どう処置

して来たか、疑った。

藤吉郎は、それについては、

「かりやす刈安、

たけくらべ長比、

長亭軒の城など――

ひとから一括げに、

はや落去

いたし、敵將樋口三郎兵衛以下、一名も余さず、お味方に降し、

くだ

それがしが手勢のうちに従えて参りましたれば、はや後には御懸

念なく」

と、答え、

「つぶさなことは、御陣のお暇をみて、

つれづれ徒然のおなぐさみにで

も、いずれお話し申し上げましょう」

と、のみで、その折には、語らなかつた。

徳川家康をはじめ、諸将老臣が居合わせていたし、それを語れ

ば、自然、自分の手功てがらばなしとなるので、わざと、避けたものを見て、信長も深くは訊かなかつた。

ただ彼の、これから先の大決戦に第一陣をという願いに対しては、

「すでに、その第一陣は、徳川殿に囑しよくしてある。そちは、第四番につけ」

と、信長はいった。

藤吉郎は、家康の倅しあわせを羨望せんぼうしたが、素直さがに退つて、自分の人数を、総軍第四番手に備え立てた。

陣營の前を、きれいな河が流れていた。姉川の支流である。一夜、営内で快眠した藤吉郎は、まだ兵も眠っているうちに、一人

そこの河べりへ来て、顔を洗っていた。

「殿。お早いことですね」

後ろで、誰かいう。

「お……。竹中半兵衛か。そちも早いなあ。寝たか、ゆうべは」

「よく寝ました」

「体は快よいかな」

「ありがとうぞんじます。さてさて、戦いくさは病人によく効きく名薬と思おもいました」

「はて。異なことを」

「されば、平常は病を宥いたわられて、季節変り、朝夕の寒暑にも、立ちどころに咳せき声を増し、よく熱など出す弱体が、この炎暑に、

粗食をつづけ、兵や軍馬と共に歩み、夜は露草の上に臥しながら……どうでしょう、かえつて、この通りの健康でござる。半兵衛を病人あつかいになさるるは、戦場では、この後御無用にねがいまする」

「なるほど。ムム、なるほど」

藤吉郎は、一茎けいの螢ほたるぐさ草を摘つんで、指先もてあそに弄もてあそんでいた。花に寄せて、誰を偲しのんでいるのだろうか。母か、寧ねね子か。——彼の多感多情は、彼の軍師竹中半兵衛が、誰よりもよく知っていた。

きんせん
琴線

半兵衛の眼に気づかれては、見ツともない気でもしたのだろう
か、藤吉郎は、弄んでいた螢草を、指頭からぽんと捨てて、

「大戦が迫ったな」

「迫りました」

しばらく、視野を敵地へ向けたまま佇^{たたず}んでいたが、また何を思

い出したか、

「於^おゆうは、もう岐阜^{ぎふ}へ着いたろうか」

と、呟^{つぶや}いた。

「長浜からでは、まだまだ岐阜へは帰り着きません」

「途中、無事であればよい。——女子^{おなご}の旅、わけて戦乱の中だ、

気にかかるの」

半兵衛は、答えなかった。

於^おゆうは、自分の妹であるばかりでなく、大戦を前にして、殿
の煩^{ぼんのう}悩にも困ったものだ、苦^{にがにが}々しく思えたからであろう。

その於^おゆうは、長浜から帰したとある。知らぬ者が聞けば、陣
中へ女子を伴^{ともな}つたと誹^{そし}られるにちがいない。

——が、そんな事情ではなかったのである。さもなければ半兵
衛が許すはずはない。

許していながらも、半兵衛の苦々しく思うのは、主君が、彼女
の帰り途まで、気にかけているからだった。

まだ、その報告は、藤吉郎から信長の耳にも入れてないが、陣
中へ愛人と呼んだ理由を釈明するためにも——追っつけ審^{つづ}さに語

らなければならぬであろう。

で、話は少し後にもどるが、彼が佳麗な愛人のゆう女を、陣中へ召し寄せた——彼らしくもない、また、彼らしくもある事情をここで明らさまにしておこう。

不破の関は、関所がなくても、地形そのものが、すでに天然の関門をなしている。

従つて、ここを占めれば、湖南一帯から美濃の平野を扼し、京都や北国路や東海道への交通を抑えることになるので、討つても掃つても、敵たる者は、当然、すぐこの地方に充血してくる。

かりやすじよう
苅安城。

たけくらべじょう
長比城。

かまはじょう
鎌刃城。

松尾山の城。

みな敵の牙だ。きばひとつひとつ孤立したものでない。齒のごとく

れんかん
連環いふき ふもとしている。

伊吹の麓に、藤吉郎の手勢は陣取っていた。まだ一将校にすぎない彼に、大兵を預けられるわけもない。微々たる兵数だ。おだに

それをもつて、この地方一円の敵を抑え、小谷へ進撃している味方の本軍に、後ろの憂いのないようにしていなければならぬ。それだけでも重任であるのに、藤吉郎は、それだけで甘んじていられたかった。

「半兵衛、もう一度、行ってみてくれい」

「だめです。彼も侍です。たとえそれがしが、ももよ百夜通つても、節

義を変える武士ではありません」

「そちは、敵に惚れ過ぎている」

「いや、長年の友ですから、彼の心を知っています」

「心の友なら、心をもつて、説き伏せられぬこともあるまい」

「が、城門を固く閉じ、何度訪れても、会わないからだめです」

「では、絶望か」

「まず、あの男ばかりは」

「待て待て。およそ絶望ということは、きょうまでおれの生きて来た道にはなかった」

藤吉郎と、その軍師竹中半兵衛とが、帷幕いばくの裡うちで、こんな密談を交わしていたことがあつてから、数日の後であつた。

半兵衛の弟竹中久作が、ひとりの旅姿の美人を、馬の背から抱き降ろして、陣中へ導いて来た。

折からその日、垂井たるいの附近で、敵の一小隊と衝突して歸つて来た兵たちが、黒い汗を拭ぬぐいながら、兵糧を頬ほばつたり、手傷を縛つたりしている中を、時ならぬ花の香りをこぼして、美しい女性がつ通つて行つたので、彼らは大きな眼をして見送つた。――もしそれが、半兵衛の妹であり、主君の想い人でなければ、わあアツと、囃はやし立てて、せめてその袂たもとにでも触れて騒いだかも知れなかつた。

竹中久作は、兄の半兵衛重治しげはるが木下家に随身後、召し出されて、共に藤吉郎に仕えていた者である。

半兵衛より四つ年下の好青年で、兄は病弱だが、彼は健康そのものだつた。

こんどの合戦にも、

（残念だなあ。なぜ木下軍は、お味方の後うしろまき詰などに廻された

のか。信長様に従ついて先鋒を承うけたまわっているならば、浅井家第一の豪

傑といわれている敵の遠藤喜左衛門の首は、必ず俺の物なのに）

と、髀肉ひにくを嘆たんじて、兄にも人にも洩はならしているほど、武勇にか

けても、人に負おくれぬ自信はあつた。

その久作が、数日前に、

（その方が参つて、火急、岐阜表から於^おゆうを召し連れて来い）
と、主君に命じられたので、主君の命とはいいいながら、

（何だつて、女などを、陣中まで！）

と、憤^{ふん}懣^{まん}にたえない顔して、洩々使いに赴^{おもむ}いたものである。

——於ゆうは自分の妹であるが、いつのまにか主君の寵^{ちよう}をうけていることを知っているだけに、なおさら、腹立たしかつたし、戦友に間^まが悪かつた。

——今。

その於ゆうをつれて、ようやく、炎天の旅から帰つて来た久作は、営中へかかると、兄上は？ と、居所を兵にたずねて、兄半兵衛の休息している幕^{とばり}の外から、

「兄上、兄上ッ。ゆう殿を召し連れ、ただ今久作、岐阜表より立ち歸りました。君前へは、兄上よりよしなに！」

と、呶鳴り捨てたまま、妹の於ゆうを置き放して、立ち去ってしまった。

半兵衛は、幕の内から立ち出でて、さすがに、オオと、懐かしげな眼をした。於ゆうも、病弱な兄のつつがない姿を見て、

「……お兄さま」

と、寄り添った。

「何のお召しでございましょうか、久作兄様にお訊ねしても、お知らんと、顔を振るばかり……なにも分らずに参りましたが」

「驚いたも無理はない。ちと其女そなたに重い役目がいいつけられる御

様子だ。——と、申しても、この兄も共に致すこと、そう案じるに及ばん」

と、なぐさ慰めてから、

「何はともあれ、御挨拶に出たがよかろう。——殿のお座所は、すぐ後ろの幕——」とぼり

と、振り向いた。

藤吉郎のことを云い出されると、彼女は、にわかに顔を紅あからめた。——半兵衛は、主君としていつているのに——妹のそうした羞恥はじらいを見ると、場所がらのせいか、何か淫みだりがましい気がして、もう優しいことばをかける気もしなくなった。

「ゆう殿、唯今、申し上げて参る程に、これにてお待ちなされ」

わざと、他人行儀にいつて、藤吉郎のいる巨きな松と松とに張り繞めぐるらした陣幕のうちへはいつて行つたが、間もなく、戻つて来て、

「お待ちなされておらるる。——あれへお通りあるがよい」と、指さした。

兄も一緒に来てくれるのかと思つていると、雑兵を呼んで何かいいつけたりなどしてかまつてくれない。

彼女は、一人、怖おずおず々と陣幕の路地を通つて行つた。

すると、於ゆうが来たために、退けられた人々であろう。蜂須賀彦右衛門すかひこえもんや堀尾茂助ほりおもすけや、福島市松、加藤虎之助などの小姓たちまでが、相次いで、そこから四方へ出て行つた。

何かその人々へ、すまないような気もして、彼女はなお、幕の蔭に佇たたずんでいた。——と、藤吉郎は幕を払って、

「才。於ゆうか。なぜ黙って、そんな所に立っておる。さあ、はいれ、はいれ」

と、手を把とつて中へ抱え入れた。

何の憚はばかりも屈くつ託たくも彼にはない。藤吉郎は、彼女のやや小麦色に陽焦ひやけした顔をのぞきこんで、

「よう来たな。……道中、敵におそわれなかったか。留守中は、淋しいことであろう。体も、別条ないか」

と、まったく甘い。

用ありげな小姓の一人が、何気なく、ひよいと幕を上げてはい

りかけたが、小姓でさえ、顔を赤くして、あわてて引退ひきさがつてしまつた。

「於ゆう。それへ休め」

「はい」

「半兵衛より仔細は聞いたであらうな」

「まだ何も聞いてはおりませぬ。すぐこれへ伺いましたので」

「久作からは」

「なおさら一言も……」

「では、わしから告げよう。この戦場へ、はるばる、そなたを呼び迎えたは、そなたに、敵方へ使いに立つてもらいたいためじゃ。今——、不破郡ふわごおり松尾山の長亭軒の城に立て籠つておる浅井の臣、

樋口三郎兵衛と、お許もとら兄きょうだい妹いとは、幼少から親しい間がらと聞いたゆえに」

と、藤吉郎は、於ゆうが戦争の駈引などにはうとい女性であるだけに、分りよく噛みくだいて話した。

この地方に、敵方の城は、要所要所に幾つもあるが、要するに、牙城がじょうは長亭軒の一城と見てよい。

その親齒さえ抜けば、後の齒はひとりでにぐらついて来る。

ところが、あれは陥おちない。この兵力の五倍をもつて、二十日以上、多大な犠牲を払つても、陥ちるかどうか。

なぜならば、その干城かんじょうの大事を知つて、浅井長政も、逸いちはやく、鎌刃城かまはじょうにいた樋口三郎兵衛を、長亭軒の城のほうへ移し

て守らせているからである。

三郎兵衛は、稀に見る智謀の将だ。武勇にかけても鳴っている。その人物は、以前から^{よし}誼みの深い半兵衛重^{しげはる}治が珍重している通りである。

だから、ここにあるただ一つの策は、友の半兵衛からよく利害を説いて、^{ちぬ}衄らずして彼を降伏させるしかない。しかし、彼もさる者、寄手の弱点は、充分見ぬいている。

先頃から、半兵衛を説客として、何度も使いに立ててみたが、それゆえに、樋口三郎兵衛は、^{がん}頑として会わない。

——たとえば日頃は親友であろうと、敵味方と戦場にわかれた以上、会う必要は^{べい}毫もない！

そう城門の扉ごしにいわれるのみで、もう五、六遍も追い返された。

さて、そこである。

女には除外例がある。いかなる猛者^{もさ}も優しく扱う気になる。わけて殺伐な戦場ほどなお、効果は大きい。

「——ひとつ、某女^{そなた}が兄半兵衛と共に参つて、その頑^{かたくな}な敵の城門を叩いてみるのだ。よいかの。真心をこめて訪れるのだ。……そして、樋口三郎兵衛が、あわれと心をうごかして、城門をひらき、半兵衛を迎え入れてくれたら、もう事は半ば成就したようなもの。——後は半兵衛の胸三寸にまかせておけば足る」

こう話し終つて、藤吉郎は、

「どうじゃ、やさしい役目であろうが」

と、微笑んだ。

於ゆうは、謹んで、

「よく分りました。一心になって致して参りまする」

と、命をうけた。

「戦場の兵糧というものは、まだ喰べたことがあるまいが、馳走して遣わ^{つか}そう。——これ、これ、時刻はちと早いが、ゆうに夜食をつかわせ」

と、幕^{とばり}の外へ呶鳴った。

わずか一刻ほどしか、彼女は藤吉郎の側に休んでいなかった。

兄のいる床^{しょうぎば}几場へ戻って、身^{みだしな}躰みをつくろい、兄の半兵衛

も、具足を脱^とつて、涼やかな平服に着かえるのを待ち——それから間もなく、ふたたび陣所を出て行つた。

半兵衛と、ただ二人きりであつた。

半兵衛も駒に跨^{また}がり、彼女も駒に乗つて、水色の被衣^{かすき}をかぶつていた。戦場に行く旅人にしては、優雅な姿であり過ぎた。

垂井^{たるい}の宿場あたりで陽^ひが暮れた。——それから伊吹山の裾野^{すその}を、悠々と、駒を打たせて行つた。——ちようど大きな夏の月が、関ヶ原の彼方^{かなた}からさし昇つて、道は昼より明るく、伊吹風^{いぶきおろし}は、秋のように爽やかだった。

伊吹は東。松尾山は西。

不破の街道を挟んで、関ヶ村から山ふところへはいつてゆく。

ズドン！

と、鉄砲の音が^{こだま}飴した。

半兵衛は、駒をとめて、

「於ゆう。驚いたであろ」

と、わざと、微笑した。

「いいえ」

於ゆうは、強がりではなく、そう^{おどろ}愕いた様子もない。——間もなく、人の蹀音が駈けてくる。

「止れッ」

二人の駒の前後に、四、五本の槍がキラキラ月影に並んだ。

半兵衛は、馬上のまま、

「それがし達兄きょうだい妹は、御城代樋口三郎兵衛どのへお会いしに参る者でござる。御苦労ながら御案内ねがいたい」

「御姓名は」

「木下藤吉郎の家中、竹中半兵衛重治、妹のゆう」

と、明晰めいせきにいった。

ここらを見張っていた一小隊の兵たちは、そう聞くと、顔を見合わせた。また、於ゆうの清麗な姿を見まもった。

若い女性を連れているし、平服である。仔細はあるまいと、一部の兵が先に立った。——もう長亭軒の城はすぐ近いのである。

祖父谷おじや、平井山、松尾の三山のふところになっている。城じょうさ

砦いの規模は小さいが天嶮てんけんである。

城門をそこに見ると、

「御大儀」

と、送ってくれた兵たちに礼をいって、半兵衛は、まず先に城門をたたいた。

「——城内の方へ物申す。それがしどもは、御城代樋口殿と、年来親しい間がらの者でござる。幾度となく、訪れ申せど、遂に、一度のお会いも得ず、諦めかねて、こよいまた、余りの月のよさに、つつい思わずまたこれまで、訪れてござる。——恐れ入るが、お取次ぎねがいたい」

大声でなければ届かない。頑丈な鉄扉は、いくら呶鳴（てっぴ）っていて、も答えがないので、半兵衛は、長々とそういった。

それでも――

ややしばらくは、何の返辞もなかった。半兵衛はまた、同じような意味のことばを繰り返した。すると、城門越しに、矢倉の上から、敵の顔が見えて、覗き下ろしながら云った。

「御無用ッ。御無用。――何度参られても、御城代のお答えは、同じものでござる。お帰んなさい」

「あいや」

半兵衛は振り仰いで、

「いつもは、木下家の家臣としてでござったが、こよいは、一半兵衛重治として、妹のゆうと共に、月を賞でつつ、浮々と、お立ち寄り申したのでござる。――それがしの知る樋口三郎兵衛どの

は、武勇の質であるばかりでなく、風雅も解し、あわれも知る優しい武士と承知しているが、さては早、木下勢に取り詰められ、月を見る心のゆとりも、友と語らう心情も、失われてしまわれたか。……さるにては是非もないが」

独り嘆くようにいつていると、

「だまれッ」

と、狭間はざまでべつな声がした。

「おお、三郎兵衛殿」

仰ぐと、上の顔は、

「やよ、半兵衛殿。いくら訪ねて来ても、むだであるぞ。会う要はない。帰れッ……」

「——おじ様ツ、おじ様。ゆうでございまする」

「や、ゆう殿。女の身で、何しにこの戦場へ」

「余りに、兄の心の可憐いじらしさに……。そして、おじ様も、いつお討死か知れぬと聞き、お別れに参りました」

ここは、半兵衛兄きようだい妹の生地、菩提山ぼだいさんの城からも程近い。

——同じ不破郡の内である。

樋口三郎兵衛は、半兵衛兄妹を、幼い頃から知っていた。今、於ゆうから、小父さま——と、呼びかけられると、その幼い頃の彼女や半兵衛を思い出した。

「城門を開けて、二人を、本丸の書院に通せ」

遂に、彼も我がを折った。

三郎兵衛は、具足を解いて、平服となつてから書院へ出、兄妹ふたりを迎えた。

会うとすぐ、於ゆうに、

「大きいうなられたな。木下家の奥に仕えていると聞いたが、早いものよ。わしが手に抱いて頼ずりすると、この髯ひげづら面を痛がつて、顔を搔いたりしたもののじゃが……」

と、沁しみ々しみいった。そして、

「半兵衛どのにも、度々のお訪ねに、無情つれなく門を閉じたまま、無礼を重ねたが、戦国のならい、お互い武門に生きる者の辛いつらところじゃ。……察しられよ」

と、やがて、小ささやかな膳ととのを調べて、これが一生の別れとなるか

も知れぬ。月を肴さかなに、一献いつこん酌くもうと、打ち寛うくつろいだ。

明らかに、三郎兵衛は、討死を覚悟しているものと見られた。

彼には、主君の浅井が、到底、信長に抗しきれるものとは考えていなかった。ここ半月や一月は支えても、やがて最期の日は近いと、観念くわんねんしているふうであつた。

「いや、お互い武士ほど儚はかないものはありません。——が、その儚はかない中に、確かくと、生きて来ただけの足跡を残さねば、武士としても真まことの武士ならず、人間としてはなおさら口惜くししい限りです。名はお互いに、汚けがしたくないものですな」

半兵衛は、杯をふくみながら云つた。——それはまことに、三郎兵衛の現在の心境に打ッてつけた言葉であつたから、

「そうだ。……そうだとも」

三郎兵衛も、今は、以前の友と変わらず、すっかり胸襟きょうきんをひらいて、杯をかさねた。

「於ゆう。琴ことなど弾ひいて、興を添えぬか」

兄のすすめに、

「はい」

ゆうは、小侍を顧みて、一面の筑紫琴つくしごとをかりうけ、月明りの映さす月の間から、琴だんを弾じた。

「……………」

敵と味方。——二人の友は、耳をすまして聞いていた。

短檠たんけいの灯は、いつか風に消えていたが、三郎兵衛のさし俯向うつむ

いたままの面おもてに、白い月影が、よけい白く映さしていた。

嫋々じようじようと、絃げんは鳴る。哀々と、彼女は歌う。

その八絃の音は、ここにある者の心ばかりでなく、城内七百の強者つわものばらの耳はらわたへも腸へも鳴って行つたとみえて、長亭軒の城、松尾山の松しゅうらい籟いは、一瞬、しいんと静寂しじまに冴えて、ただ琴の音と、琴の歌があるばかりだった。

「……………」

三郎兵衛の瘦せた頬に、数行の涙が、月に光って見えた。

琴の音が休やむと、

「時に、三郎兵衛どの、あなたがお護りしておられる御城主の二郎丸様は、当年、お幾歳になられますか」

と、半兵衛が訊ねた。

「お十二になられた。おいたわしや、父の殿、堀ほり遠とお江とう守み様
には、先年亡くなられ、今はまた、十二の御幼少で、この城に立た
籠こもられ、御運のほども……」

と、三郎兵衛は、遂に、懷紙を取り出して、落涙をつつんだ。

半兵衛は、屹きつと、坐り直して、

「あなたは不忠者だ！」

と、にわかに声を励ました。

「なに、拙者を、不忠者と」

「——そうです。いかに武将のお子でも、まだお十二の幼君では、
世の中のどういうものか、戦いくさは何のためにしているものか、義も

節も、お胸には分っておられまい。——それを、飽くまで、この一城に^よ拠つて、籠城討死を遂げようとなさるのは、臣下たるあなただけの意志で、自分の名のため、節義のために、何も知らぬ幼君をも、犠牲にしてしまおうという^{むご}酷い我意だ。——半兵衛には、そういう自我のお心を、武士道とは、お見上げ申されぬ。むしろ穿^はきちがえたる武士道と嘆かれる。……三郎兵衛どの、それでも御身は、忠義のつもりでおられるのか」

姉^{あねがわ}川

理には負けないと思う。

理論に対する理論ならいくらでもいい立てられる。

けれど、理と共に、心情を打つて来る言葉には、樋口三郎兵衛も抗し得ない気がした。——半兵衛重治しげはるの友情から溢れ出る理に対して、彼は小賢こざかしく云い返す言葉を知らなかった。

「弱年のそれがしが、貴殿にこう申すなど、釈迦しやかへ説法にも等しゅうござるが……」

半兵衛は、三郎兵衛が、首うな垂れたまま聞いているので、むしろこう一步、謙遜けんそんしないではすまない気がした。

「——義もあまり過ぎたるは邪義とか、誰かの書に見えました。昔から主君のためわが子を殺した例ためしは幾多ありますが、わが義を固執するために、主君を亡うしない主家を滅亡させた例ためしは聞きませ

ん。——貴殿の忠義は、いわば過ぎたるものといえましょう。また、あなたの炯眼けいがんをもつて、この小城に、わずか七百の兵を擁し、織田家の二万五千の大軍に対し、最後まで守りきれるなどともお考えにはならないでしょう。なおまた、今の混沌こんとんたる時代の帰趨きすうが、何人なんびとによつて、処理され、統一され、やがて泰平が建て直されるか——そうした時の潮うしおの行く先も、お見えになつていない理わけはあるまいとも存ぜられます。——そうしてみれば、この際、主家を保ちたも、幼君の一生を託し、七百の生命を救うには、いかにいたしたらよいか、あなたのお胸一つで、キツぱりと、御方針はすぐつくことかと思ひますが」

「いや、忝かたじけない。

……仰せはお道理、この三郎兵衛とても、幾夜、

考えぬことではござらぬ。——しかし、巷間こうかんの伝えるところで
は、信長殿というお方は、御氣質峻烈しゅんれつ、敵といえは、捕虜降
参人と対しても、仮借かじやくはあらで、打首、本領追ひ払いなど、随
分おきびしいとのことである。——万一、城を開いてから、主家
も立たず、幼君の御先途も覚束おぼつかないとあつては、三郎兵衛の名
や一身などさておいて、武門の嗤わらわれ草、悔いても嘆いても、及
ぶことではありますまい」

「その儀なれば、お心やすく思し召されい。重治が一命にかけ、
主人藤吉郎秀吉様から、きつと、堀家の安泰と、二郎丸君の御助
命は、誓紙せいしをいただいて進ぜまする」

「……………」

半兵衛の眉宇^{びう}を見つめたまま、樋口三郎兵衛はややしばし黙然としていたが、静かに、その眼を閉じると、はふり落つる涙と共に手をつかえて、

「おねがい申す。……卑怯^{さげす}とお蔑^{さげす}みもあれ。ただ、御友情に」と、いった。

その翌々日。

樋口三郎兵衛は、長亭軒の城を開き、幼主二郎丸の手をひいて、藤吉郎の軍門へ、降人として訪れた。

藤吉郎はまた、その孤君、その義臣を、篤^{あつ}く迎えて、

「安んぜられよ」

と、将来までを保証した。

三郎兵衛の降伏を知ると、かりやす苅安の城も、たけくらべじょう長比城も、みな血を見ずに落城した。——藤吉郎はそこで長浜まで軍をすすめ、於ゆうはそこから岐阜へ歸して、兵馬の装備をあらた革めると、主君の信長のいる前線の地、姉川へ、

「この大戦に洩れては」

と、急ぎに急いで、昨日、ここに着陣、望みどおり信長の本軍と合したわけだった。

姉川の水は三尺、その広い河幅も、すね脛をもつてわた渉ることができ、せいれつその清冽は、夏なお身を切るように冷たくて、水源の東浅井のけいこく谿谷を思わせる。

元龜^{げんき}元年、六月二十八日、まだ夜の明けないうちであつた。

信長の総軍二万三千。

それに徳川勢の約六千。

龍ヶ鼻から進んで、姉川の岸に備え立てた。

前夜。——夜半^{よなか}頃から。

敵の浅井、朝倉の聯合軍一万八千の兵も、徐々と、大寄山^{おおよせやま}か

ら行動を起して、姉川の左岸に当る野村、三田村あたりの民家を
楯^{たて}に、戦機^{うかが}を窺^{うかが}っていた。

瀬の水音ばかり、夜はまだ明けない。

「康政^{やすまさ}」

榊原^{さかきばら}康政は、暗い水際から、

「はッ」

と、主君家康のすがたをぎようあん暁闇の岸にふりかえった。

「ひしひしと、敵は、対岸のすぐ水際まで襲よせているな」

「霧で——よう分りませぬが、馬のいななきが、微かすかに」

「下流しもは」

「とんと気配がわかりませぬ」

「天運、いずれに幸いするか。きよう半日がわかれ目だな」

「半日。そうかかりましょうか」

あなど
「侮あなれぬぞ」

家康の影は、河原の畔ほとりの林へかくれた。そこが織田軍の先鋒一

番隊の——彼の手勢がヒソと鳴りをしずめていた陣だった。

そこへ入ると、もう蕭殺しょうさつの気が肌に沁む。草むらに、灌かんぼ木の中に、兵は銃列を布しいて、身を屈している。槍隊は槍をにぎつて、まだ何も見えない姉川のいっすい一水をにらんでいる。

——今日が生死の？

兵の眼は、ぎらぎらしていた。死も生も意識のない裡うちに、きよ
うの血戦がどう終るか、無言の中にみな描いている。——この空
を、今夜もきつと見られると信じている顔はひとつもない。

康政をつれて、家康は、その中をガサ、ガサ、と静かに通った。
鉄砲の火縄のほかに、火の気も見えない。

誰か、大きな嚏くさめをした者がある。風邪かぜをひいた兵が、火縄の臭
気に鼻をつかれて思わず放ったのであろうが、そんな味方の中の

声一つでも、

——はツ？

と、したように光る眼が辺りへうごく。

睨みつめていても何時いつの間にといいけじめも分らぬまに、ほのかに姉川の水面が白みかけたと思うと、林の梢こずえを透すいて、一ひとすじ条の紅い雲が、伊吹山の肩のあたりに見出された。

「——あッ、敵がッ」

誰か、兵の中で、どなりかけると直ぐ、林と河原の境に出て佇たたずんでいた家康を中心とする幕僚たちが、

「撃つな！」

と、銃隊へ手を振った。

「撃つてはならんぞ」

他の将が、つづいていう。

対岸の正面よりやや下流^{しもて}手の岸から、一隊の敵が、騎馬徒歩^{かち}を
まぜておよそ千二、三百、一陣になつて、河を斜めに、駈^{わた}け涉り
だした。

足もとから立つしぶきに、真白な疾風^{はやて}が涉つてゆくようだった。

——恐るべきその浅井方の先鋒は、織田方の先鋒も、第二陣も三
陣も無視して、一挙に、信長の中軍を衝^つこうとする意思らしく思
われた。

「あッ、磯野丹波^{いそのたんば}」

「丹波守が手勢」

家康のまわりで、家康の旗^{はたもと}下たちは、唾^{つば}をのみながら云い合
った。浅井長政の下に、浅井家が誇りとする磯野丹波守という好
敵手のあることは、夙^{つと}に武将の間に聞えていた。——その旗じる
しを今、颯々^{さっさつ}と、水けむりの中に見たからである。

ダ、ダ、ダ、ダッ

敵の掩護^{えんご}か、味方の銃隊か。いや両岸から同時に撃ち出したと
いっていい。水に飮^{こた}して、耳も聾^{ろう}するばかりだった。

雲は裂け、六月の青空は、肌をあらわした。——と、見るうち
に、織田軍の二番、坂井右近の人数、三番備えの池田勝三郎信輝
の手勢が、

「その敵、一步も味方の岸を踏ますなッ。一人も、敵の岸へ返す

なッ」

と、どっと、流れの中へ突撃して来た。

坂井隊は、敵の横へ。

池田の将士は、敵の突角^{とっかく}へ向つて、ぶつかつて行つたのである。

接戦は、一瞬に起つた。

槍と槍、太刀と太刀。——また、組む者、馬上から落ちる者、姉川の水は、血か、映じる朝陽か、鮮紅^{せんこう}燦々^{さんさん}と揺れ^ゆに揺れた。

磯野丹波守を先頭に、率先して突きこんで来た浅井勢は、浅井方のうちでも選^より抜きの精兵だつたにちがいない。

織田方の二番備え、坂井右近の隊は、完膚^{かんぷ}なきまで、叩きつけ

られた。

隊長右近の子、坂井久蔵は、

「むッ、無念だッ」

と、その戦いくさの中で、敵味方中へ聞え渡るほどの絶叫をあげて討死を遂げた。

精兵、百余人が、つづいて河中に戦死した。

当るべからざる勢いで磯野丹波の兵は、三番備えの池田勝三郎の隊を突破して行った。

勝三郎の麾下きかが、

「くッ、くそ」

「やるなッ」

と、槍をそろえて、その突角^{とつかく}へ遮り^{さえぎ}に向つたが、まるで寄せつけなかった。

四番備え。

木下藤吉郎の陣だった。

藤吉郎も、

「こんな凄まじい敵を見たことがあるか」

と、半兵衛を顧みてつぶやいたほどだった。

さしもの半兵衛にも、施す策がなかった。なぜならば、木下隊には、先頃、長亭軒の城や荻安城——その他、諸所で収容した降参人がたくさん混^まじっているからである。

それらの降人も、今は皆、麾下^{きか}の一兵として、藤吉郎の手に加

わつてはいるが、いずれもつい先頃までは、浅井家や朝倉家の禄を喰^はんでいた者であるから、当然、敵へ駈け向わせても、その銚^ほこさき

先は弱いにきまつている。むしろ味方の足手纏^{まと}いとなろう。

木下隊には、そんな弱点があつたし、五番、六番の備えも、瞬^{またた}くまに蹴^かちらされて、織田陣十三段の備え立てが、遂に、十一段まで潰^{かい}乱^{らん}されてしまった。

その頃。

上流の徳川勢は、一気に、姉川を渡つて、対岸の敵を席卷しながら、徐々に、下流へ移つていたが、顧みてみると、すでに信長の本陣近くまで、磯野丹波の死に物狂いな兵が迫っているので、
「あの側面を突け」

と、河中へ躍り返した。

磯野丹波の兵は、自分たちの味方がいる西岸から河へはいつて来た人数なので、近づくまで、

「味方の加勢——」

と、思っていたものらしい。

榊原康政を初めとして、三河武士の名だたる武者が、

「くわッ！」

と、息弾^{いきははず}ませて、いきなり磯野丹波の隊伍へ、斬りこんで来た。

「しまった」

磯野丹波が、徳川勢と気づいて、しや噺^がれ声^{こゑ}をふりしぼりながら、返せッ——と叫びかけた時、何者か、彼の横あいから、びゅ

ツと水に濡れた一槍を繰り出した者がある。

——ぱしやッ

水けむりの中に丹波は坐った。脾腹^{ひばら}へはいつた槍のケラ首をつ

かんで起とうとする——起たせまいとする——瞬間、また、頭上

にチカツと燦^{きら}めいた、何人かの太刀が、がつんと、丹波の鉄^{てつかぶ}

兜^とへ打ちおろした。

刀は、幾つかに折れて飛んだ。丹波は起った。血しおに等しい

川波が真つ赤に立つ。

「くそッ」

「ちいッ」

三、四人、いちどに丹波の前後から組みついて、脾腹^{ひばら}、首すじ、

籠手、深股、滅茶滅茶に突いたり、斬ったりしてしまった。

すわ！ 敵が。

と、見たので、信長の旗下は、信長の幕ばくえい営を出て、みな川岸へ、槍を揃えていた。

竹中久作は、木下隊だが、乱軍となつては、もう所属などにこだわつてはいられない。猛敵浅井隊を追いかけて、信長の本陣の近くへ駆け上がっていた。

「……や。ここはもう？」

ふと見ると、何者か。

その信長の幕営の裏から——幔まんまく幕をかなぐり上げて、今し、

そつと這いこんで行こうとする男がある。

具足、太刀の鎧こじりなど、雑兵とは見えなかった。また、味方にし
ては、幕の裾をあげて、窺うかがっている容子ようすがおかしい。

「待てッ」

久作は、飛びかかつて、敵の鎖くさりと筋金で固めてある片足をつか
んで引ッ張った。——もし、味方だったら、同士討ちになると、
大事を取ったからである。

竹中久作に、足を引ッ張られた男は、驚きもせず、振り向いた。
それは浅井方の一将とみたので久作が、

「敵だな！」

と、確かめると、

「当然ッ」

と、喚わめきながら、相手は、やにわに槍をしごいて、突いて来た。

「何者ッ。名乗る程の名は持たぬ奴か」

「浅井の臣、前まえなみしん波新八郎ろうッ。織田殿にこそ、この槍を見参にと

参つたるに、邪魔だてする小面こづらにく憎い童めわつば。何奴なにやつだ」

「木下藤吉郎の家来、竹中久作とはわがことよ。——信長様に近づかんなど、身の程知らず。いで、久作が」

「さては、半兵衛が弟よな」

「そうだッ」

いうや否、掴んでいた敵の槍を手繰たぐつて、敵のふところへ跳びこんだ。

槍の穂が虚空へ刎^はねる。

久作が太刀のつかへ手をかける寸前に、新八郎は、組みついて来た。——だと、仰向けざまに、同体に倒れる。久作、下になる。蹴離す。——また下にねじ伏せられる。敵の指に噛みつく。

新八郎やや弛^{ゆる}む。——間^{かん}！——揉^もむ。解^ほれる。久作、起きかえ

る。咄^{とつ}嗟^さ。久作の手、鎧^{よろい}貫^{どお}しを引き抜いて、新八郎の喉^{のど}へ目

がけて突く。鎧貫しの切っ先、外^それる！そして、新八郎がうわ唇から鼻を削^そいで、眼孔へ突っこんだ。

「戦友の敵ッ」

後ろで、声がした。

首を掻く間もない。

刎^はね跳んで、久作は直ちに、その敵と渡りあつた。——この附近、すでに浅井方の決死隊が、何十人となく入りこんでいるらしく思えたが、敵は背後^{うしろ}を見せて駈け出した。追いかけざま、刀で、膝^{なく}を撲^{なぐ}つた。——倒れた上へ乗^のしかかつて、久作が、

「名ある者か。何ぞ一言、ないか、あるか」

炎のような呼吸でいう。

「小林端周軒^{はしゅうけん}なり。ほかに、何らいうことはない。ただ、信長に近づかぬ間に、汝^なごとき小侍の手にかかったが残念だ」

「浅井の家中なら知つていよう。浅井随一の豪の者、遠藤喜左衛門はどこにおる」

「知らぬ」

「いえ、吐ぬかせ」

「知らぬ」

「ええ、面倒」

久作は、端周軒の首を挙げて、また血ちまなこ眼に駈け出した。

——今度の合戦には、浅井の遠藤喜左衛門の首は、他人の手には渡さぬ。

久作は、戦の前から、こう広言していたのである。是が非でも、喜左衛門の首を、討つてみせなければならなかった。

河原のほうへ駈け降りる。——と、そこの雑草や石ころの辺りに、賽さいの河原を見るように、無数の死体が横たわっていた。

——と、その中に。

乱髪を顔にかぶせて、血どろのまま仰向いていた一個の死骸があつた。駈け下りて来た久作の足もとから、わツと、銀蠅ぎんばえの群れが唸うなつて舞つた。

「——やツ？」

何気なく、久作が振り向いた。髪の手で、顔を隠していた死骸の足を踏んだ気がしたのである。それはいいが、変な触感だったので怪しみながら振り向くと、とたんに、その死骸は、脱兎の如く、信長の陣所の前へ向つて駈け出して行つた。

「御要意あれツ。——それへ敵がツ」

久作は、後ろから呶鳴つた。

信長の姿を見かけて、低い堤を、駈け上がろうとした敵は、草わ

鞋らじの緒を踏み切つて、堤の途中ですべにたつた。

「うぬッ」

圧おしかぶさつて、久作が手捕りにした。そして、信長の前へ曳いてゆくと、

「はや、首を打てッ。すぐ打てッ。武士に恥を与えるな」

と、その者は怒号しつづけた。

信長の陣中へ、捕虜となつて縛くられて来た浅井方の一人安養寺三郎右衛門は、怒号しているその味方を一眼見ると、突然声をあげて泣き出した。

「オッ、喜左衛門どのか。おぬしまで生擒いけどられて来たか」

それで判明した。久作が縛からめた偽死にせ人の豪傑こそ、彼が求めて

いた浅井の猛將遠藤喜左衛門だったのである。

大勢は初め織田軍の総崩れに見えたが、敵の猛烈な先鋒隊の側面を突いた家康の三河勢によつて、辛くも信長の陣前に、その鋭角を喰いとめた形であつた。

しかし、敵にも二陣あり三陣ありである。押しつ返しつ、姉川の水を揉んで、敵味方、鐔つばを割り、槍を砕き、その勝敗は混沌とわからなかつた。

「わき見すな。ただ信長の本陣を突け！」

と、初めからの目標としていた浅井の二陣高宮三河守、三陣赤田信濃守、四陣大野木大和守やまとのかみなどの兵は、余り突き出し過ぎて、かえつて織田軍の後ろへ出てしまった。

家康の三河勢も、

榊原康政、

大久保忠世、

本多平八郎、石

川数正など、

「織田衆におくるるな」

と、忽ち対岸を突破して、越前勢の朝倉景健の幕営へ突き進

んで行つたが、ようやく味方と遠ざかつて、後ろも敵、前も敵、

甚だしい苦戦に陥つた。

まったくの乱軍だ。魚に河が見えないように、こうなつては誰一人、全体の大勢というものは分つていない。

身辺の必死のみである。ひとりの敵を突き伏せるとすぐまた一つの敵の顔を見るだけだった。

——が、これを高い所から俯瞰すれば、姉川の一水を挟んで、

両軍はちようど まんじけい 卍形に入りみだれていた。信長はさすがに冷静な眼でそう見ていた。藤吉郎もまた、そう大観していた。そして、

「この一瞬だな」

と、直感した。

勝ち。——負け。

そのわかれ目は微妙な一瞬だ。信長は、携たずさえていた杖で大地を叩きながら叱咤した。

「三河殿の人数が遠く突き入った。あの一点を、孤立さすなッ。

——誰ぞ、三河殿の苦戦を救いに向えッ」

だが、左右の備えに、もうその余力は残していない。信長の声

も、いたずらに噎^かれるばかりだった。

すると、北岸の一叢^{むら}の林から、真つ白な水煙を蹴立つて、乱軍の中をわき目もふらず直線に対岸へ上がって行つた一隊がある。

——信長の号令が届いたのではなく、信長と同じ大所へ眼をつけた藤吉郎の木下隊であつた。その旗じるしと金^{きん}瓢^{びょう}の行くのを見て、

「あッ。よしッ！ ……。藤吉郎が駈けおつた」

信長は、眼に流れ入る汗を、籠^{こて}手で横にこすりながら、傍らの小姓たちへ、

「かかる折は、またとない。そちたちも、河中へ行つて思いのまま働いてみい」

と、許した。

もりらんまる

森蘭丸その他、まだ年少な者たちまで、皆、われおくれじと敵を目がけて駆け出した。

深入りした徳川勢は、たしかに、危険は危険な行き方であつたが、けいがん炯眼な家康が、みずから全局の急所に打った一石だった。「この一石を見ごろしにするような織田殿ではあるまい」

と、家康も信じていたろうし、信長もたしかにそれは認めていた。

木下隊と前後して、稲葉一鉄の隊も後続した。池田勝三郎の隊も殺到した。

がぜん
俄然。

戦局はそこから一転して織田軍の優勢となった。朝倉景健かげたけの本陣は、五十余町も後退し、浅井長政も退いて、小谷城へ総くずれに駆け出した。

それからは、追撃戦であつた。

浅井、朝倉勢の討たれるもの数知れぬ程だつた。名ある将校だ
けでも、細江左馬介、浅井斎あさいいつき、狩野次郎左衛門兄弟、弓削六郎
左衛門、浅井雅楽助うたのすけ、今村掃部いまむらかもん、黒崎備中、等々々、戦後の
織田方の首帳に、豪華な亡命者の名をならべた。

追撃は急だつたが、朝倉勢を大寄山おおよせやまに追い上げ、浅井長政を
小谷へ封じこめると、信長は、戦後の処理を二日間にすべて終つ
て、三日目にはもう岐阜へさして帰陣していた。——その迅さはやは、

まだ死屍累累ししるい々と渚なぎさに洗われている姉川を、夜々翔かけわたる時ほととぎす
 鳥すにも似ていた。

両面將軍りょうめんしょうぐん

英雄も英雄の質それだけでは、英雄となり得ない。

環境が彼を英雄にしてゆく。

その環境とは、間断なく彼の素質を責め苦しめるようにばかり動いてくる、四囲の悪い条件である。眼に見える敵、見えない敵、あらゆる存在が、挙こぞつて、彼ひとりを苦しめ抜くために、この世に在るかのような形を取った時、彼は初めて、

——英雄たるか否か。

の試煉しれんに出遭であつていたのであつた。

姉川の合戦の直後、余りな信長の帰還の速さに、各隊の部將たちは、

「なにか、岐阜表に、事變でも起つたのではないか」

と、怪しんだほどだった。

帷幕いばくの高等軍略は、もとより下には分らないが、洩れ聞えたうわさによれば、

「——あの折、一挙に浅井の本城小谷を奪取だつしゆしてしまふべきだ

と、木下殿が切に獻言けんげんなされたそうだが、お用いもなく、その

翌日、敵の出城でしろ、横山城だけを落して、木下殿をそこへ詰め置か

れたまま、早速にも、お引揚げになってしまったのだとある……。

いかなる御意図か、どうも、われわれ末輩には、分らんなあ」

分らないのは、兵ばかりではない。丹羽^{にわ}、柴田、前田、佐久間

などの側臣さえ、信長の真意は分っていないなかつたであろう。――

薄々^{さと}覺つていたかと思われるのは、家康だけであつた。

家康の眼はいつも公平に信長を觀ている。近すぎず、遠すぎず、

熱しすぎず、冷淡過ぎず、信長を客觀し得られる立場にある。

信長が引揚げると、即日、家康も浜松へ向つて歸つた。

その途中、家康は、

「見よ、織田殿には、血具足^{ちぐそく}を解かれると、すぐまた、都扮^{みやこいでた}

装^ちに粧^{よそお}いかえて、あの鞭^{むち}を、京都へさして急がるるにちがいな

い。……さても、心の駒の忙しさよ」

と、譜代ふだいの石川、本多、榊原さかきばらなどを顧みていったが、果たして、その通りだった。

家康が、浜松に着いた頃、信長はもう、岐阜を去って、京都に出ていた。

といったところで、都には今、形に現われた事件も起つてはいないのである。けれど信長が恐れているのは、形に現われたものよりは、形を見せない「まぼろしの敵」であつた。

いつだったか。

信長はその悩みを、藤吉郎に、こう洩らしたことがある。

（余が最も恐れているものは何か。そちなら分るであろう。……

分らぬか)

藤吉郎は、首を傾^{かし}げて、

(左様ですな。……常に背後を窺^{うかが}っている甲斐^{かい}の武田。足もとの浅井、朝倉。こんなものではありません。浜松の徳川殿は、恐るべきではありませんが、叡^{えい}智^ちの人ですから、馬鹿ほど恐れるにも当らないでしょう。松永、三好、これは蠅^{はえ}です。蠅のたかりやすい腐れ物はいくらも存在していますが、所^{しよ}詮^{せん}、亡んでゆく性質のもの。ただ始末の悪いのは、本願寺門徒の諸山の僧侶ですが、これとてもまだわが君を恐れさせるほどのものではございますまい。……と、すればただ一つ、恐いものが残っておりますな)

(何だ。いうてみい)

（敵でもなし、味方でもなし、尊敬はしなければならなし、尊敬してのめいれば立ち所に陥し入れられる——両面の化け物殿——いや失言いたしました。將軍家ではございませぬか）

（ウむ。いうなよ、誰にも）

信長の悩みは、実にその敵でもない味方でもない人であつた。

彼が上洛した日にも、辻には、その幻の敵のな為すわざ業らしいものを

見た。それは暗に彼の悪政を歌つた落首らくしゅの立て札であつた。

はえ 蠅のように三好の残党がする悪いたずら戯わづらの一つにちがいない。

落首の立て札にはこんなことが書いてあつた。

ながらへば

また信長やしの俣まばれん

憂^うしと三好^{みよし}ぞ

今は恋しき

卑屈な落首の作者は、暗に信長の革新政治を弥次^{やじ}っているが、それは彼らの不平だけで、民衆の心を代表してはいなかった。

その証拠には、立て札に足を止める往来の人々も、一応は面白半分に見ているが、笛吹けど踊らずで、苦笑しながら通つてしまふ。——何か力んで、落首に同感をあらわしながら、庶民を焚^たきつけている者があれば、それはきまつて、三好党臭い牢人^{ろうにんもの}者か、さもなければ、一向^{いっこう}宗^{しゅう}の法師だった。

それとて、大した者ではなく、彼らの卑屈を知っている町人たちが、^{からか}揶揄い半分に、

「来た来た」

と、嘘にでも、信長系の武将か見廻りの兵でも来たように呶鳴ると、蠅牢人も蠅法師も、

「そらッ」

と、ばかり泡を喰つて、どこかへ隠れこんでしまうのだった。

勿論、京都在住の信長の部将は、見あたり次第に、落首の札などは取り捨てているが、彼らの粘りねばづよい攪乱こうらん戦術には、相当、手をやいているのである。

流言蜚語りゆうひげんごの出所も、皆そこからだし、放つけ火び、強盗、橋杭はしぐい

の伐り倒しきなど、眼に余るものがある。すべて信長の政治方針が招いた世相の悪化の如く見せかけるのが、彼らの狙いどころだつ

た。

そうした反信長同盟の張本と巢窟そうくつは、いったい何処にあるか
といえ、叡山えいざん、本願寺などの僧団と三好の残党の内にあると
は、誰もすぐ考えつくところだが、事實は、もっと奥深い深殿の
裡にその本尊はかくれていた。

將軍義昭よしあきであつた。

義昭は、かつて、信長の恩に感涙をながして、

（おん身を、父とも思うぞ）

とまで、いった人である。

その義昭が、なぜ？ どうして？ ——人の想像もつかない所

に、いつも人の表裏は潜ひそんでいる。

性格的にも、義昭と信長とは合わなかった。育ちも違う。信念も違う。

救われた当座こそ、義昭は恩人として、信長に接していたが、將軍家という席に温まると、何かにつけて、

「野人は困る」

と、信長を忌むようになった。うるさくなつた。なければと厭う存在になつた。——自分の勢威を凌駕する邪魔物と敵視するようになった。

けれど、それを表面化して、信長と争うほどの勇氣もない。彼の智謀は、極めて陰性であつた。——信長の陽性に対して、義昭の陰性は、飽くまで執拗に、飽くまで秘密に策されていた。

「……そうか。頭けんによしようにん如上人にも、お憤いきどおりとあるか。さもあるう
 さもあるう。信長の人もなげな専横せんおうばつこ跋扈、いかに御門跡ごもんぜきとて、
 お怒りは当然じゃ。——この義昭とても」

今日も。

彼のいる二条殿の帳ちようだい台奥深い辺りには、石山本願寺の使僧ひそ
 がさつきから密かに目通りを乞うて、何やら小声ではなしこんで
 いた。

「以上。……お耳へまで達したことは、極々ごくごく、内密の儀にござ
 りますれば、そのおつもりで。——同時に、甲州へのお使い、ま
 た、浅井家や朝倉家などへも、機を逸いっさぬように、御密書を送ら
 れますように」

「よし。わかった」

「おぬかりもございますまいが」

密使の僧は、こつそり退さがつて行つた。——その日、べつの殿中には、信長が、着京の挨拶のため伺候して、義昭の出座を待っていた。

義昭は、何喰わぬ体ていをつくろつて、信長の待っている公式の間へ現われた。

「姉川の一戦は、大そうな勝かちいくさ軍でお引揚げとやら、いつもながら御武勇なこと。いや、めでたい。祝着にぞんずる」

信長は、彼の世辞に、苦笑を禁じ得なかったが、皮肉にも、

「いや、御威徳によつて、後事に憂いもなく、一途いちずに戦えました

ために」

と、いった。

義昭は、女のように、すこし顔赤らめながら、

「安心するがよい。洛中は見らるる通り至極平穩。——が、戦後、怖ろしく迅い^{はや}上洛、なんぞまた、異変でも聞かれたかの」

「いえいえ。禁裡^{きんり}御普請^{ごふしん}の落成を拝し、その後、怠りがちの政務を視^み、かたがた御機嫌をお伺いに」

「いや、そうか」

義昭は、すこし安心して、

「このとおり身も健固、また、政務も滞りなく運^{とどこお}んでおれば、そう心に懸けて、度々の上洛には及ばぬ。——いや、それよりは、

姉川より凱旋のこと、きようは曠^はれの祝い、奥で盛宴を張ろう。

休息の上、後刻、うち寛^{くつろ}いでお互いに」

「なかなか」

信長は、手を振って、

「まだ戦いの後、将士に犒^{ねぎら}いのことばもかけて遣^やっておりませぬ。

信長ひとり、大宴の贅^{ぜい}に飽いては、何やら心がすまぬ心地——おあずけしておきましょう。再度、出仕の折に」

と、辞して退った。

宿所に帰ると、明智^{あけちみつひで}光秀が、

「大坂本願寺の門跡^{もんぜき}、顕如^{けんによし}上人^{しょうにん}の使いらしき僧が、二条の

お館^{やかた}を去って、何やらあわただしゅう立ち帰って行きました。――

—先頃から、僧徒と將軍家との往来に、怪訝いぶかしいものを感じまするが」

と、警備日誌をさし出した。

光秀は、藤吉郎の木下隊と交代して、その後、洛中守備軍として、京都に止まっていたので、室町むろまち將軍の目付役めつけやくともなつて、その人出入りや市中の出来事など、つぶさに書きとめておいたのであつた。

信長は、一覽して、

「大儀」

と、だけいつた。

救い難い公方くぼう——と、思つてか苦々しげであつたが、むしろ、

その義昭が、従順であるよりは、幸いのようにも思った。

夜は、朝あさやまにちしよう山日乗、島田弥右衛門など、禁裡きんりの造営に当つて

いる奉行たちを呼びよせ、その竣しゅんこう工の模様を聞きとつて、

「大儀、大儀」

と、機嫌が直つていた。

翌朝。

暁ぎようき起に嗽水うがいして、彼は、ほぼ落成した御所の外廻りをここか

しこ見て歩いていた。そして、皇居を拝し、陽の出る頃は、もう宿所の寺院に帰つて、朝飯を喰つていた。

「戻るぞ」

上洛の折は、平服だったが、帰りは武装していた。——岐阜へ

帰るのではなかったのである。

ふたたび姉川の戦場を一巡し、横山城に詰めている木下藤吉郎に会い、各所の押えとして残っている味方の部隊に令を飛ばし、
さわやま佐和山の城を攻囲した。

佐和山には、浅井の家中 いそのたんばのかみ磯野丹波守の手勢がなお立たて籠こもっていたからである。

「これで一掃除すんだ」

岐阜城へさして信長が帰ったのはそれからであつたが、残暑の
 疲れを、彼も兵馬も、のびのび伸々、ひと月と休んでいるいとま違ちがひもなかつた。
 摂津せつの中之島の城にいる細川藤ふじたか孝から「火急」として飛状が

来た。——同時に、京都にある明智光秀からも、

摂津野田、福島、中之島一円に亘り、阿波三好党一万余、墨を築き、浮浪の徒を糾合候て、一揆に及び、門徒僧数千も加わり、本願寺門跡、これが背後の謀主たる由にて、勢い猖獗、寸刻の猶予もなりがたく覚えられ候に依而、早々、おさしず下し賜わるよう……

との急状が届いた。

摂津の石山本願寺の地は、後に、大坂城の本丸となつた難波の杜の岡にある。

大坂御坊とも、石山御堂ともよばれていた。

蓮如の法孫、証如からの道場で、室町幕府の無統治、

無秩序のなかに建立されただけに、社会の動乱にいつでも対抗で

きるだけの構造と武備を持っていた。濠ほりを深くし、城橋を渡し、石垣を築き、輪りんかん奘は寺院であるが、全体は堂々たる城廓をなしていた。

もちろん、僧そく即兵。——ここにも南都、叡えいざん山に劣らない法師武者が充満しているのである。

——信長、何者ぞ。

ふる旧い法城に住む僧として今、信長に反意をもたない僧は、ひとりもなかったであろう。——豎じゆし子何者ぞ！ の語気のうちにすべての感情がこもっているといつていい。気に喰わない理由の一つを挙げれば、

（——伝統を無視する仏敵だ）

と、いうにあらう。

なお、いわせれば、

（——文化の破壊者だ。野放図のほうずもない魔王が、獸群しそうを使噓しして、

社会を野原とまちがえて出て来たものだ）

と、口を極めて罵ののるだろう。

もつとも石山の法城の大衆が、そう怒っているにも理わけはあるこ

とだった。——むしろ信長のほうが余りに意慾を急にしたため、

よけいな大敵を——それでなくても多事多端なところ——みずから求めてしまった失策の一つといつていいかもしれないのである。

それは。

石山本願寺に向つて、その前に信長から、

（立ち退いて、その地を明け渡せ）

と、交渉というよりは高圧的に移転を命じたことから端を発したものだつた。

法城の誇りはたかい。彼らの擁している特権は古い。当然、

「何を、ばかなッ」

と、信長の命を一蹴した。

そして、西国方面や堺さかいなどから、鉄砲二千挺を購入したとか、一山の僧兵が、にわかにも倍ふにも殖ふえたとか、塹壕ざんごうを坑ほりぬいているとか、法城の武装化は、ちらちら聞えていたことでもあった。

これが——海を隔てた阿波あわ、四国の三好党と結びついたり、将

軍義昭よしあきの弱点をうまく唆そしたり、近畿きんきや堺の町人に悪宣伝をまいたり、一揆いつぎを焚たきつけたり、いろいろやるな——ということとは信長も予想していた。

で。京都や難波なにわの味方から急報をうけ取っても、さして、意外とはしなかった。むしろ、

「この機に」

と、新しい決意さえ持つて、すぐ自身、摂津へ出陣した。

途中、彼は、京都に寄つて、

「願わくば、あなたの御出陣をも仰ぎたい。將軍家が陣頭に立たれたと聞えるだけでも、士気は奮い立ち、一揆も忽ち平定しまし
よう」

と、義昭に告げて、無理に陣中へ伴れて行つた。

義昭は、嫌々だったが、嫌といえなかった。——役にも立たない厄介者を伴れたようであるが、信長に取つては、名分の楯^{たて}になる。また反^{はん}間^{かん}の計にもなつた。

難波の神崎川、中津川のあたりは、まだ葭^{よし}や葦^{あし}や所々の耕地や、塩気のある水がじめじめしている池などの多い——渺^{びよう}茫^{ぼう}たる平野だつた。

中島には、南中島と北中島とがある。——北の砦^{とりで}には、三好党が拠^より、南の小城には、細川藤孝^{ふじたか}が拠つていた。

戦いは、この辺を中心として、九月の上旬から中旬まで猛烈に一勝一敗をくり返していた。——野戦であり、盛んに新式の小銃

や大鉄砲が用いられた。

「——今だ！」

九月十四、五日から十六日にわたる頃である。

それまで、山深くに、また城を閉じて、敗戦の惨味さんみをかみしめていた浅井、朝倉の軍勢は、信長の虚を窺うかがうや、装備あたらたを革めて、琵琶湖を漕ぎわたり、大津、唐崎の浜に、陣を布しき、一部は、叡えいざん山へさして続々と登って行つた。

宗門の上では、派別を称とえている僧団も、「反信長」の行動では、完全に、

——打倒だとうぶつてき仏敵。

へ一致していた。

「彼は、叡山の山領を、恣に削つた。——伝教大師このかた、

ふかしんきよう不可侵境の山則を、またわれわれの体面を、辱め踏みにじつた

！」

叡山と浅井、朝倉の関係は、親密だった。この盟約も、当然、ものをいつている。

——信長の退路を断て！

三者の意見は、一致して、行動に移った。朝倉軍が、湖北の山からうごき出す。浅井軍が、大湖を渡つて上陸する。形勢はまさに大津の咽喉を扼し、京都に入り、淀川に待つて、大坂石山の本願寺、その他と呼応して、信長を一挙に、その間で屠り去つて

しまおうとする作戦かに見られる――

一方。

なにわ

難波の神崎川、中津川辺の湿地帯で、石山御坊の僧軍や、中島

とりで

砦の三好党の大兵などと対峙たいじして、連日、苦戦をつづけていた信

長の耳に、

「後方に

いちだいやく

大厄が

しゅつたい

出来」

と、その警報が聞えたのは、同月二十二日だった。

詳細はまだ分らない。

しかし――

信長の直感は、

「ちいッ」

何ものかを奥歯にかんだ。

「勝家ッ、勝家」

と、柴田勝家を呼びたて、和田惟政これまさと共に、ここに殿軍しんがりせよと命じ、自身は、

「すぐさま、引つ返して、浅井、朝倉を初め、叡山をも、粉碎してくれん」

と、はや用意に取りかかる。

陣中の動揺は争えなかった。柴田勝家は、

「次の詳報が参るまで、もう一夜お待ちあつては」と、止めたが、

「一瞬に、世の相貌そうぼうも変ろうとする今、何で！」

と、ばかり肯く色もない。

和田惟政は、また、

「われわれども、死を賭して、殿軍は仕りますが、いかんせん、

渡船、荷舟、田舟にいたるまで、船は戦いの前に、敵に攫われ、

また焼き捨てられて、この南中島から対岸へお越え遊ばすには、

筏を組まねば相成りません。——せめて、夜半頃までお延ばしあ

つて」

それをも、信長は退けて、

「徒歩の兵は、筏で渡れ。馬を持つ者はわれにすぐ続け。——才

才、幼年の頃、清洲の庄内川に出て、水馬に遊び暮したことが、
今ぞ、思いがけなく役に立った」

信長はやがて、馬上となると、中津川の流れへ、駒を乗り入れた。

が——彼一人ではなかった。

彼は、もう一名の大將の駒の鞍つぼへ手をかけて、引き寄せ引き寄せ、水路を導いていた。

將軍家義昭^{よしあき}である。

「あなたも」

と、信長は、共に彼を伴^つれて引き上げの途にいたのだった。

義昭は、水馬の心得がないので、満々たる大河へ駒が泳ぎ出ると、
「あぶないッ」

思わず叫んだ。

そして、駒のたてがみに、しがみつこうとするので、

「馬の平首に縋すがりたもうな。鞍の上であがき給うな。馬を疲れさせぬよう、お楽にあれ。——信長がついておれば、大船に乗られた気で」

と、教えたり、励ましたり、慰めたりしながら進んだ。

敵の塹壕ざんこうや、砦とりでの櫓ぐらに、

「信長だッ」

声が揚る。——忽ち撃つ。

ド、ド、ド、ドッ

と、小銃、大鉄砲、つるべ撃ちに、浴びせかけた。

水面は、雨のような、飛沫ひまつに白くなった。義昭は気も萎なえてし

まった。——しかし、その狙撃はすぐ熄んだ。信長を撃つために、義昭を撃つてしまふ危険を敵方も恐れたからであつた。

信長は、義昭を楯として、北岸の洲へ、難なく躍りあがつてゐた。

信長、義昭につづいて。

夕陽の赤い中津川の流れを、十騎、二十騎——何十騎となく、泳ぎ渡つた。

日が暮れると、兵をのせた筏も、続々と越えて行つた。

「敵は、退く。——総引揚げとみえた」

三好党の塹壕からも、本願寺僧の戦線も、一斉に攻勢を展開し、ひろい闇の中には、ひっきりなし小銃の音がパチパチと鳴り

ひびいた。

こんど此処の合戦では、十四日の天満てんまノ森もりの衝突を除くほかは、ほとんど、鉄砲と鉄砲との撃ち合いが多かった。

従つて、塹壕戦術が、用兵の上に新しい進歩を示した。

足場櫓やぐらから撃ちこむ大鉄砲のうなりも、違つた音響をもつて、相互の陣地をゆすぶつた。

石山御坊には、信徒の献金による淨財が豊富である。それがみな弾丸たまとなり銃器となつて、三好党を援けたすた。

ここ数年のうちに、鉄砲の発達とその普及力には、驚かれるものがある。織田方の銃器は、光秀の献策で、極く最近、新しい様式のをだいぶ入れたが、僧兵の銃隊は、すべての手に、新式

のものが揃っていた。

射撃の技倆も、ふしぎに僧兵は巧^{うま}かった。平常の修行が役に立って、すぐ精神を標的に集注できるせいだろうという者もある。

——また、彼らには、

仏敵。

と、狙う敵に一倍の憎しみと、信仰の護符^{ごふ}が頭上にあるので、その弾丸^{たま}も、よくあたるのではないかと——織田方の雑兵などはすこし気味わるがった程であつた。

白兵戦でも、ひどく強い。

天満^{てんま}ノ森の合戦などでも、織田方の前線は、七花^{しちかはちれつ}八裂の粉碎^{えつちゆ}をうけた。その日、佐々成政^{さつさなりまさ}は、重傷を負い、野村越

中^{うのかみ}守は戦死し——辛くも前田犬千代が力戦して、わずかに味方の退^{のきぐち}口を取ったので、全滅をまぬかれたくらいだった。

「坊主の強さよ！」

負けぎらいな信長も、この戦いでは、時には悲痛な苦笑いを、しばしば、噛みしめたものである。

その石山との戦いを捨てて——一転、彼が馬を向け直した行く先も、また——叡^{えいざん}山という昔から荒法師をもつて鳴る僧団を中心とする戦場だった。

幾たびか、鞭^{むち}を折り、馬を代えて、彼が京都に着くと、

「おうツ、殿ツ」

「残念ですツ」

悲涙をたたえた幾つもの血相が、彼の馬前へむらがつて、こもごもに、事態の急を訴えた。

「何より先に、申しあげねばならぬ儀は、御舎弟の信治様のぶはる（織田九郎）——また、お附添の森三左衛門可成よしなりどの、共々に、宇佐山の城を枕に——まる二昼夜の御苦戦もむなく——討死あそばされたことにござりまする」

惨として、ひとりがそのまま、声を嚙のむと、べつの者が、また、声をふるわせて告げた。

「浅井、朝倉に山門の衆徒しゅうとも加わり、敵は何せい、二万をこえる大軍にござりますれば——無念、力も及びませぬ。信治様、森三左衛門どのの御最期につづいて、青池駿河あおちするがどの、道家清十郎どうけど

の、尾藤源内どの、その他まだ……」

と、主なる味方の戦死者を思い出すだけでも、無念がこみあげ、涙が声をかすめて、将士はみな籠手の肱を曲げて、顔をおおってしまった。

——と、信長は、

「この期に臨んで、くどくどと、返らぬ者どもの戒名を読み立てるな！ 聞きたいのは、今の戦況だツ。敵は、どこまで来ておるか。どこが、血戦の中心か。……ええ、その方でもでは大勢もわかるまい。光秀はおらぬかッ。光秀、戦場なれば、急いで、これへ呼びもどせ。——光秀を呼べッ」

叡山えいざん

三井寺みいでらは、その山門も坊舎も、聯合軍の旌旗せいぎにつつまれていた。ここを本陣として。

浅井、朝倉の主將たちは、きのうは信長の弟九郎信治のぶはるの首を、大勢の眼で、実検じっけんした。

また、次々と。

青池駿河守、道家清十郎、森三左衛門可成よしなり、そのほか織田家の名ある士たちの首級しるしを、飽き飽きするほど、検分した。

「姉川の敗北も、これで雪辱せつじよくしたというもの。幾らか、胸がはれた」

一名が、つぶやくと、

「いやまだ、信長の首を見ぬうちは！」

誰かが強く叫んだ。

すると、北国訛なまりの濁だみ声で、

「あははは。見たも同じよ。その信長も、前には難波なにわの石山、三好勢。うしろには、この大軍。どこへ逃げ得よう。——網の魚だわ」

半日も、無数の首級しるしを検分して、誰も血臭いにおいに附きま
とわれてならなかったとみえる。夜に入ると陣の幕舎には酒さけ瓶がめ
が持ちこまれ、勝かち軍いくさの気を昂あげる心も手伝つて、兵に、酒を
汲ませながら、

「京にはいるか。止まって、大津の咽喉いんこうを抑え、徐々、包囲をちぢめて網の大魚を完全に捕るか」

と、飲みながら軍議に移っていた。

「もちろん、京師に兵を進め、淀川、河内かわちの野に、信長を殲滅せんめつすべきである」

と、いう者と、

「不利だ」

と、反対する者があつた。

浅井、朝倉の両家は、目的のため一体になつても、内輪の議論などになると、各が、体面を固執こしつしたり、無用な小智慧を述べたてるのに、時を費やしたり、夜半を過ぎてもまとまらなかつた。

「怖ろしく空が赤いなあ？」

評議に倦うんで、外へ出て来た浅井方の将が、空へ手をかざして
いると、

「山科やましなから醍醐だいがこ方面の民家へ、お味方が火を放つけたのでござい
ます」

と、歩ほ哨しょうの兵が答えた。

「なんだって、あんな方まで、焼き立てるのか。無益ではないか」
つぶや
呟つぶやいていると、

「無益ではない。敵を牽制けんせいする必要がある。京都守備の明智光
秀の隊が、死にもの狂いで暴れまわっておる。また、味方の猛威
を示すためにも——」

と、それを指図した朝倉家の將たちが口を揃えて反駁はんぱくした。
とこうする間に、夜が明けて来た。大津は街道の要衝ようしゅうであ
るが、ひとりの旅人も荷駄にだもない。

そこを一騎。——後からまた二、三騎。

伝令の兵である。ぱツと飛び下りて、駒もそのまま、のめるよ
うに山門へ駈けこむ。

「すぐ、蹴上けあげの辺りまで、信長が襲よせて来ましたツ。明智、朝山、
島田、中川などの諸隊を先鋒せんぽうとし、死にもの狂いの勢いで」
伝令のことばに、諸將は、耳を疑つて、

「信長自身ではあるまい。信長がそう簡単に、難波の戦場から引
つ返せるわけではない」

口々にいつていたが、

「山科^{やましな}の辺りで、味方の勢は、はや二、三百名も討死をとげました。なにしても、敵は勢いが烈しくて、例の如く、信長が、死ねや死ねやと、声をからして指揮にあたり、信長自身も、まるで夜叉^{やしや}か鬼神のように馬を駆つて、これへ来る様子です」

浅井長政も、朝倉景健^{かげたけ}も、そう聞くと、顔いろを変えた。

わけて長政にとっては、妻の於市^{おいち}の兄にあたる信長である。かつては、義弟^{おとうと}の自分にも優しい人であつただけに、信長の真に怒つた形^{ぎようそう}相^{さう}が、ふと、正直な本心を慄然^{りっぜん}とさせた。

「退^ひこうツ。叡山^{えいざん}へ」

長政が、口走るような、急な語気でさけぶと、朝倉景健も、

「そうだッ、叡山へ寄れ」

と、どなつて、同時に、騒ぎたつ本陣の将士へ、

「街道の民家へ、火をかける。——いや、先鋒の味方を、急いで、退かしてからだッ。——火を放て、火を放て」

と、号令した。

熱風は、信長の眉を焦がした。駒のたてがみや、鞍総にも火がついた。

「——死のうは一定」

この一語は、彼の心の護符だった。生死の境に立つと、われ知らず、念仏のように、また、謡の文句のように、唇から衝いて出た。

かばね
屍、屍、屍。

敵味方の無数の死骸も、踏みこえ、躍りこえ、突撃してゆく彼の眼には、一掬きくの涙もなかった。

死のうは一定——生身いきみの我也、路傍の死者も、彼は差別を思わないのである。

やましな
山科から大津へ。

途々、乱離らんりとして、往来に焼け倒れている民家の火の梁はりも、焰のうずも、彼の行くを妨さまたげることとはできなかった。

彼の身そのものが、すでに一炬いつきよの炎であつた。

駈けつづく彼の幕下も一団の火となつて、

「信治様とむらの弔い合戦」

「森、青池、道家殿などの怨みを雪がずに措こうか」

と、猛進してきた。

が、三井寺にも唐崎からさきにも——来てみればもう敵は一兵も見えなかった。すべて叡山へ逃げ上ってしまったのである。

「おお。逃げ足の迅はやさよ」

——仰ぐと。

鈴ヶ峰、青山岳、坪笠谷つばがさだにのあたりまで、敵の二万余に、一山の僧兵を加えた大軍が、

（逃げたのではない。この陣容がものをいうのはこれからだ）
と、誇示こじするかのよう、旗差物をひるがえしていた。

信長は、屹きつと見て、

「ここだ。この山の天嶮てんけんに非ず、この山の特権こそ、信長の敵である」

と、心に宣言した。

彼は、あらた革めて思った。——源平のむかしから今にいたるまで、歴代の朝廷におかれても、心ある為政者も、革新をはか図る英雄も、無数の民も、どれほどこの山の伝統と特権に苦しめられわずら煩わされて来たことか——と。

「この山のどこに、真の御みほとけ仏の微光でもあるか。国家の鎮護ちんごたる大本があるか！」

信長は、まんこう満腔の怒りを、心に抑えつけながら心で叫んだ。

唐の天台山をここに移して、開山伝教大師が、

あのかたさんみやくさんぼだい
阿耨多羅三藐三菩提の仏たち

わが立つ^{そま}杣に冥^{みようが}加あらせ給え

と、五台四明^{めい}の峰に法の灯^{のり}をともしたのは、神輿^{みこし}をかついで朝廷^{ぎょうそ}へ嗽訴^{ごうそ}するためだったか。政治に容喙^{ようかい}して特権を逞^{たくま}しゅうするためだったか。武力とむすび権門^{しそ}を使^し喚^そし、世を紊^{みだ}すためだったか。——峰谷々に、法体^{ほつたい}へ甲^{かつちゆう}冑^{きゆう}をつけた化け物を蓄^{たくわ}えて、槍、鉄砲、旗さし物を、全山に並べるためだったか。

「……………」

信長の眼には、憤りから滲^{にじ}みわく涙^{なみだ}が沸^{たぎ}った。

思^けえ。外道^{げどう}。

叡山は、国家鎮護の霊場として、初めて、その特権も伝統もあ

るのである。

その本来のものは今、叡山のどこにあるか。

こんぽんちゅうどう
根本中堂をはじめ山王七社も東塔西塔の伽藍がらんも三千の坊ぼ

うしや

舎も、法衣に武装した化け物ばものどものすみか以外の何ものでもな

い。陰謀、策動の巢以外に、現在の世のなかへの何の役割をしているか。国家の鎮護となっているか。民衆の心の光となっているか。

「よしッ！」

唇に喰い入ったまま彼の齒は赤いものに染まっていた。

「——この信長を、仏法破壊の魔王と称よばばよべ、妖婦の虚飾にひとしい一山の輪奐りんかんの美も、お道化者どけものにひとしい甲冑の坊主ど

もも、一戦の火に葬り去つて、その焼け^{あと}址^{まこと}に、真の青人草^{あおひとぐさ}を生ぜしめ、真の弥陀^{みだ}を招来して見せてくりよう！」

即日。

彼は、全山の包围を命じた。

もちろん彼の立つ所に、彼の擁^{よう}する全勢力の兵馬は、湖を渡り山をこえ野路をいそぎ、続々として数日のうちに集まつた。

一度攻め取りながら、また敵が捨て去つた宇佐山の焼け^や址^{あと}を、信長は、本陣とした。

「まだそこらには、討死した信^{のぶ}治^{はる}や森^{よし}可^{なり}成^{どう}や道家清十郎^{けいじゅう}などの血も乾いておるまい。——瞑^{めい}せよ、忠烈なる亡魂ども、そちたちの鮮血を、あだにはせぬぞ。末法魔界の仏灯に代つて、昭々と、

世を照らす燈明に、そち達の血はよみが甦えつて燃ゆるであろう」

宇佐山の土を踏んだ時、信長は土に向つて合掌した。

ゆがさんみつ 瑜伽三密の靈場叡山を敵として、今、自己の全武力をあげて包囲にかかりながら、一塊かいの土には、掌てを合わせて哭なく信長であつた。

「……………」

ふと、側を見ると、自分と同じように合掌して泣いている小姓がある。——父、森三左衛門可よしなり成をここに亡うしなった蘭丸らんまるであつた。

「蘭丸」

「はい」

「泣いておるのか」

「ごめんくだされまし」

「今だけはゆるす。もう泣くなよ。そちの亡父^{ちち}が笑うぞ」

——が、信長の眼こそ熱くなりかけていた。彼は、床^{しょうぎ}几^ぎを移

させて、包囲陣の配置を、高い所から一望した。

叡^{えい}山^{ざん}の麓^{ふもと}は、見わたす限り、味方の兵馬と旗だった。

叡山の峰々は、雲のかからぬ所、雲のかかっている所、すべて敵軍だった。

まず、麓の布陣を見ると。

穴田村方面には、佐々^{さつさ}、進藤、村井、明智、佐久間の諸隊。

田中の畠には、柴田隊が掘^よって、氏^{うじ}家^{いえ}、稲葉、安藤の諸隊が

凸^{とつじ}字形に、日吉神社^{ひえ}の参道まで突出している。

香取屋敷の方面は、丹羽^{にわ}、丸毛、不破^{ふわ}などの兵で埋まり、唐崎^{つげじろ}の附城には、織田大隅守^{おだおおすみのかみ}——そして叡山の裏——京都に向つてゐる方の麓口には、足利義昭^{よしあき}、その他、在京の兵が八瀬^{やせ}、小原をめぐつて、ずっと取り巻いてゐる形にあつた。

「義昭將軍こそ、痛^{かゆ}し痒し、さだめし物憂い顔しておろう」
信長は、その顔つきを想像して、何か、おかしくなつた。

「や。あれへ来る兵船は、何者か」

湖水をふり向いて信長が訊ねていると、やがて、

「木下藤吉郎殿、横山城の御人数のうち、七百を割いて、湖を押し渡つて、御加勢に馳せつけられました」

と、注進があつた。

間もなく、藤吉郎は、船から上がるとすぐ、陣地へ登つて来た。留守は、竹中重治一人あれば足るという。信長は、よく来たともいわなかったが、不機嫌ではなかった。

十月にはいった。

十月の半ばもすぎた。

いつもの信長の戦法とちがつて包囲陣は、動かなかつた。——
山上に籠こもつた浅井、朝倉、僧兵の聯合勢は、やつと気がついた。
「しまった！ 敵は根気よく糧道を断つて、われわれを乾干ひほしにする作戦だ」

もう間に合わなかつた。山上の穀倉は二万余の大兵で食うので

またたく間に空になつた。から木の皮まで喰いはじめた。

十一月となる――

山上の寒氣に、またべつな苦痛が襲つて來た。藤吉郎は、かねての獻策を、信長へ促うながして、

「もうよい頃でしよう」

と、囁ささやいた。

稲葉一鉄が呼ばれて來た。信長の旨をうけて、彼は從卒四、五人を連れただけで叡山へ、そして、僧兵の本陣である根本中堂で、西塔さいとうの尊林坊そんりんぼうと会見した。

尊林坊と一鉄とは、旧交のある仲だった。その誼よしみとして、降伏をすすめに來たのである。

「何かと存ずれば、友人として冗じょうだん戯ぎも程になされい。——降伏を乞いに来たのかと思うたゆえ、会見をゆるしたのじや。われわれに降伏して出ろとは、なにをばかな！　かくの如く氣の立つておる中でござるぞ。たわ言も、首と相談で申されたがいい。あはははは」

尊林坊が、肩をゆすぶつて、哄笑すると、他の法師武者たちは、殺氣を眼に燃やして、一鉄の唇くちもとをねめつけていた。

先方に、いわせるだけをいわせておいてから、一鉄は、徐ろおもむに口を開いた。

「大師でんぎよう伝でんぎよう教が当山をひらかれたのは、王城の鎮護、国土安泰のためと承知いたすが、甲かっちゆう冑ゆうをまとい、劍槍けんじゆうを羅列られつし、政争

にか関わり、武略をもてあそび、朝命にそむ反く兇兵に与くみして、王土の民を苦しめよとは、よも天台の立りゆうがん願ではあるまい。とはいえ、一山の大衆もまた、われわれ武臣も、いずれか皇土の臣でないものはない。かくの如き争乱は、みな宸しん襟きんを悩まし奉るものである。

——大悟せられよ、僧は僧にきみよう歸命せられよ。速やかに、浅井、朝倉などの徒を、山より追い下し、各には武器をすてて本来の仏弟子に返られい」

腹からの声である。

この間、山法師たちには、一語をさし挿はさむ隙も与えなかった。

「——もしまた、命に従わねば、信長様にも、これまでとあつて、根本中堂、山王七社、三千の坊舎、峰谷々をも焼きつくし、一山

ともがら、塵殺しになさるべしとの御決意である。——我意なく、冷静に、お考えありたい。——当山をして、地獄と化すか、旧態の悪風を一掃して、霊地の一燈を保たるるか」

突然、法師側の間から、

「無用、無用ッ」

「詭弁だッ」
きへん

と、どなる者があつた。

「しずまれ」

尊林坊は、それを制しながら、苦笑をふくんで、

「非常に陳腐で退屈な御説教であつた。そこで、謹んでお答え申

そう。叡山には叡山の権威があり、信条もある。要らざるおせッ

かいというほかない。一鉄どの、日が暮れる、はやはや下山されよ」

「尊林坊、おぬし一存でよろしいか。一山の碩^{せき}学^{がく}、長老をも会し、慎重に御^ご僉^{せん}議^ぎあつては如何だな」

「一山一心一体。尊林坊がことばは即ち全山の声でござる。さもなくて、何でこの山の嶮^{けん}に信長調伏の旗を立てようや」

「では、どうあつても」

「愚^ぐや。愚や。われわれは飽くまで、武力の侵略者と抗争する。血をもつて、伝統の自由を守る。帰れッ」

「左様か」

一鉄は、起ちもせず、

「……浅ましや、なぜ、その血をもつて仏光の無限大なるものを護らんか。——おぬしらの護らんという自由とは何？ 伝統とは何？ それは皆、自己の栄華にだけ都合のよい偽瞞ぎまんの護符ごふではないか。もはやそんな護符が通用する世ではないぞ。時勢を直視なさい。眼をふさいで時の潮うしおを邪よこしまげる利己心の亡者どもは、春秋の落葉と共に焚ふん殺さつさるるもぜひあるまい。——尊林坊、その他の法師衆、悔ゆるなよ。ではおさらば」

稲葉一鉄は、下山した。

冬は十二月となつた。こがらし 凧は、枯葉を吹いて、嶺みねの空を翔かけまわる。

朝夕は霜。——折々には、雪まじりの寒風が吹いて来た。

すると、この頃になつて、毎夜のように、山には出火が頻々ひんぴんと起つた。ゆうべは、横川よかわの大乗院の薪倉まきぐらから、おとといの夜は、飯室谷いいむろだにの滝見堂から、小火ぼやがあつた。

こよいもまた、まだ宵なのに、中堂の坊舎から、火災が起り、さかんに鐘を鳴らしていた。附近には、大きな堂閣どうかくが多いので、法師武者は、消火に必死だつた。

真つ赤な空の下に、闇の谷。——叡山えいざんの谷々は深い。闇は濃
い。

「アハハハ、あの慌あわてざまは」

「毎夜のこととて、寝るまもあるまいて」

「笑止笑止」

猿の群れではない。異装な黒い人影である。風の梢こずえにのぼつて手を叩いていた。彼らは、木の実みにあらぬ干飯ほしいいの弁当を喰いながら、毎夜の火事を見物していた。

夜ごとの出火は、藤吉郎の献策で、その家中である蜂須賀党が得意の仕業しわざであるなどとも——近ごろようやく噂されて来た。

夜は怪し火の頻ひんぱつ発に悩まされ、昼は防備につかれ、そして、喰う物は尽きるし、防寒の用意もない。

山は、霏々ひひと、雪の吠える冬になった。——二万の兵と、数千の山法師も、今は、霜げた菜のように意気も失うせてしまった。

十二月の中旬だった。

武装を解いて、ただの僧衣となった代表者一名が、法師武者四、

五名連れて、

「織田殿に会い申したい」

と、陣門へ来た。

信長が会ってみると、それは先に稲葉一鉄と会見した尊林坊であつた。——一山の意見が變つて来たので、和議を進めたいという口上であつた。

「ならぬ」

信長は、一言に退け、

「先にわれより遣わした使者に何と申したか。恥をこそ知れ」

と、陣刀を抜いた。

尊林坊は、おどろ愕いて、

「あッ、御無法なッ」

躊^{よろ}めき立つところを、一閃^{いつせん}、戛^かツと横に払つて、

「法師ども、その首を拾うて帰れッ。信長の返事はそれだ！」

随員の法師たちは青くなつて、山へ逃げ歸つた。——その日、大湖を渡つてくる雪みぞれは、信長の陣へも強く吹いていた。

信長は、鉄の意志を、叡山の使いへ示した。しかしその時、彼の胸にはまた、べつな大難に対する処理が考えられていたのであつた。

前に見える敵は、多くの場合、壁に映っている火事の影にすぎない。

壁に水をかけていても火は消えない。そのまに、ほんとの焰は

背へ燃えついてくる。

兵法に誡いましめてある常識だ。しかも信長の場合は、知りながら、その火元とは戦えなかった。

——つい昨日。

岐阜表から急報がはいった。

甲斐かいの武田信玄が、兵を催して、留守を襲わんとしているというのである。

また。

本国尾張の長嶋ながしまに、数万の本願寺門徒が蜂起ほうきして信長の一族

彦七郎信興のぶおきは殺され、その居城は占領された。そして良民のあいだに、あらゆる反信長の悪声を放ち、甲斐の武田勢を誘導する

工作にかかつている——ともあつた。

信玄がそう出て来たのは、うなず領かれた。

「織田家とは姻戚いんせきの縁を断たつた」

と、いうことを、彼は近頃、公然と声明していた。

一面、年来の呉越ごえつの敵、越後の上杉家とは休戦を調とえて、専ら、

志向を南方から西進へ転じて来ているのである。この傾向は、信長にとって、実に、何ものよりも警戒を要するところだった。

また、そういう悪い条件は、いつでも、退のつ引びきならない場合を計つて、突然、銚ほこをあらわすものでもあつた。

「藤吉郎。藤吉郎ッ」

「はッ。——御前おんまえに」

「光秀の陣地を訪れ、光秀と同道して、すぐ、この書面を携えてたずさ京都へ使いせい」

「これは、義昭將軍への」

「そうだ。將軍家に、和議の仲裁をなかだちいたすように、それとなく、書中認めてはあるが、そちの口からも……。よいか」

「心得ました。……しかし、つい今し方、叡山からの和睦の使者わぼくを、首にして、追い返されましたが？」

「わからぬか！ ああせねば和議は纏まとまらん。たとえ成立しても、わが足下あしもとを見て、和議などはすぐ反古ほごとし、追い撃ちして来るは明らかである」

「御意。わかりました」

「いずれにせよ、どこの炎も、火元はひとつ、火悪戯ひいたずらのお好きな、あの両面の公方殿の仕業に相違ない。——その公方殿に、わざと和睦の仲裁をさせて、急に軍を退くひのだ。秘かにだぞ。急いで行け」

和議は、成立した。

公方の義昭は、三井寺まで来て、信長を宥めなだ、和睦のとりなしに努めた。——が、それは表面のことで、そうさせたのは信長であるこというまでもない。「よい機しお」とばかり、浅井、朝倉の両軍は、即日、本領へ帰ってしまった。

ああ拙せつなる哉、浅井朝倉の徒と。この折、四国摂州せつしゅうなどの同心へ申し合せ、山上に越年の覚悟もて、信長を引寄せおか

んには、さしもの織田勢も、後方の憂ひはあり、四囲の情況すべて利非ず、遂には、大將まで危ふからんものを、和睦にたばかられ、早々陣をひき払ひ、嬉々ききとして故郷へいそぎ帰る。今にみよ、ふたたびその故郷をも信長に討ち取られんと——その頃の人々、みな笑ひ合うてぞあたりける。

当時の世評は、その始末を、物の本にも誌しるしていた。

十二月十六日。信長の全軍も、陸路、勢多せたの舟橋を渡つて、岐阜ふへひきあげた。

翌日。——藤吉郎の木下隊七百人も、唐崎の浜から兵船で、対岸横山城へさして帰還した。

「ああ、久しく便りも怠っていた。……母上へも。寧子ねねへも」

その船中。藤吉郎は、囲いの内で、筆をとりながら、洲股すのまたの領地へ想いを馳せていた。——何とや書かん？ 母へも妻へも書きたいことが多すぎる。筆を持つと、ただ想いのみ乱れてくる。

——と。すぐ近くで、部下の将が、何か兵をどなりつけたような大声がした。それと共に、さぶん——と烈しい水音が聞え、彼の膝や、懷紙にまで、飛沫しぶきがかかったので、何事かと、胴どうの間まへ出てみた。見れば、この極寒、ひとりの若い士卒が、湖へ蹴落されていた。今にも凍え死なんばかり、顔も紫いろになって、アップ波間にもがいていた。蹴落した水夫頭かこがしらは、

「泳げ、泳げッ。船と一緒に横山城まで泳いで来いッ。死しに損そこなうのも一生の薬だ」

と、酷いことばを水面へ投げて、また大声で叱ツていた。

「どうしたのだ？」

藤吉郎が訊ねると、水夫頭は、あわててひざまずいて、

「申しわけがございませぬ。大切な御士卒を、酷い目にあわせました、私事の怒りで仕置はいたしませぬ」

「いや、咎めるのではない。あの兵が、どう軍紀をみだしたか訊くのだ」

「あの者は、帆綱番にございます。正しい進路をとるため、舵把りへも、帆綱番へも、何番綱張れいとか、弛めろツとか——絶えず絶えず手前から号令をかけます。ところがあの兵は、何かぼんやりして、とかく、帆がたるみますゆえ、駈け寄って、一つ

横顔を撲りつけ、なぜかと質ただしたところ、ちょうど今、自分の生れた田舎の安土村あづちがついその岸に見えたので、母親のことを思い出していたと答えますゆえ、ばか者ツ、お引揚げでも、まだ陣中であるぞ、もう戦いくさがすんだ気になっておるのかツ——と、全軍の士気のため、またこの船の進路のため、心を鬼に持って、湖へ蹴落したわけでございまする」

水夫頭かこがしらの眼には涙が見えた。この水夫頭も、もう人の子の親らしい年だった。

「よく、いたした。——が、もうよかろう、綱を投げてやれ。許してやれ」

藤吉郎は、囲いへ戻ると、懷紙も筆も投げすてた。そして寒風

のふく舳^{みよし}へ出て、屹^{きつ}と鉄の如く、立っていた。船は白波を嚙んで進む！ 正確に進んでいる！ 帆綱はみな張りつめていた。

「部下に恥かしい！ ……」

藤吉郎は、痛切に思った。一個の信長は、今や天下に無数の信長を作っていた。そう知る自分もまた、いつのまにか、信長の分身の一つとなっていることに気がついた。

東風吹く一^{こちふ}隊^{いったい}

一月の半ばであつたが、江南の春はもう梅も綻^{ほころ}ぶほどあたたかい。

道々、伊吹いぶきのすそや不破ふわの山かげには、まだ雪も深かったが、滋賀しがのさざなみに照てり映はえる陽を横顔にうけて、湖畔をのたりねのたり練ねつてくると、よいほどに汗ばんで、行列の兵卒たちも、歩あきながら眠たげであつた。

「重治しげはる。お許もとも睡ねむたかろ」

馬上、藤吉郎はふりむいて、左右に従う五、六騎のうちの一人へはなしかけた。

半兵衛重治は、うつむいたまま、駒にまかせて、主人のあとに従おもてつていたが、面おもてをあげるとニコとして答えた。

「湖南こちの東風、鞍上の揺られごこち、何とも堪たまりません。——思おもわずうとうといたしました」

「やはり居眠っていたのか、さてさて、そちらしくもない」

「面目ない態ていをお眼にかけました」

「いや、それをいうのではないよ。御身は、われらのような武骨一片とちがい、わが麾下きかではただ一人の風流子ではないか。風流を解すその方が、このたまたまな好日を、詩もなく歌もなく、黙々、俯向うつむいてばかり行くのはどういふものか。——ひとつ吟ぎん懷かいでも聞かせんか」

「おそれ入りました。なおさらもって、面目ない次第ですが、歌もありません」

「ないか。……ハハハハ」

「ただ睡とうございます。おゆるしてください」

「居ねむりを許せとか。むりもなかろう。昨夜も旅舎で深更まで皆と話しこんでしもうたからな。実をいえば、この方も睡たいのだ。久々で洲股すのまたに立ち帰り、母上やら寧子ねねやら弟どもにかこまれて、滞留二日のあいだ、ひと夜は語らい明かし、ひと夜は双すごろ六のお相手でもたねむれず——すっかり寝不足がたまつてしもうた」

と、他の家臣たちをも見まわしながら、からからと笑い出して、「いや、よい正月、よい正月。……どの顔もみな睡ねむそうな」と、大声でいった。

騎馬のあとには二百人ほどな歩卒がつづいて来る。彼の大声にみな眼を揃えて前のほうを見た。

（——実に陽気な御主人だ。天下の春は御主人の顔から立ち昇っているようだ。戦場にあつても、こういう旅のあいだも、屈託らしいお顔はみたことがない）

一将の顔は万卒の顔である。藤吉郎が笑ったので、みな笑みをおびる。彼の明るい放声にすべて眼がさめたように歩調もあらたまる。

ことしの正月は元亀^{げんき}二年であつた。

永禄十三年とかぞえられるところ、去年四月、改元になったので、何か一年とびこえたような気がすると誰もいう。

つい年暮^{くれ}の十二月、叡山^{えいざん}の和議を容れて総引上げとなるとすぐ正月であつた。藤吉郎は、姉川の合戦このかた、浅井、朝倉の

抑えとして、もと浅井の驍^{ぎようしやう}将 大野木土佐守がこもっていた横山城にはいつていたので、当然、正月はそこに帰っていた。

だが明ける早々、年頭の賀をのべるため、彼は岐阜城におもむいて、信長に謁^{えつ}し、さらに数日のいとまを賜ったので、その足で^{すのまた}洲股へと廻ったのである。そして久しぶり、妻の寧^ね子や母や兄弟たちの許でふた夜をたのしく泊って来た帰り途であつた。

「^{しげはる}重治。重治」

藤吉郎は、また何か、話しかけようとするらしく彼に向けたひとみであつたが、その眸^{ひとみ}を大きくみはつて、

「どうした？ 重治ッ。……これはいかん、重治を抱きおろせ」

と、あたりの者に命じながら、自分も鞍をとび下りてしまった。

——実は。

彼と駒をならべて来た人々はみな気がつかずにいたわけのことでもない。

半兵衛は、鞍の前輪にかがみこんだまま、手綱たづなを腹で抑えているように、駒のたてがみへうつ伏していた。

——が、今し方まで、主人の藤吉郎と、睡ねむとうてならないなどと、元気に話を交わしていたので、ほんとうに居眠ってしまったものと、怪しみもしなかったのである。

「や。やッ？」

「どうなされた」

藤吉郎にいわれて初めて、同僚の人々も愕おどろいたのであった。――

―抱き下ろそうとして寄って見た時は、呼吸いきもしていないかと思われるほど、竹中半兵衛重治の顔は、蒼白となっていて、眉はくるしげに二すじの針をよせていた。

「御発病だ」

「これは重い。火のようにお熱がある」

抱えおろす家臣たちの手へ、藤吉郎はそばから、

「そつとせい。……そつと、そつと」

自身の武者羽織を脱いで、草のうえに展ひろげ、その上へ共に手を添えて、静かに寝かした。

半兵衛の病弱は、誰よりも藤吉郎自身がよく知っている。――

思えば無理をさせた、と、今さら悔まれもする。

極寒十二月、坂本の陣から帰つてくると、すぐ正月、また旅路と、持病のある彼のからだには、こたえていたにちがいない。ゆうべも深更まで側において、興のつきないまま夜更よふかしをさせた。悪寒さむけがすると眩つぶやいていたが、丈夫な自分にはつい思いやりが足らなかった。

「あいにくだ。供のうちに医者はおらんな」

「おりませぬ。薬は持参しておりますが、それも半兵衛どのの御持症に、合薬とは参りますまいし」

「飲ませぬよりはましではないかな。半兵衛の持病は、いつもこ
う熱が出る、咳せきこむ、その後、食物が細る……といったようなふ
うだが」

「さあ、それよりも、附近の農家へでも一時あずけて、静かにお寝かし申したほうが」

「むむ、至極道理だ。……わしは少しあわてたとみえる。ここはいまはま
今 浜だな」

「左様にござります」

「今浜ならば、丹羽殿の陣所があるわけ。まだそこへは遠いか」

「遠ござるが、そつと、負うて参るぶんには」

「胸を圧しては病に悪かろう。……はてな」

こんなにも当惑そうに案じる、主人の顔というものを家臣たちも見たことがない。しかし藤吉郎が、その竹中半兵衛重治ひとり
を麾下に迎えるため、かつては栗原山の山中に七日も通って行き、

慇懃^{いんぎんさんこ}三顧の礼をとつて、ようやく彼に出廬^{しゅつろ}の決心をさせた、

あの熱意を思い合わせれば——さもあるうかと、家臣たちは、むしろ彼があわてる様をたのもしくさえ見るのであつた。

「殿さま。殿さまッ」

——時に、思いがけなく。

彼方^{かなた}の湖の岸のほうから、そうさけびながら二人の童子が駈けて来た。

ふたりとも小姓姿である。そしてこの行列の中にいた者であつたが、素迅^{すばし}こく、いつのまにか湖岸へ駈けて、すぐ戻つて来たものとも見える。

「おお於市^{おいち}に、於虎^{おとら}か」

虎之助は十一歳。市松はそれより五つか六つ年上だった。共に、すのまた洲股の城に養われていたが、こんど藤吉郎が立ち寄ったしおに、はや年齢としも年齢、ぜひ前線の横山城に伴ともなつてくれと、当人も縁者どももせがむので、乞いにまかせて供のうちに加えて来たものだった。

「なんじや両名」

「はい」

虎之助は眼ばかりうごかしてみせる。まだ十一歳だし、主君の前では、ものがいいないふうなのである。それから較べると、市松のほうはもうずっと大人おとなびている。

「すぐ、あそこの浜に、小屋もあります、医者もいるって云いま

した。近いから、そこへ御病人を持ってゆくのが一番でしょ」

と、湖岸を指さした。

そこからも見える――

彼方かなたの湖岸には、仮小屋らしい長い棟が幾つも並んでいた。

それは藤吉郎も家臣の人々も知らないではなかったが、遠く、
鑿のみや手斧ちようなの音がきこえてくるので、急病人をつれて行つたところ
で、手段はあるまいと考えていたのである。

大人は、智に訴えて智まどに惑い、少年は、機転をすぐ実行にうつす。

いつのまにか、そことの間を、一走りに往復して、あれまで行けば、立派に手段のあることを、二人の小姓は慥たしかめて来たもの

だった。

「でかした」

藤吉郎はまず褒めてやった。虎之助と市松は、満足して、顔の汗をこすりながら退^ひきさがった。

「ともあれ、あれへ」

と、藤吉郎は自身、先に馬をすすめて、道を曲った。

病人を護つて、従者や卒の列もつづいてゆく。

畑道をうねる。低い並木堤^{なみきづつみ}をこえる。

すぐに湖畔である。見ると、土手の陰に沿って、街道からながめたよりは遥かに多くの建物が建ちならんでいた。

「ほ？ いつのまに」

藤吉郎は眼をみはった。

丹羽五郎左衛門長秀持場。にわ もちば

と、書いた杭くいが打つてある。ここでは今、十数艘そとうの兵船が造られていた。新しい船底や肋骨ろつこつを組みかけた巨船おおぶねが渚なぎさに沿って並列している。耳もふさぐばかりな鑿のみ、手斧ちようなのひびきは、それになかつて蟻ありのごとく働いているたくさんな船大工の手から発するものだった。

ふと。

一艘みよしの舳しりのへりに立って大工や人夫を督励とくれいしていた奉行らしい男は、それへ来た藤吉郎の列に気づくと、

「何者だッ」

と、舳からとび降り、けんもほろろに、駈け寄つて咎^{とが}めた。

「横山城の木下藤吉郎」

彼は、馬を下つてまた、ていねいに訊^{たず}ねた。

「丹羽殿はおいでか」

「おお木下様でしたか。主人長秀は、今し方まで、検^{けんぶん}分に見えておいででしたが、はや今浜の御陣所へ歸られました」

まぎれもないその人と分つたので、奉行はにわかに態度をかえて、

「——何か御急用なれば、今浜の方へ、使いを走らせますが」

「いや、それには及ばぬ。実は供の中に、急病人が生じたので、一棟の小屋と医者を拝借したいと思つて参つたが、医者はおろう

か」

「おやすいこと。てまえの飯屋かりやまでお越しくだされば、如何よう

にも」

そこもと
「其許は」

「丹羽家の臣、島木筑後しまぎちくごです。先頃よりは、ここの船造ふなづくり奉行を仰せつかっておりまする」

「島木殿か。ともあれ、早速にたのむ」

「御病人は」

「あれにおる者だが」

ひとりの背に負われ、幾人かの同僚にいたわ勞れながら、病人の半

兵衛重治は、島木筑後の飯屋に導かれて行つた。

彼方の柵さくのうちに、船普請役所ふなぶしんが見え、それに附属した役宅が幾棟かある。藤吉郎は後に佇たたずんだまま、

——これでまず安心。

と、いったような顔して見送っていた。

「お床几しょうぎを」

小姓の市松と虎之助が、うしろに控えてそれをすすめる。彼は黙念と腰をおろしたまま、またたきもせず、ここの造船作業を見ている。

もちろんこれは信長の企画きかくである。叡山えいざんや京都や難波なにわの変に駆けつける日の備えであることもいうまでもない。

岐阜ぎふから陸路をいそぐ場合、いつも途中一向宗の僧徒や、各地

の残敵にさまたげられて、意のごとく捌はかどれない恨みがある。

——で、邪さまたげのない湖上を押しわたつて、ふたたび叡山以西に出軍する日の遠からぬことを、藤吉郎も今思ひあわせた。そしていつもながら信長の先見と、その予見を確実に実行してゆく敏速に、敬服せずにはいられなかった。

やがて、そこへ。

先に病人につき添つて行つた家臣たちはもどつて来た。案じ顔して、床しょうぎ几に待つていた主君のまえに、堀尾茂助はひざまずいて、半兵衛重治の容態をこう復命した。

「もはや、ご心配はないかと思われます。島木殿の仮宅に落着かれ、さっそくお医者の手で薬をさしあげました。しかし少々お口

より血を吐かれましたから、なお十数日は、絶対にうごいてはならぬとお医師のご注意でございました」

「なに、血を吐いたと」

藤吉郎は、眉をくもらせて、

「……では、重態だな」

「いえいえ、落着いて、薬を召しあがられると、竹中殿には、いつものように、すずやかなお気色で、血を吐くことは今日のみではないと……微笑しながらお医師に答えておいででした」

「その我慢がむりになるのだ。……そうか、血を吐くのは毎度とあったか。平常、わたしにはかくしていたとみえる」

「わたくしどもへ向って、幾度となく、御主君は、御主君は……」

と、頻りに氣をつかつておられる様子なので、はや先へお立ちと申して、むりに押しなだめて戻りましたが」

「誰か、みとり看護にのこしおかねば、あの気性、じつと、寝てはおるまい。——又十郎」

と、彦右衛門の甥、おい蜂須賀又十郎をふりむいて、

「おぬし、茂助と共に、あとに残つて、半兵衛の枕元に附添つておれ。——かえ帰り途、みち丹羽殿にも会つて、よく頼んでおこう程に、

充分、身を養つて、恢復いたすまでは、横山城へ歸つては相成らんと、藤吉郎がかたくいうたと半兵衛に申しつたえよ。よいか」

「かしこまりました」

「立とう」

彼の前に、馬が曳かれ、床几が畳まれた時である。

材木をかついだ人夫の群れが、そこから少し彼方かなたを通っていた。みな造船の用材らしく、巨材の後先に縄をかけて、肩もめいりこむばかり四天よてんに吊って行くのだった。

——と、その中に、色の小白い人夫がいた。こういう荒仕事にはまだ馴れないらしく、足もとも危うげに、顔をしかめながら、材木のはなを担かついでよたよた歩いていたが、ふと、藤吉郎のほうを見ると、

「——あッ？」

驚いたはずみに、四天よてんの棒を、肩から外はずしてしまった。

ふいに、一方の者に肩を外されたので、相棒の人夫もよろめい

た。のみならず材木のはなが、その人夫の足の甲にどんと落ちたので、

「あ痛ツ」

悲鳴をあげて、ぎょうさん仰山に、ぶつ倒れた。

すぐほかの人夫が寄つて来て、材木の下から足を抜いてやった。人夫らしくない痩せがたの男は、自分の過失におののいて、

「ごめんなさい。どうかご勘弁をねがいます」

と、もう当然な折檻せつかんが降りかかるのを恐れてか、頭をかかえて、ひたい地に額をすりつけた。

「まつ、まぬけめツ」

ちんばを引きながら起ちあがつた被害者は、まつさお蒼な顔いろし

て、いきなり相手を撲りつけた。それでも、腹が癒えないとみえ、耳を引っぱりながらさげんだ。

「おいッ、みんな、手をかしてくれ。この野郎のどじときたら、一度や二度のことじゃあねえ。力仕事に馴れねえなら、日傭^{ひやとい}などに來なければいいんだ。賃銀泥棒だ、こいつあ。——おいッ、くせになるから、ふくろ叩きにして、湖水へたたッこんでくれ」

「ア。ごめんなさいッ」

男は逃げまわった。

逃げたが却^{かえ}つて悪い。彼らの野性をよけいに駆りたてた。多勢の荒くれどもは、その襟^{えり}がみをつかみ、蹴^{なぐ}る、撲^{なぐ}る——の存分^{なごさ}を振舞いながら、渚^{なごさ}のほうへ引きずって行つた。

「茂助、茂助ッ」

藤吉郎は、あわただしく、指を彼方にさして命じた。

「助けてやれ。そして、打ちようちやく擲ちやくされているあの男、試みに、これへ連れて来い」

堀尾茂助は駈けて行つた。

——此方こつちで見ていると。

茂助は、大喝して、人夫たちを叱りとばしている。そして今にも湖水へ投げこまれるところだった男を、いきなり自分の肩へ奪つてひつ担かつぐと、無造作に駈けもどつて来た。

「連れて参りました」

肩から投げ出すように、その弱々しい人夫を、藤吉郎のまえに

ひきすえると、男は、

「おゆるし下さいまし。どうかおゆるしを」

と、まだ悲鳴に似た声ばかりつづけて、顔を地から離さなかつた。

藤吉郎は、そのすがたを、いつまでも凝視していたが、やがて、

おもて
「面をあげい」

と、穏やかにいった。

てんどう
癲動していた男も、ようやく落着いてきたらしいが、どうしても顔をあげようとはしなかった。

「これッ、面を上げんか！」

堀尾茂助も云い、家臣たちが、側から叱咤しったしたが、それでもな

お、彼はどうきん雑巾のように、べたと、顔を伏せているきりだった。

「つんぽか！ きさま 汝は」

蜂須賀又十郎が、遂にかんしやく癰癰をおこして、襟がみへ手をのばしかけると、藤吉郎は、

「待て。つんぽではない。すこし仔細がある者だ。——手荒にするな」

と、制した。

そして、じつとそそいでいた眼を離すと、歩み寄つて、土まみれな男のそばへ片膝を折つた。

「おふく於福。……なぜ顔を上げないか。そちは尾張新川の茶わん屋捨

次郎の息子、福太郎に相違あるまい」

「……いえ。いえ違います」

男は、胸に顔をうずめたまま、身をそむけて、全身でわなないていた。

「はははは」

藤吉郎は、わざとのように笑って、しかも親しげに、その肩を軽くたたいてやった。

「なぜそのように恐れるのだ。尾張新川は、わしの故郷ふるさと中村の隣村。それだに懐かしいものを、わけてわしと其方そちとは、七つ八つの腕白時代からよく遊んだ幼友達ではないか。……こら！ おたんこ茄子なすの於福おふく！ あはははは、何を泣くか。その年になっても、未だにそちは泣虫とみえる」

「……め、め、面目次第もございません」

「何、面目ないと。……ああそうか。そちの父、茶わん屋捨次郎は、あの近郷では手びろく商いしていた大家、その若主人が落ちぶれ果てたすがたで、面目ないと申すのか。——それともまた、その茶わん屋にわしが丁稚奉公でっちぼうこうしていたあいだ、主人の息子であつたその方が、事ごとに、幼いわしを虐めいじたから、その仕返しを受けはせぬかと、それを恐れて顫わないておるのか。……案じぬがよい、中村の日吉は、そんな小僧ではなかつたはず、そちも覚えていゝるだろうが」

「……はい、はい」

福太郎は、鼻をつまらせて、おえつ鳴咽しだした。

藤吉郎がまだ日吉とよばれていた頃、たしか彼のほうが二ツか三ツ年上であつたから、ことし三十五歳の藤吉郎に対して、彼もすでに三十七、八になっているはずである。

「供の中について来るがよい。帰城の後、身の上も聞いてやろう。
——来いよ、悪いようにはせぬ」

そういつて藤吉郎は、鞍の上に身をうつした。家臣は、彼の命のまま福太郎を促して供のなかに歩ませた。

堀尾、蜂須賀のふたりは、後に残つて、

「では、わたくしどもは、竹中殿の御全快まで、これにおりました」

「むむ、半兵衛の看護を頼んだぞ。くれぐれ軽はずみをさすな、

氣を勞つうて歸城をいそぐなど、半兵衛にも伝えおけよ」

卒は槍を立て、騎馬の人々は、彼の前後に立つて縦隊を作った。於市と於虎も、その中に歩き出していた。

獅子ししの乳児あかご

ここの北国街道は、近江おうみから越前への唯一の通路だった。

とりこえやま

鳥越山、高時山、横山岳などのふもとを縫って、道もようや

けわ

く峻けわしくなる頃、日は没して、湖北の水は遠く左手のほうに暮れ

ている。

浅井長政の小谷おだにの城も、その途中にあつた。

「才。灯がともった」

なんの故か、藤吉郎は、小谷の城の燈火ともしびに、そうつぶやいて、殊さらに駒をとめた。

江北六郡に三十九万石を領有する浅井家の居城は、さすが難攻不落の地形にある。

（これを墜すおとは容易でない）

そう嘆じている彼であろうか。

非ず。

彼の眼には、その要害のなかに安んじている曲輪くるわ曲輪しよくの燭はや狭間ざまの灯が、儚いはかなものとすら見えたのである。

——いつまでのまたたきか。

と、浅井一族の上にやがて来る日を、あわれむが如く、笑うごとく、見ないでいられた。かつた。

それと。

彼が心ひそかに傷^{いた}んで熄^やまないものは、その城中に嫁^かしている主人信長の妹君にあたる人の境遇であつた。

お市の方。

こんど年賀の拝をなしに岐阜城へのぼつた折も、信長はいくたびとなく口に出して案じていた。

それはまた天^{てん}麗^{れい}の美質といつてよいほど美しいお方である。

佳人薄命ということばは、そのまま今のお市の方の身の上にあてはまる。

兄信長の政略のために、その天麗をもって浅井家に嫁がせられ、良人の長政と信長とのあいだが不和となつて、互いに敵国として呼びあう羽目になつた時には、もう三人の子をなして、まだ二十歳を幾つもこえない若さで母とよばれる身になつていた。

去年の暮。

將軍義昭よしあきのとりなしで、叡山えいざんとも、浅井朝倉の両家とも、

織田家としては、和解したことになっているものの、決して永久なものでないことは、その後の諸国のうごきや、僧団の依然たる攪乱策こうらんさくが証明している。

浅井長政にしたところで、もちろんその底意に变りはあるまい。彼は信長の妹むこ婿として、信長には誰よりも愛されていたことを知

っている。——しかも信長とはどうしても心から提携^{ていけい}できない性格だった。

若^わ人^{こうど}ならばすべてが新時代を理解する若人であろうとはいえない。若い生命をもちながら、時の真^{しん}髓^{ずい}をつかめない若者もある。長政などは、それだった。

信長の行動は、彼にはただ危険にしか見えなかった。あの行きかたで、時代をつらぬいて行けようとは信じられないのである。

——ために、理性に富む彼は、越前の朝倉とむすび、叡山その他の僧団と款^{かん}を通^{つう}じ、旧態の將軍家をなお恋々と奉じている。

（——所詮^{しよせん}は、ふたたび）

信長の思うところは、長政もふくむところに違いなかった。――

―そして藤吉郎の今の位置は、この小谷の城から越前へ通ずる北国街道の途中にあつた。両家をつなぐ動脈の一道を、横山のふもと横山城に遮断^{しやだん}して、越前の朝倉と、江北の浅井家とを、両手^{おき}に抑えているかたちだつた。

「急ごう。星が出た」

横山城まではもう一里余しかない。藤吉郎以下、行旅の列は黒々あるき出した。そしてはや、各々が各^{ねぐら}の塹を眼にも思いうかべていた頃、

「やッ、火の手ではないか」

「おッ、御城門だ」

山陰^{やまかげ}の道を出たとたんである。人々は愕然^{がくぜん}とさけんで騒ぎ

立つた。これから帰ろうとする砦とりでのあたり、夕星ゆうずつの空をそめて、赤い火気がたちのぼっているではないか。

何の号令も聞かないうちに、二百の将士は、戦支度いくさを一瞬ににして、

「さては、敵が」

と、各、総毛だツた顔してさげんだ。

「浅井か、朝倉か」

「御不在をうかがい知って、留守へ襲いかけるとは、小癪こしやくな敵兵」

「御和睦ごわぼくの直後というのに、卑怯な策謀、蹴ちらして、眼にももの見せねば」

眼に彼方かなたの炎をにらみ、齒に唇をかんで、藤吉郎の命令一下を
まちかまえた。

「……なるほど」

駒の背から藤吉郎も火の手を見ていたが、やがて洩らした声は、
至極悠長な——なるほど——であつた。

「躁さわぐな」

まず、うしろへ向つていった。

「わが横山には、小城なりとはいえ、留守として、蜂須賀彦右衛
門がおる。半兵衛の弟竹中久作もおる。多士たしせいせい濟々だ。やわか、あ
れしきの火の手に陥おちよう」

暗い山風のなかで、からからと笑い声が聞えた。

つづいて、天蔵天蔵と呼ぶ声がする。はッと、渡辺天蔵が列からぬけて、彼の馬前にひざまずく。

「物見して来い」

「はッ」

一個の影が飛んでゆくと、藤吉郎はまた、

「新七はおるか」

と、騎馬の中を見まわした。

「これに！」

青山新七が高く答える。

「そちも行け。そちは馬のままがいい」

「心得ました」

青山新七は、馬のしりに一鞭あてて駈けて行つた。

次々に六、七名を放つた。

それらの面々が、やがてすぐ物見から歸つて來ての報告を綜合すると、ほぼ敵方の実体と、火の手の程度がわかつた。

人々の想像はちがわな^い。敵はやはり浅井家の一族だとある。

浅井七郎右衛門、同玄蕃^{げんぱ}という者に、三田村右衛門大夫の兵が合体して、およそ八百人ばかりが、横山城の城戸^{きど}へ枯柴^{かれしば}の山をつんで、焼き立てているところという。

「攻口を取っている敵はそこだけか」

「搦手^{からめて}は山、水の手も無事です。ただ西の城戸^{きど}に、関^{とき}の声^{こえ}はしました^{こだま}が、御城内の守りがかたいとみえ、頑として、ただ罅^{こだま}がす

るだけのようでした」

「よしッ、このまま、清水沢の鼻まで進め。忍びやかに！」

はじめて方向が示される。馬も兵もこれまで来た歩速と変りなくうごいて行く。そして清水沢の丘をうしろにひそと陣容を取った。炎を浴びている城門は近い。そこへ迫っている敵の影も蟻ありのように見える。時折、喊かんせい声をあげ、鉄砲をうちこみ、炎へ柴を投げこんで、火勢と共に、突き破ろうとしているのである。

藤吉郎は、鞭むちをあげて、

「行けッ。討て！」

ありつたけな声量で号令した。馬と兵は、黒い横波となって駈けだした。そして敵のすぐ背面に迫ると、その一人一人が、から

だ中からふるい出して、うわーッと一度に武者声をあげた。

藤吉郎は前進しない。彼はわずか数名の者と共にあとに残つて

いた。りようりよう寥々たる人数にすぎないが、彼のいる所、すでにその

まま総司令部である。

「おいち おとら於市、於虎」

「はいッ」

「しょうぎ床几を持って来い。そして二人ともこれへ上がって来い」

駒をすてた彼は、小高い丘へのぼっていた。そして床几に腰を
すえると、前方の火の手に面をおもて赤々と焦がしながら、しばし唇を
への字にむすんでいた。

みじん微塵に似た火の粉の柱が、新しい黒煙と共に高く噴いた。

城門の一角が燃え落ちたらしい。

寄手は、それツとばかり、一団になつて、遮二無二、火と煙をくぐつて、中へなだれ入ろうとしていた。

突然、うしろから思わぬ猛兵が突撃したのは、その時だった。

「裏切りかッ？」

寄手の将はうろたえて、そう呶鳴つたほどである。

何ぞ知らん、藤吉郎直属の城兵であらうとは。

血戦は、火雨ひさめを浴びながら展開された。

にわかに、後を向いて、ふいの敵を迎えた浅井軍が、戦鬪の当初からすでに乱れ立っていたことは当然だった。

城中の兵は、

「味方だッ」

と、告げ渡つて、

「殿がお歸りになつたらしいぞ。助けによつてこの城が保つたな
どと、城外の味方に笑われるな」

どよめき立つて、西の城戸きどをひらき、また、火焰について躍り
出る者もあつたりなどして、完全に、寄手の兵をふくろ包みにし
てしまった。

見るまに、無数の死体が、火焰の下に捨て去られた。敵は一た
まりもなく潰走かいそうしたのである。逃ぐるを追つて、首をあげた者
が、彼方此方の野や河原で、声いッぱい、名乗りをさけんでいる。

「追うな、長追いするな」

城中でしきりに呼ばわっているのは留守居の蜂須賀彦右衛門であらう。しかし勢いはとまらなかった。逃げる敵の悲鳴か、追いまくる味方の声か、ごうごうと曠野こうやの闇をふく風のような震撼しんかんが、しばし何処ともなく揺るがしていた。

——床几しょうぎをすえて。

さつきから、ここ清水沢の丘で、戦いくさのもようを眺めていた藤吉

郎は、

「よし、片づいたな」

焚火たきびの火でも踏み消させたぐらいな気やすさで、独りうなずい

ていた。

「於虎おとら。

——於市おいち」

「……………」

ふたりの小姓をかえりみて呼んだ。ふたりはすぐ近くに立っていた。けれど、どっちも棒を呑んだように、彼に呼ばれても気づかないふうだった。

「そうもあろう」

藤吉郎は咎^{とが}めなかった。むしろ微笑をもつてその二人をながめた。

ふたりとも、戦^{いくさ}というものを、初めて見たにちがいない。眼をまろくして、魂も彼方へとぼしている容子^{ようす}に見える。わけて十一歳の虎之助のほうなどは、眉をたて齒をかみあわせ、自分が血のなかで闘っているような顔をして見入っている。

「どうだった？」

床几を立つて、藤吉郎は、両方の手でふたりの肩を抱きよせた。

「――戦は恐^{こわ}いか」

「う、う、ん」

虎之助は、首を振った。

市松は、あわてて下にひざまずいて、

「すこしも恐ろしいことなどございません。どうか私にも、あれへ行つて、戦うことをおゆるし下さいまし」

と、願った。

「はははは。何をいうか。もう戦は終っている。わからぬか、敵はくずれて八方へ逃げ出している」

すぐ丘の下あたりだった。

ぎ、ぎ、ぎツと枯草を鳴らして、二、三名の敵が逃げて来た。

そして藤吉郎がいるのも知らず、この丘へ上つて来ようとする、きやツ——と、悲鳴をあげた者があつた。

敗走兵はおどろいて、横ツとびに道を変えて逃げ去つた。藤吉郎は、その悲鳴に思い出して、

「茶わん屋の於福おふくはいかがいたしたろう。途中から連れて来たあの意気地ない人夫だ。ふたりに探して来い」

と、市松と虎之助にいつけた。

「はいッ」

ふたりとも、勇躍して、丘を駆け下りて行つた。

この戦^{いくさ}なかに、戦の外にいて、ただ傍観していたのは、実はつまらなかつたし、子ども心にも、すまない気がしていたのである。

こんな際には、用の端でも、何かしたい。人間はそういう善性を生れつき持っている。まして主君からそれを命じられたのである。役不足など考えているいとまはない。

「おういッ、於^{おふく}福うッ」

「おーい。おたんこ^{なす}茄子」

市松と虎之助は、かわるがわるに呼んでみた。そして真ッ暗な丘のすそを歩きまわった。

「……いないや」

「どこへ行っちゃったんだろ」

「変なやつ」

「何だつて、御主君は、あんな男を、大事にお連れになつて来たのかしら？」

どん栗林ぐばやしの小道にはいった。右を見、左を見、呼んでみたり、藪やぶを叩いてゆく。

すると、星明りを、ガサガサと戦そよがせて、うごき出したものがある。虎之助が見つけて、

「いたよ、いたよ、ここに」

と、うしろの友へ告げた。

とたんにそこから跳び出した影は、豹ひょうの如く、虎之助をつきと

ばした。そして不用意に駈けて来る市松へ向つて、出あいがしらに、わツと、大きく口を開いた。

隠れていた敵兵のひとりだったのである。もとよりぞうひよう雑兵にはちがいない。市松も虎之助も、びっくりしたが、それ以上、敵兵のほうあがが逆上つていた。

「こん畜生」

いちど転んだ虎之助は、雑兵の足に抱きついて、芋いもの蔓つるみたい
に離れなかった。

「於市どの、つかまえているから、斬れツ、斬れツ」
頻りとさけびぬいている。

だが、雑兵は、長い槍を持っているので、市松には近づけない。

その恐い顔といったら、市松も虎之助も、この世の人間の顔の中で初めて見たほどのものだった。

「木下家の小姓どもだな。邪魔すると、ぶち殺すぞ」

吠えるように雑兵は罵る。ののしそれはただ逃げたがっている焦しょうそ

躁うにすぎないが、獅子ししの乳児あかごには敵の心を量はかることなどできな

かった。市松が石ころや土を投げつける一方、虎之助も雑兵の脛すねへ必死に咬かみついているくらいが精いッぱいであった。

声を聞きつけて、数人の味方が駆けて来た。そして物もいわず、雑兵の背を槍でつき刺してしまった。虎之助は頭から血をあびたまま、雑兵が仆たおれてもまだその脚に抱きついていていた。苦悶してあばれるので、離れたら生き回かえるような気がするのだった。

「もういい。こらッ、いつまで死骸と取っ組んでいるのだ」

襟えりがみを抓つままれて、虎之助は道の端へ簡単に片づけられた。市

松と並んで、夢中から醒さめたように、茫然と立っていた。

——ところへ、また多勢の味方がひきあげて来た。ひとりの法師武者を捕虜とし、その縄じりを取って引つたてて来たのである。

捕虜とは見えないほど、法師武者は尊大に反そりかえつて、怖ろしく威張っていた。そして自分を取りかこむ人々を睥へい睨げいして、

「躁さわぐな。持て余すほどの荷物なら、いつでも、この首、この胴を、べつべつにして持つて歩け。この期ごになつて、逃げかくれするような宮部善性坊みやべぜんしやうぼうではない」

と、大言しながら、藤吉郎のいる丘の上へ追いあげられて行つ

た。

「於虎。……行こう」

「もう捜さないのかい。おいつけの人を」

「於福なら、そこらにいたよ。みんなに尾^ついて、一緒に丘へのぼって行つた」

市松と虎之助も、後から味方を追いかけた。丘では、追々とひきあげて来る人々が、各獲^えて来た敵の首級^{しるし}を、藤吉郎の床^{しょうぎ}几の前にならべ合つて、血のさかもりにどよめいていた。

卑屈^{ひくつぢや}茶わん

その夜、討ち取った敵の首級しるしは、八十幾つと数えられた。

横山の城内からは、

「お迎えに参じました」

と、蜂須賀彦右衛門、竹中久作、松原内匠たくみ、そのほか留守居の

人々が、主人の帰城を迎えに出た。そして、

「お留守中、ふがいもなく、御城門の一部をば、敵に焼かれ、また、大切な御士卒をも、幾十人か討死させました。申しわけもございませぬ」

と、重なる者おも、打ちそろって、罪をわびた。

藤吉郎、言下に、

「なんの、なんの」

家臣らの自責をなぐさめ、

「そんなこと、たれが罪として咎めよう。四方、味方との聯絡もないこの孤城を、そち達、寡兵かへいの手にあずけて、悠々、半月あまりも、留守にしておいた藤吉郎こそ咎めらるべきだ。ようその間、持ち支えていてくれた。留守中の勤め、大儀大儀」

彼はすぐ、ほかの群れへ眼をやつて、

「生捕いけどった敵の一将、宮部善性坊みやべぜんしやうぼうとやらを、これへ曳け」

と、命じた。

法師武者の善性坊がそれへ直ると、藤吉郎は、黙って人態にんていをながめていた。

「……………」

善性坊も顔をあげたまま、藤吉郎をにらまえていた。

そのうちに、力負けしたように、ふと、善性坊がひとみを俯せると、とたんに、

「不届き者ッ」

と、藤吉郎は満身から声を出して呶鳴りつけた。

むくツと、善性坊が面^{おもて}をあげて、何か、口を開こうとするとまた、

「不忠者めが！」

と、二の句をいわせなかった。

善性坊は、面に朱^{しゆ}をそそいで、

「なんで、それがしが不忠者か、不とき者か。よし捕われの身

であろうと、いわれなき辱めはづかしをうけてはこのまま死ねぬ。理ことわりを明らかにせい。せねばただは措おかんぞ」

躍りかかつて、咬かみつきそうな顔していった。

「あわれむべき男かな。——浅井長政の臣、宮部善性坊といえ、かねてうわさにも聞いていた英傑だが、聞くと見るとは大ちがいだった。こういう人間が、得て、主家を亡ぼす害賊となるのだらう」

面と対むかっている者を相手にもとらないで、あたりの人々へはなしかけるように藤吉郎はつぶやいた。

善性坊は、いよいよ躍起となつて、

「わけを申せ。やいッ、そこな猿面郎えんめんろう、理もなく、武士を誹そしる

法やある。百姓そだちの成上がり者、武士を遇する道を知らんか

ッ

と、^{ののし}罵った。

軽く笑いかえして、

「武士として遇せられたくば、なぜ武士らしい道をふまぬか。武
将らしい戦^{いくさ}をせぬか。——聞^きけ、善性坊、汝^{きみ}をはじめ、同腹の浅
井七郎右衛門、同じく玄蕃^{げんぱ}、三田村右衛門大夫などの徒は、決し
て、主君浅井長政の命によつて、わしの留守城を襲撃したわけ
はあるまいが」

「ばッ、ばかなッ」

善性坊も、一笑を返して、

「主君の命なくして戦うものがあるのか、主人長政のおさしずによつて戦つたのだ」

「いや、そうでない。——はばか憚りもなく、左様な放言してひる怯まぬ馬鹿者だから、わしは汝を、不屈き者、不忠者ともうしたのだ」

「な！ なぜだ？」

「浅井、朝倉の両家は、えいざん叡山において、かたく、信長様へ対して、和議を申し入れたばかりでないか。和を乞うて、すぐ誓紙を裏切るなど、武門の不信、これ以上な沙汰はない。汝らは汝らの主君に、不信の汚名をおもきせて、恥を天下につたえたいのか」

「……………」

「しかもふたたび、織田浅井の御両家が、ほこ矛を交えとなれば、

小谷^{おだに}の城は、三日と持たぬぞ。越前の援けは遠し、叡山とは湖の隔てがあり、そして今浜にはわが織田家の丹羽^{にわ}五郎左衛門あり、ここには木下藤吉郎がいるものを。……はははは、浅慮^{あさはか}な人々ではある」

彼の説く理に抗しきれず、善性坊は、默念とうなだれてしまった。

藤吉郎はさらに諭^{さと}した。

「親の心子知らずというたとえがあるが、信長様と浅井家のあいだも、それに近い。信長様には、浅井家に嫁^{かた}づいているお妹君^{むこ}を庇^{かば}うお心があるのみでなく、真実、妹智^{むち}の長政殿をも、愛しておられる。惜しんでおられるのだ。——然るにその二つが結ばれて

は、必然、大きな脅威きょういをうける朝倉や叡山などが、たえず両家の不和を謀はかっている。汝ら家臣の輩はいも、それに躍はつて、主家を滅亡へ導こうとするか」

「……………」

「横山城の留守を襲うたこよいのことなども、汝ら一部の浅井家臣が、主人長政殿のさしずによらず、自分らの私謀わぼくでしたこととしておきたいのは——この藤吉郎とても御両家の和睦わぼくをふたたび破りたくないからだ。主君信長様のおこころを傷いたませたくないからである」

「……わかった」

善性坊は、縄目のまま、がくと前へ体を曲げて、神妙にいった。

「いかにも、こよいの横山攻めは、われわれの私謀に相違なく、主君はあずかり知らぬことだった。この上は、善性坊の首を刎^はねて、主人長政が和議の誓文をやぶったわけでない旨を、織田家へも明らかにお告げねがいたい」

「さすがは、よくお弁^{わきま}え下すった。其^{そこもと}許の首は其許へ、しばらくくおあずけしておこう。——彦右衛門、彦右衛門」

「はッ」

「宮部善性坊が身は、おぬしに渡しておく。捕虜^{とりこ}だからといって、粗略にするな」

「承知いたしました」

蜂須賀彦右衛門が、縄じりを取って立ちかけると、藤吉郎は、

至極簡単に、

「解いてやれ」

と、いった。

縄を解かれた捕虜の影は、すぐ多勢の影の中に没して行つた。

床しょうぎ几を払つて、藤吉郎も丘を降りた。そこから近い横山城の

城門へ、やがて主従一兵ものこらずかくれた。

焼き払われた城門は、あくる日、もう新たに普請ふしんしていた。防

禦は一日も怠れない現状にある。北境の雪でも解けはじめれば、
ちようじよう

重 畳たる山岳をこえて、何が越えてくるか。

鉄砲をみがき、槍を拭ぬぐい、戦いくさのない時の戦の備えこそ、武士が

同時に心をも養つている時だった。

養い方もいろいろある。兵馬の訓練は将士一体のことだが、個々の小閑には、書を読むもあり、酒をたのしむもあり、禪をやるものもある。藤吉郎の場合は、たいがい砦とりでの奥のいちばん広い座敷を——がらんと空間にさせておいて、広縁のはしへ褥しとねを運ばせ、それへあぐらをくんで、ぽつねんと陽なたぼっこをしているような折が多い。

或る時、家臣のひとりが、

「殿には、なぜお座敷におられませぬか。よほどお縁側がお好きでございますな」

戯れに問うと、藤吉郎もおかしそうに、

「何も、板縁に坐るのが好きなわけではないが、春の草々が芽ぐ

み出すと、無^{むし}性に土がこいしゆうなる。座敷よりは縁のほうが生に近いだろ。それだからこれにおるのだ」

と、いった。

その答えは、家臣の者には、何だか半解のようだったが、彼のうしろに、彼の刀をささげて居眠っている二人の童子には、かえって分ったようだった。

市松も虎之助も、春めくとよけいに畳の上よりは土が恋しくなつた。藤吉郎は、洲^{すのまた}股にある母が、今頃はまた菜園に出て、菜を作ったり豆を植えているであろうなどと、子の自分が多少立身しても、なお鋤^{くわ}を離さない母のすがたをぼんやり想像していた。

「きょうも、お座所^{ざしよ}は、そちらでございましたか」

そこへ蜂須賀彦右衛門が来て、笑顔をもちながら手をつかえた。

「才。彦右衛門か」

「だいぶ、山々の木の芽も、色づきましたな」

「人間も同じだと思わないか」

「ははは。お戯れを」
たわむ

「戯れではない」

藤吉郎はまじめくさって、

「遠くにいる妻が恋しゆうなる」

あまり真顔なので、

「ここへお呼びなされてもよいでしょう。ならば洲股へ、お迎えをやりましょうか」

と、いった。

すると案に相違して、

「ばかを申せ」

と、頭から叱った。

「ことしは大乱だ。合戦また合戦とならざるを得まい。さてさて、眼先の見えぬ……」

「殿も、おひとが悪い。彦右衛門にそういわせるように、お誘いをかけながら」

「せめて、口にでも、恋しいというて、我慢の鬱うさをはらしたまでよ。——時に、捕虜とりこの善性坊はどうしておるな」

「なすこともなく、日々、経きようなど誦よんでおります」

「本心ではあるまい」

「わかりかねます」

「まあいずれでもよい。将棋でいえば持駒というようなものだ。大事に養つておけ」

「余事ばかり申しあげて、お取次を忘れました」

彦右衛門は、手にしていた一通をそこへさし出した。今浜で静養中の竹中半兵衛からの便りであつた。

藤吉郎は、黙読していたが、読み終ると当惑顔して、

「これは物騒だ」
ぶっそう

と、つぶやいた。

「殿。何事か、半兵衛殿の身に起りましたか」

「いや。……この手紙によると、半兵衛の病は日増しに快方にむかつておるらしいが、その後、今浜の丹羽にわ五郎左衛門が、半兵衛を迎えとつて、医師薬餌いしやくじの手当など、至れり尽せりの親切をしてくれているという」

「それが何で物騒なのでございますか」

「半兵衛には、はや帰りたい心もあるらしいが、丹羽殿にひきとめられて困つているとある。元来、半兵衛重治しげはるは、理には屈しぬが情には脆いもろ。彼の博識と智勇はかねて丹羽殿もよく知つて、わしの顔をみるたびに、よい者を家中に持ったと日頃から羨望せんぼうしぬいておる。あまり恩をかけられると、半兵衛を、丹羽殿に取られてしまうおそれがある」

「ははは」

彦右衛門は思わず笑いだして、

「お見かけによらぬもの。殿にもそんな嫉妬しつとがおりでございましたか」

「あるとも。わしは、女人の愛には、そう嫉やかないつもりだが、良い家臣を他家へ取られたら、非常に嫉妬するだろう」

「丹羽殿がさようなことをなさるはずはありません」

「はずもないものを案じるがゆえに嫉妬ではないか」

「相違ちがございません」

彦右衛門は、こころの裡うちで、ふと気づいた。——主君のことばは、そのままではない。半兵衛の変心を案じていつているのでは

なく、この彦右衛門に対してそれとなく誓わせているのである。

主従とはなったものの、まだ年も浅く、それに、信長の命によって、藤吉郎の手に附けられた彼でもある。

城中の士も大半は、以前、蜂須賀村から連れて来た彦右衛門の

さむらい

手下であつたし、藤吉郎もまた、そのむかし少年の頃には、彼の

やしきに飼われていた一雇人いちやといにんだつた。猿々とのみよばれて、

ひよし

日吉という名すら、誰も呼ばなかつた寒々さむざむしい鼻たれ小僧だつた。

それが、今では。

——と、考えてくると、彦右衛門は自分を家臣として使おうとする人の難しさがよく察しられた。そして、そう心をつか勞わせては

すまないと思うのであった。

陽なたの沈黙がつづく。

小姓の於市おいちと於虎は、主君のうしろで居眠っている。

山鳩が啼なく。気けだるい。べつにほかに用もないらしい主君の顔

つきなので、彦右衛門は退さがろうとしかけたが、ふと庭面にわもを見ると

樹陰から濃い煙が這つては薄れてゆく。

庭番の者が、朽葉くちばでも焚たいているのかと思つていたが、よくよ

く見ると、炭焼窯すみやきがまを小さくしたような土窯どがまがそこに築かれてあ

る。そして火口のまえに、ひとりの男が火をのぞきながら屈かがみこ

んでいた。

彼の怪訝いぶかる容子ようすを見て、藤吉郎はわらいながら云った。

「彦右衛門、あの者を、知っているか」

「見かけない御小人。おこびといつお抱えになられましたか」

「先ごろ帰城の途中、今浜のあたりで拾ってきた者だ。——多分、そちも知っているはずだが」

「はて。おもて面を見たらどうかぞんじませぬが、ここからでは」

「思い出せぬか。わしの尾張中村にも、そちの郷土蜂須賀村にもちかい新川村の者、茶わん屋捨次郎の息子福太郎というのを」

「あれが、茶わん屋のせがれですか。新川の茶わん屋といえ、かなりな豪家でございましたが」

「主あるじの歿後、家屋も廃すたれ、畑やしきも、みな失なくしてしもうたとかいいおる」

「では、落魄おちぶれ果てて、今浜のあたりで、何か貧しい生業なりわいでもしておりましたか」

「人夫の群れにまじって、馴れぬ業わざをしておったをふと見かけて、旧縁を思い、供に加えて連れもどったが、もともと虚弱きよじやくな商家の息子、この城内においてみても、さて何をやらせたらよいか、思案もないでな」

「なるほど」

「当人に、何がそちの能かと、才能をきけば、茶わんを焼くことなら好きだという。それなら茶わんでも焼いておれと、望みにまかせて、やらせておるが」

「ははあ、ではあれば、それを焼く窯かまでございましたか。しかし

茶わんなど作って、どうなさいますか」

「飯でも喰おう」

「ははは」

彦右衛門の高笑いに、彼方^{かなた}に屈^{かが}んでいた福太郎は、びっくりしたように窯^{かま}の前から伸びあがって振り向いた。

が、いつも物に脅^{おび}えているようなその眼は、遠く、藤吉郎のすがたを見ても、あわててまた窯^{かま}の前に、卑屈^{ひくつ}な犬のように背を屈^{かが}めてしまう。

「あの卑屈を、どうしたら除いてやれようか」

藤吉郎は、彼のひとみを見るたび、不憫^{ふびん}をおぼえた。

何か、常に恐怖していた。優しく仕向けければ猶^{なほ}おどおど尻ごみ

するといった風である。なぜかと、福太郎の心を察してみると、自分がまだ茶わん屋の若主人と立てられていた時代、家にいた日吉という小ましやくれた^{でっち}丁稚を憎んで、朝夕にいじめつけたことがある。それを今となつて、急につよく憶い出し、自責のあまり、人知れず恐怖したり苦悶したりしているらしいのであつた。

日が経つと、彼の作つた茶わんが焼けた。

焼き上がるたび、福太郎は、幾つかの品を、黙つて、藤吉郎の書院の縁先へならべておいた。

^{かま}窯は小さいので、一窯に二個か三個ぐらいしかはいらない。その中には割れもできる。だから、日は経つても、そこに並ぶ茶碗が、目立つて増えることもなかった。

また、誰が持つて行くとなく、その中の幾つかが、いつのまにか減^へつてもいた。それを発見すると、福太郎は、

「お気に入ったのかな。あれで茶を召し上がって下さるだろうか」
 生きがいと仕事の張りあいを感じるらしく、ひとみにも安心と
 落着きが少しずつ見えて来たし、彼の手で焼く茶碗の形まで、卑
 屈なゆがみやいじけた線が見えなくなつて、だんだん暢^{のんき}気者ら
 しい恰好に變つて来た。

しめんそか
四面楚歌

月の八日ごとに、市^{いち}がたつ。そのため岐^ぎ阜^ふの城下は、馬や人や

物資で溢れかえる。

まだ信長が城主とならない以前の、斎藤氏時代からの慣わしであつた。

紙、漆、皮革、地がね、織もの、そのほか古着、食料など一切の物がかなり大規模に交易される。国々から雑多な人間がはいりこむので、治安や国防上には弊害も眼にあまるほどあるが、織田家にとつても経済上この循環を禁絶するわけにもゆかなかつた。

「阿呆ツ。どこ見てあるく。前を見てあるけツ」

夕方にせまった市の雑沓のなかで、博労の気のあらい声がした。

仔馬こうまと牝馬めうまを曳いて人ごみの真ん中を通つて来たので、往来の人たちは市の両側へ避けたが、頭巾ずきんのうえに塗笠ぬりがさをかぶつて、眼もとばかり出して歩いて来た武家は、避けることを知らなかった。

「あッ」

よろめいた時、博労の手綱は、その武家の肩を打つたようであつた。

だが、あッといったのは、よろめいた武家の声ではなく、もつと離れた所から、べつな人間の口をついて出たものである。

連れの者とみえ、すぐ、

「お怪けが我はありませぬか」

駈け寄つて来て、脱ぎ捨てられた片方の草履をさがして、その人の足もとへおいた。

従者らしいが、ほとんど同じような身ごしらえをしている。笠、おもてがく面隠しまでが同じだった。

「乱暴なやつ、ひッ捕えて、奉行へわたしてくれましょうか。武家にさえあの態^{てい}、一般の者には、どんなか、思いやられる」

もう人ごみの遠くに馬の背しか見えないのを振り向いて、連れの武家が怒りをもらすと、

「止めよ。止めよ」

小声にいつて、ひとりはまだ先へ行く。従者は、ふたたびまた、何かあつてはと、案じるように、こんどはすぐその人の背につい

て、眼をくばってゆく。

市を出端ではずれると、人もまばらに、空地があつて、その先は寺院らしい。醤油くさい煮売りや濁だみぎけ酒のにおいのうえに、夕月が仰がれた。

「おくたびれでございましょう」

「いや、おもしろかった」

「黄昏たそがれました。はやお帰りあそばしては」

「む、む」

見まわしていたが、

「あれは、何か」

と、急にまた足を向け出した。そして空地の一隅に黒々かたま

っている多勢のうしろに佇たたずんだ。

見ると、ひとりの法師が、石のうえに立つて、何か群集に演舌えんぜつしている。

ほかに三人の旅僧がいて、これは三方に分れ立ち、睨にらむように、まわりの人がきを見張みはりっていた。

演者の法師は、熱弁ねつべんをふるって群集にいう。

「物が高値たかくなるばかり、法令はひどくやかましい。働き手は、戦いのたびに、軍夫にかり出される。喰くえない。やりきれない。

これがおまえ方のほんとうな相すがただろう。もつともだ。この市いちにしたところで、斎藤道三様や龍興様の時代には、こんなものではなかった。もつと繁昌はんしょうだった。白粉おしろいの女も出るし、唄うたい女めもある

くし、夜明けまで酔っぱらいの声でした。それが今では、みんな
ごはつとあきな御法度、商いまで宵かぎりでびたりと木戸を閉めてしまう」

法師は唇を舐めあげて、聴衆の上をねめまわしている。巧みに
 領民の弱点をついて、織田家の施政を暗に誹そしろうとする口うらが
うかが窺える。

過去の、何もかも放漫にまかせていた斎藤家時代の爛らんじゆく熟じゆくだ
 けを称たたえて——それがゆえに、その斎藤家は三族までも滅び、城
 下の民も共に、外敵の侵攻と兵火のくるしみをあの如くうけて、
 今もなお、その創痍そういが癒えきれないであるのだ——とは強いて歪わ
いきよく曲まがしていわないのであった。

「殿。……殿」

勝家はそつと、信長のたもとを引いた。

耳へ口をよせて、

こうそう

「一向僧ですぞ、敵のまわし者にちがいありません」

あたりの群集にさとられぬよう眼をくばりながら囁いた。
ささや

「うム。むむ」

信長はうなずく。そのあいだも人輪ひとわの肩ごしに、眸は、演舌し

ている法師のすがたへ射向けていた。

さつき市の雑沓ばくろうのなかで、博労にどなられたのは、信長だつ

た。従者は柴田しばた勝家である。もちろん微行びこうで、その偽装ぎそうにも細

心な気をくばっている。

領民が踊り遊ぶ日は、自分も領民のなかへ出て踊る信長だった。

少年期からの素行にみても、こういうことはさして意表に出た行動とは、家臣たちも思わない。

ただ時節がら、危険だけが案じられる。で、勝家として、重大な任を負っているわけだった。信長はまた、少しもそんな点は意に介していないらしい。

ここしばらく軍旅のこともないので、彼はもっぱら内政と外交に心をいれていた。殊に、戦えばいつも岐阜^{ぎふ}を出るので、治下の民心の如何は、彼自身の健康ほど、常々細心にこころを労^{つか}つていた。

「――断っておくが、わしはこの通り、僧門の身。わしの眸^{ひとみ}は弥陀^だの眸だ。あの国とこの国、西と東、東と南、諸処方々で戦つて

いるらしいが、仏者には敵味方はない。ただ気のどくなおまえ方に慈悲の手を垂れよと、弥陀如来みだによらいの仰せをうけているまでだ」

法師は、喋舌しゃべりぬいている。さすが敵地にはいつて民心を攪かきみ

乱だそうとするほどの者だけあって、不敵な面つらだまशीいと雄弁を

持っている。——ともすれば、聞き入っている民衆は、その詭弁きべんを、ほんとうのものと、魅せられかけているふうだった。

「このぶんで行くと、ことしも合戦、来年も合戦、未来無限、戦は熄やむまい。わしは予言する。この夏だいやくびようごろは、大疫病が流行はやる。秋は飢饉ききんとなろう。さあおまえ方、どうして生きる」

背なか合わせに、演者の三方にわかれて、人なかを見張っている同行の僧は、演者の法師が、自己の弁に酔って、次第に露骨な

煽動^{せんどう}を放つて来たので、時折、うしろを振り向き、

「どうか、みなの人衆に、ありがたいお札^{ふだ}をあげてください。疫病除^よけのおまもりを、ここに寄つた仏縁の方々に、お頒^わけしてあげてください」

と、数珠^{ずず}をあげて催促した。

「では。——今、お札を頒^わけてあげるが、静かに、われがちにならないで、順に待つておいでるがいい」

演者の法師が、そういつて石を降りると、ほかの三名が、

「これを、屋の内に貼つて、朝夕一向に念仏すれば、疫病はまぬがれる。そして七月か八月頃、自然のお札^{ふだ}焼が始まるから、その時は、疫病焼のお手つだいに、おまえ方も集まつて来い。風の

つよい夜、岐阜の諸処から火の手があがる。それがお報らせじや。疫病焼がすんでの後は、斎藤家時代よりは、もつと安樂な御政治が布かれよう」

おまもりと称する小さい紙きれを、群集のひとりひとりに渡すたび執しつこくいつて聞かせるのだった。忽ち雪の撒まかれたように、多勢の手に一枚一枚持ち去られてゆく。

「わしにも」

うばい合う肩と肩のあいだから、勝家も手をつき出した。

ほかの僧と一緒に、札配りをやり出した雄弁法師が、何気なく、その手へも一枚つかませると、勝家の手は、咄嗟とつさに彼の腕くびを捕えて、

「売僧まいすッ」

ずるずると人ごみの中から引きずり出し、勢いを与えておいて、いやという程、大地にたたきつけた。

「あッ、今の坊さんが」

「捕まったッ。まわし者だ」

驚いた群集は、こけ転まろんで、逃げちりながら、各の手にもらった物を、魔符まふのように、おぞ毛をふるって捨ててしまった。

演舌いぢしていた首魁しゅかい者らしい僧は、勝家の手に縛くりあげられ、逸いぢはやく逃げたほかの三名も、そこそこで捕まった。

「や。あのお武家は？」

と、市に躁さわいでいた庶民が、信長のすがたを信長と知ったのは、

勝家が捕えた法師を、町なかの寺院の門前まで引つ立てて行つたからであつた。

そこには、騎馬の家臣七、八名に、なお多くの徒歩かちの家来が、ひそやかに、信長の帰りを待ちもうけていた。

万一のため、市の附近に、あちこち立っていた御小人おこびとたちも集まると、かなりな人数になり、縄目の法師四人を、列しりえの後につれて、やがて稲葉山の城門へかくれて行つた。

一刻ほど後。

信長は湯殿からあがつて、さわやかな顔を、岐阜城の一室に見せていた。

「蘭丸らんまる、箒こうがいをかせ」

濡^{ぬれ}髪^{がみ}のほつれへ手をやりながらいうと、小姓の蘭丸は、うしろへすり寄つて、

「おなでいたしましょうか」

「む、む」

と、頭^{つむり}をまかせ、信長は、やや上気した面^{おもて}を、燭に上げていた。侍臣がつたえたとみえて、頃をはかつていた勝家が、それへ、

「取調べてまいりました」

と、報告に来る。

懷紙をとつて、そつと、額^{ひたい}の汗へあてがいながら、信長はうしろへ、

「もうよい」

と、いつてすぐ、

「どうだった。坊主どもの申し立ては」

「なかなか実を吐きませんので、手をやきました」

「さもあるうず。寺籍はどこに属する者か」

「ひとりは長嶋の長円寺」

「やはりそうか」

「二名は、性懲りもない、叡山の僧であります。もう一名は、

三好の残党で、法体はしておりましたが、僧ではありません」

「より集まりか。——類と類だな」

「首魁の長円寺の坊主は、さすがにいかに叩いても、そら嘯いて口をあかず、三好の残党も、泥を吐きませんので、叡山の二名

を、べつにして、拷問ごうもんしてみましたところ、すべてを白状いたしました」

「そうか。ふふム……おもしろいな、同じ坊主でも、そうちがうか」

「この初夏を期し、かねて領民をまどわしておいて、御城下の各所に火を放ち、一揆いっきを煽動せんどうしておいて、北からは浅井、朝倉の兵を呼び、南からは長嶋の一向宗徒を糾合きゆうごうし、石山本願寺の門徒兵や、叡山や、また畿内きないの三好、その他の残党もあつめ、一挙に、岐阜を葬らんとする企謀たくらみをめぐらしておるとのことにございます」

「なるほど。——この信長を憎しとする敗者、競争者、旧弊の擁よ

護者^{うごしゃ}が、みな自分らの末期をさとつて、くさいもの同士、團結してきたな」

「いずれも、亡び去るものの様相には違いはございませんが、輕視はできません」

「もとよりのこと」

「坊主の自白によりますと、なおこの一連の密盟には、甲州の武田殿まで加わつておるやに思われます。その武田家と、京都の將軍のあいだに、近ごろ繁く、密使の交わされていること、双方の肚^{はら}の中など、思いめぐらせば、御当家は今やまったく、四面楚歌^{しめんそか}の中にあるかと考えられます。寸刻とて、御油断はなりません」

信長は、默然^{もくねん}、燭^{しよく}を見つめていたが、やや疲れたように、

「勝家、また明日あした聞こう。法師どもは獄に下げて、しばらく生かしておけ」

と、いった。そして蘭丸をつれて休息の間へかくれた。

伏龍ふくりゅうもんどう悶動

「よくもいった、四面楚歌しめんそかの中とは。——信長がこの居城、見まわせば、八方敵ならぬ境はない」

ひとり居ひととなると、彼は手枕をして横になった。

まだ寝所にはいるには惜しい気もする四月末のよい気候であつた。

城下の蒸し暑い夜も、この山上の本丸は、
爽涼そうりようだった。

「四囲しゐの敵ばかりではない」

彼は、反省してみる。自分の領下にある施政しせいがどうか。自分が果たして、領民の心をつかんでいるか否か。

岐阜ぎふの領は、親ゆずりの遺産ではない。自己の実力で新たに版は図んとに加えたものである。領民はついきのうまで、斎藤家を領主と仰いでいたものだ。それだけに困難が多いのである。

「ひと眼でも知れている敵の諜ちようじや者きべんの詭弁きべんに、すぐに動かされるような領民では」

信長は、心をいためた。誰のせいでもない、信長自身の施政と徳のいたらぬためと考えるからである。

どうしたら民心を？——と、瞑目めいもくして苦念する。

信長を信じろ。

と、令してみたところで、民心が自分の思うままに向くわけもない。

領民の本義にもとるやつは縛しばるぞ。

と、圧力を加えてみたらどうなるか。

これも覚つかない。

心の形ぎようたい体はどうにでも取れる。法令を布しくはやすいが、法

令に心服させるのは難しい。

いや民心には、法令と聞くと、内容を汲くまないうちに、先に厭いとうような性格さえある。かつての遠い時代の暴圧が民層のなかに

深くしみこんで、生理的にさえなっている。

では、法令と被治者、これはいつも溶けあわない片恋か。

「——で、あつてはならない。ふたつが離反すれば、必^{ひつじよう}定、

国は亡ぶ。……国主の任とは」

信長は思う。

むすぶことだ。

歎^{よろこ}んで民心がうけとるような法令でなくてはならない。

そんなことをしていたら国政は成り立つまい。——こう自問自

答してみながら、

「そうでない」

と、信念した。

民衆はもとより生活の豊かと安心を渴仰かつごうしているが、いつて、放恣ほうしな快樂とか安易な自由とか、そんなものにのみ甘やかされて飲んでゐるほど愚ぐなものでもあるまい。

一個の人生にしたところで、余り気まま暮しな人間や、物に困らないものが、却かえつて、幸福でない例を見ても、総括そうかつした民心というものにも、艱難する時代と、共榮謳歌きやうえいおうかする時代と、こもごもの起伏があつていい。なければ却つて、民心は倦うむ。

「まちがつていた」

信長は、そこに思い至つて、ひそかに悔くいた。

祖先以来の受領地、尾張にあつては、ずいぶん艱苦を領民に強いたが、岐阜の占領地へ来ては、前の斎藤家が、放漫な施政をし

ていたので、華美自墮落かびじだらくに馴なれている新領土の民には、きようま
で、信長としては極めて生ぬるなまい政策をとつて、徐々に馴ならして
行こうという方針でいたのである。

「まずい。民心を知らないものだ。かえつて領民は、前の領主の
やり方と、似て非なる信長のやり口を疑つていたろう。信じない
はずだ」

自墮落な領主の下に、自墮落に生きて、滅亡を告げ果てた歴史
を眼で見ている領民である。彼らが今求めているのは、斎藤家の
それとはちがったものであるにちがいない。

自分だに、信念と徳を示せば、彼らはよろこんで、艱苦を享きよう
受じゆするにちがいない。むしろ清新な希望をかかげ、民心に、艱

苦せよということであつた。

子に対する父の愛を、もつと宇宙大にもしたような、民心への大愛をもつて。——しかも民心を打つことだ、鞭打つことだ。

蘭丸は、室のすみに、その小さいすがたと年齢のわりにしては、余りに行儀よく、ちよこねんと坐っている。

が——いかに彼が伶俐でも、信長の心のなかの慘憺たる経営はわからない。

「うたた寝を遊ばしては」

などと、彼の手枕の顔を、遠くから案じていた。

山の若葉を漉してくる夜風が冷たくなった。蘭丸は立つて、

「まだ御寝所へ入らせられませぬか」

と、信長の顔へそつといった。

「もう少しこうしていよう」

ほそく開いた主君の眼には、睡そうな気はすこしも見えない。

蘭丸は、信長の背へまわって。

「おつかれ遊ばしたのでしよう。すこしお体でもさすりましょう」と、肩へ手をあてがった。

無用とも、せよともいわない。しかし蘭丸は、信長がよく背が凝こるというのを聞いているので、揉むところを知っていた。揉めば信長は、なすままに、体をまかせている。

「……むりもない、民心がこの信長に、頼りきらぬもむりではない」

彼はなお思いつづけている。

「いま信長の味方といえ、三河の徳川家があるばかり。それとて、近ごろは武田家との抗争で、力とは恃^{たの}み難い。その徳川家へのぞいたら、この信長を、父とも思うといった將軍家義昭^{よしあき}をはじめ、遠くは西国の毛利家にいたるまで、みなわが敵であらぬはない。——領民の眼から見たら、この城も、危うく見えよう、^{はかな}儚く見えるも尤^{もつと}もである」

どうして、そういう民心の信望をつなぐか。この人でなければと、領民が一心一体となってくるか。信長にはこうしか考えられなかった。

「まだやり足らないのだ。身をもつてやり通そうと誓ってやって

来た年来の実行も、まだ人眼ひとめから見れば、やり足りていなかった。

——そうだ、これからも、身をもつて信念を実行に示してゆく。

それしか、民心を得る途みちもなく、また信長の生きる途もない」

むくと、彼はふいに起きた。

晏如あんじょと、身を横にしていられないような衝動が、唐突に、意

識を度外して、からだを起させたのである。

蘭丸は、驚いて、

「どうかなさいましたか」

「いや。……いま何刻なんどきだな」

「亥こくの刻ごろかと思えます。お時計番にたしかめて参りましょうか」

「それには及ばぬ」

と、支^さえてふと、蘭丸の腫^はれぼつたい瞼^{まぶた}に眼をとめ、

「なにを泣いていた？」

「はい」

「眠^{つろ}とうて、奉公が辛うなつたか」

「そんなことはございませぬ」

「では、なんで泣いた」

「どうしたのか、わかりませんが……」

と、蘭丸は両方の眼を肱^{ひじ}でかくしながら――

「殿のおからだをさすつておりましたら、討死した父のことが、急に胸にせまって来て、ひとりで涙が出てしまいました。おゆる

し下さいまし」

「三左衛門可成よしなりのことを思い出してどうか」

「……はい」

「そちの父可成よしなりは、去年、叡山えいざんをかこむ前、朝倉の大軍と僧

兵につつまれ、宇佐山うさやまの城と共に相果てた。あとに遺のこつたそちも

まだ少年、悲しむは無理もないが、嘆なげいては、父のいさぎよい討

死も、可あたら惜、何もならないものとなろうぞ。泣くな。可成は死ん

ではない」

「えッ、父は死んだものではございませんか」

びつくりしたように蘭丸は顔から肱をはなした。信長は坐り直して、

「生きている」

強くうなずいて見せた。

「どこに……どこに父は、生きておりますか」

蘭丸は手をついて、わなな顫きながら、主君の唇もとを見つめた。

信長は、自分の胸へ、手をあてながら、

「ここにだ。信長の胸にだ。——生きているというたのは、そち

の父の形ではない。討死しても、可成の忠ちゆうこん魂は、信長の胸に

生きていると申すのだ」

「ど、どうしてですか」

「可成ばかりではない。信長の軍について、今日まで、諸処の合戦で死んだ者も、みな信長の胸に合祀ごうししてある。それが信長の心

となつて、艱苦にぶつかるときに、信長を勇気づけてくれる。怯ひる

む心や惑まどう心のうごくたび、わしが幼年の頃、わしを忠ちゆうかん諫かんし

て自害した平手政秀をはじめ、そのほかたくさんな忠魂が、わしを叱咤し、わしを善に善にと導いてくれる。そちの父三左衛門可成も、そのひとりじや。そちが悲しむと、信長の心もかなしむ。

——見よ、わしはなお、無数のよい将士を死なすだろう。かなしんでいては出来ないのだ」

噛かんでふくめるようなことばになる。生来、利発な蘭丸は、凝ぎ然ようぜんと坐りなおしていた。

「……だが、信長はそちにも誓う。信長はかならず乱脈と暗黒に沈んでゐる日本全土の人々を甦よみがえらせてみせる。大君おおきみの御ここ

ろを安んじ奉る日を迎え取つてみせる。なお百世の後の代までも、信長のなしたことが、かならず日本によいことであつたという事実を地上にのこしてみせる。……これだけのことを信長がしたら、信長の麾下きかに討死した白骨どもも、むだに死んだとは悔い嘆なげくまい」

「殿。……殿。……よくわかりました。蘭丸も決して嘆きません」

山上の闇の森に、ほととぎすが啼なきぬいている。幼い者や弱い者には心情をみだされやすい。信長も眼のまへの蘭丸のすがたに、日頃の彼らしくもなくふと感傷にとらわれたが、それは長いあいだではなかつた。

「蘭丸。料紙と硯すずりばこ 笥はこを」

「はいッ。……これに置きまする」

「墨をすれ」

筆をとつて、信長は一書を認めた。したた横山城にある木下藤吉郎へ宛てて。

文面はかなりつぶさである。秘封ひふうして宿直とのいの者をよび、

「すぐ早打ちをもつて」

と、使番へ下げる。

その後また筆を取りあげて、家臣の重なる人々の名を列記していた。城中に住んでいる者と、城下にある者とに限っている。

「これを、勝家の部屋へとどけて参れ。明朝卯うの刻こくまでに、これに誌しるしてある者ども一同、評定ひょうじょうの間に集まるようにと申し添

えて」

宿直にそれを渡すと、信長は間もなく寢所にはいった。

卯の刻といえ早そうぎよう暁あけだった。召しをうけた人々は、何事か

と暗いうちに起き出て来た。ここ久しく軍議もなかった。主君の胸に、そも何事か、機も熟せりと神算が立ったのだろうか。

出揃った朝の顔は、天井のたかい大広間に居ながれていた。柴

田、佐久間の首席をはじめ、氏家うじいえト全ぼくぜん、安藤伊賀守、武井たけいせ

夕菴きあん、明智十兵衛などの顔もあった。

信長が着座した。

軍議は、実にみじかい時間で終った。一決して、すぐ各席を立つ。

外へ出てみれば、まだ朝の大气が水々しい。

「朝飯前に決つたな」

「左様さ。御評議のみか、駈け向うところも、この意気では、朝飯前で片づいてしまうじやろ」

廻廊をながれて退る諸將のすがたには、もう明らかに戦気が立っていた。——その朝、信長が諸將に諮^{はか}つたのは、

「まず、長嶋^{ながしま}の門徒^{いっき}一揆から平らげて、四敵^{してきはつそく}八塞^{かたち}の象にある岐阜の位置を、一角から打開してゆこうと思うが如何に」

と、いう議であつた。

大坂の石山本願寺、京の叡^{えい}山^{ざん}、尾張、伊勢境の長嶋門徒。

なお江^{ごうしゅう}州や各地に、僧徒の勢力は、根ぶかく散在している

が、以上三つが、反信長聯盟の三本^{ほんざん}山として、歴然たる抗争の旗をひるがえしているものだった。

信長にとって、およそ始末のわるい相手は、はつきり領土を持たないで、しかも諸国の民心にふかく蝕^くいこんでいるこの末期的僧団であつた。その煽動力であつた。

五月にはいつてすぐ。

岐阜城下に、信長の大軍は、勢ぞろいした。

^{おも}重なる人々のほか、その日まで発向を知らなかったので、

「どこへ。どこに戦いが？」

と、城下の者は、眼をみはつたが、その出陣の血まつりに、先頃、八日の市で捕まつた四人の間^{かんちようそう}諜僧が首を刎^はねられたので、

「さては、長嶋か」

と、初めて知った。

「あのまわし者の僧に、疫病除^{やくびようよ}けの守り札をもらつて家に貼つておいた者は、剥^はがしておくがよいぞ」

領民のなかにも動揺が見えた。彼らはあわてていろいろな物を湮^{いんめつ}滅した。

夏ともなれば、強風のふく夜が来れば、疫病焼の火の手があがる。それに手伝うものは、生きては安楽なくらしに会い、死しては仏果を得るなどと囁^{ささや}かれたことを、よほど盲信していたらしいのである。

中にはまた、その夜、用いよといわれて、正直に蔵^{かく}して持つて

いた一揆いっきの旗を、こつそり焼きすてた者などあつた。

その旗というのは、白木綿に梵字ぼんじをしるし、下に、

退一步たいほだじく墮地獄

進一步しんぽう生極樂

と、書いてあつた。

長嶋には今しもこの旗が林立そうぞくしていた。一揆の僧俗そうぞくは七万を

こえ、なお、一向僧の煽動せんどうにつて、鋏くわをすて、商あきないを抛なげうつて、

自暴自滅の騒乱へ身を投じるものが日に増しふえるばかりだつた。

（——男たるものは一步も退くな。女たるものは一言も悔くやむな）

一揆に加わると、そういう誓詞を立てさせる。また宗祖親しゅうそしんら

鸞らんのことば、

如来大悲の恩徳は

身を粉こにしても報ずべし

師主智識の恩徳も

骨を粉にして謝すべし

.....

難なんぎよう行ぎよう 雑ぞうしゆう修じりき 自力のこころを捨て

一心ごしよう後生にたすけたまえと

弥みだ陀をたのむべし

と、あるような聖者の文章を、人間への光明と安心には役立て
ないで、破壊と騷そうじよう擾を意図とする咀呪そじゆの歌として称とえさせた。

信長の軍は、絶滅を期して、長嶋へ詰めよせた。

去年には。

この地方の、小木江^{おきえじょう}ノ城の城主であつた信長の弟、三七^{のぶ}信興^{おき}は殺され、城は一揆の者に奪われていた。

「弟三七のとむらい合戦」

とは、口にこそ出さないが、信長の胸にはあろう。全軍の将士は、もとよりそれを誓っていた。

だが。

長嶋は容易に破れなかった。

むしろ攻めれば攻めるほど強くなった。一心一向の称え^{とな}そのままに凝り固^こまつて戦う。矢も鉄砲も槍もつき通らない抵抗を示すのであつた。

「誤った。蛇をころすには頭をこそ打てだ。蛇尾だびを叩いて、日を過しているまに、わが大事は去ろうも知れぬ」

信長は、長嶋の要害や地勢を、自身視みてあるいた日、そう悟つて、にわかにな軍へ総退却の命をくだした。

その伝令をうけて、各陣地にある諸将は、

「やッ？ 何ゆえに」

と、信長のところを疑つて、ひとしく意外な愕おどろきに打たれた。孫子そんしも訓おしえている。

攻進は易やすく、退くは難いと。

その難事を、信長は、喰いかけていた飯茶碗でも、思い直して置くように、

「退^ひけ」

と、総軍へ命じたのである。

当然、全軍は大混乱を起した。今が今まで、攻略一方で、退くなどということは、考えてもいなかった人々である。——なぜか？ 何故の退却か？ 部将たちの頭からして混乱を呈していた。

「各 はそも、何を疑い惑うのか。退^ひけとの御命令である。主命は絶対ではないか。理由などは、後で問え。ともあれ、退くのだ」
 殿^{しんがり}軍をいつかつた柴田勝家や氏^{うじいえ}家ト全^{ぼくぜん}などは、なお退^ひくことをいさぎよしとしない部隊を駈けまわって、退却をうながした。

急速度な転回、そうして寄手の一角から徐々に開始された。

その日まで、広い地域をかこんでいた大兵が、にわか引揚げ始めたのをながめて、

「すわ、信長の後方に、何か、突発的な大事が起つたにちがいない」

と、観^みて、急に門徒の大兵団は、長嶋を出て、追撃に移った。

追撃にかかった僧兵の一隊は、川^{さかのぼ}を遡^{さかのぼ}つて先に廻り、やがて潰^か走^{いそう}して来る見込みで、敵を待っていた。

殿^{しんがり}軍の柴田軍は、堰^{せき}を切つて出た門徒勢のため、さんざんに

撃破された。彼の作戦どおり、逃げ走つて行つたが、そこには、待ち伏せていた新手の敵があつた。鉄砲、乱^{らん}箭^{せん}を浴びせられたあげく、全部隊の半分は、僧兵のために殺された。

柴田勝家自身も、左の股ももに一弾の銃じゅう瘡そうと、肩のあたりに一矢やきずの矢痕やきずをうけていた。そればかりか、中軍に持っていた金幣きんぺい
 の馬うま標まじるしまで、敵手に奪われてしまい、主従、ちりぢりになつて逃げ走った。

「殿！ 殿！ もう私は、お別れします。お供もこれまでです」
 彼の小姓のうちに、当年十七歳になる水野采女みずのうねめという少年がい

た。突然、勝家の駒のそばを離れて、後へもどろうとする様子に、

「采女うねめ、どこへ行く」

と、勝家が叱った。

すると采女は、

「恃たのみに足らぬ細腕と思し召しましょうが、馳しんせもどつて、殿が

軍の殿軍をいたします。わたくし如きは、お見捨て下さって、すこしも早くお退きなされますように」

と、いうたかと思うと、もう身を翻かえして、敵の中へ駈けて行つた。

死を決して奮進した采女うねめは、奪われた味方の馬うま標しるしを敵の手から奪とりかえし、しかも後日、身をもつて危地から遁のがれてかえつた。

この引揚げが、いかに至難であつたかは、勝家と共に殿軍しんがりした氏家ぼくぜんト全が戦死し、安藤伊賀守も潰つぶえ、将士の戦死八百余人、負傷二千余名と数えられたことを見ても、その犠牲のほども想像されよう。

——が、信長は、ようやく岐阜へ近づくと、

「まず、よかつた」

と、つぶやいた。そして乗れる愛馬の平首ひらくびを叩いて、

「もう一年の辛抱だ。ほんとに汝の駿足しゅんそくを労すことは、一年の後にある」

と、独り云つた。

一死ただこれ君命あるのみと、敵中へ馳せもどつて、金幣きんぺいの

馬標うまじるしをとりかえして来た少年水野の如きは、退却に際しても、

何の理窟もこねなかつたが、諸將のうちには、岐阜帰着後も、こんどの引揚げと、その犠牲に対して、信長への批判や懷疑がひそかに絶えなかつた。

それに対して、信長は一日、^{あるひ}群臣のいるところでこういった。

「わたしには——わが織田軍には、前途多くの任務が横たわっている。彼^{かしこ}の敵も捨ておき難いが、長嶋はまだ一地方の敵、この信長を仆さんとする敵の根元ではない。——火事を消すに火元を措^おいて、他の壁に映っている幻影に水をそそいでいたら人は嗤^{わら}う。しかも、そこで大切な時と軍馬を費やしてしまうなど、愚のいたりではないか。……まあしばらくやすめ。百日がほど、休養して、どこが根本の火元か、そち達も、ひろく天下をながめて見定めておくがよい」

甘糟三平あまかすさんぺいは、甲斐かいの名将として聞えのたかい甘糟備中守が一族の子であるが、特殊な才能のあるために、かえって低い役目におかれたまま、十年も働いていた。

「——人間、あまり重宝がられるのもよし悪あしだよ。むしろ鈍どんぶ物つに生れて、生涯一度か二度という時に、一生の働きをいちどにして、あとは不器用者といわれていたほうがいい」

近ごろ四十にも近くなると、甘糟三平も、時々そんな愚痴をこぼした。

けれど、彼はまだ依然として、持ちまえの才能をもって、敵国と甲州のあいだを、まるで韋駄天いだてんか天馬のように、のべつ往来し

ていた。

三平の所属は、武田家の乱波組らつばぐみ（隠密）であつた。敵国攪こうら乱らん、諜報、聯絡、流言浮説さんぷの撒布など、あらゆる実戦以外の戦鬪に跳躍しているひとりであつた。

その三平は、若い時から敏びん捷しょうと健脚で仲間のうちでも鳴っていた。どんな山道でも一日に二十里から三十里は歩くという脛すねを持つていた。

——が、いくら彼でも、そんな速度を毎日には続けきれないのであろう。遠隔から急いで来る時は、馬の使える地帯では馬を用い、嶮路けんろにかかると、自身の脛で飛ぶことにしているらしかった。

そのために、彼は常に往来する要処要処に、「馬継うまつぎ」をする

小屋をもっている。多くは獵師りようしの小屋か、木挽こびき小屋などであつた。

「おーいッ、炭焼。——この小屋の親爺おいぼれはおらんか」

三平は今、その馬継らしい炭焼小屋のまえで、馬を降りていた。彼も大汗をかいていたが、彼にも負けないほど、馬も汗にぬれていた。

五月の末である。

山にはいると、まだ緑も浅いが、里のほうはもう、草いきれや蟬せみの声であつた。

「いないのかッ」

面倒になったとみえ、破れ戸やどの腰を膝で蹴った。小屋の戸はす

ぐ外^{はず}れる。

三平は、ここへ預けるつもりを、小屋のなかに曳^ひき込んで、くくりつけると、土間の奥へはいつて、勝手に飯^{めし}櫃^{びつ}や漬物や土^ど瓶^{びん}などを持ち出した。

そして腹いっぱい喰べ終ると、

「どれ……」

と、すぐ腰をあげかけたが、矢立の筆をぬくと、鼻紙へこう書いて、それを御飯^{ひつ}つぶでお櫃^{ひつ}のふたへ貼っておいた。

狐狸^{こり}のわざにはあらず。空^{から}にしたものは三^{なり}ぺい也。うま、留

守^こばんにあずけおく。こんど通過の折まで、よく草を喰わせ
て肥^こやしおくべし。

三平が出て行こうとすると、馬は別れを惜しんで、ばたばたと羽目板を蹴った。

無情な飼主は、ふりむきもしない。その蹄ひづめの音へ、がたツと戸を閉め、こんどは持ち前の両脛りようずねで、飛ぶが如く——というのも大げさだが、何しても身軽そうな迅足はやあしで、南巨摩みなみこまの山地へいそいで行つた。

もとより彼のさしてゆく方向は甲府であつた。駿遠すんえん方面から本国へもどつて来たものであることもいうまでもない。日ごろの健脚に一倍風をきつて行く様子から見ると、何かよほど急を要する情報たずさでも携たえているらしく思われる。

次の日の朝には、早くも彼のすがたは幾山をこえて、脚下に富

土川の水を見ていた。山峽やまかいのあいだに見える屋根は鰯かし沢かさわの町だった。

「まず、午過ぎひるすまでには」

と、そこで甲府に着くまでの時間と歩速に、すっかり見込みがついたらしく、ひと休みして、甲斐盆地にも訪れている夏の日をながめていた。

「どこへ行つても、いくら山国の不便や損はあつても、やっぱり己れの国ほどこいいところはないなあ」

つぶやきながら、膝をかかえていると、夥おびただしい馬の列が、背に漆桶うるしおけをつけて、何十頭か数も知れないほど、麓ふもとから追われてのぼつて来た。

「はてな。どこへ？」

あまかす甘糟三平は腰をあげて降りて行つた。山の中腹で、下から来

る百駄の輸送隊と出会つた。

「やあ」

馬上の先頭の方は、武田家の荷駄頭^{がしら}、佐奈田源太左衛門だつた。

もとより相識のあいだから、三平はすぐたずねた。

おびただうるし「夥しい漆ではありませぬか。かように大量な漆桶を馬にのせて、

いつたい何処へ輸送するのですか」

ぎふ「岐阜へじやよ」

源太左衛門は答えて、彼の不審そうな顔いろに、説明をつけ加えた。

「一昨年、織田家から注文のあつた漆が、ようやく、その量に達したので、岐阜まで送つてまいるところじゃ」

「なに、織田へ」

眉をしかめて、三平は、それは御苦勞至極など、笑いも作れないような顔をした。

「——ずいぶんお氣をつけておいでなされ。路次はなかなか物ぶつそ騒うですぞ」

「長嶋の門徒も、よく戦うそうだの。織田軍の戦況はどうじやな」
「主君に御報告せぬうちは、口外はなりません」

「そうそう、そちは今、その方面から歸つて来た途中であつたな。
では、立話はばかも憚りあり。……おさらばおさらば」

百駄に近い荷駄と、源太左衛門のすがたは、峠をこえて、西へ去った。

三平は、見送つて、

「山国はやはり山国。世の情勢が伝わることもどうしても遅い。

兵馬は強くても、大將はお偉くても、これは何割の損かわからない」

彼は、自分の任務の重いことを一ひとしお感じた。

いわつばめ
岩燕のように、麓まで駈け降りた。

かしかざわ
鰍沢の町で、また馬を求め、それから一ひとむち鞭で、甲府へ

はいった。

盆地の甲府はむし暑い。

信玄の居城、躑躅つづしヶ崎さきの館たちは、常になくきびしく固められてい

た。

よほどな大問題か、軍議の折でもなければ、平常めつたに通らない顔が、ぞくぞくと城門へはいつたので、

「何事があるな？——」を、門の士卒でも予感していた。

戦国のいま、事があるといえいくさば戦ときまつているようなもので

ある。それかあらぬか、今朝から城内へ通つた人々では、一族のまごろくにゆうどうしよううけん

孫六入道逍遙軒あなやまばいせつをはじめ、穴山梅雪にしなのぶもり、

山県三郎兵衛昌景まさかげ、内藤修理昌豊しゆりまさとよ、小幡信定おばたのぶさだ、小山田備中

守などの譜代などがあつた。

「御軍議だろうか」

「いうまでもない」

「出軍とすれば、どこへであろう」

「さあ、どこへだか」

「川中島か、善光寺平だいらの西か」

「上杉家とは、和議が成つておるはずだが」

「わかるものか。和睦と開戦は、天気のようなもので、急に風雨になった、こんな約束ではないといつても、その時はもう人間のせいにはならない。天を嘆いてみても始まらない」

城門の士卒たちには、そんな臆おくそく測を交わし合つてみるしか、

明日のことは分らなかった。

城の奥は、若葉のみどりにつつまれて、時折、初蟬はつせみの声がするほか、寂じやくとしている。しかもなお今朝から登城した諸将で退さがつて来るものは一名もなかった。

そこへ。あまかす甘糟三平は駈けついた。

濠ほりの外で、馬をすて、その馬の手綱をつかんで、駈け足で橋をわたつて来た。

「何者だツ」

と、鉄扉てつびの横から番兵の眼と槍が光る。三平は、馬を柳にくくつて、

「それがしだ」

左右の兵に、自分の顔を示し、すたすたと城内へはいって行つ

た。彼の顔は、通り手形である。何の某なにがしと詳しく知らぬ者はあつても、その顔と役目を知らぬ兵はなかつた。

躑躅つつじヶ崎さきの城館しろたちのうちに一字いちうの伽藍がらんがある。毘沙門堂びしゃもんどうといつて、信玄入道の禅室でもあり、政務所でもあり、時には軍議の場所ともなつた。

信玄は、今その廻廊に立っていた。庭の泉石から室を吹きとおしてくる風に、彼のからだは緋牡丹ひぼたんの花が炎のように揺れた。彼は、具足のうえに、大僧正だいそうじょうの緋衣ひいを着ていた。

ことし五十一歳。

かた肥りに肉の緊しまつたからだをしている。背は並である。どこ

か異相にはちがいないが、彼に謁えつしたことのない者がよく、どんな怖ろしいお方かなどというが、そんな近づき難いひではない。むしろ温容のほうであろう。——ただ見るからに重厚な風をそなえ、眉といい手脚といい、多毛質で不屈な面つらがまえではあるが、これは山国甲斐の人の共通な特色で、ひとり信玄いちじるに著しいわけではない。

「ではお暇を」

「退さがらせて戴さかきます」

伽藍がらんのうちから次々に席を立て退出してゆく人々は、階かいを降りて、もういつぱん廻廊にある彼のすがたへ、挨拶してゆくか、黙礼をして散つて行つた。

朝からの軍議だった。——軍議といえ、彼は具足を下に着、
 緋衣ひいをうえに纏まとつて、陣中にあるとおりの装いをしていた。

さすがにきょうの暑さと長座にはややつかれたものとみえ、今
 しがたそれが終ると、一同から退出の会釈をうけて、すぐ廻廊の
 外に立ち出たのである。

小幡、内藤、山やまがた県ふだいなどの譜代をはじめ、逍遙軒しょうようけん孫六、伊

奈四郎勝頼かつより、武田上野介こうずけのすけなどという一族にいたるまで、およ

そきょうの軍議に列した者は、踵くびすをついで帰って行つた。——そ

れがみな云い合わせたように、どこか沈重な眉と、決意をもった

唇と、倉皇そうこうと先をいそぐ足どりをして行つた。

人は去つて、人ひとけ気けない毘沙門堂びしゃもんどうは、風に光る金壁と、しずか

な蝉せみ こえの声だけになった。

「……ことしの夏は？」

信玄は、この国を繞めぐる山々の影を、遠く見まわすような眼をした。

十六歳の海野平うんのだいへの初陣から、彼の想い出ふかい経歴は、ほとんどみな、夏から秋にわたることが多かった。

冬となれば、引籠つて、内に力を養っておくしかない山国である。自然、生理的にも、春が来、夏ともなれば、

——さあ、出て戦え。

と、おのずから満身の血は、限られた区域から外へ向つて逸はり止まないのであった。

それもひとり信玄ばかりでなく、甲斐武士には共通な心理であった。町家や農田の人々まで、勃然と、

——時こそ来れ。

という太陽を夏には感じるのであった。

殊に、信玄自身は。

ことし五十を一つこえて、痛切に或る悔いと、生涯に期する焦^あ躁^{せり}を抱いていた。

「……余りにも、戦^{いくさ}のための戦ばかりやりすぎて来た」と、いうことである。

「今にして、越後の謙信も、そう覚^{さと}つておることだろうに」

と、多年の好敵手を考えれば、敵のためにも、同様な苦笑を禁

じ得ない。

しかしこの苦笑は、五十一にもなつてみると、深刻に胸を蝕^くう。これから何年を生きられるか、当然、人間の天寿というものをいつも考えるからである。

一年のうち、三分の一は雪に閉じられる国である。田も生産もその間は遅れ、文化には遠く、新しい武器なども入手するに困難な領土にありながら、人間のもつとも精力的な中年期のほとんどを、可^{あた}惜、越後の謙信と、十幾年も戦いつぶしてしまった。

「思えば。……今にして思えば、この信玄を、ひとは老巧^{あざむ}というが、むしろ岐阜の信長や三河の家康などに、まんまと、欺^{あざむ}かれていたにひとしい。あの小国の若^{じやくはい}輩^{はい}どもに」

陽は強く若葉の陰は濃い。そのせいか、彼の面^{おもて}にも、彫^ほったような悔いがあらわれていた。

信玄は、多年、

（関東第一の兵家）

をもつてみずから任じて来た。

土馬精鋭と、その特有な国内の経済政策などは、天下のひとも認めているところである。

——にも関^かわらず、いつのまにか、甲斐は天下の大勢から^{けん}圏^が外^いにおかれかかっている。

信長が、いちど京都に出て、その存在をにわかに大きくし始めた去年あたりから、信玄自身も、

「甲州の位置は」

と、あらためて眼界から自身を見直し、そして愕然と、気づいたのであつた。

武田家は今も、関東第一の兵家にはちがいない。

しかし、天下の重鎮^{じゅうちん}ではない。

経済力も、精鋭な士馬も、ひるがえつて視ると、中心のうごきや天下の大勢とは、甚だ遠い感があつた。——余りに小さく規格されすぎた武田家の経済施政、武田家の士馬精鋭でありすぎた。

さればといって。

彼ほどな大腹中が、甲斐近国の伐り奪りを、生涯の理想にしていたのでは決してない。

彼にも中^{ちゆうげん}原の志は、早くからあつたのである。信長や家康が洩^{はな}をたらしていた頃から、すでに次の時代に野心をかけ、

(この山国は仮^{かり}住居^{ずまい})

と、京の使臣にも洩らしたことがある程だし、越後との長期にわたる合戦も、実に、それへ発足するための一部戦として端^{たん}を開いたものだつた。

ところが、川中島その他、あらかたは、対謙信との戦いで、国力の消費と、貴重な年月を、過してしまった。

年齢の五十が、信玄に、大きな警告を与えたことはいうまでもない。——が、そう覚^{さと}つた時すでに武田家の位置は、信玄がつねに、

尾張の小せがれ、とか。

岡崎の童^{わっぱ}、とか。

眼の中にもなかった信長や家康よりも、時代の大勢からは、はるかに、縁遠いところにおかれていゝ自身を見出したのである。

「あれも謀^{はか}られたようなもの。……これも今思えば、大失策」

悔いはかぎりもない。戦^{いくさ}にかけてだけは、彼は悔いを知らなかつたが、外交的にふりかえる時、われながら、

「まずかつた」

と、思うことが幾つかあつた。

今川家滅亡の時、なぜ東南へ出なかつたか。また、家康から質^ち子^しをとつて、なぜ彼が駿^{すん}遠^{えん}へ領土をひろげてくるのを黙視して

いたか。

それよりも大きな過誤かごは、信長から歡心を迎えられて、彼と姻戚いんせきをむすんだことである。

ために信長は、やすやすと西隣、南隣の国々と戦つて、一氣に、中原へ足をかけてしまった。家康の質子ちしはまた、機うかがを窺つて逃げてしまい、信長と家康が、その緊密な同盟のもとに謀はかり合つてしたものだといふ外交的効果が、今では余りにも明らかにされていた。「――が、いつまでその策てはくわぬ。姻戚以外、甲斐に武田信玄あることを、思い知らせてやらねばならぬ。家康の質子は出奔した。これ、家康から義を絶つもの。もう何の仮借かしゃくを要そう」

きょうの軍議で、彼はそう宣言したのであつた。

折ふし信長は、長嶋へ出陣して、苦戦のまようと聞えたので、機逸すべからずとなし、にわかはこの動議となつたものであることは、機を見るに敏な兵家のこと、いうまでもないことである。
あまかす甘糟三平は、そばしゅう側衆まで取次ぎを申し出て、控えて湯など飲んでいたが、いつまでも沙汰がないので、

「てまえが帰着のこと、お耳へとどいたであらうか。もう一度、御催促ねがいたいが」

と、再度の取次ぎを仰いだ。

側衆からの返辞は、

「今しがた、御評議が終つたのみで、ややおつかれの体にお見うていけされるゆえ、もうしばらく相待つように」

とのことだった。三平はかきねて、

「その御評議なればこそ、てまえの用向きも、よけい火急を要しますわけで。恐れながら即刻」

と、せいきゆう請求した。

すると、側衆から信玄へ達したとみえて、すぐ通れとのことだった。毘沙門堂びしゃもんどうへ行く中門まで表の武士が附いて来る。そこから奥の武士へ引き継がれて、彼は、信玄の身近へ歩いて行つた。

「三平か」

信玄は、毘沙門堂の縁に、床しょうぎ几をおかせて腰かけていた。幹の大きな若楓わかかえでが、そのすがたに燦々さんさんと日光の斑ふをそよがせていた。

「——余事は措おきまして、取りいそぎ、急の御報告までを申しあげまする」

「ウム。うむ。……余事などは措おけ。何事が起ったか」

「さきに、早馬をもつて、伊勢からお知らせ申した儀は、情勢、まったく一変いたしましたゆえ、万一のおうごきもどうかと、自分、夜を日について、駆け参りました」

「なに。長嶋の様子が一変したと？ ……。それはいかなるわけじゃ」

「一時はほとんど岐阜表を空からにして、総がかりに長嶋へ攻めかかるやに見えましたところ——信長が長嶋の戦場に着いたかと思うと、即日、総引揚げを命じ、かなりな犠牲をも払いながら、潮うしおの

ごとく、ひつ返してしまいました」

「ええ、引揚げた……とか？」

「織田の麾下^{きか}さえ、意外であつたらしく、味方と味方のあいだにすら、信長の意中が解^げせぬと、すくなくらず狼狽^{ろうたい}の者もありましたが」

「……喰^{かな}えぬやつ哉！」

信玄は舌をならして、しばしは唇^{くち}を噛^かんでいたが、

「織田が、長嶋から手を引いては、虚^{うそ}をついて、この信玄が、三遠の平野に家康をよび出して討^うち懲^こらそうとしたのも画餅^{がべい}となつた。——危^{あや}うし危^{あや}うし」

つぶやいて、急に、

「信房のぶふさ、信房どうぼう」

と、あわてて堂房どうぼうの一間へ向って呼びたてた。そして、きょうの軍議によつて決定した出陣のことはにわかに取り止めるという旨を、すぐ家中へ沙汰せよといいつけた。

老臣の馬場信房ばばのぶふささえ、その理由を問う間もなかった。まして、つい今しがた、ここを退出したばかりの諸将は、

「はて、今を措おいては、徳川家を切りくずす好機はあるまいに」と、思いまどつた。

だが、その機会を逸したと知ると、信玄は釈しゃく然ぜんとして、もうそれにこだわつてなどいかなかった。はやくも次の対策と、次の機を得るもののように、物の具を解いてから、あらためて三平を

禅房の一間に召し入れ、人を払って、詳細に岐阜、伊勢、岡崎、浜松あたりの情勢を聞きとつていた。

その後で、こんどは三平のほうから、ひとつの不審を、信玄にただした。

おびただうるし

「夥しい漆の輸送を、途中で見かけ申しましたが、織田徳川は一体の国。なんで織田家へ、漆などをお送りになられますので？」

「約束は約束。……それにまた織田のこころも鈍ろうし、あの荷駄が、先に徳川領を通つてゆけば、徳川家でも油断しておろうにと。——さように奇略を試みたのじゃが、それもむだとなつた。

いや、むだでもない。時は、明日にもまた来ようも知れぬ」

彼は、自嘲じちようをもらして、どこか淋しげに意中を語つた。

雁と燕かりつばめ

甲軍の精銳は、一時、出動見あわせとなつて、むなしく夏を送つたが、秋九月というと、ふたたび西山東岳のあなたに、

（機会は、今！）

と、世の物音が聞えだした。

信玄の耳は、秋風ならぬ時代のあしおと蹙音にそばだツて来た。

その中を、彼は一日、笛吹川のほとりへ駒をたてていた。従者もわずかで、氣がるに秋の日を浴びてゆくすがたは、自身の領下の完全な治政を、みずから誇っているかのようにであった。

乾徳山 けんとくざん

と、山門の額がくに見える。

信玄の帰依きえしている快川国師かいせんこくしが住む恵林寺えりんじであつた。

あらかじめ通じてあつたものとみえ、迎えをうけて、信玄は庭園に通つた。ほんの立ち寄るといふ程度で、わざと伽藍がらんにははいらなかつたのである。

そこに、わずか二間ふたまの茶屋がある。小さい水屋が附いているの
みで、青苔あおごけの匂うばかりふかい泉石に、銀杏いちょうの黄色な落葉が、
笥かけひの下に溜たまっていた。

「和尚わじょう。きようは当分のおわかれに参つた」

信玄のことばに、快川かいせんはうなずいた。

「いよいよ、御決心かの」

「されば、機の到るを、ずいぶん根氣よく待ち申したゆえ、この秋こそは、どうやら信玄にも、やや時運がひらけて来たようにぞんずる」

「この九月にはいつて、織田の衆は、またも大挙して西へうごき、叡山を掃滅そうめつするとして、去年にもました大軍を催しておるそうな」
「そこでおざる。待てば日和ひより。——かねて京都の將軍家からも、

この信玄へ、しきりと御内書を通かわされて、織田のうしろを衝つかば、浅井、朝倉も同時に立つ、叡山、長嶋もともども手伝う、三河の家康ごときはいっしゅう蹴して、はやはや京地まで上洛あれと——御催促も再三ではなかったが、いかようと岐阜が難所——今川義

元が二の舞はしたくないので、機を計っておぎつたが、その岐阜の手薄に乗じて、雷^{らいはつ}発一迅^{じん}、三遠尾濃の諸州を一走りに、都までのぼりゆく心底でおざる。――さればことしの年越しは洛中にあつて、正月も都で迎えることになるうとぞんずる。和尚^{わじょう}にも、御健固^{ごけんこ}におすごしあるよう……」

「左様かの……」

快川^{かいせん}は、浮かない返辞だった。

兵事、政事、何事も和尚にただして、ふかく信頼している信玄は、その顔いろを観^みるに敏^{さと}かった。

「和尚には、信玄の思慮に、なんぞ危惧^{きぐ}をお抱きであろうか」

「……いや」

快川は、面おもてをあげて、

「あなたの生涯の御大志じや、何で不同意なはずはない。……じ

やが、おもしろくないのは、將軍義昭よしあきの小策である。頻りとあ

なたへ催促して来たような内書を、あなたのみならず、越後の謙

信へもさし向けていると聞く。また、この夏六月、死去されたが、

中国の毛利元就もとなりへも、同様、出兵をうながしておつたらしい」

「その辺のこと、信玄も知らぬではございません。胸中の大策を

天下に布しくには、なんといつでも、上洛せねば行われません」

「可あた惜、あなた程の人物を、甲斐の盆地に埋もれ果てさせてよい

とは、わしとしても思いきれぬ。ゆくゆく御難儀は多かろうと思

うが、御旗楯無みはたてなしのすすむところ、敗れた例ためのないあなたの磨き

下^かだ。ただおからだのみは御自身のものだから、天寿に仕えて素直にお持ちあるように。——それ以外、お餞^{はなむけ}別のことばとておざらぬ。お大事にお出ましあれ」

その時。

茶を煮^にるため、奥の清泉を汲^くみに行つた一僧が突然、手桶^{なげう}を抛^なつて、何か大声をあげながら、木の間を駈^{はし}けだしていた。

鹿の駛^{はし}るような物音が寺園の奥に響いた。その跽^{あえ}音を追いまわしていた一僧は、やがて息を喘^{あえ}ぎながら茶屋の庭面^{にわも}へ駈^{はし}けて来て、「はやくお手配下さいませ、怪しい者をただ今、とり逃がしました」

と、告げた。

この寺内に、怪しげな者などいるわけはないが——と、快川がたずねると、その一寺僧は、こう云い足した。

「まだ和尚わじょうのお耳には入れてございませندしたが、実はその

者は……昨夜おそく門をたたいて、わたくしどもの房へ泊めておいた旅僧でございます。——それも時節から見知らぬ僧なれば、

もちろん泊めもいたしません、顔を見ると、以前、お館やかたの乱らっぱ

波組ぐみにおりまして、御家中の方々と、寺へもよく来たことのあ

る渡辺天蔵どのなので、仔細はあるまいと、同房の衆とも計らつて、一泊をゆるしましたところ」

「待て、待て。……それはなお不審ふしんではないか。もう数年も前に、織田方のさぐりに行つて消息も絶え果てていた乱波組の者が、ふ

いに夜中、しかも僧そうぎよう形して、門を叩いて一泊を乞うなど。：

：なぜよく糺ただしてみなかつたのじゃ」

「その儀は、何とも、手ぬかりでございました。——が、彼のいうには、織田家の領に入りこんで、探りを働いておるうち、甲州の諜者と露頭ろけんして、獄に投げこまれ、幾年かを牢中で送つていたところ、幸いに、よい折があつて、一命をひろい、姿を変えて歸つて来たと、真まことしやかに申すのでございました。——そして明日は、甲府に出て、組頭の甘糟あまかすさんぺい三平どのお訪ねするつもりなごとも云いますので、すつかり真まにうけておりましたところ、今し方、てまえが水屋から手桶をさげて出ると、お茶屋の北窓の下に、その天蔵めが、やもりのように貼はりついて、立ち聞きたいし

ておるではございせんか」

「なに。……ここでの、お館やかたとのおはなしを、物蔭でぬすみ聞きしておったとか」

「はい。——登音に、てまえの方を振り向くと、さすがに愕おどろいた態ていで、すたすたと庭の奥へ歩いて行きますゆえ、これ、天蔵どの、これ待たんかと、声をかけましたが、まるで耳もない顔して、そそくさと、足を早め出しました。——で、わたくしが突然、曲くせも者のッ、と一声となりますと、恐ろしい眼を振り向けて睨みつけ

ました」

「もう逃げ失うせたか」

「大声で、呼ばわれましたが、お供方は、ご中ちゆうじきちゆう食中、どな

たも出合わず、残念ながら、私の手にはおえぬ相手でございましたため——」

信玄は、その僧へ、見向きも与えず、さつきから黙然と横耳で聞いていたが、快川かいせんの眼ざしまなに会うと、

「供の中に、甘糟三平を召し連れおります。彼に、追わせましよう。これへお呼び下さらぬか」

と、静かに云った。

和尚わじょうから旨をうけて、寺僧はすぐ山門のほうへ走って行った。やがて三平は、茶屋庭に平伏して、何事かと床しょうじょう上の信玄を仰いだ。

「そちの組下に、数年前、渡辺天蔵という者がおったであろうが」

信玄にきかれて、三平はすこし考えていたが、

「思い出しました。尾州蜂須賀村の生れで、叔父の小六が堺さかい

鍛冶かじに作らせたとかいう新しい鉄砲を持つて御領地へ逃げこん

で来、それをお館へ献じた功に依つて、数年、お扶持ふちを下しおか

れた者ではございませんか」

「その鉄砲のことで、信玄も覚えておるのだが、尾張者はやはり尾張者、今では、織田家の側に従ついて働いておるらしい。そちが追いかけて、首にして来い」

「追いかけてとは？」

「仔細は、そこにおける寺僧に聞いて行け。早速に追わねばとり逃がすぞ」

三平は、畏^{かしこ}まってそこを退^{さが}り、やがて恵林寺^{えりんじ}の門前から一頭の駒を解いて、どこへともなく鞭^{むち}を打って行つた。

韮崎^{にらさき}から西^{こま}へ、駒ヶ岳^{たけ}や仙丈^{せんじょう}などの裾^{すそ}を縫^ぬつて、伊那の高^{たかとお}遠^{とほ}へ越えて行く山道がある。

「おおウーいッ」

と、この山間にめずらしく人間の声がした。ひとりの旅僧はふと立ちどまって振り向いたが、それきり咎^{こたま}もしないので、また峠^と路^{うげ}を先へいそいでいた。

「オオーイ、旅の御坊」

二度目の声はなお近くした。それに御坊とよぶ声も明らかだつ

たので、僧は笠に手をかけて、ややしばし佇たたずんでいた。程なく、喘あえぎ登つて来た男は、近づくともまず、皮肉な一笑を相手に投げて、「めずらしいのう、渡辺天蔵。いつ甲州へ来ておったか」と、いった。

旅僧はぎよつとした容ようす子であつたが、すぐ平静に立ちかえると、クツクツと笠のうちで、髪切虫のような笑い声をもらした。

「ほう。誰かと思つたら、甘糟三平どのだったか。いや、お久しぶりでござる。——いつもお達者で」

皮肉へ返すに、皮肉をもつてした。お互いに敵地へはいつて味方のために機密を探るのを職分とする者同士である。これくらいな図太さと沈着がなければ勤まるものではない——と、教えてい

るような態度である。

「御挨拶だな」

と、三平も至って洒然^{しやぜん}としたものであつた。自国の中に敵国の密偵を見出したからといって、にわかにも物々しく立ち騒ぐなどは、平常、注意のない常人のことで、泥棒の眼でみれば、世間にも昼間も泥棒はあるいているので、あながち驚異するにもあたらないことだつた。

「おとといの晩、恵林寺へ泊つて、きのう同所で、快川和尚^{わじょう}とお館の密談を盗み聞きして、寺僧に見つけられ、それから一目散にお立ち退きだつたな。……そうだろう天蔵」

「そのとおり。貴公もあそこへ来ておつたのか」

「生憎あいにくとな」

「知らなかった。それだけは」

「おぬしに取つては不運だ」

「そうかしらて」——と、天蔵は、ひと事のように空そらうそぶいて、

「武田の間諜、甘糟三平は、まだ伊勢境か岐阜あたりで、織田家の虚きよを嗅かぎあるいていると思つていたが……いつのまに帰国したか。さすがは三平、お迅はやいことだ、賞ほめておこう」

「むだな追つ従しやう、いくら賞めても、おれの眼にとまったからには、生かして帰すわけにはゆかん。——この国境を生きてもどる気か」

「まだ自分には死ぬ気など少しもない。……だが、そういえば三

平、おぬしの顔にも死相がただよっておるぞ。まさか、死にたくて俺を追いかけて来たわけでもあるまいが」

「主命によつて、首をもらいに来た。申しうけるからそう思え」
「たれの首を」

「その首をだ！」

三平が太刀を引き抜くと、渡辺天蔵もぱツと杖を向けて身構えた。杖の先と刀の先とは、かなりの距離を置いてである。だが、凝ぎようぜん然ぜんと長い睨ねめ合いがつつくうちに、どっちの呼吸おもてもあらくなつて、さながら死に瀕してゆくような蒼白が二人の面おもてにみなぎつて来た。

すると、なに思つたか、三平は刀を引いて、

「天蔵。杖をひけ」

と、いった。

「^{ひる}怯んだか」

「いや、怯みはせぬが、お互いに同じ職分ではないか。役目の上で死ぬのはよいが、斬り合つて相討ちしてもつまらん。……どうだ、その着ている法衣を脱ぎ捨ててゆかぬか。さすればそれを持ち帰つて、討取つたと披露しておくが」

^{らっぽ}乱波の者——と、呼ばれている、いわゆる戦国の密偵仲間は、

ほかの武士にはない特殊な信念を持っていた。それは職分の相違から自然に持たれてきた生命観のちがいであつた。

——君の馬前で死ぬ。また、主君のためにはいのちを鴻毛^{こうもう}よ

り軽んじる。しかも華やかにいさぎよ潔く。

それがふつうの武士の信条だったが、乱波らっぱの者の考えは反対だった。

いのちは惜しめ。どんな恥や苦痛をしのんでも、いのちは持つて帰れ。

たとえ敵国へはいつて、どんな貴重な情報をさぐり得ても、生きて本領へ帰って来なかったら何の益にもならない。だから乱波者が敵国において死ぬのは、それがどんなに華々しい死に方でも、犬死である。たとえば、その者一個人には武士道らしくあつても、帰するところ、主君のためには無益な死であり、犬死である。

故に、乱波者は、生きて犬侍と呼ばれても、生き通して、必ず

その任を完まうしなければいけない。窮地となつても、意地穢きたなく、小心狡智こうち、あらゆる非武士的な行為にみずから辱はしても、飽くまで生きて帰るところへ帰ることをもつて、乱波組に働く者の本旨とする。

——そういう特殊な職分の中にあつて、骨ほねの髄ずいまで信念にしている三平、天蔵の二人であつた。で、いま一方の甘糟あまかす三平が、（お互いに同じ職分。ここで相討ちしてもつまらないではないか）と、刃やいばをひいて、相手の理性に訴えると、天蔵も直ちに得物を引いて、

「もとよりこつちも好むことではないが、首を賭けようというから相手をしたまでのこと。この法衣ころもの端ですむと申すなら置いて

行こう」

と、あつさり身にまもっている法衣ころもの片袖を破つて、三平の足下へ抛ほうり出した。

三平は、拾い取つて、

「これでいい。これを証しるしに持ち帰つて渡辺天蔵は討つたりと披露しておかばすもう。名だたる敵の侍なら知らず、多寡たかが乱波らっぱの者ひとり、首を御実見なさろうとは仰うつしやるまい」

「そう話がわかれば、双方の祝しゅうちやく着、では甘糟三平どの、お別れとしよう。……いずれまたと申したいが、会えば最後、もう生涯二度と会わないようにお互いに祈ろう」

云い捨てると、渡辺天蔵のほうも、急に相手が恐くなって来た

とみえ、生命いのちびろいでもしたように、足をはや迅めて立ち去った。

その姿が峠の降り坂へかかった頃だった。三平は、その前に、草むらへ隠しておいた鉄砲と火縄を持ち直して、天蔵のあとを追いかけていた。

やがて、鉄砲の音がした。——つづいて鉄砲を投げすてて、倒れた敵へ止刀とどめを刺しにゆく彼のすがたが跳ぶ鹿のように彼方かなたの坂に見えた。

そまみち 杣道の草むらに、渡辺天蔵は仰向けに倒れていた。——が、

三平が踏み跨またがつて、その胸いたへ、刃の先を向けたせつな、天蔵はふいに起つて、敵の諸足もろあしへ両手で抱きついて行つた。

「——あッ」

三平は仰向けに倒れる。天蔵の石あたまは、いやというほど、
 その鳩尾^{みずおち}へ打つかつて逆立ち^{さかだ}する。

「ざまを見やがれ」

蜂須賀村の産、野武士小六の甥^{おい}——である天蔵の野性は遺憾^{いかん}な
 く發揮された。相手の喉^{のど}をしめつけて、狼のように立ちあがると、
 傍らの石を両手に振り上げて、三平の面部にたたきつけた。

ぐしゃツと、柘榴^{ざくろ}の割れるような音がした。天蔵の影は、もう
 その傍にいなかった。

権化^{ごんげ}

信長が長嶋ながしまから引きあげた後も、横山城の藤吉郎は、江ごうしゅ

州うの各地を転戦てんせんしていた。

始末の悪い一揆いっきの火である。

ここを消せば、かしこに燃えあがり、そこを馳せ向えば、後方がまた再燃している。

あの信長でさえ、自身、長嶋征伐おもむに赴いて、現地の実情を知る

と、直ちに兵を引返して、

（——これを攻めるのは愚だ。火事の火元をつきとめずに、火事の映っている遠い壁や塀に水をそそいでいるようなもの——）

と、嘆じて、以来、各地の一揆いっきに対して、いちいち虱しらみつぶしに出る戦法はやめてしまった。

で、藤吉郎の方へも同様な指令が来た。藤吉郎は、信長のころを察して、

「さすがは御賢慮ごけんりよあつたとみえる。このひと夏は、悠々、昼寝でもしておれとの仰せだろう」

忽ち、横山城へ馳せもどつて、将士をねぎらい、夏を江北の山城にすずしげに送つていた。

が、武人の休養は、戦場より苦しいと兵などという。毎日、鍛た錬れんは怠らない。その休養のあいだが約百日ほどつづいた。

九月にはいると、

「出陣！」

の令が下つて、山城の門はひらかれた。横山を降りて、湖岸に

出るまで、兵たちはどこへ戦いに行くのか知らなかった。

湖畔には大船が、三艘そうもついていた。馬も人もどかどかとそれに乗ってから、士卒たちは初めて、

「石山か。叡山えいざんか」

と、こんどの戦場の方角を知ったくらいであつた。

兵船はすべて新造の木の香を放はなつていた。ことしの正月以来、
丹羽長秀にわながひでが奉行となつて、孜々ししと造船していたものである。

大湖の秋を渡つて、対岸の坂本についてみると、すでに信長以下さつきの——佐々、柴田、佐久間、明智、丹羽などの諸大將はさきに寄せていた。叡山えいざんのふもとは眼のとどく限り、織田軍の旗だつた。
「いつのまに？」

と、味方ですら眼をみはったほど迅速な行動だったのである。去年の冬、ここの囲みを解いて、岐阜へ引きあげた時から丹羽五郎左衛門に命じて、いつ何時でも湖を押し渡れる大船の準備を命じておいた信長の遠謀を、今になって、人々は思いあわせるのであった。

思い出されることといえは、長嶋の攻撃を中止して帰った折の信長のことも胸に呼び起された。——信長の眼から諸処の一揆や騒乱の火をながめる時、その地方地方の火の手はみな壁に映っている火事であつて、禍根の火もとはまさにここ叡山のうえにあり——と、見さだめたものに違いない。

今日、ふたたび大挙して、この山を取りまいた信長の眉には、

実に、かつてのいかなる時にも見られなかった、決意と勇猛な氣がただよつていた。

そのせいかな、中軍の幕とぼりのうちには、彼のいつにない激越な声が営外へまで聞えていた。さながら敵の中で叱咤がらんするような声で、「なに、攻め上るに、火を放つては、山上の伽藍がらんを焼くおそれがあるから、火計かけいは用いたくないと申すのかッ。……ば、ばかなことを。戦いくさとはどんなものか、なんのためにするか。そちたち、各一方の將たりながら、まだそれすら弁わきまえずに、今日まで戦つて来たかッ」

と、洩れ聞えてくる。

内うかがを窺うと。

その信長の床しょうぎ几めぐを繞めぐつて、佐久間右衛門、武井夕菴せきあん、明智十兵衛などの驍ぎよう将しょうが、頭ずを垂たれて居ゐならんでいた。——ちよ
うど、親たちが息子に意見されてでもいるように。

いかに主君とはいえ余りな極言である。——佐久間信盛も武井
夕菴も、また十兵衛光秀も、そう思つて恨めしげに面おもてをあげた。

「……………」

そして信長のひとみを、敢えて正視した。

なんのための戦いか。それを思えばこそ、憂えればこそ、面おもてを
冒おかして、自分たちは、諫いさめに出たものである。

「情けないことを御意あそばします。われわれとても、それくら
いなことは、弁わきまえぬではございませぬ。……が、数百年このかた、

国家鎮護の靈域れいいきとあがめられている叡山を焼き払えなどという

乱暴な御命令には、臣として——いや臣なればこそです——なおもつて、仰せに従うわけにはまいりません」

のぶもり 信盛はもう決死の氣を眉にも見せていた。すぐにも、しょうよ 従

容うと死を受けとる覚悟でなければ、今の信長の顔を見て、これだけのことはいえないはずであつた。

常日頃でも、この君には、なかなか直言のし難いところがあるのに、きょうのその人は、さながら斬魔ざんまの劍か、狂う烈火か——と、疑われるような姿に仰がれる。

果たして。

「だまれッ、だまれッ」

信長は、彼のことばにつづいて、夕菴せきあんや光秀が、つづいて自分へ口を開こうとしたので、頭からそれを抑えつけて云った。

「そちたちは、常に諸国の僧徒が、教化きょうげの道を誤つて、衆民を煽動せんどうし、財をあつめては武器を蓄え、門を出ては流言るげんを放ち、いたずらに政道を紛糾ふんきゆうさせ、宗門末派を利用しては私権をむすぶなど——手におえぬ醜状しゆうじようや、また蜂起ほうきする一揆いっきをながめて、日頃、何と憤慨していたか」

「それは、眼にあまるものでございます。われらとても、その悪弊こへいをお懲らしあるに、なんの異存を抱くものでもございませぬ。けれど、諸人の信仰をあつめ、特殊な権能をゆるされておる教団の改革は、そう一朝にはまいりかねましょう」

「そんなことは誰もいう常識というものだ。八百年来、その常識がさまたげて来たればこそ、夙つとに、山門の腐敗墮落は嘆かれながら——何人もそれを革あらためることができずに今日へ来てしまったのだ。——畏れ多くも、白河法皇の御ことばにさえ——朕ちんの心のままにならぬものは、双六すごくの賽さいと賀茂川の水——とある。山法師どもが、日吉の御輿みこしを奉じて来る時は、朝廷の御威厳すら、光もなかったと史書にも見える。源平の騒乱に、またその後の乱世、この山が、どこに国家の鎮護たるつとめをして来たか。衆民の心に安心と力を与えて来たか」

信長は、突然、右の手を、いっばいに横へ振った。

「——今の世の通りだ。数百年来どんな国家の大患たいかんという時で

も、彼らは、自分たちの特権を汲きゆう々きゆうと守ることしか知らぬ。

愚民から献じさせた財をもつて、城廓のような石垣や山門を築き、内に銃槍を蓄えて——しかも、日ごろの行状に至つては、荒淫かういんせしよく

腥食、心ある人間には、できないような生活も平然とやつておる。法燈修学の頽たいはい廢など、いうもおろか、破戒乱行の末世と申

すも過言でない。——左様なものを焼き払うのになんの惜しみがあろうぞ。色をなして諫いさめだてするそちたちの心がむしろ信長には解げせぬ。止めるな、信長は断じてやる」

「仰せは、いちいち御尤もですが、われわれ三名も、断じて、お止めいたします。死すとも、この座は起ちませぬ」

信盛、夕菴せきあん、光秀の三人は、同時にまた両手について、あた

かも諫言かんげんの砦とりでのように主君の前をうごかなかつた。

叡山は天台てんだい、石山は門徒もんと、宗派はちがうが、仏徒であることに変りはない。

その仏徒の団結は、教義のうえでは、他宗とよび合っているが、信長に対抗することだけには、完全に一致し、完全に同じ性格をあらわしている。

浅井、朝倉と通じたり、將軍家を利用したり、各地の殘党に利便を与えたり、越後や甲州へまで密使を送ったり——また信長の領土を中心として、気ままな野火のように、一揆を蜂起させて、信長を奔命ほんめいにつからせてしまおうと謀はかつたり——すべては靈山の大堂に住む僧形そうぎようの策や指命であつた。

この特殊な世界——不可抗力とされている、法城の清掃を措^おいて——織田軍の行動はなし得ないし、信長の理想の行えないことは、三人の臣も、充分に知っていた。

だが、信長がここへ着陣してからの命令というのは、

（——全山を取り詰め、山王二十一社を初め奉り、山上の中堂も、坊舎堂塔、すべての伽藍^{がらん}も経^{きよう}巻^{かん}も霊仏も、ことごとく焼き払え）

と、いう余りにも過激なもので、しかもその焼討ちにかかったら、

（有^{うちむち}智無智の僧たるを問わず、貴僧と堂衆のけじめなく、僧形たれば一人ものがすな。児童、美女とて仮^{かしやく}借するな。俗体といえ、

この山にかくれ、火を見ておどり出る者は今日までの害物と見てさしつかえない。みなごろしとして址あとを人氣ひとけもなき焼け山としてしまえ

と、いうのである。

羅刹らせつといえどそんなことのできるものではない。命に接した諸

将は実に戦慄したのだった。

（気でも狂わせられたか——）

と、武井夕菴せきあんがつぶやいたのを聞いて、佐久間信盛も、明智

光秀も——そのほかの将にもなお多くの反対者はいたが——ともあれ三名だけが君前に出て、御意見をしよう。——われわれが御意にさからって割腹したら、次々に罷まかり出て君公の前に死骸をつ

みあげても、無謀極まる焼討ちなどをおさせしてはならないぞ——と、そう誓つて、直言に出た三人であつた。

攻めるもよい。

えいざん
叡山を占領するも当然である。

が、焼討ちだの、そんな殺戮さつりくをする必要がどこにあるう。

そんな暴挙を敢えてしたら、せつかくの人心は、信長を離れてしまおう。

天下にみちている反信長の陣営では、よろこんで、それをあらゆる機会に悪用しせんぷ宣布するにちがいない。

古来、何百年、何人なんびとも恐れてうけなかつた悪名をこうむるのみである。

（——君をあやまる左様な戦いくさにわたくしどもは戦えません）

それが諸將を代表しての三名のことばであつた。

もちろんそれを告げるには、臣下として、声涙ともに下るばかりな真心を披瀝ひれきしてであつたが——信長の肚はぐわんと決まつていて、さつきから三名の縷々るる数百言にも、

（もいちど考えてみよう）

と、いう容子ようすも見えなかつた。

いや、むしろ彼の強固な意志を一そう打ちかためてしまったよ
うな傾きさえあつた。

「……………」

「……退れ。もういわん。もう聞く要もない。そち達が、命をう

けぬとあれば、他へ命じる。他の将士も従わねば、信長一人をもつてもやる。やらねばならないのだ」

「この山一つ、攻めとるのに、何で仰せのようぼうぎやく暴虐をする要がありましようか。むしろ血も見ずに陥おとすのが、まことの大將、まことの軍いくさとぞんじますか」

「利巧そうな常識のみをならべるな。八百年来の大藪おおやぶだ。根こそぎ焼き払わねば、新しい若草の芽は萌もえ出でぬ。……この山一つとそち達というが、信長は、叡山ひとつの処置に逆上しておるのではない。この全山を焼き払うことは、諸山の仏閣を救うことであり、この一山の僧俗をみなごろしとするも、諸国の不心得者が眼をさませば、未然に、それだけの助けはするわけだ。——眼

前の阿鼻叫喚きようかんなど、信長の眼にも耳にも、何ものでもない。

この信長ならで、誰がこれをなしきろう。天は今日信長をこの土に生ませて、やれとお命じになつておるのだ」

信長の英才や経略、すべて彼の偉大さは、誰よりも知っている
つもりの三名にも、いま彼自身、

（——この信長ならで、誰が、これをやりきろうぞ）

と、いったのには、これはもうただ事でない、天魔にでも魅入られたかと、悲しまずにいられなかった。

信盛につづいて、武井たけいせきあん夕菴も、主君の床しょうぎ几の間近へ身をかがめて、

「いや、なんと仰せありましようとも、われわれどもは、臣とし

て、御諫止ごかんしいたすしかございません。——勿体なくも、桓武天皇
 このかた、伝教でんぎょう以来の靈跡れいせきを、灰燼かいじんにしてしまえの、ま
 た……」

「うるさいッ。——黙らぬか。——信長は、この心に、桓武天皇
 の勅を奉じて焼き払うのだ。——胸に、伝教大師の大慈大悲をも
 つて殺戮さつりくの命を汝らに下すのだ。わからぬか」

「わかりません」

「わからねば去りおろうッ。邪さまたげするな」

「お手討ちあるまでは、御諫言を申しつづけけまする」

「亡者めッ。立て」

「何で立ちましようや。生きてわが殿の狂氣沙汰を見、君家の滅

亡に会うよりは、死をもつてお邪さまげ仕かまります。——古来、入に道ゆうど

うきよもり

清盛をはじめ、幾多の例をみても、仏ぶつ舎しゃ靈れい閣かくを業火ごうかとして、

さつりく

僧徒を殺戮した者に、よい終りをとげた者はありません」

「清盛のは私の怒気だ。彼一門の擁護にすぎぬ。——信長はちが

はかな痴人ちじん

う。そんな儚い痴人の夢を、この地上に描くため、夥おびただしい血と兵

いせんもてあそ

燹を弄ぶものではない。——信長は信長のために戦いくさはせぬ。わ

しの戦は、わしをして旧弊のあらゆる邪魔ものを破壊させ、また、わしをして生々たる新しい世を打建てよと命じる——神か、民か、

時か——何かは知らぬが、うけたる使命によつて戦うのみだ。そ

ちたちは気が小さい、眼がせまい。そちたちの嘆なげきは、小人のか

なしみだ。そち達の説く利害は、信長一個を出ておらぬ。叡山の

ごときを、灰としようが、無辺の国土と、かぎりない衆民を擁してゆく世々の末までを思えば、何ほどのことがあろう」

「御理想はそうありましようとも、これが民心に映るものは、悪鬼の所業と見えましよう。得て、小愛の仁は、衆民によるこばれますが、余りな苛烈かれつや峻厳しゅんげんは、うけ容れられません。たとえば、わが殿の大愛から出たものでありましようとも」

「右を顧み、左を眊みして、今この時、なにができようぞ。——古来の英雄どももみな、一時の人心を恐れて、禍根かこんを末代にのこして来たが、信長はその根をぬいてみせる。やるからには、徹てつしてやる。さもなくば今日、弓矢をとつて中ちゅう原げんに出る意義はない」

怒濤どとうにも、間断がある。

信長の声もすこし穏やかに返つて来た。三名の臣が、ほとんどそれに抗弁する辞も^{ことば}つきて、首を垂れてしまったからであらうも知れぬ。

——藤吉郎は、折ふし、その日の午^{ひる}ごろ、湖を渡つてここに着いたが、着陣のあいさつのため、中軍に来てみると、この有様なので、さつきから外に^{たたず}佇んでいたが、その陣幕の割れ目から顔を出して、

「よろしゅうござるか。木下藤吉郎ですが……はいってもよろしいでござろうか」

と、中へたずねた。
ふと、ふり向いた。

そこに藤吉郎の顔を見出すと、さながら炎そのものの形ぎようそう相さうだつた信長も、氷の如く張りつめて、死を決していた三名も、

「……お。お」

救われたように、ほつと眉を和なごませた。

「ただ今、船が着きました。——湖上の秋は、また格別、竹生ちくぶし島まなど、はや紅葉もみじしておりました。何やら、戦場へ向うようなここちもせず、船中で下手へたな歌など作ってまいりましたが……いずれ戦いくさの終つたあとで御披露に及びましょう」

そこへはいつて来ると、藤吉郎は、ひとりで好きなことを喋しゃべり出した。彼の顔には、どこをさがしても、ここにいる主従のよけんうな陰かげもないし、また屈託くつたくらしいものさえなかった。

「……どうなされたのです？」

なお、凝然^{ぎようぜん}たるまま、ものもいわない君臣を見くらべながら、

彼のみは独り春風のように、

「——ははあ、ただ今、陣幕の外で聞いていましたが、そのことで御沈黙でござるか。臣下は、君を思うの余り、死を決して、諫^か言^{んげん}し、御主君には、臣下の衷情^{ちゆうじやう}を知るも、斬りすてても、

思うことをなさろうとするほどな暴君でもおわさぬために。……なるほど、困ったものですな。これは、いずれを是^ぜ、いずれを非^ひともいえぬし」

信長は、きつと、向きをかえて、

「藤吉郎」

「はッ」

「よい折に見えた。あらましを聞いていたとあれば、余が胸中も、三名の申すところも、分つておろう」

「分つております」

「そちは、信長の命を、^{めい}うくるかどうか。信長の命を非と思うか」

「思いませぬ。つつしんでおうけいたします。——いや、お待ちください。その御命令の本旨は、元々この藤吉郎が、書をもつて、殿のお手許へ献策いたしたことで、殿の御決断は、それがしのおすすめに依るものでござりましょう」

「な、なにを。……いつそちが左様な献策を」

「いや、そうです。お忘れかも存じませぬが、すでにもうこの春

頃でしたかな。——あいや明智殿、武井、佐久間の御両所にも、先ほどのからの御忠諫^{ごちゆうかん}、うるわしき臣道の真心、藤吉郎も蔭にあつて、涙をもよおしましたが……しかし、各の第一にお案じあるところも要するに、叡山を焼討ちになどいたしたら、世の人心が君公から離反するにちがいない、故に君公のおんためには、死をもつても、お諫め^{いさめ}せねばならぬという御決心でござろうが」

「もとよりのこと。仰せのごとき暴をなせば、上下^{しょうか}の怨嗟^{えんさ}をうけ、諸方の敵方に乗ぜられ、末代、殿の悪名は拭^{ぬぐ}うべくもおざるまい」

「いや、そこが、ちと違ひましょう。……叡山へお手入れのうえは、断じて、徹するまでやるべしとは、この藤吉郎が献策で、実

は殿の御発意ごほついではござらぬ。さすれば、いかなる悪名あくみょうも呪詛じゆそも、藤吉郎が負うべきで——また自身、そう決意いたしておりますので」

「僭越せんえつでおざろう。何で一木下ごときを、世人がとがめよう。

織田軍として行うたことは、すべて殿の御名おんなに帰してくる」

「もちろんです。——が、各もなぜ藤吉郎に御加勢きこくださらぬか。あなた方三将と藤吉郎とが、殿の御命令以上、騎虎きこの勢いで徹底的に——つい、やり過ぎたのだと——世間に触れたらよいわけではござらぬか。忠の大なるものは、諫言かんげんして死処に迫らざるにあり——とかいいますが、藤吉郎にいわせれば、忠諫して死んでもなお、真の忠臣には忠義がし足りないであろうと思われる。

——むしろ生きて、あくみよう悪名、罵詈ばり、迫害、失脚、何でも殿に代つて、身にひきうけんと藤吉郎は所存いたすが……各にはまた、お考えがちがいませんか」

うなずきもせず、否定もせず、信長はだまつて聞いていた。
するとやがて、武井夕菴せきあんがまず云った。

「木下。お身のことばに同意いたす。……わしは同意いたすが？」
彼が顧みると、明智、佐久間のふたりも、異存のない旨を、共にちかった。

——信長の命令を命令以上、勝手に超えて行動したものとして、徹底的に叡山焼討ちの拳に出ようというものである。

それなら信長の決心もつらぬけるし、死をもって忠諫に出た三

名の臣道もとどうという藤吉郎の提案である。

「名策である」

夕菴は、嘆声に似た声で、こう彼の機智を賞めたたえたが、信長はすこしも歡ばない顔していた。むしろ、よけいな斟酌しんしゃくなど要らぬことである——と、いわぬばかりだった。

それに似た色が、ちらと光秀の面おもてにも見えた。

光秀も、心のうちでは、正直に、藤吉郎の説に感じていたが、何か自分たちの真実をもつてした忠諫まで、彼の一言に、その功を奪われてしまったような嫉そねみが、胸のどこかで滲にじみ出していたのだった。

けれど聡明な彼はすぐ、この際のそんな私心をみずから恥じた。

そして、

（死をもつて君を忠諫しに出た身が、かりそめにも、何たる浅ましい考えを）

と、ふかく内省して、みずから誠めていた。

三名の得心はそれでついたが、信長はいつかな藤吉郎のことばなどを、恃^{たの}みともしないふうだし、それによつて初志をうごかす気色^{けしき}もない。

——誰を呼べ。彼を呼べ。

と、続々と口をついで諸部隊の将校を床几^{しょうぎ}の前に呼び、

「今夕、本陣の貝を合図に、いっせいに山へ攻めかかれ」

と、さきに三名に下した嚴命と同じ令をもつて、自身から伝え

た。

諸將のうちに、武井、明智、佐久間の三將と共に、焼討ち反對のものも多くいたらしいが、すでにその三人も、命に服しているので、みな二言もなく領受して去った。

陣地の遠い部隊へは、中軍の使番が、伝令をおびて駒をとばした——伝令はその以後も、次々に前線の山麓へ放たれた。後からのそれは、作戦行動の指令であつた。四明ヶ嶽のうしろに、夕雲の燦爛をとどめて、陽は落ちかけていた。——湖上にも虹のような光芒が大きく走つて、水面は波騒を起こしていた。

「……見よ」

信長は丘に立って、叡山の上を——さらにその上の団々たる雲

を仰いで——あたりの者にいった。

「天意も、信長の意思を、励ましたもうている。——風がつよくなつて来た。焼討ちをかけるには上乘な空あいであるぞ」

そういう間にも、颯々^{さつさつ}と、秋の夕風の冷やかに、そして次第に烈しく、人々の陣羽織をふいて来た。

ほんの五、六名しか、彼のまわりにはいなかったが、その時、夕風を孕^{はら}んでふくらんでいる彼方^{かなた}の陣幕の辺に、ひとりの味方が、誰か探しているように覗^{のぞ}きまわっていた。

武井夕菴^{せきあん}が、大声で、

「何用だツ。殿には、これにお立ち遊ばしておられる」

と、注意すると、その武士は駈け寄つて、遠くへひざまずき、

「いや、殿へのお伝えではございませぬ。木下殿がおられましようか」

と、いった。

藤吉郎が、人影の中から進んで、何用かとたずねると、取次の武士は、

「ただ今、御家中の渡辺天蔵と仰せられる僧そうぎよう形の者が、甲州

の旅より立ち帰つて来たばかりとかで、すぐお眼にかかりたいと、丘の下に待つております。——何か、火急を要する大事とかで、しきりと急いでおりますが、まだ御帰陣には間がございまするか」と、彼の都合をたずねた。

やや離れていたが、信長はふと聞きとがめて、彼を振り向いた。

「藤吉郎。甲州から立ち歸つて来た者とは、そちの家中の者か」

「殿にも御存じかとぞんじますが、蜂須賀彦右衛門の甥おい、渡辺天藏のことでございます」

「……むむ、あの天藏か。さてはなにか耳新しいことが聞けよう。ここへ呼べ、信長も共に聞こう」

丘の下へ、一武者が取次に駈けてゆくと、やがてひとりの旅僧ともなが伴われて来た。それが天藏であつた。

天藏は、そこへ来て、主人の藤吉郎と信長へ、甲州の見聞をつぶさに告げた。そのなかでも重要な事柄は、彼が恵林寺えりんじにしのんで直接、耳ぶくろに入れて来た甲軍の出兵に関する機密だった。

「……ふーム」

信長はうめいた。こうしていても背後の不安はもちろんある。去年の叡山攻めの時からくらべて、その危険と不安は、すこしも良好になつてはいない。むしろ、武田家との関係も、長嶋方面の状態も、悪くなっている。

ただ、去年の陣には、叡山のうえに、浅井、朝倉の大軍がのぼつて協力していたが、こんどはその^{いとま}違を敵に与えなかつたので、当面の勢力はさして^{ぼうだい}厖大ではない。ただ背後の危険が常にあるのみである。

「叡山へも、はやこのことは、武田家から早打ちされておるであらう。……坊主どもは、またしても、信長がいそいで軍を返すものと樂觀しておるにちがいない」

彼は、天蔵の労をねぎらつて、丘の下へ退^{さが}らせた。

「これも天の御加勢だの」

藤吉郎や夕菴^{せきあん}をかえりみて、信長は会^{かい}心^{しん}の笑みをうかべた。

「甲山をこえて、尾濃へ迫る武田勢が早いか、叡^{せつ}津を席卷して還る織田勢が早いか、われらに、競^{きそ}いと励みを与え、なお必死の信念を加えてくれるようなもの。……各もはや部署につけ。夕星^{ゆうずつ}が見えはじめたぞ」

信長は陣幕のうちにかくれた。——丘のうえ、丘の下。また叡山の裾をめぐる諸処の陣所に、兵糧を炊^{かし}ぐ煙があがっていた。

夜に入ると、風はなお烈しくなった。常に聞く三井寺の鐘も鳴らなかつた。——が、やがていんいんとして中軍の丘に貝が鳴る。

諸処の陣所からは鬨とぎの声があがった。

その晩から九月の十三日の暁にかけての大修羅だいしゆらであつた。

中腹、山上にかけて、十数カ所の嶮けんに防寨ぼうさいをかまえていた山徒の守りを突破して、全山を翔かけまわつた織田軍の兵は、火を放つて、烈風に喊かんせい声を嗷からした。

黒煙は谷をうずめ、火焰は満山に狂い、ふもとから仰ぐと、大きな火の柱が、叡山の各所からあがつていた。

湖まで赤かつた。

その巨大な火の柱の位置から察すると、根本中堂も焼けている、山王七社も焼けている。また、山上の大講堂から、鐘しょうろう楼、法蔵、諸院の坊舎、宝塔、高塔、峰々谷々の末院坊舎にいたるまで、

残された伽藍がらんというものは一つもなかった。

（——心に桓武天皇の勅を奉じ、胸に開山伝教大師のゆるしをうけて我は焼くのだ！）

そら恐ろしいばかりな炎を仰ぐたびに、諸将は、信長のいったことばを、胸によび起して、自分を励ました。

将の信念は、兵にのりうつる。炎をこぐり、黒煙のなかを駆け、寄手の兵は、信長の信念をそのまま遂行した。

八千の僧はみなごろしにされた。阿鼻あびき叫喚ようかんは笈こだました。谷間へ這い下り、洞あなにかくれ、木へ逃げ登りなどした山徒も、稲の害虫をころすように狩りつくされた。

自分の大英断と、部下の大猛烈と、ふたつの合致からここに現

出された未曾有みぞうな光景を、その夜、夜半頃には、信長も自身、山上へのぼって来て、まざまざと眼に見ていた。

叡山側は、誤算していた。

かれらはその夕方まで、信長の大军をふもとに見ても、

「物々しき虚勢ではある」

と、多寡たかをくくっていた。

そしてまた、

「いまに慌あわてふためいて、総勢、退軍しはじめるから、そこを追い討ちすればよい」

と、晏如あんじょとしていた。

そういう心理にはどうしてなったかといえ、山から遠くない

京都から、かれらを安心させるような情報が頻々^{ひんぴん}と、山徒の本陣へ来ていたからであつた。

京都といえ、いうまでもなく、そこにいる將軍義昭^{よしあき}の府のことである。叡山は諸国の僧侶や信徒にとつて、もつとも顕著な反信長の本山であるが、その叡山に、裏から兵糧を送り、武器を与え、間断なく、煽動と督戦^{とくせん}に努めているものは、義昭そのものであつた。

その將軍家の府には、もう逸^いはやく、甲州から早打ちが来ていて、

（——信玄うごく！）

という大きな期待を抱き、その意向が、叡山にも伝わっている

ので、山徒も当然、

「今に、甲州の軍勢が、信長の背後を衝く。——さすれば信長は、またぞろ、長嶋の二の舞だろう」

と、觀察をくだして、ひたすら一面の雲ゆきばかり空^{そらだの}恃みにしていたわけだった。

それと、もう一つは。

かれらが八百年来安住して来た特権の下に、いまもお、時代^{へんせん}の変遷^{へんせん}を見くびっていた錯誤^{さくご}も大きい。かれら自身が、自身で法の霊場を世間以上に俗化したり、国家からうけた特別な待遇を腐敗させたり、また世人の魂の燈^ひを踏み消してしまいながら——なお金色の大日如来^{だいにちによらい}の像^{かたち}だけにすがって、この特権と信仰の

墨^{とりで}に對しては、どんな猛勇な兵も、そうやすやす、駈けあがつて来ることはできまい——宝塔伽藍^{がらん}を蹂躪^{じゅうりん}するまでのことはなし得まい——と、そう充分に恃^{たの}んでいたふうもあつた。

ところが。

信長の果斷は、まったくかれらの想像外に出て來た。全山の焼討ちと、僧俗すべての大殺戮^{だいさつりく}が無言の答えとして敢行された。この世ながらの地獄が半夜のうちに天^{てん} 飈^{びょう}のごとく全山をつつんだ。

それに対して。

遅いにも程があるが、猛火のさかんな真夜半頃^{まよなか}となつて、恐怖と狼狽の底に捲^まき墮^{おと}された叡山の代表者は、信長の陣へ使いをた

てて、

「いかなる莫大な償金なりともさし出します。また、いかなる条件にもきつと服しますれば」

と、和議をいつて来たが、信長は一笑を見せただけで、

「答えには及ばん。その僧どもも斬りすてろ」

と、鷹へ投餌なげえをやるように、左右の者へ云い放った。

僧徒の使いは、二度も来た。二度目の使いは、信長のすがたを
拝んで、

「……お慈悲に」

と、まで叫びながら合掌したが、信長は、

「ならん！」

首を振った。

そして即座にまた、使いの僧を斬らせてしまった。

夜が明けた。

叡山は、余煙と、灰と、黒い枯木と、峰谷々まで、さまざまな断末のすがたをした死骸で埋^{うず}まっていた。

「——このなかには、一世の碩^{せきがく}学も、大智識も、未来ある若僧もいたろうに」

ゆうべ殺戮の先鋒となつた明智光秀も、今朝は余煙のなかに立つて、面^{おもて}をおおい、胸のいたみを覚えた。

その光秀は、その日、

「志賀一郡はそちにあずける。以後、ふもとの坂本城に住め」

と、いう信長の恩命に接した。

信長は、一日措くとすぐ山を降つて、京都へはいった。

その日もまだ叡山は黒煙をあげていた。おとといからの余焰である。

かれの大虐殺の手をのがれて、京都へかくれこんだ僧俗もかなりあるらしい。その者たちの口から信長の名は、

「生ける魔王」

だとか、

「地獄の使者」

だとか、また、

「暴^{ぼうれい}戾な破壊者」

だのと、極端な恐怖の象徴に擬せられ伝わっていた。

眼に、比叡ひえいや四明しめいの大紅蓮だいぐれんを見、耳に当夜の惨状を聞かされていた京洛きょうらくの人々は、信長が兵をひいて下山して来ると聞くと、

「こんどは京都か」

と、震えあがつて、

「室町將軍の館やかたは焼討ちをまぬがれまいぞ」

などと、昼ながら戸を閉めたり、荷をからげて逃げ支度する者も多かつた。

しかし信長の兵は、加茂川べりに屯たむろして、市街に入るを禁じられた。

禁じた者は、それを統率しているおとといの魔王である。

かれは少数な部将だけをつれて一寺院にはいった。そこでかっち甲

ゆう胃をぬぎ、湯漬を喰べ終ると、これはまた優雅みやびな衣冠にすつきり着かえて出て来た。

駒も派手な鞍をおいた月毛に乗り換え、わずかな部将だけは甲胃のままであつたが、それらの十四、五名を従えて、ゆるやかに大路を通つて行つた。

魔王のすがたは余りにも平和であつた。かれの面や眼ざしはその日、わけても市民たちをニコやかに見まわしているふうだった。「何事もないらしいが？」

市民たちは辻々にあふれ出て、信長を拝した。ほつとした安心

がもりあがる歓呼となつて、わあツというどよめきの波になつた。するとその歓呼の辻から、ふいに一発の鉄砲が鳴りとどろいた。弾丸^{たま}は信長の身をかすめたが、信長はけろりとしたのみで、音のした方を振り向いただけだつた。

当然――

まわりにいた部将たちは、馬をとび降りて、曲^{くせもの}者を捕えにどつと駈けたが、かれらよりは、市民たちのほうが勃^{ぼつぜん}然と一致して、

「ばか者を捕えろ」

と、怒つた。

市民は自分たちの味方だと考えていた曲者は、案に相違したの

で逃げ場をうしない、忽ち抑えられてしまった。山門第一の勇僧といわれていた法師で、捕まってもまだ、

「仏敵め、魔王め」

と、信長を罵^{ののし}っていた。

信長は、眼のなかにチリがはいったような顔もしていない。予定どおりかれは道をすすんで、やがて皇居に近づく时下馬した。

神泉で手をきよめ、しずかに御所の門前へあゆみ寄って、そこに坐った。

「一昨夜来の猛火、さだめし内裏^{だいり}におかれても、お愕^{おどろ}きのことと拝しまする。御宸襟^{ごしんきん}をなやまし奉りました罪、おゆるしおかれ

ますように」

胸のうちでそう詫び入っているかのように、かれは長く拝跪はいきしていたが、やがて御所の新しい門や牆かきをながめあげて、

「皇居の御普請ごふしんも、あらまし竣しゅん工こうしたな」

と、満足そうに、左右の諸將を顧みた。

起つて、御門脇に整列し、古式のとおり奏文そうもんの伝奏を仰いで、しずかにまた、引つ返して来た。

家業を離るる者大罪たり

蜚語流言ひごりゆうげんを放つもの即死罪そくしぎい

総じてきのうの如くあるべし

信長代官

法三章、市中各所にそれを立てさせると、信長は岐阜へひきあげた。——ひと頃は生きたそらもなく、濠ほりを深め、鉄砲を持ちこみ、焼討ちを覚悟していた將軍義昭よしあきには、とうとう会わずに帰ってしまった。ほつとはしたが、室町御所では、無気味にかれを見送っていた。

時々刻々じじこつこく

兵燹へいせんのけむりは叡山えいざんだけに濃かつたのではない。

三河の西部地方から、天龍川に沿う諸部落、また美濃の一端までも、野火の飛火のように、けむりが挙あがっていた。

甲州の連峰をこえて、武田信玄の精銳は、南へなだれ降りて来たのである。

「すわ！ 足^{あしなが}長の信玄めが」

浜松を本拠とする徳川家康の部下たちは、まなじりをあげて、それに立ちむかった。

かれらの意気は、信玄の上洛をくいとめるにある。

「西へ通すな」

と、するのである。

それは同盟国の織田家のためにはない。甲州と三遠とは、宿命的に隣接している。武田勢に突きやぶられたら、徳川家の存立はあり得ないからである。

その家康は、ことし三十の男ざかりである。その家中の三河武士は、貧乏と体面と、あらゆる困苦欠乏をここ二十年来もしのんで来た者どもである。ようやく成人した主君をいただいて、信長と隣交をむすぶ一方、今川家の領をすこしずつ蚕さんしよく食して、

「これからだ！」

と、老臣も若い臣も、その家族たちも、百姓町人も、草も木も、立ちあがって奮ふるい立っているというような、興隆の希望と進出の勇氣にみちみちている領土なのである。

「信玄何者ぞ」

であつた。——その装備、物資においては、もとより彼には及ばない若い国であつたが、意氣においては、すこしも劣る気はも

っていない。

その三河武士が、信玄をさして「足^{あし}長、足長」とあだ名しているのは、どういうわけかというと、かつて信長から主人に來た書狀のなかに、そういう警句^{けいく}が書いてあつたのを、家康が見て、「うまいことをいわれるものだ」

と、家中へはなしたのが伝わつたのであつた。

きのう北国の上杉勢をむかえて甲信の境に戦っているかと思えば、きようは上州や相州に出て北条家をおびやかし、また忽ち転じては、三州遠州美濃までも兵火を放つて駿^{しん}々^{しん}とやってくる。

しかもその陣にはかならず信玄自身が指揮にあたっていた。だから世間はかれには七人の影武者がいるなどといっているが、事実

は、どこの戦いにも自分で臨まなければ気のすまない信玄である
 らしかつた。とにかくそういうふうに山国にいながら足が長い――
 ―そこを信長が諧かいぎやく諛うしたのである。

けれど、信玄が足長なら、信長は足早といえよう。

信長は、叡山へかかる前に、使いを送つて家康に、

「いま甲州の鋭鋒へは余りむきになつて相手になられぬがよい。

事迫る場合は、浜松から岡崎へ退ひいても、堅けん忍んにん持じ久きゆうされてお

られるように望む。――時は他日に待つとも遅くはなからうから」

と、わざわざ云い遣やつたが、家康は、その使者のまえで、近臣
 を顧みながら、

「この城を退ひくほどなら、弓矢をふみ折つて、武門を捨てたほう

がましである」

と、いった。

信長にとれば、家康は国防の一線だったが、家康にとっては、絶対的な三河であり遠州であつた。ここの土を措おいて他国に骨を埋うずめる地はないのである。

信長は、使いの返事をうけて、

「困はやものつた逸り者」

と、つぶやいたが、そのためか、叡山の事が終ると、例の足早で、疾風のごとく、岐阜ぎふへ歸っていた。

その早さには、信玄もまた舌打ちをもらしたろう。さすがに彼も機を見ることは敏であるから、

「また時もある」

と、甲山の彼方^{かなた}へ旗をひそめてしまった。

こういう険悪な空あいのうちに年は暮れて、元亀^{げんき}三年の春は迎えられた。

その春。

熱田^{あつた}神宮では、本殿そのほか、大修理の工事にかかっていた。応仁の乱このかた、めずらしい鑿^{のみ}の音だった。

地方民も豪族も、長いあいだの不安と暗黒に漂って来て、各が自分たちの営み^{いとな}にだけ追われていたかたちだった。

荒れきった神宮の森に、この春、鑿の音を聞くと、かれらは、耳をそばだてて、

「どなた様の御寄進であろう。さても御奇特な」

と、にわかになにその勿体^{もったい}なさきに眼をみはつた。

「——年の暮、熱田の祠官^{しかん}岡部又右衛門どのを岐阜へお召しになつて、信長様が、私財をもつて、お命じなされたものだそうな」

こう実相が伝わると、

「あの、信長様がか？」

と、諸人はまた意外な思いに打たれた。

叡山の堂塔伽藍^{どうとうがらん}から坊舎^{ぼうしやろうもん}楼門のすべてと山王七社までを

一夜に焼き払つたという信長が——と、信長のところを、どう解
していいかわからないような顔をしたものである。

だが近頃、街道を往来する旅人のうわさなどから、上方や諸国

の評を聞くと、

「――叡山を焼いたのは、叡山自身じやとみないうている。神仏は焼こうとて焼けるものではないぐらいなことは、信長様も知らぬはずはないさ」

と、いう者が多かつた。

いや、むしろ彼は人いちばいな敬神家でさえある。熱田の修築が実証している。また、仏教に対しても、憎悪をもっているわけではない。若年の頃、自分を忠諫して死んだ一老臣のために、政せいし秀寺ゆうじを建こん立りして供養くようしているではないか。

また毎年。

一月の元旦といえ、衣冠いかんをただして、遠く皇居を拝し、次に、

祖先の廟びようにぬかずいて、父母のみたまに一年の報告をすることを

例としていえるというはなしもある。

おけはざま
桶狭間へ出陣の明け方、

——人間五十年、化けてん転のうちをくらぶれば。

と、舞い唄ったあの唄のころというものは、明らかに、仏教から来ている生命観である。それをあの場合あの人がうたっているからこそ、武士道になっているが、その源泉には、濁にごらない仏教の精神もせせらいで流れているといつてよからう。

こんなふうに、つぶさに彼の心にはいつて、彼を批評する者もあつた。

いずれにしろ、近頃、世相のうえに、非常に濃くあらわれて来

た現象は、

信長びいきと。

信長ぎらいと。

こう二者の分れ方であつた。

叡山焼討ちという曠^{こうせい}世の大猛断をやったことが、その是々非々、ふたつに分れて、暴風のような批判を天下にまき起した結果であることはいうまでもない。

「きらい」のほうでは依然、かれを悪魔視して、いよいよ反感をつのらせたが、「ひいき」側の一部では、はやくも、

「天下はやがてあのお方に」

と、予想するものもあらわれて来たりした。

いやたとえ信長を敵とするものでも、具眼の大將は、彼のやり口を見て、いよいよ恐るべきものと観て来たにちがいない。

信玄などは明らかに、

「一日おくれれば一年の難事となる」

と、上洛じょうらくという多年の宿望に対して、いまは一日も急ぐ気

もちになっていた。

ために、あらゆる外交策が内々、急がれていた。

北条家との修交は、それによって功を奏したが、上杉家とは、依然、交渉がはかばかしくない。

ぜひなく彼は、その年の十月を待つて、甲府を発した。——甲越のさかいは早、雪にさまたげられて来るから、謙信へ対する憂

いは、まず大丈夫と見てである。

総軍約三万は——かれの領する甲斐、信濃、駿河、遠州の北部、三河東部、上野こうずけの西部、飛驒ひだの一部、越中の南にまでわたる、およそ百三十万石の地から徴せられた将兵であつた。

「守るに如くはない」

「織田どこの援軍がいたるまでは」

一面、浜松城のうちには、こういう守勢論もあつた。

徳川家の兵力は、その全土のものをあげても、一万四千に足りないのである。

武田方の半分だ。むりもなかったが、若い家康は、

「なんの。——織田どこの援軍などは待つほどのこともない」

と、出軍を令した。

家臣はみな、この際、当然な義務として——過ぐる姉川の役に徳川家が助力した義理からでも——織田から大兵の来援があるものと期待していた。

その空気に対して、家康は努めて、あてにしない顔をしていた。今こそ、危急存亡の時であることを覚悟させると共に、真に恃むものは自力以外にないことを悟らせようとした。

「——退くも滅亡、進むも滅亡ならば、突きすすんで、乾坤一擲てきのなかから、もののふの名と、死に華はなを、両手につかみ取って死のうではないか」

と、かれは家臣たちへ静かにいうのである。

この君は幼少から実にみじめな苦勞にもまれながら、こせつかず才走らず、どことなくぬうと成人されている。

いま、こんな際になつて、浜松の城中はかなえの沸く^わような殺氣だが、そこに坐つて、しかも誰よりも烈しい主戦論を口にしながら、その語氣はほとんど平常と變りがなかつた。

だから家臣のうちには、

「あんなお氣色^{けしき}で」

と、そのことばと内容の差をあやぶむ者すらあつた。

けれど家康は、櫛^{くし}の齒をひくような物見の者の報告を、いちいちうけとりながら、着々と出陣の用意をすすめていた。

その間にも。

敗報はもう頻りであつた。

信玄の大軍は、すでに遠州を冒おかして来たという。只来ただき、飯田の

二城は、敵へ降伏を余儀なくされたとある。

袋井、掛川、木原地方の村落は、一として甲州勢に踏みし
かない所はない。——わけても、味方から偵察に行つた本多、大久

保、内藤の三千ばかりの先鋒が、天龍川附近の一言坂ひとことざかで武田勢

に発見され、全滅に近い打撃を与えられて、池田村から浜松へ潰か
走いそうして来たという報告のはいつた時には——城中みな色をうし

なつて動揺した。

だが家康は、黙々と軍事を見ている。交通路の確保にはもつと
も注意し、十月の末近くまでに、その方面の守備をととのえ、ま

た天龍川の二ふたまたじよう侯城の抑えに、援軍と軍器食糧などを増派しておいて、

「いざ、立たん」

と、浜松城を出た。

そして、天龍川の岸、神増村かんましむらまで軍をすすめたが、甲州二万七千余の大軍が、各部に整肅な陣をはり、その陣地陣地が、信玄の中軍から車軸と車の齒のように、完全に統一されているのをながめて、

「ああ、さすがは」

と、家康も、丘に立って、しばらくきようしゆ拱手したまま、嘆称していたということである。

信玄の中軍には、はるかから眺めても、四語の旗が立っていた。近づけば、その文字も鮮やかに読めよう。敵も味方も知る有名な孫子そんしの語がかいてあつた。

其疾如風
そのはやきことかぜのごとし

其徐如林
そのしずかなることはやしのごとし

侵掠如火
おかしさるやひのごとし

不動如山
うごかざることやまのごとし

うごかざること山のごとし——その文字のとおり、幾日かを、信玄もうごかず、家康もうごかず、天龍川を挟んで対陣したまま冬も十一月にかかつていた。

みかたはら
三方ヶ原

家康に過ぎたるものが

ふたつあり

からかしらほんだ
唐の頭に本多平八。

占領した一言坂ひとことざかのうえに、誰かがこんな落首を立てた。

勿論、武田方の中の者である。

陣地を捨てて敗走はしたが、負けぶりがいい——とは、後で勝ち誇った武田軍の衆評だった。

大久保忠世ただよ、内藤信成のぶなりなどの武者ぶりもよかったが、とりわ

け本多平八郎の退きひは見事——徳川家にもさむらいはいるぞと、

歌ったのであろう。

「敵として、不足のない敵。このたびの合戦こそは、全甲州の實力と、全徳川の実力とが、真正面にぶつかって、のるかそるかのかんこん
乾坤一擲となるだろう」

ひとりでに身ぶるいの出るような張合いが、甲軍全体の士氣をいやが上にも高くしていた。

こういう余裕をもつて。

信玄はその本陣を江台島にうつし、一方、伊奈四郎勝頼、穴
なやまばいせつ
山梅雪などの一手を、ふたまたじよう
二俣城へ向けて、

「手間どるな」

と、厳命した。

それに対して、家康は、

「味方には、大事な防禦ぼうぎよの線。敵が奪とれば、攻め入るに有利な

一抛地きよち。——守將、中根正照を苦戦におちいらすな」

と、すぐ援軍を送り、自身も後詰に向つて、督戦とくせんしていたが、

変幻極まりない武田軍の陣容は、たちまち変貌へんぼうして、左右に迫

り、へたをすれば、うしろ巻きしている家康自身の陣地が、浜松

と遮断しやだんされそうな形になった。

しかも、その間に。

城は水の手の動脈を断たたれてしまった。

二俣城のもつとも痛い弱点を、敵の詭計きけいに突かれたのだ。この

城の一方が天龍川に臨んでいるので、飲料その他、城兵の生命と

する水は、城壁の一端から懸出^{かけだ}してある井楼^{せいろう}に車をかけ、井戸水を汲むように川から上げていたものである。

それへ向つて、武田方は、上流から筏^{いかだ}をぶつけ、櫓^{やぐら}の脚を破壊する策に出た。

奇策は成功した。城兵はその日から水に困った。視野のかぎり流れる大河を前に、炊^{かし}ぎの水にも困りだした。

十二月十九日の夜。

守将以下の城兵のすべては、力尽きて、闇のなかを退却して行つた。

開城を知ると、信玄は、

「^{よだのぶもり}依田信守、そこにおれ。そして佐野、豊田、^{いわた}磐田の諸郡と、よ

く聯絡をたもち、敵の掛川、浜松方面の退路に備えよ」

と、いいつけた。

かれの布陣とその前進とは、名人の碁ごの一石一石を見るように慎重であつた。

こうして着々と、まつ黒に、地を這う雲かのような甲軍二万七千余の兵は、押太鼓おしだいこを天地にとどろかせながら、祝田いわいだ、刑部おさかべ、引佐川いなさがわと迫つて来た。

——そこから。

信玄の中軍は、井伊谷いいだにをこえ、三河の東部へ出ようとしていた。二十一日の昼である。

鼻も耳も削そがれるばかり寒い。弱い冬陽をかすめて、三方ヶ原みかたはら

の方面に、赤い土ほこりが舞っている。久しく雨がなかったので、空気は乾ききつている。

「井伊谷へ。井伊谷へ」

と、中軍の使番が、各部隊に信玄の令をつたえると、諸将のうちから異論がおこった。

「井伊谷へとあらば、浜松城をお取り囲みの御決意と思われるが、それで違算はあるまいか？」

人々が、そう危ぶんだのは、織田の援軍が、もう続々と、浜松へ着いたし、なお後続中のその兵量は、どれほどか分らないものであるという諜報を——その日の朝からチラチラ耳にしていたからだった。

敵の真相というものは、敵に迫れば迫るほど、分らなくなってくる。

情報もまた同じであつた。目前の敵地から、頻々ひんぴんと、敵の動静は報じられてくるが、その偵察がみな血走つた眼まなざしと、余りに鋭い耳を持ちすぎていて、却つて、大勢を見誤りやすい。

行くゆく沿道の村落で聞く風説などにも、ずいぶん戒心かいしんを要するものがある。その中には多分に、敵の流言も混まじっているからだった。——けれど、織田の救援軍が、続々と南下して、浜松に合しているというその日の風説は、どうもほんとうしかった。

「もし信長が、大兵をもつて、浜松の後詰をして参れば、ここは慎重に、御考慮を要するところではございますまいか」

信玄きか麾下の諸將は、ひとしく中軍に伺候して、各から献言した。

「浜松一城へかかつて年を越えることにでもなりますと、お味方は当然冬期の長陣となり、日夜敵の奇襲をうけ、兵糧不足と病人の続出にも、疲労困憊こんぱいしてまいるかと案じられますし……」
「また、一面には、海道その他の退路を遮断しゃだんされるおそれもあり」

「なお、織田の後詰に後詰のかさなる時は、お味方は狭隘きようあいな敵地に立つて、にわか of 転勢もままなりませず」

「かくては、御西上の宿望もさまたげられ、むなしく血路をひらいて引揚げるのがようやくの儀となりましょう。そも、このたび

の御出軍は、浜松一城の御攻略にあらず、初めから御上洛のことこそ大目的にもござりますれば——」

信玄は、中央の床しょうぎ几にあつて、そういう口々の諫言かんげんへ、針のように細い半眼をもつていちいちうなずいていたが、やおら口をひらいて一同へ答えを与えた。

「みな 의견、至極もつともと思う。しかし、織田の援軍とて、たかだか三千か四千の小勢に過ぎまいとは、この信玄の胸づもりである——なぜといえ、もし岐阜ぎふの大半なと浜松へさし向ければ、かねて、信玄より申しやつてある浅井、朝倉が必然、江北からうしろを衝こうし、また洛中の將軍家よりも、各地の門徒、殘党どもへ一斉に激励の教書を発せらるるはず。……まずもつて織

田の懸念^{けねん}は大してない」

と、いちど語を切つてから、また静かに、

「もとより上洛の目標は一途^{いちず}に志すところではあるが、家康にかぎつては、路傍の邪魔石と、ただ避^よけて通るわけには参らぬ。やがて行く手の岐阜へ迫れば、当然、家康めは、手兵をひッさげて、わがうしろを塞^{ふさ}ぎ、織田を救^{たす}けるに相違なかるう。さすれば、織田の充分に加勢のなし得ぬいま、直ちに、浜松城をふみつぶして通るが上策ではあるまいか」

諸将はそれに服すしかなかった。主君の言であるばかりでなく、戦術にかけても大先輩たる人の信念である。

だが、各が隊へ歸つてゆく中で、ひとり山^{やま}県^{がたまさ}昌^{かげ}景は、行

軍のうえに薄ら寒く曇っている冬の陽を仰ぎながら、口のうちでこう嘆じていた。

「……実に天性、戦が^{いくさ}おすきであられる。武将としては、稀な御器量ではあるが……」

一方。

浜松城へ、甲軍の方向急転がつたえられて来たのは、二十一日の夜だった。

信長からの援軍としては。

滝川一益^{かずます}、平手汎秀^{ひらてのりひで}、佐久間信盛などを武将として、三千

ばかりが城下に着いていた。

「思いのほかな少数」

と、失望の声もあつたが、家康はさして歎びも不平の色も見せなかつた。そして次々と情報の来るあいだに、軍議をひらき、城將の多くも、また織田方の部將のすべても、

「ひとまず岡崎へ退いて」

と、自重を望む中で、かれのみは依然、

「敵に城地をふまれながら、一矢もいっし酬むくわずに退ひけようか」

と、主戦論をとつて動かなかつた。

浜松から北へおよそ十町。横二里、縦三里に余る高原に出会う。
みかた三方ヶ原はらであつた。

高原を二つに割つて縦走している断層がある。深さ十八尺もあ

ろう崖をのぞく、せいれつ清冽な水がながれている。そこを犀さいヶ崖たにという。

二十二日の未明、浜松を出た家康の軍は、犀ヶ崖の北に陣をしいて、武田勢がさしかかるのを待っていた。

「いかながなされたのやら。……こんどの御陣に限って」

いくさめつけ軍目附とりいただひろの鳥居忠広は、陣地で出会った石川数正をとらえて、痛嘆していた。

「何をお憂いなされておるか。御合戦のさきにあたって」

「いや、常には、われわれの血氣をお叱りなるとも、先へはや逸るよ
うなことはない殿が、こんどばかりは、初めから誰よりも烈しく
攻勢を主張しておられる。……何となく、すでに御心中、玉砕を

お覚悟されているように思われての」

「む、む。……だが、この期ごになつては、名を惜しむか、恥を負うかだ。殿が名を惜しまれての御決意はさすがではある。わしたちはよい主君を持った。そう思われぬか」

「常々、そうありがたく思えばこそ、おたがい永ながの困苦をも困苦とせず、艱難かんなんを楽しみとして、これまでお家を護り合つて来た。

それを一いち朝ちようにと思つたと残念でならぬ」

「軍目附いくさめつけたるおん身からして、そう負目ひけめにお考えでは困る。た

とえ武田の二万七千に對して、お味方は一万に足らぬ小勢といえ、われら三河武士の骨ぶしが、甲州者にやわ劣ろうか。ひとりひとりが敵の三人に当れば足りる」

「各に憂いはない。だが、それがしの眼で、全陣地を見るところ、殿の御本陣を中心に、鶴翼かくよく（横隊陣）の右翼にすこしも戦気がない。その弱点が気がかりではある」

「右翼は、援軍の織田勢の三千人か」

「左様。……察するに、佐久間、滝川などの部将たちは、信長から援けに赴たすいても、兵を損するな、好んで戦うなど、内々いいふくめられて来たものと思われる」

「それもあてにはすまい。殿御自身からして、曖おくびにもそれにはお触れにならぬところを見ても、悲壮なお覚悟のほどが窺うかがわれる。われらも共々、殿と同じ心であればよい」

ゆうべから垂れこめている低い雲は、朝焼けして赤かった。今

朝、あらためてその天地を見、またわが身というものの、露よりも脆い^{もろ}生命^{いのち}を考えたものは、忠^{ただ}広^{ひろ}や数^{かず}正^{まさ}だけではなかった。

右翼の織田軍をのぞく徳川家の全将士は、もう明らかに主将家康の決心をうつして、そのまま自己の決心としていた。

ゆうべの軍議までには、まだ異論も聞えたが、ここへ来ては、もう夢にも、退^ひくなどという考えはなかった。

いつでも、跳^とびつけるような姿勢と、光る眼と、重厚にむすんだ唇とが、兜^{かぶと}の眉^まびさしの下から、前方を睨^ねめあっているだけであつた。

陽^ひがのぼる。陽^ひがかげる。

草みな枯れ伏している高原のひろい空を、鳥影が一羽、しずか

に横切つてゆく。

たまたま、その鳥影のようなものが、枯れ草を這つてまた、走り歸つてくる。――物見の兵である。

そういう偵察は、もちろん武田軍のほうにも行われていた。

今朝、野部^{のべ}を立つた信玄の大兵は、天龍川をわたり大菩薩^{だいぼさつ}を経て、なおその行軍態勢をつづけながら、午下^{ひるさ}がりの頃、犀ヶ崖^{さいがたに}の前面へかかつて来た。

「止まれ」

の令が全軍へとどいた。

信玄のそばへ、小山田信茂^{のぶしげ}やその他の将が、もうすぐ前方に

ある敵軍の状況をもたらし集まっていた。

しばらく凝議ぎようぎしていたが、信玄は一部隊を残してそれへの抑

えとし、本軍以下の大部隊は、予定どおり三方ヶ原を横ぎつて進軍をつづけた。

祝部いわいべの部落は近い。

行軍の先鋒は、もうそこにはいったかもしれない。何しろ、蛭えんとつづく二万何千騎の中軍からでは、馬の背にのび上がつても、味方の最前列は見えなかった。

「やりおるぞ」

信玄は馬上から左のほうを振り向いて前後の旗本たちにいった。

「才。なにさま」

人々も眼を凝こらした。

はるかに黄色い土けむりが立ち始めていた。抑えに残してきた一部隊が、敵から小勢と見くびられて、やにわに猛襲をうけているらしい。

「あ……。つつまれたな」

「あの小勢だ。つつまれたら一ひとたまりもあるまい」

「二、三千ほど、駈けつけてやらいでは」

長途の馬は首をさげて、歩足ものたのたと行くほうへ歩いていく——だが諸将はみな、彼方かなたの埃ほこりの下を思いやって、手綱たづなの手もかたく握りしめられ、気が気ではないような眼ざしまなをそろえていた。

「……………」

信玄は、黙々として、誰にも答えを与えない。

みすみすこうしている間にも、彼方の土つむじの下では、もう味方の幾人かが、覚悟のまえとはいえ、将棋倒しに討たれているのである。

なにがし

某の子も、某の親も、某の兄弟たちも、その部隊には混じっているのだ。信玄のまわりにいる旗本や諸大将ばかりではない。長い行軍の列のすべてが——足輕のはしまでがみな横を向いていた。眼を彼方へ凝らしながら行軍していた。

——と、その列に沿って、大物見の小山田信茂が、信玄のそばへ駆けで行った。信茂の声はいつになく弾みあがつていたし、馬上のままなのであたりへもよく聞えた。

「お館やかた、お館おツ。敵の一万を捕捉ほそくして、みなごろしにする機は、いまを措おいてありません。ただ今、味方の抑えに向つて攻めかかる陣容を物見してまいりましたところ、各隊一段備えに、鶴翼かくよくのかたちを展ひろげ、一見、大兵と見えますが、二陣、三陣とも奥行はうすく、家康の中軍とても、たかの知れた小勢で守られているに過ぎません。——のみならず旗幟きし甚だとのわず、わけて援軍の織田勢には、戦意のないこと明らかです。機をはずさずお懸かりあれば、勝算は歴々」

ことばのうちに信玄はうしろを見て、

「物見番。見とどけて来い」

語氣を聞いて信茂はすこし駒をさげ、そのままひかえていた。

物見番の室賀^{むろがのぶとし}信俊と上原能登守^{うえはらのとのかみ}が、ただ二騎で駈けて行つ

た。――敵は味方の何分の一しかない小勢と知れていながら、念に念を入れて、かりそめにもうごかない信玄の落着きかたを、信茂は充分敬服はしていたが、やはり、

「兵機^{へいき}は電^{でん}瞬^{しゆん}の間^{かん}、いまを逸しては」

と、悍馬^{かんば}が前脚で土を搔くような焦躁^{しょうそう}をどうしようもなかつた。

室賀、上原のふたりは、駒を躍らして帰つて来た。そして、

「小山田の物見も、われわれの偵察も、お答えは同様にござりまする。天機は今まさに、めつたにない幸いを、お味方へさずけておるように存ぜられます」

と、復命した。

「ウム、そうか」

太い声が出る。信玄のかぶとの白毛が、しきりと前後に振りうごき、次々と、その太い声から左右の将に命令が発しられた。

——貝が鳴る。

二万数千の先鋒から末端までその貝の音がきこえ渡ると、たちまちそれまでの行軍序列はドドドドと地鳴りしてくずれ立ち——くずれたかと見るまにまた、魚鱗ぎよりんを組んで、いっせいに押太鼓を打ちながら徳川陣の側へ迫って行つた。

これは合戦後の余談に属することではあるが。

その時の迅速じんそくな陣替じんがえばかりでなく、総じて甲州勢の大兵が、

信玄の指揮ひとつで、実にあざやかに動くのを見て、家康はあとで、敵ながら実に見事であつたと嘆賞して、

（自分も兵家に生れた名^{みようもん}聞に、信玄ほどんな年になつたら、い

ちどは信玄のように大兵を自由にうごかしてみたいものだ。――

あの総帥^{そうすい}ぶりを見ては、たとえ今、信玄を毒をもつてなら殺せるといわれても、鳩毒^{ちんどく}では殺したくない）

と、ひとに語つたそうである。

それほどに、信玄の采配^{さいはい}は、敵の大將をさえ感銘させる神変

をもつていた。かれの戦争はかれの芸術であつた。その麾下^{きか}の勇

將猛卒も、それぞれ武器馬具旗さし物などに、死出の派手^{はで}を凝^こら

して、数万の鷹^{えさ}が、餌をめぐけて、いちどに信玄のこぶしから、

それツと放たれたかの如く、声の怒濤を作つて、

——うわあツ……ツ。

と、敵の顔が見えるほど近くまで一気に駆けだした。

ぼうだい

彫大な人数の輪が車形に旋るように、徳川勢も鶴翼の陣

形をそのまま向きをかえて、敵のまえに人間の堤をきずいた。

敵のあげる埃、味方の埃、双方で蹴だてる埃に、一瞬は晦くな

った。夕陽に光る槍ばかりが——晦いなりにキラキラしている。

甲州方も槍隊を前に押しすすめ、徳川勢も槍隊を前面に曝して
対いあつたのである。

「うわあツ」

と、彼方で武者吠えをあげると、うわあツと、こちらも咄をか

えした。

塵煙^{じんえん}がうすれると、敵の顔やすがたはよく見えるが、距離はまだずいぶん遠く距^{へだ}てているのである。そしてその槍の列からは、容易に一步でも踏み出すものはなかった。

この場合は。

実に百鍊^{れん}の武者でも、齒の根がわななき、眼はつりあがり、平常のことばでいえば、総毛^{こわ}だつばかり誰も恐^{こわ}いのであつた。

恐いといっても、日頃のそれとはまるで違う。意識がふるえるのでなく、五体がひとりでに、がたがたと、常時の生態から戦闘生態へ変ろうとするのである。

それは、一瞬の迅^{はや}きで行われるので、肌は鳥肌になり、皮膚の

いろは鶏とりのとさかのように紫ばむ。

髪の毛から爪の先まで——睫毛まつげの一本一本にいたるまで、その生態を怒らせて、敵へかかろうとしないものはない。

一兵の生態を、戦っている一国として見るなら、鋏くわをもつ民も機はたを織る民も、一本の髪の毛なり一指いっしの爪にひとしい役は各持つ。主体が亡べば当然自分もないからである。にもかかわらず国土の興亡をよそに、この生態をとらない惰民だみんがいるとすれば、それは人体にたかつていても睫毛まつげの一本にも値あたしない垢あかのごときものだといえよう。

限りきがない、余事は措おいて、とにかく敵と顔を見合つたせつなは、恐いものだと平常語でいっておく。昼ながら天地は晦冥かいめいと

なり、耳に聞えるのは何か、眼に見えるのは何か、一瞬は分らなくさえなつて、前にも出ず、後にも退かず、ただ槍先ばかりそろえて、わあわあ揉みあっているこの線を——実にこの一步の線を——
——^{ひと}他人より先に出た勇氣の者に、

一番槍

の誉れはあとで称え^{たた}られるのであつた。

後になれば、何でもないこと。

しかしその刹那には千軍万馬の士でも容易に行えないこと。

一番槍は、そこに値うちがある。大きな意義もある。武士最大の機会はいま、何千という両軍の武士のまゑに平等に与えられていた。けれどその一步を——たった一步を、誰も容易に踏み出し

得なかつた。

すると、ひとり、

「徳川家の、かッ、加藤ッ九郎次ッ、一番槍ッ」

と、どなつて、向う側の列から、砲弾のように、駈け出した者があつた。

具足の粗末。名も聞いたことはない。加藤九郎次、たぶん徳川家の一平ひらぎむらい侍にすぎないものであらう。

だが、九郎次の一番槍に、あと何千がいちどに、どどどッと、数歩すすみ寄つた。

と。その中からまた、

「九郎次の弟、加藤源四郎ッ。——二番槍ッ！」

つんざくような声がした。

さては先に出たのは、兄だったとみえる。その兄なる九郎次は、武田勢の前まで近づかぬうち、さつと突き出して来た敵がわの列に吞まれて、乱戟らんげきのなかに姿も没していた。

「二番槍はおれだッ。加藤九郎次の弟なるぞ。——みろッ、甲州とんぼめ」

その武者と武者とのかたまりを、源四郎は槍で四、五振りなぐった。

振り向いた甲州兵の一兵が、

「小癪こしゃくなッ」

と、突いて来た。

源四郎は、仰向けにひっくり返ったが、よろいの胴を刎^はね^{すべ}つた敵の槍をつかんで、

「くそッ」

と、一度は起きかけた。

ところが、その時もう味方はいちどに押し出していた。甲州勢も出足をそろえてぶつかって来た。怒濤と怒濤が噛^かみあい狂いあうあのすがたを、血と槍と甲^{かつちゆう}胃^いがえがき出していた。

「あッ、兄上ッ」

味方の兵や馬蹄^{ばてい}の下にふみつけられながら、源四郎はさげんでいた。しかし手と脚で這いながら、甲州兵の足をひっ掴んで倒し、首を搔^{ほう}いて横へ抛り出した。

それきり彼のすがたは誰も見とどけていた者はない。

ここは全くの乱軍とはなつた。

だがなお、徳川勢の右翼と、武田方の左翼との衝突は、ここほどの接戦にはなっていない。

一町余もひらいていた。

砂けむりのなかに、押おしだいこ太鼓のとどろきや貝の音がもの凄すさまじ

く聞える。どうやら信玄の旗本がそのうしろに在あるようだった。

両軍とも、鉄砲組を前に立てるいとまもなかったので、甲州勢は、その最前線に「水俣みずまたの者もの」とよぶ軽士隊を出し、さかんに石つぶてを抛ほうらせていた。

石とはいえ、まるで雨のように飛んでくる。ここの前線は酒井

忠次^{ただつぐ}の一陣、二陣以下、織田家の援軍^{えんぐん}だった。

「ちいッ」

忠次は馬上で舌打ちしていた。

甲軍の前列から投げってくる砂礫^{されき}が馬にあたるので、馬が狂って仕方がないのだった。自分の駒ばかりでなく、待機している槍組のうしろにいる騎馬の者のそれがすべて竿立^{さおだ}ちとなって荒れるので、さなきだに陣形は動揺する。

槍組の諸士は、忠次の号令を待っていた。忠次が声をからして全軍に、

「出るなッ。この采配が、風を切るまでは」

と、抑えていたからである。

石を投げている敵の前列は、甲州方の進撃路をきり拓いて来た
工兵である。だからその水俣の者の隊は怖ろしくないが、一側後
ろに精銳が手に唾つばして機を計っている。

強い甲軍のうちでも強いと音に聞えている山やまがた県隊、内藤隊、

小山田隊。なお内藤昌まさ豊や小幡信定などの旗じるしも見えた。

「水俣みづまたの者ものにあしらわせて、わざとこつちの怒りを誘おうとす
る策であらう」

そう敵の計を見ぬいている忠次であつたが、すでに左翼の戦闘
は乱軍の状態にあるのに、かくては、二陣の織田家の将士のでま
えもある。また本陣の御大将も何と見ておられるやも知れないと
いう気がして——遂に、

「かつ、かかれッ」

と、兜かぶとの緒おも切れそうなほど、大きな口をあいて、突貫を命じた。

知りながら敵の策てに乗って出るといふ、序戦からして不利な位置を取らざるを得なかったのである。果たして、全軍におよぼす負け口はここから生じた。

石の雨が、ばたとやむ。

同時に、石いし礫つぶてを抛ほうっていた七、八百の水俣の者が、隊を左

右に割つて、一線からさツと退ひいた。

「しまった」

と、敵の二陣が、酒井忠次の眼にみえた時は、もう遅かった。

水俣の者と、次の陣の騎兵のあいだに、もう一列、鉄砲隊が潜伏していたのである。みな腹這いになって身をしずめ、銃身を左^ゆ手で顔の横に当てがって――。

ド、ド、ドツと、つるべ撃ちの弾^{たま}けむりが草から燃え立った。

弾道の低いたため突貫して来た酒井隊の多くは足を撃たれた。刎^はねあがった馬は、腹に弾^{たま}をうけたものであろう。倒れぬうちに鞍を離れて、歩卒と共に、突進して来る将もある。戦友の屍^{かばね}をこえて、槍をふりしごいて来る勇兵もある。

「――退^ひけいッ」

武田方の鉄砲組へかけられた命令であつた。わき眼もふらず追つて来た槍組に接触されたら鉄砲組は一たまりもない。かれらは、

うしろにいる味方の騎兵隊を繰り出すために、できるだけ迅速に散った。

どっと、馬の鼻づら揃えて、一番に甲軍随一の山県隊、二番に小幡隊と、重厚な備えで奔出してきた。酒井忠次^{ただつぐ}の手勢は、ためにさんざんに駆けくずされた。

「くずれ立ったぞ」

勝ちほこる声が、甲軍にあがる。——と見るや小山田隊は、迂^う回^{かい}して、徳川方の二の備え、織田勢の側面へ馬けむりをあげて来た。

見るまに、甲軍の大兵によつて、鉄の輪のような囲みができてくる。織田兵も、酒井、本多、小笠原などの旗じるしも、すべて

その中に揉み揺られていた。

中軍の小高い陣場に、味方の全線をながめていた家康は、

「——ウム！ 負けたッ」

と、はつきり呻いた。

「……ぜひも、ございませぬ」

凝視して、同じように、側に立っていた軍目附の鳥居忠広は、

ちと、無念そうに、唇をかんだ。

きょうの戦いばかりは、どれほど諫めたことか。

——勝目はありません！

断言して、家康に、手出しを止め、こよい敵が祝田に野営するところを放火して奇襲するようにすすめたのであったが、老

獯^いな敵の信玄は、わざと、小人数の抑えをのこして家康の手出しに「放^{はな}し餌^えの戦法」を掛けたのであつた。

「はや、手の下しようはありませぬ。この上は、味方をおまとめあそばして、一時浜松へ」

「……………」

「お引揚げが、一瞬早ければ、一瞬の利がありまする」

「……………」

「殿。……殿ツ」

「うるさいッ」

家康は、忠広の顔も見ない。——陽は沈んで、刻々、三方ヶ原の野^の末^{すえ}には、白^ゆい^う夕^も靄^やと夜の闇とが、二^ふ一^た条^{すじ}に濃くわかれてい

た。

冬風に乗って、使番の旗は、頻々ひんぴんと……悲報をそこへつたえた。

「織田家のお身内、佐久間信盛のぶもりどのには、まつ先に潰え、滝たきが川わかずます一益どのにも逃げくずれ、平手長政のりひで（汎秀）どのはお討死。酒井どの、ひとり御苦戦にございまする」

「敵、武田勝頼の勢、山県隊と力をあわせて、お味方の左翼をかこみ、石川数正どのには、傷てを負おわれ、中根正照まさてるどの、青木広次どのなど、次々に御戦死です」

「松平康純やすずみどの、敵のなかへ駆け入ったまま、斬死なされました」

「本多忠真^{ただまさ}どの、成瀬正義^{なるせまさよし}どの始め、その手勢八百余人の将士、信玄の旗本めがけて深入りされ、数千の重囲におちて、生き還つたもの幾名もございませぬ」

次の声、また次の声と、敗報は悲調をおびてくるばかりだった。
「御免ッ」

なに思ったか、鳥居忠広は、やにわに家康のからだを引つ抱えて、部下と共に、かれの駒のうえに押上げた。

「――逃げろ！」

それは、馬の尻を打って、馬にどなったのである。家康をのせて馬が飛ぶと、忠広その他の旗本もあとを追って駆け出した。

まんじ
正

雪となつて来た。——陽^ひが沈みきるのを待っていたように。
雪かぜは霏々^{ひひ}と、敗軍の旗を兵馬を吹きまくして、一層、抛^よる
ところを失わせた。

「殿は。殿はいずこに」

「御本陣はどこへ」

「おれの隊は？」

路頭に迷つた逃げ足のかたまりへ向つて、甲軍の銃隊は、けむ
る雪の中から、鉄砲を撃ちあびせた。

「おひき揚げだ」

「退軍の貝が鳴っている」

「さては、もはや御本陣をひき払われたか」

敗軍の鯨波げいはは、まっ黒に北へなだれ、西へまよい、その間にもなお多くの死傷者を出しながら、やがて南のほうへ一路潰走かいそうしはじめた。

さきに、鳥居忠広とりいと一緒に、危地を脱して行つた家康は、うしろに続く、人々を顧みて、

「旗を立てい」

と、急に駒をとめ、

「――旗をたてて、味方の者どもを、ひとつに呼びあつめろ」
と、命じた。

夜の闇はせまり、雪はふり増してくるばかりである。家康をまん中にして、旗本たちは貝をならし、馬じるしを振りまわしては叫んでいた。

「おうういッ」

「オオーイ」

追々と、敗軍の士卒は、そこへ集まつてきた。どれもこれも血にそんでない姿はない。

だが忽ち。

敵の中軍がそこにあると知った甲州の馬場美濃みの、小幡上総おばたかずさの二隊が、一面から弓、一面から鉄砲を撃ち放ちながら詰めてきた。

——そうして早くも退路を断たたんとするかに見えた。

「ここも危ない。各には殿を守つて、早々お立ち退きあるがよい。それがしは一手の人数を頂戴して、敵のなかへ、体当りにぶつかつて行きますから」

大勢のうちから伸び上がつて、悲壮な声で家康とその旗本たちへ最後の袂別^{べいべつ}を告げた者がある。

水野左近であつた。

左近はあたりの部下へ。

「われこそお身がわりにならんとするものは、おれに続け」

と、云いながら、続くものがあるうとなかろうと、それは意^{こころ}にもかけず、驀^{まっ}しぐらに敵のなかへ駈けこんで行つた。

——が、そのあとからすぐ三、四十人ばかりの兵は、彼と共に

死ぬべく続いて行つた。たちまち、敵軍の一角で、わめく声、吠えあう声、噛みつくような声が、劍槍のひびきと共に、雪唸りゆきうなを交まぜて、渦巻きはじめた。

「左近を死なすな」

家康はもうまったく平常の家康でないようだった。侍臣が止めるつもりでかれの轡くつわを阻はばめたが、ふり飛ばされて、あつと、起きあがってみた時は、もう主君のすがたは、白と黒のまんじのなかに、魔人のような馳驅ちくを見せていた。

「わが殿うツ。……わが殿ツ」

その日。浜松城の留守居にあつた夏目次郎左衛門は、味方の敗亡と聞くと、手勢わずか三十騎ばかりひいて、家康の安危を見と

どけようものと、これへ駈けつけて来た。

そして今、これへ来て、家康の勇戦しているすがたを見ると、駒をとり降り、槍を左に持ちかえて駈け寄るなり、

「な、なんたることですツ。常のあなたにも似げない御粗暴。おかえりなさいツ。早、お退きなされい、お城のうちへ」

と、駒の口輪をつかんで、ぎりぎりと後へ廻した。

「離せツ、次郎左でないか。敵軍のまつただ中で、邪さまたげするたわけがあるかツ」

「てまえがたわけなら、あなたは大馬鹿者でいらつしやる。こんな所で討死なさるほどなら、きょうまでの御苦労などせぬ方がよい。日頃の云いがいもない馬鹿大将ではある。功をたてたいなら

後日天下の大事にむかつてお立てなさいッ！」

眼に涙をため、口を耳まで裂いて主君をどなりつけると、次郎左は、持っている槍で家康の馬をいやというほど撲りつけた。なぐ

譜代ふだいの臣や、近習の誰彼のうちにも、ゆうべここを立つて、こよいはもう見えない顔がたくさんある。将士の戦死者、三百余、手負いは数も知れなかった。

「無念、無念」

「畜生」

惨たる敗軍の名を負って、われとわが身へ怒るような顔が、宵から夜半にかけて、続々と、雪の城下へなだれ帰って来る。

空は赤かった。

木戸の口々のかがり篝のせいである。

が、大地の雪のくれない紅は、駈けまわる武者のこぼした血しおに違いない。

「——殿はどう召された？」

半ば、人々は発狂している——泣いている。

もう先に家康は、浜松の城内へ帰っているものと思つて引きあげて来たところ——

「まだ、御帰城はない」

という留守衆のことばに、さてはまだ敵の重囲のうちにありか、或いは、御戦死か、いずれにせよ、殿より先に逃げて来たと

いわれては、浜松の住民に対しても、面目ないと、城にもはいらず地だんだ踏んでいるのだった。

その混雑のところへ、

ドドドドツと、すぐ西の木戸のあなたで鉄砲の音がした。

敵軍だ。最期は迫った。もうここまで甲州勢が来るようでは、殿の運命もおぼつかない。

徳川家の人々は、

「これまで」

「このうえは！」

と、絶望の眼^{まな}じりをあげて、わツと、鉄砲の音へむかつて、討死を果しに駆けだした。

すると、木戸のあたりに押しもんでいた味方のかたまりを衝きやぶつて、吹雪と共に、どツと駈けこんで来た騎馬の面々がある。思いがけなく味方の将たちであつたから、兵は悲壮なさげびを、歓呼にかえて、太刀をふりあげ、槍をさしあげて、迎え入れた。

——その影の、一騎、二騎、五騎、七騎とつづいて来る第八番目に、家康が、鎧よろいの片袖かたそでもちぎられ、雪や朱あけにまみれた姿で、駈けつづいて来た。

見るやいな、木戸の将士は、

「殿だツ、殿だツ」

「御無事だつたぞうツ——」

伝えあい伝え合い、われを忘れて、躍りあがった。声かぎり歓

声をあげた。

それのみか。

すがたこそ、さんたん惨憺には見えるが、思いのほか、家康がにこに

こしているのをながめて、半狂乱になっていた将兵たちも、ひどく安心して、その後はおのずから秩序づいた。

家康主従二十騎ほどは、城下の辻に、駒を立てて、まだ後から続いて来るらしい部下を待つていた。

追いかけて来た甲州のやまがたぜい山県勢へ小返りして、さんざんに打ち戦い、もうよい頃と、ひと足あとから城下へはいつて来たのは、一隊四十人の槍組だった。

その四十人は、二十七人に討ち減うへらされていた。中のひとり高

木九助が、槍のさきに、敵の坊主首ぼうずくびをさし貫いて帰つて来たのを、家康は遠くから見て、

「九助、九助」

と、さしまねいた。

何事かと、九助が駆けよつて行くと、家康は顔を寄せんばかり鞍のうえから身をかがめて、

「……、……。よいか、九助、あらん限りの大音にて、存分に大言を吐け」

と、何か策をさずけた。

心得て候う——とばかり高木九助は勇躍して城のほうへ走り出した。そして雪を蹴たてつつ、

「聞けや、味方の衆。——今日の乱軍にて、武田晴信はるのぶ入道信玄の首を、高木九助が討ちとつたぞ。——眼にも見よ、耳にも聞け、俺だぞツ、信玄の首、打ちとつたのはかくいう九助だぞツ」

城の唐橋を駈渡りながら、狭間はざま狭間に案じている留守の将士に、ひとり残らず聞えわたるような大声をあげて行つた。

「なに、信玄を討つたと？」

「信玄の首をだと？　ほんとか」

「あの声は高木九助であろう。坊主首を槍さきにさして、氣狂きちがいみたいに触れまわっている」

城兵はみななどよめき立った。そのどよめきは絶望から希望へ一変した。

非常などん底には、非常識も通用する。善くも悪くも通用する。しかもまた、いちどは生死さえ案じられていた家康が、その中へ無事、にこやかな面をもつて生還して来たのであるから、一時は、まったく敵将信玄の死をみな信じた。

城門にはいつて、留守の将士の出迎えにかこまれ、駒の背から降りると、さすがの家康も、ほつと、満身で吐息をついた。

「水を。——水をひと口くれい」

そういつて、家臣を見まわし、ひとりが柄杓ひしやくのまま汲んでさし出す水を、がぶがぶ飲み干していた。

と、その前へ。

黒革くろかわの鎧具足よろいにがっしり身をかためた四十がらみの武者が、

部下の中から走り出してひざまずいた。

「殿。お久しゅう存じまする」

家康は、柄杓の残り水を切つて、小姓へ渡しながら、

「誰だ？ ……其方は」

「石川善助めにございまする」

「なに、石川善助と？」

「——四年前、酒の上で朋友と不埒な争いふらちを仕りまして、御当家をお暇いとまとなり、やむなく他国へ立退のきましたお厩組うまやぐみの善助です。はやお忘れでございましょうか」

「忘れはせぬが、その善助が何しに参つた。——そちは当家では三十貫の扶持ふちしておったが、その後、他家へ仕えて三百貫の高禄

にありつき、近ごろは至極よき身分と聞いていたが」

「前田殿のおなさけで、身にあまる扶持をうけておりましたが、常に、故主の御恩は忘じ難く、^{がた}折ふしまたこのたびは、甲州軍の乱入にて、天龍川その他の要所は次々と撃破され、御当家の危急存亡は今に迫ると遙かにうけたまわるにつけ、矢もたてもたまらず、意中を前田殿に訴え、三百貫の禄をお返しいたし、召抱えの者八十ほどひきつれて、御加勢の端^{はし}にもと、夜を日について馳せつけて参りました。……何とぞ、先の不行^{ふぎようじよう}状はおゆるしあつて、以前のごとく、厩^{うまやぐみ}組の端くれになと、お抱えおき下さいますように……。おねがいのござりまする」

善助は、家康の足もとに、^{ひたい}額を伏して縷々^{るる}といった。

かれの義と忠誠を、かれの面にも見た人々は、いずれも大きな感動に打たれていたが、家康の容子には、さほどな歓びも見えなかった。

「要らざる業を」

と、むしろ不興げに、

「その方などが加勢をうけずとも、戦に事を欠くわが徳川勢ではない。せっかく前田殿の下された高禄をば打ち捨てて参るなど、勿体ないことではある。——が、すでに馳せ参ったからには、ぜひもない、戦の終るまで、どこへなと陣場をもつて働いておるがいい」

そういう間にも、敗軍の味方は後から後からと、城内へひきあ

げて来た。

武者溜りも、狭間堀の陰も、大玄関の廂の下も、負傷者のうめき声でいっぱいになった。家康は、不愜らしい眼もくれず、その中を押し通って、本丸へはいつて行つたが、ふと傍らの旗本たちをかえりみて、

「善助には是非とも、充分に働ける陣場をくれてつかわせよ。……ああは申したものの、近ごろ欣しい男ではある」

と、心から洩らした。

櫓に立ってながめ下ろすと、雪は小やみになったが、甲州の大軍は潮のように、はや城外の近くへまで迫っていた。——その先鋒隊の襲来であろう、城下の木戸から町屋へわたって焰々と焼

き立てられていた。

てんぽうむもん
天放無門

「ひさ野。ひさ野ッ」

本丸の広間に突ツ立つと、家康はこう大声で呼んだ。

まだ戦場にいるような声しか出ない。肺臓も声帯も、異常になつたまま平常に返らないのである。

「はいッ」

ひさ野という侍女は、小走りに寄つて、そこへ手をつかえた。彼女のたもとの風に揺れた短たんけい襷けいが、家康の半顔に明滅してい

た。その頬に血しおが光っている。惨として、髪の毛がほつれている。

「櫛くしをもて」

どっかと坐る。

ひさ野に髪をあげさせながら、

「空腹だ。……湯漬を」

と、あとの用を命じる。

湯漬の膳ぜんや飯めし櫃びつが前へ運ばれてくると、すぐ箸はしをとりかけた

が、その箸で、

「縁障子えんしょうじをみな開け放せ」

と、いった。

燭はゆれても、開けひろげたほうが、室内まで明るいほどな雪だった。縁には、武者たちが、ここかしこ黒々とかたまつて休息していた。

湯漬を搔きこみながら、家康はそのひとりへ、

「三五郎、怪我をしたか」

と、たずねた。

布を噛んで、肱の槍痕を巻いていた野中三五郎という若い近習が、

「いえ、些細です」

と、そのまま答える。

「これへ来い——」

と、さしまねいて、家康は彼に杯をとらせた。杯の底に三日月の蒔絵まきえがしてあった。

押しいただいて、飲みほした後、三五郎は、

「これを拝領しておいてもよろしいでしょうか」

と、杯の底を見ていた。

「何にするのか？」

「身の誉れですから、この三日月を、家紋にして伝えたいと思います」

家康は、うなずいて、湯漬の箸をおいた。

なお距離はだいぶあるが、敵軍の銃声はさかんに聞えて来るし、庭さきの雪なども、城兵の右往左往に、忽ち泥土と変つてゆく。

雪はやんで、大おおびさし 廂ごしに見える夜空は、冴さえかけてさえい

た。それにまた、城下の町屋の焼けさかる火の粉がいちめんに舞っている。人に悲壮な感傷と、地に敗軍の呻うめきがなければ、麗うるわしいともいえる空だった。

「松井左近まついさこんはおるや？」

「おりまする」

「もつと寄れ。きょう引揚げる途中、よくいたした。家康に明日の命はないかもしれぬ。こよいのうち褒めておくぞ」

そのほか、きょうの戦場で、家臣たちのなしたあらゆる働きに對して、彼は洩れることなく、感謝と、賞のことばを与えた。

「——あんな中で、どうしてあんなことがお眼にとまっていたら

うか？」

と、怪しまれるくらい、彼は細事まで見ていた。

野中三五郎が、特に三日月の杯を頂いたのは、こよい家康が落ちて来る途中、七、八騎の甲州武者が先へ迫つて道をふさいだのを、よく奮戦して、血路をひらいたのみか、そのうちの敵の剛勇、^{なが}長弥九郎の首を打ちとつた功によるものだった。

その長弥九郎は、もと徳川家にいて、甲州へ奉公替えた男なので、家康も明らかに記憶していたとみえ、

「この長め、^{なが}この長め」

家康自身、刃に^{やいばむか}対つてどなつたほど、憎い敵であつたから、その首は一倍値うちがあつたのである。

松井左近の功は。

きよようの乱軍のなかで、甲州の孕石^{はらみいしちゆうや}忠弥という剛の者が、家康にせまつて、家康の乗っている馬の尻^しツ尾^ぽをつかまえた。――家康は竿立^{さおだ}ちになつた馬の背から、太刀をうしろへ振つて、馬の尻ツ尾を切り離した。ために孕石忠弥は仰向けに倒れたが、なおりきあがつて槍をつけようとしたせつなを、松井左近が、跳びかかつて、討つたのであつた。この首も、首帳の三、四番目に値するものだった。

大敗は喫したが、総じて、きよようの戦に遺憾^{いかん}はなかった。足輕の末までも、よく苦戦に耐えてくれた。

家康は満足だった。取りあえず左右の者の功を賞したのも、政

治ではない、心からな満足の溢れであつた。

湯漬を喰べ終るや否、彼は本丸を出て、諸所の防備を見まわり、
天野康景と植村正勝のふたりに惣懸り口の防ぎを命じ、鳥居、
内藤、水野、酒井の諸將を配して、大手から玄関口までの守りに
当らせた。

諸將は、死守を誓つて、

「たとえ甲州の大軍が、その全力をかたむけて、これに襲せ参り
ましようとも、御武威を示して、石垣の一つだに、取りつかせる
ことではございません」

と、口をそろえて壮語した。強いてでも、家康を安心せしめ、
家康を励まそうとしたことばだった。

「うむ！」

家康は、その意気を受けとつて大きく頷いたが、諸将がすぐ部署へ駆け向おうとすると、呼びとめてこう注意した。

「大手の城門、多門たもん、玄関まで、すべて閉じてはならんぞ。城門はみな開けひろげておけい。——よいか！」

「えッ？ ……何と仰せられましたか」

諸将はみな疑った。

自分たちの意志とはまるで反対な命令だからである。

すでに城門は大手といわずどこも鉄扉てつびを閉めてある。味方の総

くずれを追迫して、敵の大軍はもう城下間近まで来ているのである。海嘯つなみの襲来をまえにしながら、何でみずから堤防の口を開け

ておけと命じるのか——人々には家康の気もちが分らなかつた。

「いや、それまでには及ぶまいかと存じます。後から引揚げてくる味方には、その都度、門を開けて、入れてつかわせばすむことです。特にそのため御城門を、八文字に開いておかずとも——」

鳥居元忠が云いかけると、家康は笑つて、彼の思いちがいさとを論さした。

「帰り遅れた味方のためではない。かならず勝ち誇つて、これへ潮のごとく襲よせ来るであろう甲州勢に対する備えだ。——ただ城門を開けおくばかりでなく、大手の門外五、六カ所に、煌こう々と、大おお篝かきを焚たかせい。また城内には燎火にわびを旺さかんに焼かせるがよい。

——ただし防禦は厳に、部署は整然と、鳴りをしずめ、敵の懸り

ようを見まもつておれ」

この場合、何という放胆な対策だろう。諸將は余りにも剛愎ごうふくな彼のことに、遲疑ちぎをいだくまでもなく、はツと服命して、各の持場へ駈け競つた。

城門の鉄扉は、家康の胸のごとく、大きく開け放された。

まっ赤な簀かがりが、濠ほりの外から玄関まで、煌々と雪明りに燃えだした。

家康はそれを眺めながら、ふたたび本丸のほうへ歩を移していった。主なる部將は心得ていたろうが、城兵のあらかたは高木九助が喧伝した「信玄の首」を信じて、ここへ襲よせてくるものは、首將を失った敵の敗残軍にすぎないと考えているらしい。

「ひき野、つかれた。わしも酒を一盞いっさんまいろう。ひとつ酌ついでくれい」

家康は、最前の広間へもどつて、一杯の冷酒をのみほすと、そのまま身を横たえて、侍女のかける衾ふすまをひき被かつぐなり、いびきをかいて眠つてしまった。

それから間もなく。

殺到して、濠ほりのまぢかまで、まつ黒に襲よせて来たのは、甲軍の馬場美濃守みののかみの隊、山県昌景やまがたまさかげの隊など、氣負い立った精鋭だった。

——が、美濃守も昌景も、浜松の城門を真ん前に見ると、

「や、や？ ……。待てッ」

にわかに駒足を抑え、逸りきつた味方の奔勢を、全軍にわたつて制止した。

「美濃どの。どう思う」

山県昌景は、彼のそばへ馬を寄せて行きながら訊ねた。いかにも解けない謎につき当つたようである。

「……？」

美濃守も、凝然と、かぶとの眉廂から、敵方の城門を見つめたままであった。

その面も遠くから焦かんばかりに、城門の内外には、篝火がどこどか燃えさかっている。そしてその鉄扉は八文字に開け放たれてあるではないか。

門なきも、門あり。

門あるも、門なし。

これをいかに見るやと、質問を出して、こちらを計っているように、濠ほりの水は黒く、満城の雪は白く、寂せきとして、物音ひとつ聞えないのである。

もし耳をすませば。

バチバチとはぜるかがり篝まきの薪の音が遠く聞えて来たろう。またもつと心耳しんじを凝こらせば、本丸のうちに、無門の胸きょう襟えきんをそのまま手枕の一夢をむさぼって、

(——妄動もうどう何かせん。観くわんずれば死生は一瞬の風裡ふうり。悠久は天にあり、死を帰すも天、生を托たくすも天)

としている敗軍の将家康のかんせい鼾声も聞えて来たかも知れないのである。

けれどそれは、心耳なくては聞えないものだつた。昌景は云つた。

「味方の追撃があまり早かつたので、敵は狼狽のあまり、城門を閉じるいとまもなく、鳴りをひそめてしまったものと思われる。いぎ、攻め入ろう」

「いや、待ちたまえ」

馬場信のぶふさ房はさえぎつた。

美濃守信房といえは、信玄きか麾下のうちでも有数な武将であり兵学の巧者であつた。

智者は智を修めて智に溺^{おぼ}る——

かれは断じてその不可なことを昌景にむかつて説いた。

「この場合、競^{きそ}つて、門を固めるのは、敗北の自然な心理である。諸所に籌を焚^たくいとまをもちながら、門扉をひらいておくのは、彼に怯^{きようき}気なく、沈着のある証拠といえよう。——思うに、充分勝計を信じて、一城一心に、われの不要意に攻めかかる機を待っているに相違ない。危^{かな}うい哉だ——相手は若将ながら徳川家康、うかつに踏み入って甲軍の武名をけがし、後のもの笑いになつてはなるまい」

遂に。——そこまで迫りながら二将とも、軍をめぐらして引つ返してしまった。

それと、近侍の声を、寝耳に聞くや否、家康はがばと刎ね起きて、

「我なお死なず！」

と、雀躍こおどりした。

そして即座に、鳥居元忠とりい、渡辺守綱もりつなの二臣に、手勢をさずけて、追いつちをかけた。

山県、馬場の二隊は、さすがに狼狽もせず、抗戦しながら、名栗ぐり附近に放火して、あざやかに交わし去ったが、一方、城内からはなお、間道づたいに、天野康景やすかげや大久保忠世ただよの奇襲隊が潜行して、信玄の本陣地、犀ヶ崖さいたに附近の敵へ鉄砲を撃ちこんで帰つて来た。

雪に^{すべ}に^つて、犀ヶ崖へ落ち、寒流に溺死した甲州兵が何十人かあつたという。

大敗はうけたが、徳川勢としては、なお骨ぶしの程を示して、最後に万丈の氣を吐いたものといえる。

のみならず信玄をして、またも上洛を断念させて、空しく甲山へ引揚げることを余儀なくさせてしまった。

犠牲は多かつた。甲軍の四百九人に対して、徳川方の死傷は実に千百八十人にのぼつた。

意外なのは、戦意もなく上手に立ちまわっていた織田家の援軍に、思いのほか死傷が多かつたことである。総勢三千のうちから二百余名という十分の一に近い死傷を出していた。要するに戦場

の危険率は、誰へも平等であつて、勇者にのみ危険が多いとは限らないものとみえる。

田園でんえんの一悲母いちひぼ

小閑しょうかんを楽しむというのは、まだ閑のある人のことである。

戦国に生れ、ことし三十二、しかもなお逆境の小君主、家康に閑日などはない。

「——けれど、それでもいけません」

老臣いしやは諫めていう。

「弓も弦つるを懸けたままでおくと、そのまま弛ゆるんでまいります。大

いざん
山へ坐るには大悠なれという通り、時には、御放心も必要で

しよう。——稀には殿御自身、忙を離れて、気をお養いあそばさなければいけません。家中一般も、ほつと息をつき、領民が仰げば、何かしら安泰を感じて、国中が寛やかな心になりましょう」
家康はうなずいて、

「もつともな言だ。ひとつ鷹でも放しにまいるか」

「よかろうと存じます」

甲州の足長殿あしながは一時退ひいたが、三方ヶ原以来、なお多事多端に明けた翌年の天正元年——春もまだ浅い頃だった。

季節とすれば、狩には遅い。だが放鷹ほうようが目的ではない。君臣十騎ばかり徒士かち一隊をつれて、一日、山野を駆けあつた。

歸途――

祝部いわいべの村落までかかると日が暮れた。村民は戸ごとにかがり篝火を焚いて領主の通路を照らした。そして軒端軒端の下にみな土下座していた。

「待て。前者」

前驅ぜんくの家臣をよびとめて、家康は駒を止めた。

道のかたわらに、一戸の旧家らしい軒が見える。夜目にも白髪
のわかるほどな老婆が顔をあげていた。何か、粗相そそうでもあったの
かと、村の人々は眼をそばだてた。

「……何か？」

と、家臣たちも怪しんだ。見れば家康は鞍くらを降りて、その軒

先へ歩み出していたからである。

「老婆。——そもじは今、わしのすがたを見て、おえつ嗚咽したのである。う。にわか泣きじやくった声が、ふと、わしに聞えた。……なぜ泣いたか、わけを聞かせい」

近習の者があとから寄つてゆくと、家康は、腰をかがめて、せむしのように平伏している老婆へ、やさしく訊ねているのだつた。

「……………」

老婆は顔をあげ得ない。いつまでも答えないのである。——で、家臣のひとりが、

「殿のおたずねじゃ。じきじき直々でも苦しゆうない。お答えせい」

と、注意した。

家康は、老婆に眼をあつめている近臣たちを、あなたへ遠ざけて、ただひとりになって訊ね直した。

「恐れることはない。ただ、そもじの洩らした咽び泣き^{むせ}が、ふとわしの心へ食い入るようであつたから問うてみるまでじゃ。何ゆえ、わしを見て泣いたか」

老婆はようやく面^{おもて}をあげて答えた。

「田舎^{いなか}者の婆^{ばば}は、巧みにものを申すことができませぬ。正直にもうしますで、お怒りくだされますな。——殿のおすがたを見ましたれば、急にお恨めしゆうなつて、つい愚痴^{ぐち}なむせび泣きがでてしもうたので」

「わしが、恨めしいとな。してそもじは誰の妻か」

「加藤政次まさつぐという郷土ごうしの後家でござりまする」

「では、浜松の家中にあつて、先頃三方ヶ原で最期をとげた、加藤九郎次、源四郎、ふたりの母にあたるものか」

「おお。……殿さまには、あんな侍の端くれにも足らぬ若者でも、お忘れなく、お覚えおきくださいましたか」

「さては、ふたりの子を、戦場で死なせた悲しさが、この家康を見たとなんに、胸へこみあげてきたのじやな」

「ありようは、それに違いございません。ふたりとも、ひと一倍、孝行ものでございましたゆえ……」

偽りなく老母はいつてまた咽むせび泣いた。家康は肺腑はいふをえぐられる思いに迫られたが、同じ悲嘆を抱くもの、この老母以外にも無

数にあることを知ると、彼は、なんと答えるべきか、慰めるべきか、襟えりを正して、自分もまた、偽りなき心を告げなければすまない気もちになった。

「老婆、そもじには、ほかに子はないのか」

「先ごろの戦いくさで死んだ二人のほか、子も孫もございませぬ」

「縁者は」

「何かとおりまする」

「では、縁者の子を養い、家督かどくをつがせるがよかろう。いずれ家

康が、その子は取立てて得させる」

「ありがたいおことば……」

老婆は、頭かしらをさげたが、さして欣うれしそうでもない。気のせいか、

家康は、自分を仰ぐ彼女の眼に、なお何ものか含んでいるように思えてならなかった。

「そちの子の九郎次、源四郎の両名は、三方ヶ原で共に一番槍二番槍をつけて、もののふの華はなと散つた殊勲者しゅくんしゃ、ほまれは末代まで伝えられよう。恩賞の沙汰も疾とく達してあるはずだが、なおなぞ望みはないか」

そう慰めると、老婆はあわててかぶりを振り、いとど恨めしげに家康を見あげて、

「御領主さま。おこころのほどは身に沁しみみて忝かたじけのうござりまするが、子をふたりまでも戦いくさのにわに死なせた母の身には恩賞のお沙汰など耳にははいりませぬ。……この母は、この母はただ……」

急に、ここでもた、よよと咽^{むせ}び伏したところを見ると、老婆が、家康に向つて、何か云いたいとする真実もこのことばの先にあるらしく思われた。

で、家康がなお、ねんごろに質^{ただ}すと、老婆はこういった。

「あれも、さむらいの子。わしじやとて、さむらいの子の母でござりまする。討死を、なんでめめしゅう嘆きましよう。……けれどもただあなた様、徳川家のお栄えだけを旨としておいで遊ばすのでは、わしらが子の討死は、なんのためになつたやら、なんの誉れといえようやら——迷わずにはいられませぬ」

こう云い出すと、老婆はもう泣いてもいない。老いさきのない命はそこにさし出しているというふうにする見える。

「わしらを初め、村々の者は、代々この土に住み着いて百姓しておりますが、いずれも遠い大祖おおおやは、伊勢の大神おおかみさまにしたがうて諸国にわかれた御先祖がたの裔すえでござりまする。いまでも天朝さまの百おおみたから姓おおみたからに相違ございませぬ。——源平のころ、建武けんむの後、また応仁のみだれなど、長い幾世のあいだにかけて、ここらあたりも、御領主さまは遷うつり変つてまいりましたが、わしらにおさずけ下されている田や畑の土ばかりは変りませぬ。——それを耕すにも、安穩に暮してゆけるのも、それは御支配のお守りがあればこそで、御領主さまの恩はよく弁わえておりますが、さればとて、その御領主がみな善いわけではございません。天朝さまの百おおみたから姓おおみたからを——あだに死なせる御領主もないことではござい

ませんでした」

「老婆。そもじは、この家康が、そういう領主と思つておるか」
「そんな武将ではおわさぬと、せがれどもも、お慕いしております
したればこそ、足輕奉公に出、やがて浜松で、侍のはしにまで、
お取立ていただいたのでございます。……けれど、ありよう申
しあげれば、戦のため、年々^{ねんぐ}年貢のおとりたては高まり、若い働
きては召し出され、麦秋や収穫^{かりいれどき}時といえ、他国の兵に荒らさ
れたり……それはもうことばにも尽せぬほど、村は困窮しており
ます。冬になれば、飢えるもの、薬も求められぬもの、妊娠^{みごも}つ
ても産めぬものなどが、いっぱいでございます。……これが伊
勢の大神さまに侍^{かしず}いたものの御裔^{みすえ}かと、正直、日頃そう嘆かれま

するで、折ふしきよう、御領主さまのお通りを拝んだら、急に、胸がふさがってまいりました。——せがれどもの生命いのち二つが、わしらへ下さる恩賞に代って、もつとこの村のうえに、ひろい御仁ごじん慈んじとなつてくだされたらと。……はい、それやこれ、せがれども
の捨てた生命に、つい慾の涙を掻きこぼしたわけでござりまする」
家臣たちは、案じて、

「夜もおそくなりますゆえ、なお老婆へおたずねの儀もあれば、他日お城へ召されてのことになされては如何で」

と、家康の帰城をうながした。

なにか、夢からでもさめたように、家康もつぶやいた。

「おお、留守の者も、案じておろう……」

老婆へは、近日、あらためて沙汰しようと約束して、彼は黙々と、そこを去つたのであつた。

前後の騎馬に守られながら、彼はまた暗い夜道を、浜松のほうへ駒を向けていた。

「田野のなかにも、無智な田夫でんぷばかりはいない。真実をわきまえている怖ろしい民もいる。……世はみだれても、やはりかわらぬ皇国みくに、その土に生きる民くさ、明国みんこくや朝鮮とはちがう」

彼の若い烈しい弓矢の精神も、きようばかりは棒打ちされたこちで、あの一老婆に、まったく頭かしらがあがらなかつた。——が、その自責は確かに、老婆とひとつな民くさの心が、彼にもある証拠だつた。

「あッ、いかん……。後日を待つては」

途中、よほど来てから、家康は、急に、鞍のうえから振り向いて、なに思ひだしたか、家臣のひとりへいいつけた。

「駈け戻つて、いまの老婆を、すぐ城へもの伴うて来い。自害せぬよう、眼をはなたず、やさしく、よう宥いたわつて」

「はッ」

と、二騎ほど後へ引つ返して行つた。——けれど家康が浜松の城門にかかる頃、その二騎はまた忽ち歸つて来て、

「真に御賢察のほど、おそれ入りました。あれから急いで老婆の家へもどつてみましたところ、果たして仏間を閉め、見事に自害しておりました」

と、告げた。

「間にあわなかったか」

家康はここでもまた、なにか心を痛打された。しかし侍臣には何も洩らさなかった。

後に、一老臣が、

「どうしてあの折、加藤兄弟の老母が、自害すると、お予見がつきましたか」

と、訊ねたのに対して、彼は初めてこう述懐じゅつかいした。

「領主たるわしにむかつて、あれほどなことのいえる者は、おそろく譜代ふだいの家臣にもないであろう。即座にも、死を決していたからこそ、あの老婆は、思うままを、わしへ訴えられたのだ。――

しかも家康は、乱世の武門として、これから行くべき弓矢の大義を訓^{おし}えられた。くれぐれも老婆の死後はねんごろにいたしてやれ」

彼はまた、家中一統を集めて、こういう諭告^{ゆこく}を発した。

「近ごろ、伊勢境は鎮^{しず}まり、織田家とは同盟し、今川氏^{うじざね}真はわ

れに屈して、いささか領土も拡まり、日常、家中一般の生計も、

むかしのような窮乏もなくなつてから、自然、おのおのの衣食は

美をこのみ奢侈^{しゃし}にかたむき、氣風一變のきざしが見ゆる。……省^{かえり}

みるに、家康自身も、知らず識らずそうだった。自分は六歳から

他国の^{ひとじち}人質となつて、一衣一飯にも、つぶさに辛苦をなめて来

たが、それにもまさる貧苦困乏の味を知っている譜代の家中すら、

みなこう變つて来たかと思うと、恐るべきものを感じる。――ま

だまだ、今ぐらいな小功で心を驕おごるなど、早すぎる。家康もまず改めようほどに、各も、もういちど以前の窮乏時代に立ち回たかえつた気になつて欲しい」

次に、彼は、軍事経済の諸奉行と老臣をあつめて、

「農民たちの税をかるくし、いつそう軍備には資材を増強するよ
うに、藩政一変の策を考えてもらいたい」

と、求めた。

彼自身が、まっ先に、実じっせん践するので、全藩一致、それぞれの

施政は忽ち実行された。

農民の疲弊ひへいは甦よみがえつてきた。

家中は、以前にまさるほど、質素剛直ごうちよくになった。

しかも武備はいよいよ強化され——ここに徳川家なる一国は、小国ながらも、領民と領主と、人と物と、さながら一体の強みをかつこあきら確乎と顕かにして来た。

くんしんしゅんぶう
君臣春風

もとの稲葉山、いまの岐阜ぎふ。

その高い山上のお城から、ヒラ、ヒラ、と紅いもの白いものが、城下の町屋根に降ってくる。

「御本丸の梅ばやしも、もう散りかけているそうな……」
人々はそう想像する。

かれらは一年ましに、城主に信頼をたかめている。その信頼は生活の安心から来ていた。どこに住むよりも、ここにいる幸福を事实に知って来たからである。

法令は厳だったが、ここの国主は空言を吐かない。領民の生活に約束したことは必ず行^{じつり}う。実利をもつて示してみせる。

戦^{いくさ}にはきつと勝つ、安心しろ。そういえば必ず勝ち、勝てばよろこびを領民にわか^つ。三日ぐらいぶつ通しに、飲め、踊れ、歌え、遊べ——を奨励する。

人生五十ねん

化^け転^{てん}の^うちをくらぶれば

夢まぼろしの如くなり

酔えばうたう彼のおはこは、領民にまで知られている。しかし室町頃の、世を^{はかな}儚み世を無常とのみ観じていた、^{いんとんそう}隠遁僧のうけ取っていた解釈と、信長の気もちとには、同じ歌謡^{うた}でも、たいへんな隔たりがある。

——死のうは ^{いちじょう}一定

この一節が彼のいちばん好きなところで、いつもそこになると、声をはりあげる。

思うに、彼の生命観は、そこにあるものとみえる。

いのちを深く考えない人のいのちは、完全に生かされていない。やがて死ぬ——いのちを知っている彼であつた。

人生の四十。まだ先は長いとしていない。

そのみじかい間に、かれの抱負ほうふは途方もなく大きかった。無限な理想があつた。それに向い、その障難しょうなんを克服してゆく、一日一日のたまらない愉快な日があつた。——しかるに人間の天寿がある。かれは惜しまずにいられないのである。

「於蘭おらん、つづみを打て」

きょうも彼は舞わんとしていた。伊勢の使者を饗応きようおうして、使者が帰つても、まだ興じて、ひとり杯をあげていた昼だった。蘭丸は、つぎへ退さがつて、つづみを抱いて来たが、信長のまえに寄つて、

「ただ今、横山の木下藤吉郎どのが、御着城になられましたかと、取次のことばを、また取次いだ。」

ひと頃、浅井も朝倉も、三方ヶ原の結果によつては、大いに為なすあらんとしていたらしく、しきりに蠢しゅんどう動しかけていたが、信玄が退ひいてからは、ぴたと自領の限界にすくみこんで、国境の保守に汲きゆうきゆう々としていた。

——まず、このぶんでは。

と、当座の平穩を見こして、藤吉郎はひそかに横山城を出、畿き内ないから京地をすこしばかり巡遊していた。

どこの城将でも、またいかに戦乱でも、榮螺さざえのように、そうのべつ城のなかにとじ籠っているわけもない。

留守とみせて実は居たり、居るとみせかけて居なかったり、兵家の生活は虚実の影をつかいわけている。もちろん藤吉郎のこん

どの小旅行も、すがたをかえた微行^{びこう}で、この岐阜城へも、そういうわけから突然やつて来たものにちがいあるまい。

「やあ、藤吉郎か」

信長は、彼を別間に待たせておいて、やがて非常なきげんで上座にすわった。

藤吉郎は、ふつうの旅行者とことならない極めて素朴な身なりで平伏していたが、^{おもて}面をあげると、

「おどろ^{おどろ}きでしょう」

と、笑いながらいった。

解^げせぬ顔して、

「——何がか？」

「唐突の参上で」

「なにをばかな。そちが半月前より、横山におらぬことぐらいは知れておる」

「でもてまえが、今日これへ推参いたそうとは、御意外でございましたらう」

「ははは。そちは信長を盲めくらと思うているな。京では京の浮かれ女めとあそび呆ほうけ、近江路おうみじへ来ては、長浜のさる豪家ごうかまで、そつと於おゆうを呼んでおいて、密ひそかに会つて来たであらう」

「ははあ……」

「なにが、ははあじゃ。……どうじゃそちこそ愕おどろいたであらう」

「これは愕おどろき入りました。さすがに御主君、なにもかもお分りで

すか」

「この山は高いから十州も見とおしである。だが、信長よりは、もつとそちの行動にくわしいものがある。たれか知っておるか」

「そのようなちようじや謀ちようじや者がそれがしを尾つけておりましようか」

「そちの家内じや」

「お戯たわむれを。……ちときは御微醉ごようすの御容子で」

「酔うてはおるが、申すことにまちがいはあるまい。そちの妻は、すのまた洲股すのまたに住居しておろうが、遠いと思うと、甚だ相違であるぞ」

「いや、どうも、悪い折に伺いましたな。……どうぞもうおゆるしを」

「はははは、遊びはとがめん。ひそかに、たまたまの桜狩など、

大いによからう。……しかし長浜で落ち合うてやるほどなら、な
ぜ、寧^ね子^ねを呼んで会ってやらぬか」

「はい」

「もうだいぶ夫婦の対面もしておるまい」

「なにか……愚妻から、殿へつまらぬ書状でも、さしあげて参つたのではございませぬか」

「案じるな、そういうことはないが、信長の思いやりである。――
―そちのみならず、誰の妻も彼の家内も、戦陣となれば、長い留守となるものを、せつかく少しでも暇^{いとま}を得たら、せめて無事な顔ぐらいは、たれより先に妻に見せてやるべきが……」

「御意ですが、ちと」

「異存があるか」

「ございまする。——ここ数カ月は、四辺あたりも無事でございますが、それがし自身の気もちは、まだ寸毫すんごうも、戦陣から解とかれてはお
りません」

「口くちがしこ賢いやつ、またいらざる弁をふるうか」

「やめましょう、このへんで旗を巻いて」

主従は哄こうしよう笑する。そしてやがて、杯をとり合うと、小姓の
蘭丸らんまるまでしりぞけて、酒間のはなしは、却つてまじめに、また
小声になっていた。

「——して、近ごろ、京都の情勢はどうか。たえず村井民部より
使いは通うてまいるが、そちの観たところを聞きたい」

信長は、期待している。

藤吉郎のいおうとするのも、そこにあるらしい容子ようすであつた。

「ちと、座が遠ございまする。殿がお寄りくださるか、てまえが進みましようか、もすこし間近になりたいもので」

「わしが寄ろう」

と、信長は、銚子ちようしや杯と共に上座を降りてすすみ、

「次の間のふすまも閉めい」

と、いいつけた。

藤吉郎が立つてそこを閉めかけると、ふと蘭丸の白い顔が見えた。

「はや、日も暮れてまいりましたから、燭しよくをこれまで持参してお

きました」

すぐ、退^{さが}つてゆく。

明りを内に入れ、あとを閉めて、藤吉郎は信長のすぐ前に坐り直した。

「情勢は相かわらずです。ただこのところ、信玄入京のあてがはずれたため、室^{むろまち}町^{やかた}のお館^{やかた}は、失望のいろ濃く見えますが、公^く方^ぽ家の依然たる策謀は、いよいよ露骨で、あくまで信長ぎらいで一貫しております」

「いや、そうだろう。せつかく信玄が、三方ヶ原までまいりながら、引つ返したと聞いてはな。……義^{よし}昭^{あき}の顔が眼に見えるようだ」

「しかしなかなか政治家でいらつしやる。洛中の市民に、こせこそ恩恵をほどこしたり、暗に、信長政治を怖ろしがらせたり、叡えい山いざんの焼討ちなどは、殿そしを誹る好材料とし、いよいよ諸山の僧団を焚たきつけておるようで」

「ふうむ……始末のわるい」

「――が、御懸念にはおよびません。さすが僧門陣も、叡山の結果を見ては、しんから胆きもを寒うしたらしゅうございます。あれは徹底しております。あれだけは、御不成功ではございせん」

「洛中に逗とうりゅう留中、藤孝ふじたかには会わなかったか」

「細川どのは、遂に、公方くぼうどのに忌み厭いとわれ、どこか田舎へ蟄ちつき居よされたそうです」

「義昭將軍に退けられたか」
よしあき

「どうかして、織田家とのあいだをむすび、また両家の円満な提て携いけいこそ、室町將軍家の命脈をたもつためにも、万全の計と信じておられた細川どののことゆえ、面おもてをおかして、幾たびか義昭公を忠ちゆうかん諫かんされたものかと考えられまする」

「たれの言も、義昭の耳にははいらぬとみえる……。ちと、狂態だな」

「いやなおまだ、室町將軍家なるきのうの遺物を、過大視しておられるのでしよう。およそ時代のさかいに、過去のもの将来のものと、二つに分け去られる大濤おおなみにのつて、あぶあぶ溺れてゆくものは、ほとんどが、旧態の威力や、その遺物の未練に、世の推

移をケタ違いに見ちがえておる人々です。——その大濤からちよつと上がつて、平然と見ていれば分りきっていることでも、將軍職とか、一国とか、小城や小財力など持っている、それが重荷で、時勢の濤から這いあがつてみることもできません。思えば、あわれなもので」

「さしずめ、うごきは、そんな程度かな」

「いや、大變事があります。——申しおくれましたが……」

「なに、大變事が」

「さればです。……これはまだ世間に洩れておりませんが、例の手飼^{てがい}の乱波^{らっぱ}、渡辺天蔵の早耳ですから、おそらく信をおいてよいかと思ひますが」

「何事か……?」

「惜しむべし、甲州の巨星は遂に隕おちたようです」

「……え。信玄がか?」

「この二月、刑部おさかべから三州へ攻めに出て、野田城をとりつめておるうち、一夜、鉄砲で撃たれたと聞きました」

「……?」

しばらくは、ひとみを澄ましている信長であつた。藤吉郎の唇くちもとを見つめて。

信玄の死。

もしそれが事実ならば、たちまち天下の象かたちが変る。それほど、信玄の存在はたしかに大きい。

わけて信長には、直接的な影響をもつ。彼は、大きな衝動をうけた。なにか忽然と、うしろの虎が消え失せたこちだ。

信じたいが、信じられない気もちもわく。むしろ不気味を感じ出す——なぜならば、そう聞くうちにも、

（彼なくば——）

と、すぐ背後の安心がおこるからである。彼は、名状しようのない歓びをも味わいながら、ほど経てから、

「そうか！ ……。それが真とすれば、古今、稀なといえる、惜しむべき将が、世を去ったものだ。——これからという時代を、われらの手に委いして」

と、嘆息をもらして云った。

藤吉郎は、それを告げるにも、彼ほど複雑な面^{おも}もちではない。

食事の席について、順におはちがまわつて来たぐらいな感情しか出していなかった。

「——その鉄砲傷がですな、どこにあたったものか、即死か、怪^け我が程度か、そのへんの儀はまだ仔細にわかりません。……が、にわかには野田城のかこみを解き、甲州へひきあげた武田の士氣^{しきせい}、旌色^{しよく}というものはなかったと申しまする」

「そうであろう。甲山の将士いかに猛^{たけ}しといつても……信玄^{うしな}を亡^うつては」

「旅の途中、この報を、ひそかに渡辺天蔵からうけましたので、ふたたび天蔵を、すぐ甲州領へ放ちました。追ッつけ、もすこし

具体的に、事実をさぐって帰り着こうとぞんじますか」

「諸国にはまだ聞えわたらぬふうか」

「なんの気^けぶりも見えません。おそらく甲府一門としては、かりに信玄亡きあとも、しばらくは厳秘に附して、なお信玄健在なりとしておるでしょう。——ですからもし甲州領において、何かわざとらしき積極政策や、信玄の名を謳^{うた}うような兆^{しるし}あれば、まず十中の八、九まで、信玄の死は事実か、かろくとも重態と見てよろしいでしょう」

「ム、ウム……」

信長は二度もうなずいた。強^しいてでも肯定したいかのように。

ふと彼は、冷たい杯を手にして、人生五十年、化^け転^{てん}のうちに：

…思いうかべていた。

しかし、舞いたい気もちは、わき上がらない。

自己の死を観るよりも、彼はひとの死を観るほうが大きく心をうごかされた。そして複雑になった。

「そちの放った天蔵は、いつ頃もどるか」

「三日のまに帰りましょう」

「横山城へか」

「いや、ここへと、申しふくませておきました」

「では、それまで、そちもこれにとまりゆう逗留しておるがいい」

「そのつもりでございまするが…願わくば、旅舎は御城下にとつて、お召しを待ちたいとぞんじますか」

「なぜか」

「べつ儀もございませんが」

「では、城内に泊つてはどうか。久々の対面」

「それほどごぶさたとも存じません」

「はりあいのない男。信長のそばは窮屈か」

「いえ、実は」

「実は、なんじや」

「その……城下の旅舎に、連れを待たせておりますので、それが淋しかろうし、こよいは、戻ると約束してまいりましたので」

「連れとは、女子おなごか」

信長が呆あきれている。信玄の死を聞いて囚とらわれている彼の感傷と、

藤吉郎の心配とは、これほどな距離があつた。

「つかれもしたであらう。こよいは旅舎へ退るがよいが、明日は連れの者をも伴れて、登城いたせよ」

——帰りがけに、信長からいわれたことばである。

藤吉郎は、^{みち}途で、

「^{くぎ}釘をお打ちになつたな」

叱られたような氣もしたが、また^{すい}粹な御主君とも思う。

釘のあたまが氣にならぬよう、ほどよく美術的な釘隠しで包んでいる。

で、あくる日、^お於ゆうを連れて登城するにも、そう恐縮には及ばなかつた。

きのうと違う書院で、信長もきようは酒氣をふくまず、藤吉郎と於ゆうをならべて、上座から見た。

「竹中半兵衛の妹とか聞いていたが、左様か」
親しげである。

於ゆうは、はじめての御見ぎよけん、それに藤吉郎となので、消えも入りたげに、面おもてをふせていたが、

「……はい。お見しりおきくださいませ。兄重しげはる治へも、お眼かけていただきました。妹のゆうと申しまする」

かすかな声ほど美しい。

信長は、ながめ入って、感心していた。

その意味を、藤吉郎にすこし揶揄やゆしてやりたいような気もちが

うごいたが、罪な気がして、

「半兵衛は、その後、健在かの」

と、まじめになる。

「久しく、兄とは会いませぬ。戦陣のせわしさに……便りのみは折々にございますか」

「今、そなたは、どこに身を置いておるか」

「すこしばかり所縁の者がおりますので、不破ふわの長亭軒ちやうていけんのお城に身をよせております」

「そうか、なるほど、あれには樋口三郎兵衛ひぐちが今もおったな」

なるほど——と、いつて、特に藤吉郎の顔を見る。彼のその方の才しやうようを称揚しょうようしている微笑だった。

藤吉郎は、すこしてれて、

「時にまだ、渡辺天蔵は、もどりませぬかな」

わざと、とんちんかんをいう。これが曲^{くせもの}者である。信長はその手はくわない。

「なにをいう、うろたえて。天蔵の帰りは、三日目ぐらいと、昨夜、自分でいうたばかりでないか」

「なにさま」

藤吉郎の面が^{おもて}ひどく赤くなる。信長は、これで気がすんだらし

い。——彼が羞恥^{はにか}んで困るのをさつきから見たかったのである。

「ゆう。遊んでゆけ、ゆるりと……」

女性には当りのいい信長である。藤吉郎はうれしくもあり、時

々気ももめる。終日^{ひねもす}、いろいろに、春を暮らした。

夜に入ると、

「わしの小舞を見たことはなからう。藤吉郎はたびたびじゃが」と、夜の酒もりにも彼女を交^まじえた。そこには、奥の侍女^{こしもと}、家族の老若^{ろうやく}、重臣たちも共になる。いかにも、春の夜らしい人々であつた。

「……泊つてゆくがよい」

と、いわれたが、ゆうはお暇^{いとま}をねがった。

信長は、強^しいもせず、

「では、藤吉郎も帰れ」

と、彼にはにべなくいった。

人々に、囃^{はや}されながら、ふたりはお城を辞した。けれど、間もなく藤吉郎ひとり、あわただしく帰つて来て、

「殿は」

と、もとの酒席のおつぎへ来て、小姓にたずねた。

「ただいま、御寢所のほうへ、おひきとりになられたばかりでございます」

聞くと、藤吉郎は、いつになく忙^{せわ}しげに、またそこへ行つて、侍臣に取次を仰いだ。

「どうしても、こよいのうちに、まいちどお目通りをねがいたい儀がございまして——」と。

旧閣瓦解きゆうかくがかい

寢所にはいったが、信長はまだ衾ふすまに就いていなかった。

藤吉郎は、人ばらいを乞い、宿直とのいが遠く退さがつても、なお注意ぶかく見まわしていた。

「何事じゃ……藤吉郎」

「はッ。……おつぎの隅にまだもう一名、たれかいるようですが」
「心配なものではない。蘭丸らんまるじゃ、少年じゃ、さしつかえあるまい」

「さしつかえます。恐れ入りますが」

「いけないのか」

「はい」

「——蘭丸、そちも退れ」

ふり向いて、つぎへいうと、そこから默然もくねんと礼儀をして、蘭丸は立って行つた。

「もう、よかろう。……何か」

「実は、ただいまお暇をいただいて、麓ふもとまでもどりますと、はからずも天蔵に出あいました」

「なに、渡辺天蔵が立ち帰ってまいったか」

「昼夜もわかつたず、山越えで来たと申します。——そして、信玄の死は、うごかぬ事実とのことでした」

「……やはり……そうか」

「細かくは申しあげませんが、甲府の内輪には、さあらぬ表面のかげに、歴然たる憂色がうかがわれる由です。——はや、まちがいのないことと、お認めあつてよからうかと存ぜられます」

「まだ、喪^もはかたく、外部に秘しておるのだな」

「もちろんです」

「——と、他国は知らんな」

「いまのうちになれば……」

「そうだ、今のうちだ。……天蔵にはかたく口どめしておいたろうな」

「御念には及びません」

「したが、乱波^{らっぱもの}者などには、心のいやしい者もある。まちがい

はないか」

「かれは蜂須賀彦右衛門の甥おいですし、いささか義に感じて、わたくしに仕えおるもの、そのへんの儀は」

「でも、万一があつてはなるまい。賞はとらすが、体はこの城内にとめおいて、事のすむまで、監禁しておいたがよからう」

「いけません」

「なぜ」

「そういう人使いをいたしますと、次の大事の機会には、もうこんどのように、死に身になって働こうという気が出なくなります。——また、かれの人間は信じぬが、功によつて、賞は与えるというような扱いをすると、何かの折、敵から莫ばくだい大な利を喰らわせ

ると、それに心がうごくようになりましょう」

「では、どこへ留めおいたか」

「さいわい、ゆうも戻るところでしたから、於ゆうの女駕籠おんなかごを守つてまいれといいつけ、ちやうていけん長亭軒の城のほうへ送りつかわしました」

「夜を日について、甲州より歸つて来たのであれば命がけ。その者に、そちはすぐ、自分のおんなの送りをいいつけたのか。——それで天蔵は、そちを恨まぬのか」

「よろこんで附いて参りました。おろかな主人でも、私というものを、よく知っていてくれますから」

「そちの人づかいは、ちと信長とちがうようだな」

「なお、安心なことは、女子ながら、ゆうの側におけば、もし天蔵がひとへ機密をもらすが如き氣ぶりでも見えれば、すぐ刺^ちし交えてでも守りましょう。よく云いふくめておきましたから」

「自慢はよせ」

「おそれ入りました。つい」

「そんなところでない。——甲山の猛虎^{もうこ}が斃^{たお}れたからは、猶^{ゆう}予も

ならぬ。世上に信玄の死が知れわたらぬうちこそじや。——藤吉郎、そちはこよいのうち発足して、横山へいそいで帰れ」

「もとよりすぐ、そのつもりでしたから、ゆうも長亭軒のほうへ戻しましたので」

「余事を申すな。……わしも眠るいとまはあるまい。夜の明け次

第に出陣する」

信長の思うところは、そのまま、藤吉郎の考えていることだつた。

平常に窺^{うかが}っていた機会——かねての宿題を仕果す時は今だという直感である。

その宿題とは。

いうまでもなく、旧態の公方家^{くぼうけ}という厄介ものを始末するにある。室町幕府なる複雑怪奇な存在によつて起るさまざまな煩^{わづら}いを、一挙に解決して、中央の明朗化をはかるにある。

いうまでもなく、それに代らんとする新時代の登場者として、信長の進出は急速に実現され、翌三月二十二日、勃^{ぼつぜん}然とうごい

て、大軍いちどに岐阜城から雷発した。

湖岸まですすんで、軍はふたつに分れた。

右するは信長を中心として、にわながひで丹羽長秀の迎えと合し、大船数隻にのつて、一路湖上を西へ向つてゆくもの。

また、陸路左へさして、湖南をすすんで行つたのは、柴田、明

智、はちや蜂屋などの諸部隊である。これは堅田かただから石山あたりに、い

まなおしゅんどう蠢動している僧門内の、反信長勢力を駆逐くちくし、途中の

諸処に構築中の木戸防寨ぼうさいなどを撃砕げきさいしてゆくものだった。

はやて「疾風が来た」

「すわ、信長」

洛中のさわぎ、わけて二条御所と称となえている義昭よしあきの館やかたは、色

を失つて、

「抗戦か」

「和を乞うか」

を、にわかに評議しはじめた。

二条の公方くぼうがたでも、大きな宿題をもっていた。

それはことし天正元年の正月早々、信長から正面をきつて、義昭にぶつけてよこした十七カ条の諫書かんしょ——つまり意見書に対する明瞭な返辞をまだしていないことである。

十七カ条の諫書には、冒頭、

条々、

として以下、ひとつ何々、ひとつ何々の事というふうに、信長

が日ごろ義昭にいただいている不満、苦情、鬱^{うっ}懷^{かい}などのかずかずを、箇条書として、痛烈に弾^{だん}劾^{がい}したものであつた。

まず義昭が、二条へ入館以後も、旧態依然として、皇室にたいし奉つてすこしも勤王のころざしがないこと。

その不忠節は、前代義輝^{よしてゐる}將軍も同様であつたが、わけても当今^{しそん}至尊につかえまつる念がうすく、幕臣どもみな王事を閑^{かん}却^{きやく}しているふうがある。

——これは何事か。

と、詰問的に責めているのを第一条として、そのほか十六条にわたつて、義昭の不信、悪政、陰謀、公事訴訟^{くじそしょう}の依怙^{えこ}から、金銀の横領などにわたる私的行為の不徳までを、綿々、烈々、辞句に

かざりもなく認めて突きつけた弾劾文であつたのである。

それに対して、

「僭越だ」

義昭は充分に怒つた。

「——自分は將軍である」

落魄流寓時代らくはくりゆうぐうのひがみもある。

信長に庇護ひごされて二条に立

つたという、日ごろの氣がねも勃然ぼつぜんと反撥する。

——怯者きやうしや

の怒りは、時によると、盲目的に、すて鉢をあらわすものである。

「たれが、信長ごとき、一地方の領主に、屈しようぞ。義昭から

彼にたいして、服従をちかう理由はない」

諫書かんしょは、ふるえる手から、一擲いつてきされて、かえりみられなか

った。

信長のほうから、朝山日乗、島田所之助、村井長門守な

どが、こもごも和談のあつかいに來たが、退けて会わなかつた。

そして、その返辞のように、堅田や石山方面の——京にはいる
通路へ木戸や防寨ぼうさいを築いていたものである。

信長が待っていた「時」も、藤吉郎が計っていた「時」も、そこを押し通つて、義昭に十七カ条の返答を面詰めんきつする適当な時節であつた。そしてその時節は、ふたりの予想していた以上早く來た。信玄の死が、それを急に与えたのであつた。

いつの時代でも、亡ぶ者が、かならず抱いている滑稽こっけいな信念は、

（おれは亡ぶ者でない）

という錯覚である。

義昭將軍などは、その過ちを、もつともよく身にあらわして、

盲動派の傀儡となるに都合のよい、位置と性格の人だった。

また信長の眼からも、べつな意味で、

（あれもつかえる道具の一つ）

として見られ、尊まざる貴重扱いを、日頃うけているのであった。

しかしこの時代価値のない將軍家は、自分の値ぶみを知らないし、何を思惟するにも、知識的で、その知識がまた室町文化からすこしも出ていないのである。せまい京都だけの文化面を、日本

の様態とながめて、依然たる小策をたのみ、その恃^{たの}みを本願寺の僧団や、諸国の信長の敵なる群雄に依存していた。

信玄の死を、彼はまだ知らなかったらしい。

だから強がった。

「予は將軍家だ。武家の棟^{とうりよう}梁^{りやう}。叡^{えい}山^{ざん}とはちがう。もし信長が二条へ弓をひくならば、信長は求めて、反逆の名を負うものだ。諸国の武門がゆるすまい」

一戦も辞さぬ態度を示して、近畿の兵家に檄^{げき}をとばし、もちろん浅井、朝倉、越後の上杉、甲州の武田家などの遠方にも、急使を送って、ものものしげな防備にかかった。

信長は、情報を聞くと、

「公方どのの顔がみたいな」

一笑を、洛中に向けて、そこへは一日も軍を停めず、大坂へ出てしまった。

ふいを衝かれたのは石山本願寺である。にわかには信長の軍を迎えて、なすところを知らなかった。

しかし、信長は、

「いつでも叩くぞ」

と、いう陣容だけを示すにとどめている。兵力の消費は彼のいまもつとも避けようとしているところだった。そしてこの間に、使者はたびたび京都へ出向いている。

この正月、信長よりさしあげた十七カ条の意見書にたいするお

答えは如何いかに? ——であつた。

またそれには、強硬な最後通牒つうちようの意味もある。

よしあき

義昭としては、將軍家という司権者の立場から、自分の諸政にたいする信長の意見書などに、耳をかす気もなかった。けれどもただ十七カ条のうち二箇条だけは、強硬きようこうに迫られると、困る問題だつた。

それは第一条の、

——武門棟梁とうりようの職にあつて、王城のもとに館居しながら、

朝廷に参内もせず、王事をかえりみぬ不臣の罪。

と、第二条の、

——天下の泰平をはかり治安民福を任とする位置にありながら、

諸国へ密使を通わせ、みずから乱をつくるなど大政輔弼ほひつの身にあらまじき狂態。

とをさした二つだった。

「むだです。ただ文書や使者をもつてなさる詰問きつもんでは、到底、うけつけますまい」

摂津せつつで信長を迎えた荒木村重むらしげはそういった。また、義昭を去

つて、姿をかくしている細川藤孝も、陣見舞に来て、

「おそろく御自分の最後の日を、眼に見ぬうちは、將軍家の覚かくせ醒いなど、望み得ないことでしょう」

と、嘆いた。

信長はうなずいた。よく分っているらしい。けれど叡山でやつ

た果斷猛行を、かだんもうこうここでは用いる必要もないし、また二度も同じ手法をくりかえすほど策の乏しい彼でもない。

「京都へ返せ」

四月四日、信長は発令したが、それは単に、大兵の行列を庶民に示す運動にすぎなかった。

「それ見い。長陣はゆるさぬ。信長がまた例のごとく、岐阜ぎふに不安をおぼえ、あわてて兵を退ひいて行くことを」

義昭は、左右へ云つて、得意であつた。

けれど情報の次々とはいるに従つて、顔色を変じはじめた。

こんども洛外を通過し去るものと多寡たかをくくつていると、大坂からの沿道、示威運動をかねて、悠々と流れてきた織田の大兵は、

そのまま洛中へはいって来た。

そして、ときこえ 関の声もあげず、演習よりもしずかに、いつのまにか

義昭の二条の第をとりかこんでしまった。

「皇居にお近いから、ふと内裏をお愕かせ申してもならぬ。おどろ 肅としゆく

して、馬蹄ばてい喊声かんせいをつつしみ、ただ横着公方くぼうの罪を責めればそれ

で足る——」

と、いう信長の命令が、よく足輕のはしにまでゆき届いていた結果である。

鉄砲もひびかない。弓鳴りゆなもしない。不気味なことは、かえつ

て喧騒けんそう震撼しんかんするよりも甚だしい。

「大和やまと。どうする気だろうな？ 信長はわしを」

義昭のつぶやきに三淵^{みづち}大和守は、

「情けないお覚悟、この期^ごになつても、まだ信長の心がおわかりになりませぬか。信長はあきらかに、あなたを攻めに参つたのです」

「でも、わしは將軍であるぞ」

「乱世です、そのような御自尊がなんの恃^{たの}みになりましょう。御決戦のお肚をすえるか、和をお講じになるしかございますまい」

侍臣三淵大和守は、そう云いながら涙を溜^ためた。

細川藤孝^{ふじたか}とともに、義昭が落魄^{らくはく}していた頃から側を離れずにいた功臣であつた。藤孝が、諫言^{かんげん}いれられず、身をかくして後も、大和守はつねに左右に仕えていた。

（この辛抱は、榮譽のためでもない。保身の策でもない。明日どうなるかもわかつてゐる。——それだけに、この暗愚な將軍家を、どうして見捨てられよう）

大和守は或る折、ろくおんじ鹿苑寺の一僧に、しみじみとそう述懐したことがあつたという。——たしかに彼は、救うべからざる義昭の性情と、時代の行くところを知りながら、じつと、いまの二条の第にふみとどまつてゐるらしい眉根をしていた。年はもう五十を半ばもこえた武將だつた。

「和を乞う？ ……將軍のわしから、信長ずれに和を乞わねばならぬ理由があるうか」

「一にも二にも、將軍家なる名分にとら囚われておいであつては、こ

のまま御自滅のほかありません」

「勝てまいか、戦つて」

「勝つわけにはゆきません。勝つと思ひ召して、この第^{てい}に、防禦をなされたのなら、笑止千万です」

「では、な、なんのために、そちをはじめ、武将どもは、物々しゆう甲冑^{かつちゆう}をしたか」

「せめては、死に花をかざらんものと思ひまして。……二条の第に、^{おぼつか}覚束なくも、鉄砲をならべ、^{たて}楯をかこみましたのも、^{あしか}足利御代々のいまや終ろうとする墳墓^{ふんぼ}に、多少のさむらいはあるぞと、花を立てておるに過ぎません」

「……待て。撃たすな、へたに鉄砲などを」

義昭は奥にかくれて、日野、高岡などというよし誼みのある公卿くげと、
ひたい額をあつめて、ぎようぎ凝議ぎようぎしていた。

ひる午すぎ、日野参議から、ひそかに城外へ使いを出した。つづいて、信長方から、京都奉行の村井民部が来、夕方ちかくなつて、公式に信長の使者として、おだおすみのかみ織田大隅守 信広が見えた。

十七カ条の諫書に対して、

「以後は、条々、慎んで守るであろう」

義昭は、本心にはないことばを、信長の使者へほろ苦い顔して誓った。やむなくその日、和を乞うたのである。

信長の兵は、ひ退くもまた静かに、岐阜へ歸つて行つた。

けれど、それからわずか百日とたたないまに、改めて、その軍

はまた、二条をかこんだ。——もちろん理由がある。四月の和談以後も、義昭のやり口は、ひとつとして反省されていなかったのである。

去りゆく人々

二条妙覚寺の大屋根は、初秋七月の長雨に、蕭条と打ちたたかれていた。

信長の本営である。

こんどの出陣には、琵琶湖を例の大船で渡つて来るときから、

ひどい雨と風だった。

将士の戦意はそれがためむしろ莊重を加えている。雨と泥にまみれた軍隊が、足利家の第を厚ぼったく取り巻いて、

「いつでも」

と、命令一下を待機している形だった。

首にするも、捕虜にするも、將軍義昭よしあきの運命は、完全にもう

味方にある。信長の将士は、やがて屠殺とさつにかかる高貴な猛獸を、しばし檻おりの外から見ている感じだった。

「どうなさる思し召しですか」

「いまさらどうもこうもない。このたびはゆるさん。断乎だんこ、世に

代つて、彼に最期をつきつけるまでのこと」

「——が、將軍職です、あいての公方くぼうどのは」

「知れきつたことを」

「なお、ここでもうひとつ、御分別の余地がありませんかね？」

「ない。——もはや断じてない」

信長の声と、藤吉郎の声がもれる。

外はきょうも雨に暮れかけているうす暗い寺院の一室だった。

まだ七月の残暑にこの長雨なので、金泥の仏体にも墨絵の襖ふすま絵にもカビが生えはえそうな蒸むしあつきである。

「御分別をと願うのは、御短慮なりとお諫め申す次第ではありま

せぬ。——將軍の職は、朝廷の御任命によるもの、その官職にた

いし、畏おそれあるやに思われるのです。それと、世上の反信長党に、

將軍弑しぎやく逆という絶好な旗じるしを与え、正義を唱えさすなども、

下策げさくでないかと考えられますが」

「……ム。それもあるな」

「さいわいなことに、義昭將軍はあの柔弱ですから、もはやのがれ難い窮地とわかりきつていながら、まだ自刃もせず決戦にも出ず、この霖雨りんうに濠ほりの水嵩みづかさがふえたのを、いささかの恃たのみに、館門をとじております」

「——で、どうせいというのか。そちの策は」

「わざと一方の囲みを解いて、將軍の逃げ途みちを設けてやるのです。他国へ落ちて行かれるように」

「将来の厄介ものになりはせぬか。またぞろ、地方の武力や野心の徒に利用されると」

「いや人心は次第に義昭という人物へ、あいそをつかして行くでしよう。それが自然に分つてまいれば、將軍家が中央から追われたのも、やむを得ない成り行きと納得し、信長の処置も、正しかったのであると得心いたしましょう」

——その夕方からである。

包囲軍は、囲みの一方を解いて兵の手薄を見せた。

第^{てい}内^{ない}の公方軍は、

（計略だろう？）

と、疑っているらしく、夜半までなんの行動にも出て来なかったが、雨の小やみになった明けがた近く、突^{とつ}忽^{こつ}として、一隊の兵馬が、濠^{ほり}橋^{ばし}を渡つて、洛外に逃げていった。

「たしかにその中に、將軍家が混^まじっていたようです」

報告があると、信長は、

「そうか、空家になったか。空家を攻めても効はないが、歴世十何代、足利義昭にいたって、將軍家はみずから職を抛^{なげう}つて遁^{とんぼう}亡した。室町幕府はここに終りを告げた。一攻め押して、鬨^{とき}の声をあげろ。足利十五代の悪政のあとを弔^{とむろ}うてやれ」

と、暁の陣前へ出て云った。

二条の第^{てい}は、一押しに踏みつぶされた。館中の旧臣は、あらかた降伏した。日野、高岡の二卿も出て、信長に詫^わびを入れた。

ひとり三淵^{みぶちやまどの}大和守は、子飼の郎党六十余人と共に、最後まで屈せずに戦った。ひとりも逃げず、ひとりも降伏せず、彼以下の

六十余体は、武士の華^{はな}となつて、きれいに枕をならべて討死した。腐敗しきつた数百年の濠^{ほり}水^{みず}の底にも、なお一脈の真清水^{ましみず}は涸^かれていなかった。

義昭は京都を落ちて、宇治の槇^{まき}島^{しま}へたて籠^{こも}つたが、もとより無謀、それに敗残の寡兵である。やがて信長の追撃が、平等院の川下、川上から押しわたると、一^{ひと}支^さえもなく、捕^ほ捉^{そく}されてしまつた。

「床^{しょうぎ}几^ぎをさしあげい」

捕われて来た義昭のすがたを見て、信長は左右の将に云つた。

うつ向いたまま、義昭が、与えられた床几^{しょうぎ}へ力なく腰かけると、

「みな幕外に退^{さが}れ」

ただふたりとなつて、容かたちを正し、正視して義昭に云つた。

「お忘れはあるまいが、かつてあなた様は、この信長を父とも思ふと、仰つしやつたことがある。——二条の新館にすわられて、ひとたびは瓦滅がめつした室町御所を、からくも再興なされた欣びの日であつた」

「……………」

「お覚えか」

「岐阜ぎふどの、忘れはせん、なんであの時のことを。また、いまとも」

「御卑怯である。信長は、あなたのお生命いのちなど、こうなつても戴こうとしておるのではない。——なぜ、虚言きよげんをかまえられるか」

「……ゆるせ。わるかった」

「その御一言を聞けばよい。したが、さてさてあなたという者は、困ったお方ではある。身、將軍の職をつぐ位置にお生れありながら」

「……死にたい。岐阜どの、わしは、わしを、か、介錯かいしやくして」

「はははは。およしなさい。失礼ながら、お腹を召す作法も御存じはなからう。信長は決して、あなたを心から憎む気にもなれぬ。ただあなたの火悪戯ひいたずらは、あなたと信長のあいだに止まらず、国々へ飛び火する。庶民を苦しめます。——いや、何よりも、御宸ごしんき襟えんをなやまし奉る。その罪の大を、ちとお考えあられたがよい」

「よく、わかった」

「では、何処へなと、しばし身をお慎みあつたがよかろう。若^{わかぎ}公^みのおん身は、信長の手もとに止めおいて、行く末、お案じなきよう御養育申しあげよう」

義昭は、彼の陣所から、放たれた。——何処へでも自由にと。——つまり追放である。

義昭の一子は、藤吉郎が警固して、河内^{かわち}の若江^{わかえ}の城へ送つた。これも、恨みを恩で酬^{むく}われたというものの、ひがみきつてゐる義昭から見ると、

「ていよく、人質^{ひとじち}に取つた」

と、いう気持しかなかった。

若江城には、三好義継^{よしつぐ}がいる。義昭も一時そこへ身をよせた

が、

「ここにおいであつては、御身辺のほど、何とも、危のうぞんじます。信長は、ああ申しても、いつ心が変わつて、あなたに殺意を生じるかしれませぬ」

と、強^しいて不安がらせた。

厄介な敗亡の貴人を、家に置きたくないからである。

義昭は、またあたふたと、紀州方面へ遁^{とん}走^{そう}した。そして、熊野の僧や、雑^{さい}賀^かの徒を、しきりと煽^{せん}動^{どう}して、

「信長を討ちさえすれば、こうしてやる。ああしてやる」

などと、なお將軍の名と權威をふりまわして、いたずらに世人の嘲^{ちやうしやう}笑^{しやう}を買つてあるいた。

紀州にも、長くはいず、やがて備前のほうへ渡つて、浮田家に居いそうろう候こうしているなどとうわさされたが——以後しばらく、ようとして、その消息はたえた。

時代はここに一変した。

室町幕府の抹殺まつさつは、密雲にとざされていた天に、突とつとして、青空の肌の一部が、穴のあいたように見えはじめたともいえるものだった。

久しい、実に久しい、それまでの日本のすがたは、どうだったか。

あつてもないようなものの存在が、国家の枢要すうようなところに、名だけをもっている時代ほど、怖ろしいものはない。

げこくじょう

下剋上があらわれる。室町幕府の弱体は、余りにも、久しい前から、見すかされていた。

幕府はあつたが、統一されたためしはない。武門は武門で、各地にあつて、私権をふりまわし、僧団は僧団で、財力を山にあつめて、教権にたてこもる。そうになると、公卿もまた公卿で、びよう廟堂どうの鼠と化し、きのうは武家をたのみ、きようは僧団をおだてて、政治を自分たちの擁護に濫用する。

びようこく

僧国、武国、びようこく廟国、幕府、これがみな、ばらばらに、べつべつに、日本をわすれて私闘して来たのである。田も畑もたまつたものではない。

とよあしはらみずほくに

いたましくも、豊葦原瑞穂ノ国は、こういういなごみたいな

害虫の蝕むしばみにまかせて、荒れ放ほうだい題に国土を荒して来たといつても、そう過言ではない。すくなくも応仁の乱このかたの日本の乱れは。

そういう末期の人として、足利義昭などは、まだまだ人のよいほうといえよう。けれど捨てておけば、なお彼が、しがみついていようとした幕府、將軍職などというものの存在は、有害無益にちがひなかった。一日放置して置けば一日国家のみだれが長びく。「やったな！ 遂に」

天下の衆目は、信長の行動へ、ひとしく眼をみはった。

蒼あおぞら空を見たのだ。

けれど、密雲はまだ濃い。

「このあとをどうする？」

たれも、保証できなかった。一角の密雲がくずれると、一天すべて激変の相を呈しだすのが天象てんしょうのつねであり、地上の自然きんとう均等である。

いや天地のうごきは、激変のようで、実はまた、極めて徐々と推移しているようでもある。

ここ二、三年のまに、過去となった重要な人だけでも、指を折るとかなりある。

西国の巨藩、毛利元就もうりもととなりの死んだおとしの同じ年に、東海の雄、北条氏康うじやすが世を去っている。

しかし信長にとっては、ことしの武田信玄の死と、義昭の退場

ほど、大きな意味を含むものはない。

わけて、たえず北の後ろをおびやかされていた信玄の死は、もう彼にとって、全力を注ぐほうへ注ぎ得る強味となった。

思うに、これからの将来は、一そう戦乱が激化するだろう。

——われこそ中^{ちゅうげん}原へ。

と、室町幕府のないあとへ、旗を打ちたてて、諸国の武門が、競^{きそ}い出てくるにちがいない。

その前提として、

「叡^{えいざん}山を焼打ちし、將軍家を逐^おつた暴逆、信長を倒せ」

と、風当りを強めて来ることも疑いない。

信長は、そう観^みる。

そしてその機先を制し、かれらに何の聯携れんけいもつかないうちに、びしびしと叩いてしまふべきだと考えた。

「藤吉郎、そちはまず、身軽に先へいそいで帰れ。——いずれ信長も、近日のうちに、そちの横山城へ臨むであらうから」

信長のささやきに、

「では、お越しを、待ちあげまする」

と、それだけで、以後の方針はのみこんでいるらしく、藤吉郎は義昭の子を、若江の城へとどけるとすぐ、兵一小隊をつれて、まっ先に、近畿の戦場から北近江きたおうみの横山へひつ返していた。

信長が岐阜へ歸つたのは、七月の末。

月をこえるとすぐ、横山から早打はやうちで、

——機は熟しました。いざ。

と、出馬の催促状さいそくじょうが、藤吉郎のまずい自筆で届いて来た。

北越の山ざかいを越え、雲の峰のくずるような大軍が、残暑の七月、梁ヶ瀬やなせから田神山たがみやまを経、余吾よご、木ノ本きもとのあたりへ濛々もうもと陣地を構築していた。

越前兵。

いうまでもなく一乗ヶ谷から出てきた朝倉義景よしかげの大軍だった。この七月末。

北近江の聯盟国、小谷おだにの浅井久政、長政父子から、一鞭いちべんの飛信があつて、

「——織田の大軍が、続々北上して来る。いそいで援軍あれ。も

し救援がおそいと、当城のささえもおぼつかない」

と、あつたので、

「よもや？」

と、評議では疑うものもあつたが、何せよ盟約のてまえ、

「それゆけ」

と、急遽、一万の兵を先発し、その先発が田神山までゆくとするに、

——織田の江北こうほく攻めは事実。

と知れたので、たちまち二万余の後続軍が発向され、主将朝倉義景も、このたびこそ大事と——その陣に加わつたのであつた。

なぜこうまで、越前の朝倉が、江北の戦いに大きな震しんが駭がいをう

けるかといえ、いうまでもなく、越前にとつて浅井の北近江は、自家の国防の第一線といえる地勢にあるからだつた。

宿命の地、小谷城にいる浅井父子は、おやこそれまでも、すぐ近くの地にある横山城（約三里のあいだ）に、木下藤吉郎というものが、信長のために、たて籠つて、常に凝視のやじりを向けているので、手も脚も出ない苦境にあつたのである。

その藤吉郎が、室町幕府最後の始末がすまないうちに、しつぷう疾風のごとく畿内きなの戦場からひつ返し、また直ちに、岐阜へむかつて、

「——もう頃あい」

と、戦機の熟したことを報じて、信長の大軍をよび迎えたもの

である。

その間、実に、半月というまもない^{はや}迅さだった。

八月初旬。

信長はもう浅井攻めにとりかかっていた。

藤吉郎の案内で、かれは虎御前山^{とらごぜやま}の高所へのぼって、作戦をねりあつた。

「あれが八相山^{そやま}、宮部^{みやべ}ノ郷^{さと}、小谷から横山まで三里のあいだを、
鹿垣^{しかがき}、柵^{さく}をもつて遮断^{しゃだん}すれば、敵の出ずる道はもう一方しか
ありません」

藤吉郎はつぶさに説明する。さながら自分の庭園の設計を説くようにである。

幅三間の軍用道路が横山まで通った。城へ迫つて五十余町のあいだ高い牆壁しょうへきを作つてしまった。そして溪流の水をせき入れて、道路の安全をはかる一方——持久戦の腰を示した。もろもろの防寨ぼうさいなどもすべて、半永久的に築いたのである。

こうしたら敵も決戦に出てくるに相違ない。

と、計つたのである。

だが、智者のはかりも外はずれることがある。自己の廉恥れんちと気もちでひとを考えた時である。浅井父子は、いよいよ朝倉の外援をたのむのみで、自身から討つて出ることはしなかった。

しかし信長は、それ一策たのを恃たのんではいなかった。兵家にはかならず変通がある。かれは、俄然がぜん、鉾ほこを転じて、木ノ本きもとを衝ついた。

——越前軍へ急襲したのである。

八月十三日、その日、織田軍の手にあげた首級だけでも、二千八百余級。

十四日、十五日も、逃げくずれる敵を追つて、梁やなヶ瀬せから田た神がみ、
田部たべ、引田ひきたなどという部落部落を、残暑に乾ききっている夏草の
野を、血しおで黒くするほど駈まけ捲まくした。

「こうも弱い。越前は」

越前の心ある将士は、味方のふがいなさに哭ないた。

けれど、そういう猛将や勇士は、かならず取っ返しては討死した。なんのための弱さか、なんのゆえに織田軍に当りきれないか、ふしぎというほかはない脆もろさであつた。

亡ぶものは亡ぶ素因そいんを多分に持つて、当然な崩壊ほうかいの一瞬に來るのであるが、その瞬間には、自他共に、

——あれほどな大厦たいかが。

と意外に思う。

しかしあらゆる興亡の現象には、すべて当然があるのみで、奇蹟や不思議はすこしもない。朝倉勢の弱さなども、主將義景よしかげの行動を見るだけでも、その理由がわかる。

潰走かいそうする味方にまじつて、梁ヶ瀬から逃げて來る途中、すでに

に義景は、織田軍の猛烈な追撃に度を失つて、

「だめだ！ 逃げきれん！ もう馬もわしも疲れた。美作みまさか美作みまさか

作か、山へ」

と、反撃を試みようとする策もなければ氣力もない。ただ身一つを考えて、急に馬をすてて山中へ隠れようとしたほどだった。

たくまみまさか
託間美作という重臣は、

「そんなことでどうしますか」

と、哭^なかんばかり叱咤して、彼の太刀帶^{たちおび}をつかんで引き戻し、

無理に馬へ騎^のせて、越前の方へ落した。

そして自分は、義景を逃がすためにふみとどまり、千余の手兵をもつて、驀^{ばくしん}進して来る織田軍を、幾^{いくとき}刻かそこで支えていた。もちろん美作以下、枕をならべて、惨^{さん}憊^{たい}たる全滅をこうむったことはいうまでもない。

そういう忠誠な臣下を犠牲にしながら、義景は、本城 いちじょう 一乗

ケ谷^{たに}にこもつて、祖先の地を死守しようという気ももたなかったのである。

城へもどると、妻子一族をひきつれて、大野郡の東雲寺へ深くかくれこんでしまった。城池^{じょうち}の中にと万一の際、遁^{のが}れる道もないからだつた。

主将がその有様なので、そのほかの将卒もみな思い思いに分散した。

ひとり本城に残つた桑山清左衛門という一将は、あまりのふがいなさに、声をあげて哭^ないたという。

「藩祖^{のりかげこう}教景公このかたここに五代、越前の名門 庶^{しよりゅう}流、あわせて三十七同族、世々^{おんこ}恩顧のさむらいを養うことも何十万、それ

がいま、祖先の地を敵兵に蹂躪じゆうりんされ、本城も墜おちんとするの
に、ただひとり共に死のうとする者もないとは！ さむらいの廃すた
れか、君の御不徳か！」

清左衛門は、わずかな郎党とちかつて、寄手よせてと一戦をまじえ、
これまでと観念してひつ返すと、城内一乗ヶ谷にある歴代の藩主
の墓前で、腹を切つて麗うるわしい鮮血のなかに身を伏せた。

この父にはまた、この父の子らしい娘があつた。名は伝わらぬ
が、芳紀ほうきその時十八であつたという。

彼女は夙つとに美人のきこえがあつた。美人が多いといわれる越路こしじ
の花のうちでも、藩中第一の美人だろうと日頃からいわれていた。
けなげにも父を援たすけて城内にいたが、父の清左衛門をさがして

いるまに敵兵に捕まつてしまつた。

寄手の兵は氣が立つている。仮借かしゃくもなく引つ立ててどこかへ拉らして行こうとした。彼女は死にものぐるいに一時は反抗していたが、やがて、

「もうおてむかいはしませんから筆と懷紙を持たせてください。

乳母へ一言書きのこせば、どこへでも神妙にまいりますから」

と、哀訴あいそした。

前後をとり囲んだまま、兵が筆紙を持たせてやると、彼女は走り書きに何か書いて、それを下へおいたかと思うせつな、守り刀をぬいて、あつとまわりの者がさけぶまに、自害して果ててしまつた。

懷紙は、点々、紅梅をちらしたように染まっていたが、なお鮮^{あき}らかに乾かぬ墨の痕^{あと}が読まれた。

世を経^へなば

よしなき雲も

おほひなむ

いざ入りてまし

やま
山の端^はの月

難攻不落も、腐る時は腐る。幾万の将兵も、その根幹に精^{せい}髓^{いずい}をうしなえば、また片々たる落葉の脆^{もろ}さに似てしまう。

越前三十七門の本城はいま最期の炎をあげたが、そのなかに一輪、名もない越路の花だけが薫^{くん}々たる気を吐いた。

義景の最期は、浅ましいものだった。

信長の兵が、やがて亥山いやまを囲んだので、彼は、東雲寺にも居た
たまれず、山田の六坊へ奔り、そこはしの堅松寺けんしょうじに潜伏した。

「もはや遁のがれるすべもござりますまい。あなた様は越前三十七門
の御惣領ごそうりよう、たとえ降伏して擒人とりことなられても、信長が、お命を

助けおくわけはありません。さる生き恥をさらさんよりは……」

と、一族の魚住景賢うおずみかげかたと朝倉景雅あさくらかげまさのふたりが迫つて、と

うとう義景に対して、自決をすすめるまでの窮地となった。

もう堅松寺けんしょうじを遠巻きにして、海鳴りのような兵馬の音が、刻

々、耳ぢかく聞えていたのである。

「……だめか」

と、一言つぶやいて、義景はまっ蒼な慄えを顔に走らせたが、自分に死をすすめる二人の親族も共に死ぬものと思つて、山門の方でバリバリツという凄まじい震動のきこえた刹那、急に屠腹とふくして、俯伏うつぶした。

「お。——お果てなされた」

それを見ると、景賢かげかた、景雅かげまさのふたりは、あわてて立ち去ろ

うとした。

騙だましたのである。

しかもこの悪臣の二名は、それより前に信長へ降伏を申し入れ、義景のありかへ敵を導いていた者だった。

「おのれッ、どこへ去る？」

と、近習の鳥居某なにがし、加藤景政、小姓の高橋甚三郎などが、怒り立って、ふたりを本堂の外へと追いかけたが、時すでに遅しであった。信長の兵は、怒濤どとうのごとく寺内へあふれこんでいた。

越前一国はここに亡んだ。

かなしい哉かな、義景もまだ若かった。四十一の男ざかりだったのである。——しかも歴世の国富ようふを擁し、名門に生れ、天嶮てんけんと沃よ地くちをもち、そしてまたとない時代に遭あいながら、その生命を、実に勿体ないほど、つまらなく終ってしまった。

彼にも、足利公方あしかがくぼうの義昭と、どこか共通している錯誤さくごと性格があつたのである。時代の奔激ほんげきをあくまで甘く見て来た顯門けんもんのお坊ツちゃん——こうして次々に溺れてゆくしかなかった。

彼の死や、足利公方の亡滅にくらべると、天下の器とはいえな
いかもしれぬが、信玄の死などはもつと深く惜しまれる。

一時甲州では、ふかく喪を秘していたが、この秋、隠れもなく
知れわたって、甲州の武田信玄の在世は、もう誰も信じるものは
なくなっていた。

信玄に死なれて、一時に気を落とし、甲山峡水の勇猛も、
すっかり旌旗の色が褪せたようだ——といわれただけでも、信玄
の存在はやはり大きかった。またその為人も平時の心がけも、
義昭や義景などという修養のない若輩とは比較にならなかった。

国持大名が侍を召し抱えるのに、いわゆる武勇一徹や行儀者ば
かりを尊重する風をわらって、

「おのれの好みによつて、同じ型の人物ばかり揃え、人間をいちり一
律にみることに信玄は大嫌いである。——春は桜の色めき、秋は
紅葉もみじのいさぎよき、夏の清涼淡々たる、冬の黙々と鈍重なる、み
な人間にもある特質で、いずれを是ぜ、いずれを非ともいえない。
要は、用うる者が天体のごとく、それらの人々を自然大にうごか
せば、万ばん象しやうみな有能でないものはない」
と、語っている如きは、彼の人間観や、また家士を養う心がけ
の窺うかがえることばである。

また、彼はつねに、分別ということをよく云つた。小才や機智
を嫌つて、

「遠慮——すなわち遠おもき慮んばりを常にもつて、日々の近きを処して

ゆくのが、百難の道をあゆむ法ぞ」

と、近親に訓おしえたが、その折に、

「――が、ただ人間の寿命だけは、遠い慮おもんばかりでは及びがたい」と、云いたして、呵々大かかた笑いしょうしたことがあったという。

その及び難いところへ、彼も遂に逝いつてしまった。そして地上の圏外からこの地上の争覇そうはを、今は永遠の傍観者として、脾肉ひにくの嘆きもなく、公平に観みていることであろう。さだめし自嘲をおぼえていることであろう。

お市いちの方かた

秋もさかりである。八月の末、二十五、六日の頃には、信長はもう北きた近江おうみの小谷おだにをかこむ虎御前山とらごぜやまの陣地へ、帰っていた。

ここへ来てからの信長は、

「小谷の城は落ちるのを待て」

と、いったふうに、至極おつとり構えていた。

電光石火でんこうせっかの陷滅かんめつを与えた越前の戦後の経営も、彼は、一乗

ヶ谷の余煙がまだのぼっているうちに、体だけを、急速にここへ引つ返して、ここから何くれとなく指令を出していたほどだった。

越前の降将、前波吉継まえなみよしつぐを、豊原の城へおき、同じく朝倉あさくら

景鏡かげあきに、大野城の守護を命じ、富田弥六郎やろくろうに府中の城を――

と、いったふうに、旧領の事情に精通している旧将を多く用い、

その目附として明智十兵衛光秀だけを抑えに残して来たのである。ここには、光秀以上、適任なものはあるまい。かつて浪々の不遇時代に、朝倉家の家臣となり、一乗ヶ谷の城下にも住んでいたことのある光秀は——そして当時家中の人々から冷眼視されて、ここでも世間へ泛^うかび出せなかった過去を持つ光秀は——いま、まったく反対な立場になつて、旧朝倉の一族を監視した。多少の得意とさまざまな感慨が、光秀の胸を往来したことであろう。

それに、光秀の才識は、事ごとにみとめられて、いまや彼は、
信長の寵^{ちようしん}臣のひとりだった。

人を見るに人いちばい明^{めいびん}敏な彼は、ここ数年の戦^{いくさ}や、日々の奉公によつて、信長というひとの性格もよくのみこんでいた。信

長の顔いろ、片言、かたこと、気色など、鏡にうつして見るように、遠くにいてもわかつていた。

彼は、越前から日に数度の早馬を立てた。かりそめにも、わたくしな専断をせず、いちいち信長のさしずを仰いだ。

その文書や書簡などを、信長は、とらごぜやま虎御前山の陣所で、毎日、うららかに見ては、裁決を与えていた。

「戦も、いくさこんな戦ばかりだと、のん気なものだな」

「ばかをいえ。その心があぶない。今夜にも、どんな御命令が出るかわからん。——敵の浅井一族といつても、あの堅めをみると、存外、てづこわ手強そうだぞ」

「守りきる覚悟かしら」

「もとよりだろう。北近江六郡きたおうみ、あわせて三十九万石の本城支城が、そう将棋だお仕に陥ちるはずはない」

陣外ものどかである。哨兵しょうへいたちが雑談していた。雲もない
 一碧いつべきの空に、かさなり合っている山々の秋しゅう色しよく、その裾に見
 える湖の明るさ、ふとすると、禽とりの音ねに、欠伸あくびを誘われそうだつ
 た。

「あ。……木下様が来る」

横山城から、すぐ山むこうまで陣地をすすめている藤吉郎であ
 った。四、五人の郎党をつれて、大股に彼方かなたの沢を下りてくる。

何か、従者と笑いあっている。秋あきの陽ひに、齒が白い。

たちまち近づいて来ると、

「やあ。……やあ」

右へいう。左へ会えしやく釈する。

すのまた

洲股の城を築き、横山城をあずけられ、その任も位置も、いつのまにか、織田軍の将校中では、ざんぜん嶄然重きをなしてきた彼であつたが、まことに相変らずである。

（彼は少し軽々しいよ）

と、部将のうちでは、自分たちの重々しさにくらべて、けいこつ軽忽と評するものもあるけれど、また一部からは、

（いや、彼は、くらいま位負けしないのだ。一躍ろくだか禄高が上がつても、

きのうの彼と変らないし、おこびと御小人から士になり、また忽ち一城のうえに坐つても、あのとおりだ。まだ相当なところまで禄をこ漕ぎ

つけるだろう。——とにかくいいところがあるよ、あの男は)

と、いう評もあつた。

まずこの辺の理解者は、彼にたいして、最大な好感をもっているほうで、その数はもとより百人にひとりくらいなものだった。

ぶらりと、藤吉郎が、本陣に顔を見せたと思うと、いつのまにか、至極、簡単に信長を誘いだして、山のほうへ登って行つたものである。

「怪^けしからぬやつだ」

柴田勝家、佐久間信盛^{のぶもり}などは、營外まで出て来て、

「あれだから憎まれずともよいのに人に憎まれるのだ。どうも小^こ才^{さい}を弄^{ろう}すやつほど不快なものはない」

と、唾つばしながら、彼方かなたの沢を、信長に従ついて縫ぬってゆく藤吉郎の影を見送っていた。

「われわれに、何の目的も告げず……。諮はからいもせず」

「第一、危険至極ではないか。いくら白昼でも、ひろい山地には、敵の忍びもいる。もし遠くから狙撃そげきでもされたらどうするか」

「殿も殿。ちと……」

「いや。木下がいかん。多勢してお附添いしては、眼につくなどと、殿おもねに阿あって」

勝家や信盛以外の幕将たちも、決して快こころよくなかった。

いずれどこか、山の高所へお供して、藤吉郎が例の智弁で、なにか作戦上の献策でもするつもりだろうとは察さしられたが——そ

もそもそのこと自体が不快でならなかった。その不快は、

「われわれ帷幕いぼくの謀將を、無視しておる」

と、いうところにあるらしい。

そういう人間の機微きびは分らないのか、無関心なのか、藤吉郎は
まるで遊山ゆうさんにでもゆくような笑い声を、時々、山あいの静寂しじまに発
しながら、信長の先頭に立ってゆく。

彼の郎党と信長の従者と、あわせてわずか二、三十人の小隊で
しかない。

「汗ばみますな、山を登ると。——殿、お手を引きましようか」

「たわけたことを」

「もうわずかです」

「登り足らんな。もつと高い山はないか」

「生憎あいにくとこの辺には。……やあ、しかしだいぶ高い」

汗をふいて見まわした。

信長もそこに立った。——立ってふと、附近の谷間や沢を上から見下ろすと、いたるところに、藤吉郎の手勢らしいのが、ふかく木の間にひそんで、万一を厳しく警戒していることが分った。

「お供の衆、各は、しばらくこれに休んでおられい。これから先は、大勢ではちと工合がわるい」

藤吉郎はそういつて、信長とただ二人きりで、南の山鼻のほうへ、数十歩あるいて行つた。

そこらはすべて樹木がない。飼糧かいりょうによさそうな柔らかい穂

や芝草がいちめん（いちめん）に山肌をつつんでいる。

萱（かや）のあいだに、ちらと戦（そよ）ぐのを見ると、桔梗（ききよう）の花だった。太

刀の帯革に絡（から）むのを見ると、女郎花（おみなえし）や葛（くず）の花であつた。

一步一步、ふたりは、無言ですすんだ。海へのぞんでいるように、少しさきは何もなかった。

「殿……お屈（かが）みください」

「こうか」

「なるべく、草の穂に、お身を紛（まぎ）らわせて」

そして、這うが如く、なお断崖（だんげん）のへりまで行くと、眼の下の盆地（ひで）に、忽（こつぜん）然と、鮮（あき）らかな城（じょう）廓（かく）が望まれた。

「……小谷（おだに）の城です」

声を低めて、藤吉郎は、指さした。

信長はうなずいた。

無言のまま。

そのひとみに、何かふかい感情がつつまれている。単に、敵の本城に接しただけのものでない。

自分の大軍をもつて包囲しているこの城中には、わが妹のお市^{いち}の方が、城主の妻となつてから、もう四人の子まで生^なして、いまも暮^くしているのだった。

主従は、坐った。

秋草の花や穂が、ふたりの肩までつつむ。

眼の下^{した}の城廓を、あかず見つめていた信長は、その眼を、藤吉

郎おもての面へ向けた。

「……さぞ妹は、兄を恨んでいよう。我が意もいわせず、浅井家へ嫁とつがせたのは、この信長であつた。——国を保たもつたためには是非もない。わが家の犠にえ牲になれといいふくめられて、泣く泣く輿こしにくれて行つたお市のすがたが……。藤吉郎、いまでも信長は眼に見えるようなこちがする」

「それがしも、よく覚えております。おびただ夥しいお荷物、美々びびしいお輿。飾り馬だのお供の人々にかこまれて、湖北へ嫁がれた日の御盛事を」

「お市は、まだ十五の、何もしらぬ処おとめ女だつた」

「小さくて、お可愛らしい花嫁すがたは、王昭君おうしょうくんのようだし

た」

「……藤吉郎」

「はい」

「そちにはわかるであろう、信長の苦痛が」

「それゆえにこそ、てまえも苦慮しております」

「この城ひとつ——」

と、信長は、顎^{あご}でさして、

「踏みつぶすだんには、なんの造作もないが、お市の身を、怪^け我^がなく外に救い出そうと思うと……これは、一国の戦と、信長の煩^ぼ悩^{のう}と、ふたつにかかる難事となる。——というて、凡夫信長、そのいずれも捨てかねておる」

「ぐ無理はありません」

藤吉郎は、頭^{かしら}を垂れた。彼も情痴の所有者である。信長の感情に富むところと、彼のそれとは、理解しあうことができた。

「先頃から——いちど小谷の地形が見たい、案内せよという御内意のあつた時も、また、ここを措^おいて、さきに越前の攻略をお果しなされたのも、そのお悩みによることとは、疾^とくから拝察しておりました。——口幅^{くちはば}たい申し方ですが、てまえから忌憚^{きたん}なくいわせていただくなら、その煩惱こそ、殿のよいところと、人間の至情、何をか、臣下へ御遠慮がありましよう。失礼ながら藤吉郎は、一^{ひと}しおわが殿の御美点を、もひとつ見出したようなここにござりまする」

「そちだけだ」

信長は、舌打ちして、

「ここへ陣して、旬日をむなしくわしが過しておるを見て——柴田、佐久間、そのほか帷幕いばくの者どもも、解げしかねる顔のみしておる。わけて勝家などは、わしが愚かを危ぶみもし、ひそかに啜わろうてもおるようだ」

「殿御自身が、まだ、いずれにしたものかと、お迷いになつておられるからです」

「迷わずにおれぬ。このまま小谷の外城から、ひとつひとつ粉碎して敵の死命をにわかには制せば、浅井長政父子のものは、かならずお市を監視して、炎の底まで、ひき連れてゆくであろう」

「まず、そうなりましょう」

「藤吉郎。そちは最前から信長の心に同意とは云いおるが、至極平然と聞いておる。……なにかそちに策でもあるのか」

「ないわけでもありません」

「では、なぜ早く、信長の意をやすめてくれぬか」

「近ごろ、献策はあまりせぬことに、みずから慎んでおるものですから」

「なぜか」

「帷幕いばくには、他に人も多うございますゆえ」

「余人よじんの嫉みねたを惧おそれておるか。それもうるさいことだ。しかし要

は信長のころ一つにある。まっすぐに、所存をいうてみい。：

…いや、よい策があらば、聞かせてくれい」

「篤、御覧なさいませ」

藤吉郎は指さした。

眼下の——小谷城全廓ぜんかくを、その一指にさしていうのである。

「この城の特質は、三つの曲輪くるわがふつうの城よりも、劃然かくぜんと、

各 独立しておるように分れていることです。すなわち一の曲輪には、大殿とよばれる浅井久政が住み、三の曲輪には、子息の長政どのと、御内室お市の方様やお子たちが住まわれております」

「むむ……。あれにか」

「そうです。そして一の曲輪と三の曲輪との中間に見える一廓かくは

——あの二の曲輪は、俗に京極曲輪きょうごくくるわとよび、そこは老職の浅あ

さいげんば
井玄蕃、三田村右衛門大夫、大野木土佐の三臣が固めておるのです。——ですから、この小谷を抜くには、尾を叩くよりも、頭かしらを打つよりも、あの京極曲輪をさきにお手に入れてしまえば、両曲輪は中断され、ふたつとも孤立無援のわびしいものと相成りましょう」

「そうか。……そちのいう意味は、中の京極曲輪だけを攻め陥おとし、そのうえで計はかりをなせと申すわけだの」

「いや、それも力をもつて、無碍むげに攻め陥おとそうとすれば、当然、一と三の両曲輪からも援けを出し、お味方は挟きようげき撃げきをうけて、

勢い全体の激戦と化さざるを得ません。……さある時には、一挙にふみ潰つぶすか、退いて弛ゆるめるか。いずれにせよ、御城内にあるお

市の方様のお生命^{いのち}など、どうなるか分らなくりまする」

「それでは、どうするがよいと申すのか」

「やはり、お使いを立てて、浅井御父子に、よく利害を説いて降^{くだ}し、城も無事に、お市の方様のお身も無事に、すべて難なくお手に入れることが、戦術の第一策にまちがいございません」

「それはすでに、二度まで繰り返しておること、そちも存じておる筈じや。安藤伊賀守を予の使いとして城中へつかわし、降伏なせば、小谷の旧領は、そのまま与えようと申し遣^やり、また、恃^{たの}みとする越前も、信長の手に収められたことなど、篤^{とく}、云いつかわして見たが、浅井父子の頑^{がん}迷^{めい}、すこしも顧みようとはせぬ。依然、強がっておるのみなのだ。……その強がりは要するに、信長

の骨肉を、城中に抑おさえておるゆえ、よも無二無三には攻め得まいと、お市の生命を、楯たてとしていう強氣に過ぎまいが……」

「いや、それだけでもありません。ここ一、二年、横山城にあつて、自分がじつと観みておりますに、長政どのには、さすがに英氣もあり意地もあります。ただその意地が小さいだけですが、足利くぼう公方や越前の義景どのなどの比ではありません。……で、一いつちよ朝、ここの攻略となつた場合には、どうするが最善の策かと日頃から工夫をめぐらしておりましたので、いささかそれが今日に役立ち、もはやあの京極曲輪だけは、この藤吉郎の手に一兵も損せず、墜おとし入れてあります」

「なに？ ……何と申したか」

信長は、耳を疑った。

藤吉郎は、繰り返して、

「あれに見えます、二の曲輪です——。あの一廓かくだけは、もうお味方に収めてございますゆえ、御安堵ごあんどあそばすようにと申しあげたのです」

「まことか。……それは」

「なんで殿に、この折、そのような戯たわむれを申しましょう」

「……が。信じきれぬ」

「ごもつともです。その真実はすぐお分りになりました。ただ今これへ、一名の僧と、一名の老将を呼び迎えますから、これにてお会い下さいましょうか」

「何者じや。そのふたりは」

「ひとりみやべぜんしやうぼうは宮部善性坊というもの。もう一名は京極曲輪をあずかる老臣の一人、大野木土佐守にございます」

藤吉郎は手を振った。

かなた彼方からひとりの士卒が、草のなかをかが屈み腰に駈けてくる。近くへ呼んで、何事かいいつけ、

「はやくせい」

と、すぐ追いやった。

そして信長に向い直して、

「ただ今、呼びにやりました。やがてこれへ連れて見えましょう」と、いう。

信長は意外な面持おももちから解とかれなかった。この男のこと——とは充分に信じてもいるが、なお、どうして浅井家の老臣などを、自由にこれへ拉らっして来るか、ふしぎな念を消しきれなかった。

だいぶ間がある——

そのあいだの座談として、藤吉郎は事もなげに、ふしぎでない理由を打ち明けた。

「横山の城を、殿から賜わってから、間もない頃のこと——」
と、彼は云い出すのである。

信長はいささか愕おどろいた。まじまじとそういう彼の顔を見つめずにいられない。

横山城は、前線の要地なので、特に、浅井、朝倉の抑えとして、

藤吉郎の隊を籠めさせたものである。暫定的な駐屯の意味で命じたおぼえはあるが、城地をやると約束した記憶はない。

いつのまにか、藤吉郎のほうでは、貰ったようなことをいつている。——だが、この際だし、あとの話に、心をひかれている信長とて、ケチなことを糺してもいられなかった。

「その頃とは、叡山攻めのすぐ翌年、そちが岐阜へ年賀に見えた春さきのことか」

「さればで。——その途中、竹中半兵衛が、今浜のあたりで、発病したりなどいたし、予定がおくれて、横山へかかったのがもう夜にはいつておりました」

「長物語りは聞いている心地もせぬ。要をはやく申せ」

「それがしの留守と見、横山城は夜襲をうけていました。もとより直ちに撃退しましたが、その折、生擒いけどった敵方の勇僧に、宮みやべ部善性坊ぜんしやうぼうなるものがおりました」

「生擒いけどりのものか」

「そうです。首にするところ、以来、ねんごろに養つておき、暇ひまをみては、時勢の将来を論さとし、武門の本義を訓おしえなどしておりま
すうちに、彼のほうから進んで、旧主大野木土佐守を説き、また
土佐守から他の老臣を説かせ、まったく手前に帰伏しておる次第
でございます」

「まったくか」

「戦場に戯言ざれごとはございません」

「うう……む」

感服という度をすこし超えて、彼の遠い要意と、またそのあいだ閃めいて^{ひら}いる狡さに、^{ずる}信長もあきれ顔であつた。

戦場に戯言^{ざれごと}はない！

大言したとおり、間もなく、宮部善性坊と大野木土佐守は、藤吉郎の家来に導かれてそれへ来た。

遠く、草のなかに、ふたり平伏して、信長に謁^{えっ}した。

信長は、なお、藤吉郎のことばに相違ないか否か、二、三のこととを土佐守に質^{ただ}した。

土佐守は、つつしんで、

「自分一存の降伏にはございませぬ。京極曲輪につめおる他の二

老臣も、お敵対は愚^ぐ、かえつて、主家の滅亡を急がせ、領下の民をいたずらに苦しめるものと、ふかく反省いたして、木下殿まで、誓紙^{せいし}をさしあげてあるとおりに所存をかためております」

と、明らかに答えた。

「誓紙まで持つておるのか」

信長が、顧みて訊くと、

「もとより白紙のまままで殿のお耳へ入れる気づかいはございません」

笑つて彼は答えた。

まもなく信長は山を降り、藤吉郎と善性坊は横山の陣地へ。また大野木土佐守ひとりは、小谷の二の曲輪へ、間道づたい、ひそ

かに歸つて行つた。

母の戦い

ながまさ
長政はまだ若い。

妻のお市いちの方かたとのあいだに、もう四人の子を生なしているが、その妻もまた二十三、四。彼もまだ三十には一つ欠ける。

ひろい小谷おだにの地を三分して、一劃かくごとに一城を築き、長政はその三の曲輪くるわにたて籠こもっていた。小谷城とは、三城あわせた総称である。

たそがれ頃まで、南の狭間はざまで小銃の音がかなり烈しく聞えてい

た。時折、格^{ごうてんじよう}天井もゆすれるような大鉄砲の音が交^まじる。

「才オ……」

お市の方は、怯^{おび}えたひとみを、思わずあげて、ひしと、ふところの児を抱きしめた。

まだ乳の離れない達^{たつひめ}姫であつた。

風もないのに、煤^{すすみ}を吐いて、ゆらゆらと火色の変じる短^{たんけい}檠のあかりを見て、

「……怖いッ」

「おかあ様」

と、右のたもとへ、次女の初姫がすがると、ひだりの膝へも、長女の茶^{ちやちや}々が、だまつて、しがみついた。

さすがに、もうひとりには男だけに、まだ小さいが、母の膝へは来ない。そばづか側仕えの侍女こしもとをあいてに、棒などをふり廻していた。長政の嫡子ちやくし、万寿丸まんじゆまるだった。

「見せてよ。いくさを見せてえ」

万寿は、だだをこねていた。侍女を、やじり鏃のない矢柄やがらで打っているのだった。

「……万寿。なぜ召使を打ちますか。いくさ戦は、お父さまがなされています。戦のあいだは、おとなしゅうしているのが、よいお子ぞと、お父さまの仰つしやったことを、もうお忘れか。……郎党たちに笑われたら、大きくなっても、良い大将になれませぬぞ」

母のいう理も、ことわりすこしは分る年ごろである。默然もくねんと、聞いて

いたが、急に、

「戦いくさを見たあい。いくさを見たあい」

大声で駄々泣きをはじめた。

侍役もりやくの者も、もてあましてただ眺めていた。そのあいだにも

——だいぶ小歇こやみにはなつて来たが——ばちばちと、小銃の音は
きこえてくる。

長女の茶々は、もう六歳か七歳ごろ。

父の苦境や、母のかなしみや、一城の将士のもっている敵愾てきがい
心しんなども、女の子だけに、なんとはなく分っていた。

少女おとめにしては、ませたことばで、

「万寿まんじゆ。わからないことをいうものではありませんよ。おかあ

様がおいといいと思いませんか。お父さまが、敵と戦っているのがわからないんですか。……ねえ、おかあ様」

弟を、たしなめると、万寿はこつちを見て、

「なにを」

矢柄やがらをふりかざして駆けだして来た。茶々を、打とうとするのである。

「この、お茶ツぴーめ」

茶々は、袂たもとをかぶって、

「あれツ……」

と、母のうしろへ隠れた。

「およしなさい」

なだめて、お市の方が、矢柄を取りあげ、静かにまた云い聞かせていた時である。

登音も荒々しく、

「なんじやツ、織田ごときが！ …… ついこの頃尾張の片田舎から時を得て、のさばり出た小侍にすぎないツ。信長風情ふぜいに屈するわしか。浅井の家はすこしちがうぞツ」

聞えわたるような声を放ちながら、どやどやと、二、三の武将をしたがえてはいつて来た人がある。いうまでもなく、この深しん殿でんへ、そうして無断に来るひとは、浅井長政のほかにはない。

「……才才、みなこれにいたか」

ほの暗い短たん檠けいのあかりにしては、洞然どうぜんと広すぎるこの一

間に、無事な妻子のすがたを見出すと、彼は、やはりどこかではつとしたように、

「あ……少しくたびれた」

どかと、坐つて、すぐ鎧よろいの一部を脱ぎ、うしろの部将たちへ向つて、

「その方どもも、すこし休め。……たそがれの様子では、こよいの夜半あたり、敵は夜襲に出て来るかもしれぬ。……今のうち休んでおくがよい」

と、息もあらあらしく云つた。

部将たちが立ち去ると、長政の心は、何かほつと息づいた。――戦いくさの中にも、ここでは家庭の父であり良人である自分を、ふと

見出したからである。

「夫人。……怖ろしかったか。夕方の銃つっおと音は」

お市の方は、子たちに囲まれながら、白い顔を横にふった。

「いいえ……。ここにおりますからにはなにも」

「万寿も、茶々も、泣き怯おびえはしなかったか」

「お賞ほめくださいます。みなおとなでございました」

「……そうか」

強しいて笑顔を見せて、

「安心せい。執しつこく奇襲して来た敵も城中からのつるべ撃ちに麓

のほうへ潰かい走そうした。……たとえこの後、幾十日、いや幾百日、

織田の大軍が襲よせようと、屈する長政ではない。浅井一族では

ない！ ……。信長ごときに」

唾^{つば}するように罵^{のの}したが、急に口をつぐんだ。

短^{たん}繁^{けい}のあかりに反^{そむ}いて、お市の方が、ふところの乳のみへ顔を埋めたからである。

——信長の妹！

長政の感情が揺れた。どこやら信長に似ている面^{おも}ざし、肌^き目のよい頸^{うなじ}から横顔の面長な線も、織田家の血液にある特質だった。

「夫人^{おく}。泣いておるのか」

「いえ、泣いてなど、おりませぬ。……乳の出ぬせいか、姫が焦^しれては、時々、乳くびを噛みますので」

「乳が出ない？ ……」

「ええ。この頃になつて」

「ひと知れず、悲嘆を抱いておるせいだ。そなたの瘦せが目だつて来た。——そなたは母だぞ。母の戦いくさだぞ、そなたの役は」

「わ、わかつて……おりまする」

「むごい良人と思うであらうな」

憤然と、格ごうてんじよう天井を仰ぐと、彼女は、子たちを抱えたまま良

人のそばへ身をすりよせた。

「……思いません！　なんでお恨みなどいたしましょう。……何もかも宿命と観じておりますから」

「ただ宿命というだけでは、おたがい人間、諦あきらめきれるものでない。つるぎを呑むより辛かろうが、武将の妻、もつとはつきり理

解をもて。そのうえの覚悟でのうては、まことの覚悟とはいえぬ」

「その理解を、持ちとうございます。……けれど、女子おなごのあたまでは、自分は母ぞ、と思うのがいっぱい」

「無理もない。平常、世上の知識も、表むきのことも聞かせず、いきなり解わかれと申しても。……今は話そう、はつきりと」

「……………」

「夫人おく。わしはそなたを娶めとる初めから、そなたを末長く契ちぎる妻とは思ひ得なかつた。父久政も、浅井の嫁とはゆるさなかつた」

「えッ……なんと仰つしやいましたか。いまの、いまの仰せは」
 「かかる時こそ人は真実を吐くものだ。またとない折、長政はそなたに、心を打ち割つてみせるのじや。乱世の武人の表裏さばうと詐謀

のむずかしさ、また人間的な苦しさ……。いま世の裏を教えるの
じゃ。悲しまず、疑わず、落着いて聞け」

いまにもわつと泣き伏しそうな彼女の面おもてを見つめながら、長政
はそう宥なだめて、

「信長が、そなたを、この長政に嫁とつがせたのは政略以外のなにものでもない。読めていたのじゃ、初めから信長の心はの」

と、語を切つてすぐ、

「だが——それと知りつつ、わしとそなたのあいだには、もう何
ものも断たてぬ愛が生じた。いつか四人の子が生れた。ここに至つ
て、そなたはもう信長の妹ではない。長政の妻だ、長政の子の母
だ。……敵の信長に、なみだをもつことは許さん。なぜ、そのよ

うに痩せるか、子にあたえる乳を渴^からすか」

今になってみると、あらゆる運命の結果は「政略」という呪符^{じゆふ}から始まっている。

政略の花嫁——お市の方を娶^{めと}った初めから、長政は同時に信長をも、

政略に富む男。

としか見られなかった。

政略も、もちろんあった。しかし信長は、心から妹^{むこ}婿^{むこ}の長政を愛した。初めから愛していた。

長政は、弱冠の十六歳に、もう将として陣頭に立ち、度々、南近江の六角承禎^{ろっかくしょうてい}を破ってその領土を拡張し、信長がこの地方

に驥足きそくをのぼしてきた頃には、浅井家の領土は、愛知川えちがわを境とするほど、目ざましい進出を遂げていた時だった。

（浅井の息子には将来がある）

信長はこう観みた。

彼の武勇を見こんだのである。

で——妹をと、お市の方の縁談は、彼のほうから熱心に浅井家を説いて、成り立ったものだった。

しかし、その結婚には、初めから、無理があつた。

なぜならば、越前の朝倉家と浅井家の親密は、三代にもわたっている。単に、攻守同盟というだけではない、旧恩の關係もある、そのほか複雑な交誼こうぎも入りくんでいて、断きるに断れない間がらで

ある。

ところが、その朝倉と織田は、年来の敵国だ。

信長が、岐阜の斎藤を攻略するにあたって、いかに邪魔したか、いかに斎藤方を援けたか。それだけでも、双方の感情はわかる。

（いや、そのことなら、何の御憂慮にも及ばぬ。信長が一札入れ申せばよろしかろう）

と、縁組の妨さまたげに対して、信長は信長らしい解決を計った。

朝倉家へ一札、誓紙を入れたのである。ゆく末とも、朝倉領には兵を入れぬという約やく定じょうだった。

朝倉義景は、それをとって置いて、ひそかに長政の父久政へも、彼へも、

(ゆめ、お心をゆるし給うな)

と、警戒を与え、つねに信長の野心と行動を、裏面から報じた。若い長政は、新婚早々から、何も知らぬあどけない妻を、強いてそう見るべく、父からも、旧恩のある朝倉家からも、のべつ励まされていたのである。

そのうちに、朝倉と足利公方くぼうとの、密盟がむすばれ、甲州の信玄とも、叡山とも、あらゆる反信長聯盟の構成のうちに、いつか長政もひきこまれていた。

その、のろしを揚げたのが、過ぐる年、信長が越前の金ヶ崎に攻め入った時である。

ふいに、うしろを衝いたのだ。遠征の信長の退路を断ち、朝倉

家と呼応^{こおう}して、かれの全滅を計ったその時に、

（政略の妻には惹^ひかれぬ）

と、長政は、その態度を、信長へ明らかにしたのである。

信長は、その折、

（嘘だろう）

と、疑ったほどだった。

自分が、長政を愛している真情にたいして、ありえないこととしたのである。

以来――

信長が見こんで、妹をさえ嫁がせた長政の武勇と浅井の勢力は、かえって、足もとの火となり、鎖^{くさり}となっていた。

そして遂に今。

一挙、越前を屠^{ほふ}ったあとの小谷城は、もう火でも鎖^{くさり}でもなくなつた。どうするも、信長の胸ひとつにある。

けれど今なお、信長のほんとの胸には、長政を殺したくない気持ちがあつた。——もとより長政の武勇も惜しんではいるが、より以上妹にたいする愛情の悩みであることはいうまでもない。

ひとは不思議に思つた。

^{えいざん}

叡^{えいざん}山の焼討ちでは、魔王と呼ばれることも辞さなかつたあの

殿が……と。

まだ朝霧がふかい。

大きな太陽が、山の肩へ、のツと昇っているが、小谷の盆地からは、四山の山^{やま}壁^{ひだ}も霧で見えなかった。

浅井が城は

小さいな、小さい城や

ああ、よい茶の子

ささ、^{あさちや}朝茶の子

そう遠くはない。どこか霧のなかでする声だった。それも、ひとりふたりのものでなく、多勢の合唱と手^て拍^び子^{ようし}である。踊っているのかとも察しられる。

「どこだろ」

「なんである？」

子どもは早い朝起き。――寝所からとび出すと、大廊下を駈けめぐり、声をめあてに、茶々も万寿も跣足で庭へとび降りた。そして、城廓じょうかくのはずれまで行つて、北のほうを、眺めていた。

「いたいた。あんな所で踊っている、歌っている。たくさんに」
万寿はうれしかった。

姉の茶々も、

「どこに、どこに」

と、眼をつぶらにする。

北の山の中腹である。雲の断れ目きのように、ぽかと、そこだけ霧がはれて、陽のあたっている所がある。

ちようど、大仏の膝のような阜^{おか}だった。

明らかに、敵である。一小隊ほどな信長方の兵が、朗らかに、秋の朝を、囃^{はや}しているのだった。

「やあーい。聞えぬか」

と、どなっている。

そしてまた、一斉に。

浅井が城は

小さいな、小さい城や

ああ、よい茶の子

ささ、朝茶の子

すると――

茶々と万寿のふたりの上で、いきなり小銃の音が、パンパンパンとつづけざまに響いた。

やぐらはさま 櫓の狭間から彼方かなたの嘲弄者ちやうろうしやの群れへむかつて、つるべ撃ちを喰わせたのである。

「――怖こわッ」

茶々は、うつ伏して、耳をふさいだ。万寿はさすがに男の児である。仰向いて白壁の狭間に這う弾たまけむりを見あげていた。

歌の声はやんだ。

敵の影も、霧にかくれた。

「……いなくなっちゃった。つまらない」

万寿はまだ見ていた。うしろの方で、乳母と母の声がした。

お市の方は、さつきから見あたらない二児をここに見出して、

「……まあ！」

と、さも胆きもを冷やしたように絶叫をもらし、

「あぶないッ。なんでこのような所へ」

彼女は、茶々をかかえ、乳母は万寿をひっぱって、半ば叱りながら本丸のほうへ連れもどつた。

「なにしている」

良人の長政は、一群れの老臣や部将と共に、無念そうな唇くちをかんで突つ立っていた。

「御城外の歌声に、和子わこたちが釣られて、あの遠くに身を曝さらし、おもしろげに見ておりましたので……」

「……子どもだのう」

と、長政は苦笑して、

「奥へつれて行け」

「……はい」

「いや、待て待て。ほかの子も抱いて、その辺りから、見物しておるがよい、寄手のやつ輩ばらも、長陣に倦うむまいとして、戯われておるものを、鉄砲で返答するも、ちと狭きよう量りようじゃ。……和子わこたち、いまよいものを見せてやるぞ」

長政は、雑兵をあつめて、敵方へ歌い返せといいつけた。籠ろうじ

城ようの退屈に、やや倦うみかけていた城兵は、よろこび勇んで、

浅井が城を

茶の子と仰つしやる

赤飯せきはんちや茶の子

強こわちや茶の子

と、大声あげて歌い出した。

城兵が歌い囃はやすと、

「やりおるぞ。敵も」

と、寄手の兵は、また以前の山にすがたを現わして、

浅井が殿は

熟うれ栗の実

棘とげのよろいに

可愛かわいもの抱え

揺るるも恐こわや

ああ、落ちかぬる

憂い身かな、憂き城かな

もとより即興——口まかせである。敵の一踊りがしずまると、城内方も負けずにやり返した。

信長どのは

橋の下どろがめの泥亀

ひよいと出て、ひっ込み

ひよいと出て、ひっ込み

首うまわざの巧うまさよ

こんど出たら取ろ

茶せん首

どつと笑う。

彼方の山までこだま嚮する。

それを機きツかけに、その日の小銃戦はまた始まった。いま歌っていた兵、いま踊っていた兵が朱あけにそまって、ばたばたと傷つき始める。

こういう毎日の生活のなかに、お市の方は、四人の子をかかえ、彼女は彼女の戦いを心のうちで血みどろにしていた。

谷間をわたるひよどり鶉の声に、秋は日ましにふかくなる。城草の露もしとど冷たい或る朝だった。

「――殿ツ、一大事ですぞ」

いつにない藤掛^{ふじかけ}三河守のあわただしい声がした。

子や妻の紙帳^{しちよう}に近く、夜はやすんだが、長政は、具足も解い

たことはない。

「三河。何かッ」

すぐ寢所を出た彼の声も、あやしく息が弾^{はず}んでいた。

朝討^{あさうち}！ そう直感したのである。だが、三河守の告げた異変

は、もつと重大であつた。

「二の曲輪——あの京極^{きよごく}曲輪^{くわ}が、一夜のうちに、信長方の軍に占め^しられておりまする」

「な、なに？」

莫迦^{ばか}な！ ——と、いわぬばかりである。

「お疑いはまず措かれて、櫓の上より篤と、殿にも」

「そ、そんなはずは、ありえない」

望楼ぼうろうをのぞんで、彼は駈けのぼった。

真つ暗な階段で、いくたびか躓つまずいたほどである。

櫓に立った。

京極曲輪とは、かなり距離があるが、ここに立てば、眼の下と
いつてもいい。

見ると。彼方かなたの城頭には翩々へんぺんと、いく条かの旗幟きしが流れてい
る。

その一旒すしでも、浅井家の臣、大野木土佐や三田村右衛門や浅井
玄蕃げんぱのものではなかった。

しかも。

燦^{さん}として、朝空に誇っている馬^{うま}印^{しるし}の一つは、明らかに、敵

方の将校、木下藤吉郎の陣地を証明しているものだった。

「裏切ったか。老臣どもは浅井家を去ったか。名を惜しまぬは去れ。勝手だッ。こうなつては、われをわれの思うままに生かすしかない。よしッ、見せてやろう。信長に。いや天^{あめ}が下^{した}の武門すべてに。……浅井長政の生き方を」

彼はもう微笑すらその面^{おもて}に持つことができた。

説客^{せつきやく}

——默然と、長政は、三重櫓やぐらの暗い階段を下へ降りて行つた。

あとに続いてゆく臣たちの眼にも、なにやら、ふかい地の底へでも——こうして供に従ついてゆくようなこころがした。

「な、なんたることだッ」

真つ暗な階段の途中で、ひとりの部将が、泣いているような声でさけんだ。

「——大野木土佐、浅井玄蕃げんば、三田村右衛門など、三人もそろつて、お味方を裏切るとは」

すると、呻うめくように、また他の一名が、

「身、老職にありながら。……しかも重要な京極きょうごく曲輪くわを、預けられておるご信望をも、むざと、ふみにじつて」

と、悲涙して咽むせぶと、

「に、人非にんびにん人めツ」

ひとしく、唇をかみ破つて、三老の不忠ののしを罵った。

長政が、うしろを向いて、

「やめい。……愚痴は」

と、いったとき、一同は階段を降りきつて、やや明るい、いちばん下の広い板敷の間に立っていた。

巨大な檻おりか、牢獄のような頑丈さである。ここにはたくさんな負傷者が筵むしろを敷いて呻うめいていた。

長政が通ると、仰臥ぎようがしていたさむらいも、起きあがつて、両手をつかえた。

「犬死にはさせんぞ。——あだには死なせんぞ」

長政は、右へも左へも、そういつて通つた。

外へ出ると、かれの^{まぶた}瞼にも、泣いたらしい^{あと}痕が見えた。

けれど、彼はかたく、部将たちへむかつて、愚痴を禁じた。

「敵に^{くだ}降るも、長政に^{じゆうん}殉じるも、去^{きよしゆう}就は各が選むところで、

いたずらに^{のし}罵るべきでない。——この戦い、信長にも名分あり、

長政にも名分がある。彼は、天下の改革をこころざし、長政は、

武門の名と義に^よ拠つて戦うのだ。そちたちも、信長に降るがよし

と思うならば信長に^{はし}奔れよ。敢えて、止めはせぬぞ」

そういつて、諸所の防備を見まわるため歩き出したが、その足数が、百歩とならないうちに、またも彼にとって、京極曲輪を失

った以上の大変が報じられて来た。

「殿ツ……と、殿ツ。……無、無念ですツ」

と、彼方かなたから朱あけにまみれた姿で駆け転んで来た一部将の口からであつた。

「おうツ、休太郎ではないか。いかがいたした」

長政は、何か、不吉な予感に胸をうたれた。湧井わくい休太郎は、三の曲輪の侍ではなく、父久政の侍臣だからである。

「たつた今、大殿には、御自害なされました。……こ、これまで、敵のあいだを斬りぬけて、お遺物かたみを持ち参りました」

と、休太郎は、べたと、ひざまずいた。そして苦しげな息の下から、久政の髻もとどりと、それを包んだ小袖とを取り出して、長政の手

にささげた。

「やツ？ ……。では、二の曲輪のみでなく、父上のおる一の曲輪もはや落城したか」

「まだ夜も明けぬうちでした。京極曲輪の間道から一隊の兵が城門の外まで参つて、大野木土佐守の旗さし物を打ち振つて、土佐守でござるが、火急に大殿へお目にかかりたい儀があつて罷りまかこした、門をひらかれよとの声に、味方とばかり信じて何気なく城門をあけますと、とたんに、多勢の兵が、ふいを衝ついて、奥の丸まで斬り込んでまいりました」

「そ、それは……敵であつたのか」

「木下藤吉郎の手勢が大部分でしたが、道案内の者や、旗を振つ

た者は、まぎれもなく裏切者の大野木が家来どもでした」

「ううム。そして、父上には」

「最期まで、よくお働きあそばして、自身、奥の丸に火を放^かけ、御自害なさいましたが……そこへ躍りこんで来た木下勢が、忽ち、火を消し止めて、あくまで静かに、城中を掃^{そう}蕩し尽しました」

「そのためか。……火の手も煙も見えなんだが」

「もし、一の曲輪に、火の手が揚つたら、三の曲輪の人数が、直ちに城門をひらいて加勢に出よう。——加勢はやむを得ないとしても、大殿の御最期と共に、あなた様以下、奥方さま、和子さま達までも、火をはなつて、炎のなかに御自害なさりはせぬか——それを敵は、いたく怖れての作戦かと考えられまする」

休太郎の氣息は、そこまでが、いっぱいであつた。突然、大地に爪を立ててもう一声、

「お、おわかれ申しあげます」

と、いったのが終りで、がくんと、手をついたまま地面へ顔をぶつけた。斬り死にしての戦死よりも多くの苦闘に剋^かつて死んだ。

「……一魂、また逝^ゆく、ああ壮烈な散^{はな}る華ではある」

誰か、長政のうしろで、つぶやく人があつた。そう嘆じて、また低く、

「——なむあみだぶつ」

数珠^{ずず}の音がした。

ふりむくと、木ノ本の雄山和尚^{ゆうざんおしょう}が、そこに佇^{たたず}んでいた。彼

の淨信寺じようしんじというのが先頃の兵燹へいせんに会つたため、小谷の城中へ来て共に籠城していた。

「……大殿も今朝がたはや御最期あらせられたそうな、お察しもうしあげる」

雄山がいうと、

「和尚。おたのみがあるが」

長政はわりあい乱れずに云つた。ことば静かなほど、悲調はおおいようもないが、

「——次は長政の番でござる。ついては、生前のうちに、家中一統をあつめ、形ばかりでも、葬儀を営んでおきたく思う。——この小谷の奥曲おくまがり谷に、かねて和尚からいただいたおいた戒かいみよ

名^うを刻んだ石碑が建つておる。あれを、ご苦労ながら、城中へお運びくださるまいか。僧のあなたが通るなら、敵もだまって通すでござろう」

「承知いたしました」

和尚は、すぐ去つた。それとほとんど入れちがいに、

「不破河内守^{ふわかわけのかみみつはる}光治」というものが、御城門の下まで参りましたが」と、部将のひとりが、駈けて来て告げた。

「不破河内とは、何者だ」

「織田殿の直臣にござります」

「敵かッ」

と、唾^{つば}するように、

「追い返せッ。——信長の家臣などに、長政、用はもたぬ。帰らねば、城門のうえから、岩石でも、喰らわせてやれ」

長政の意を体して、城門のさむらいは、すぐ駈けもどつて行つたが、また、他の部将が来ては、

「なんといつても、敵方の使者は、城門の下に立つて、帰りません。——戦は戦、交渉は交渉、一国を代表して来た使者にたいし、礼を執らぬ法やある——などと抗議を申し立てておるのみで」

長政は、聴く耳も持たぬと、いわぬばかりに、顔を振って、

「脅しつけて、追い払えというに、相手の抗議などを、何で取次

ぐか」

と、罵つた。

そこへまた、他の一将が来て、

「いや、ちよつとでも、会つておやりなされるが、戦陣の慣^{なら}いかと思ひます。浅井長政は逆上して、敵国の使者を引見する余裕すら失つた——などと取沙汰されては、必然、御不利かとぞんじられまするし」

彼の一徹を、諫^{いさ}めるような口吻^{こうふん}であつた。

「では、通せ。とにかく会つてだけやろう」

「はッ。では何処へ」

「あれへ誘^{いざな}え」

長政は、武者溜^{だま}りの大床^{おおゆか}をさして、自分の身も、大股に運んで行つた。

取次いだ部将やさむらい達は、反対なほうへ駈けて行つた。

そして、織田家の使者に、城門をひらいた。

その門から、平和のはいつて来ることを望んだのは、浅井家の城兵中、半分以上はあつた。

かれらとて決して、長政に心服していないではなかったが、長政の唱える義と、戦の意義は、まったく小乗しょうじょう的てきで、越前との関係とか、信長への単なる反感とか、それに絡からまる意地といったようなものが中心であるのに対して——とにかく信長の唱える志とその覇業はぎようとは、くらべものにならないほど、大きなものであることが分つていた。いわゆる大乘に立つか、小乗よに拠よるか、を彼らも考えさせられたのである。

それも。

この小谷の城が、牢固ろうことして、不拔の強味を持つていている今までは格別だが、すでに一の曲輪くるわも、中の曲輪も墜おちて、孤塁こるいら落莫くぼくの一城にたて籠かこつて——どう勝目があるうか。死にがいがあるか。考えずにいられなかった。

だから織田家の使者にたいして、彼らのあいだには、どこことなく待つ者を迎えたような空気を示した。——通された使者の不ふわか破河内守わちのかみは、城内の大床の間で、長政と対した。

はり繞めぐらした陣幕のすそに沿って、露骨に敵意をあらわした眼や、頬骨や、ざんばら髪や、負傷した手を首に吊っている者やらが——恐い顔をそろえて、みな河内守を凝視していた。

河内守は、そのなかで、甚だ温厚な物ごしで告げた。これが武將かと疑われるほど、彼は、物やわらかな人がらであつた。

「主人信長の御意を、ぎよいそのままにお伝えいたします。——おそらく長政どのには、御無念でおわそうと、まず仰せられてでござる」

「戦場だ、お見舞の世辞などに及び申さん。要用だけを聞きおう」

「朝倉家に対する御義心のほど、さすがなお心根と、主君信長にも御敬服を払つておいでなされますが、それもこれも、朝倉家が存立しておればのこと。——今日、越前もすでに亡び、その越前と浅からぬ足利公方あしかがくぼう殿にも、京を去つて遠く退去し、おんえん恩怨すべて過去となつた今、何を好んで、織田浅井の御両家が、戦わね

ばならぬ理由があるか。……まして、あなた様からは義兄。信長様からは愛^{いと}しい、妹^い智^とたるあいだにありながら」

「せつかくだが、それは毎度のはなし。和議なれば、いくら手を換え品を代えても、断じて、おことわりする。無駄口をいわるるな」

「……でも、失礼ながら、もう御開城のほかはありますまい。これまでにお戦いあれば——武門の面目も立派におたてなされたというもの。いさぎよく、城地をお渡しあつて、あとあとのお栄えを講じられてはいかがですか。——そうなされば、信長様にも、決して粗末にはできぬ、大和^{やまと}一^{ひと}国^{くに}をあて行^{おこな}うであらうとまで、心からお案じなされておりまする」

長政は冷笑をもらした。

説客せつきやくのことばが終るのを待つて、

「さような巧言にのる長政ではないと、織田殿へ伝えてくれい。

この城を開けわたすぶんには疎略にいたすまいと。——当然じゃ。
弾正だんじょう忠どの（信長のこと）が案じておらるるのは、この長

政が身ではなく、肉親の妹可愛さにある」

「いや、それはおひがみです」

「いわばいえ。何とでも」

唾つばするように——

「が、長政は、妻の縁につながつて、一命を助かろうなどとは、
みじんも考えておらぬ由を、立ち帰つてよく申しつたえよ。……」

それとだ。妻のお市も、いまは信長の妹のお市ではないことを、
彈正忠どのへ、得心とくしんまいるよう、くれぐれはなして上げるがよい」

「では、どうありまして、この城と共に、御運命を決するおつもりでございますか」

「わし以上に……妻のお市も、そう覚悟しておる」

「……ぜひもございませぬ」

説客の不破河内守は、もうあとのことばもつげず、これまでと、
帰ってしまった。

そのあとの城中には、絶望的な——というよりも一種べつな空虚が、陰気にみなぎっていた。

和議の使者に、平和を期待した城将や兵の一部が、

(やぶれたか……)

と、気落ちをあらわしたのと、それまでは、死を決していたものにも、ふと、生きのびられはしまいかという気がしたため、にわかに、前のような結束と決死にもどれない心理になったからであつた。

城中が陰気になったのは、もうひとつ理由がある。それは戦時中だが、長政の父久政の仮^{かり}の葬儀が営まれ、次の日にいたるまで、本丸の奥のほうで、読^{どきよう}経の聲がもれていたからである。

お市の方以下、四人の子たちもその日からみな白絹の衣服をまとい、帯も、髪^{ひも}の紐^{ひも}までも、黒い喪^{もしよく}色を用いていた。

そのすがたは、もう生きながらこの世のものでないように、余りに浄きよらかで、当然、城を枕にと、覚悟している侍臣たちの眼にも、傷いたましく、冷たすぎて見えた。

そこへまた、このあいだ城外へ出て行つた浄信寺じょうしんじの雄山ゆうざんが、曲まがり谷だにの奥から、わざわざ人夫せきとうに石塔をせきとう負わせて、帰つて来た。

石塔には、長政の戒名——いわゆる生前の戒名が刻んである。

徳勝寺とくしょうじ殿でん天英宗清大居士てんえいそうせいだいこじ

それを――

明ければ八月二十七日という前の夜、城中の大広間にすえて、香炉しきみ、櫛しきみの花など供え、生前の葬式というものを執とり行つた。

「当城の御城主、浅井長政どのには、武門の名を惜しんで、あつ

ばれ、華^{はな}とちるごとき、御最期をとげられた。——よつて、累^{るい}代^い恩顧^{おんこ}の諸士には、つつしんでこの世のお別れを告げられるがよい」

と、雄山が、導師^{どうし}として、将士一同へそういった。

長政は、石塔のうしろに、ほんとにもう死せる人のように、坐っていた。

諸侍は、はじめのうち、腑^ふに落ちない顔をしていた。

（何もこんなことをしないでも）

と、多少、変な空氣が騒^{さわ}めいていた。

けれど、お市の方や、まだ幼い子たちが、次々に焼香して、一族のものどもが、順々にそれにならつてゆくうち——誰からとも

なく、すすり泣きの声がながれていた。水を打ったように、広間
 いっぱいの甲かつちゆう胃の男が、みな首をたれ、まぶた瞼を抑えて、おもて面をあ
 げているものはひとりもなかった。

式が終ると、

「いぎ、夜の明けぬうち、お石碑せきひを沈めに行け」

と、雄山和尚を先に立てて数名の侍が、ふたたびそれを負つて、
 城外へ出て行つた。こんどは麓ふもとのほうへ降りて、湖岸から小舟を
 こぎ出し、竹生島ちくぶしまから八町ほど東のあたりで、ざんぶと湖底へ
 投げこんで歸つた。

「生前の葬式もすんだ。かくと見ては、城中の将兵も、いまはわ
 しの決意をさと、みな討死を覚悟したろう。……来れ、最期の

日！　いつなりと」

長政は、自分へ迫る死へたいして、敢然^{かんぜん}、云い払っていた。彼もさすがに凡将ではない。

和議に望みをつないでいた一部の士心の弛緩^{しかん}を見のがしていなかった。

彼のやった生き葬式は、弛^{ゆる}みかけた城中の空気には、果たして、効果があつた。

「すでに、殿御自身、あれほどまで、お討死と御決意を披露^{ひろう}なされたからには」

と、みな討死のほかはない運命を、各　も覚悟した。

「——これまでだ」

「死ぬのだ」

そこに一致した。

悲壮である、長政の決意はそのまま家臣に映じ、長政の施した
しんしんしんき士心振起の策は、たしかに奏効そうこうした。

けれど、彼は凡将ではなかったが、傑けっしゅつ出した将器でもなかつた。なぜならば長政は、それほどな将士に、死を歓ばせることを知らなかった。

兵法ノ極ハ、兵ヲシテ、歓キヨクンデ死ナシムルニアリ

孫子のいつている用兵の極致にまで到っていない恨みがある。

彼の将士も、譜代ふだい足輕のべつを問わず、死ぬことはもう忌いとわなかつたにちがいない。けれど、大きな死にがいを持ちたかつたこ

とは疑いもないことであろう。

大きな死にがい。

歡んで死に得る戦い。

死のうとするさむらい達の望みはいまそれしか持ち得ない。またそれは人間の希望の最大なもので最後のものだ。どんなに熱望することであろうと思いやられる。だから古来の名将は、かならずその渴^{かつぼう}望をむなくしない。いや、戦うまえに、その意義と正義を旗のうえに持たなければ、戦わないのが兵法である。

その点、長政の家臣は、やや張合いが小さかったろう。それもいただく大将の意志でぜひもないという、観念で臨むしかない最後となった。

——寄手の総攻撃。

いまは、待ちかまえていた。するとその日も、寄手からは小銃ひとつ射つて来ない。

ともすれば、晩秋の山の美しさや雲のゆく空の碧^{あお}さが、死の覚悟をにぶらせる。

「……来たッ」

午^{ひる}ごろである。城門の兵がどなった。

附近の狭間^{はざま}だの石垣のうえに見える鉄砲のかたまりが、すぐひしめいて、標的をさがした。

ところが、来たという敵は、たった一人だった。それも至つて暢^{のんき}気な漫歩^{かなた}を彼方からぶらぶら運んで来るのである。——使者な

らば、慙なくも従者も連れ、騎馬ぐらいな儀容は装つて来ようと、疑わしげに城兵たちは、彼の近づくのを見まもっていたが、そのうちに、

「やはり敵將だ。使者とも見えんし、不敵なやつ。一発、ぶつ放せ」

と、部將のひとりが、鉄砲の者へいった。

脅しに一発——というつもりで命じたのであったが、三、四人が一しよに、パン、パンと射った。

すると、びっくりしたのか、彼方の男は立ちどまった。そして、金地に日の丸の軍扇ぐんせんをひらいて、頭のうえに振りかざしながら、「待て待て。雑兵ども。木下藤吉郎を鉄砲で射つやつがあるか。」

城主長政どのに、よく訊たずねてからにいたせ。それがしを射ったところ、浅井方の勝かち軍いくさになるわけでもあるまい。百年、悔いをあとにのこすな」

大声でいった。——いやいつているまに、駈け出して彼はもう城門のすぐ下まで来ていた。

「……おうツ、なるほど、織田家の木下藤吉郎だ。なんで来たのか？」

のぞき下ろした浅井方の将は、彼の目的を疑って、彼ひとりへの殺意などは忘れていた。

藤吉郎は、城門を仰いで、

「奥の丸へ、お取次ねがいたい。どなたでもよい、御一族へお取

次ねがいたい」

と、ことばを重ねて呶鳴った。

「……………」

どうしたものか？

評議しているらしい声かがやがや聞える。やがてそれが嘲笑を交^まぜてくると、城門のうえに、浅井方の一将が顔を出して、

「無用無用。何で来たか知らぬが取次はできぬ。おそらくはまた信長どのの使いで、説客に見えたのであろう。度々の徒^{とらう}勞、むだなことだ、立ち帰れッ」

と、いった。

藤吉郎は、声を励まして、

「だまれッ、家臣の分際ぶんざいをもつて、主人の意向もうかがわずに主人の客を追いかえす法やある。すでに落城したも同様なこの城を落すために、わざわざ手間暇ひまかけて、説客に來たり詭謀きぼうをかまえる莫迦ばかはない」

と、大言をはらい、

「それがしが参つたのは、信長様の代参として、長政どののお位はゐ牌はいへ焼香に來たのでござる。うけたまわれれば長政どのには、はやお覚悟あつて、生きながら御自身の葬儀まで執り行い、さきごろその碑ひを、琵琶湖びわこへしずめて水葬式をすまされたよし。——生前のよしみ、一片の御焼香ぐらいは、お互いにゆるさるべきであろう。……それとも、もはやそういう礼儀も情誼じょうぎも交わしている

余裕はないのでござるか。長政どの以下、各の覚悟とやらは、
附つけ焼刃やきばのいつわりか。虚勢かッ。臆病ものの強がりか」

恥じたのか、城門のうえの顔はいつのまにか引っこんでゐる。
そしてややしばし、返辞もして来なかつたが、やがて、城門の一
方を少しひらいて、

「御老職の藤掛ふじかけ三河守どのでよろしければ、寸時、お眼にかか
つてみようと呼せられるが、それでよろしくば」

と、中うながへ促し、なおつけ加えて、

「御主君長政様には断じてお眼どおりかないませぬぞ」
と、念を押した。

藤吉郎は、うなずいて、

「もとよりのこと。長政どのにはすでに亡きお方とこの方も心得ておれば、強^しいてとは申さん」

云いながら、左右も見ずにはいつて来た。こうも平気で敵のかへ来られるものかと、浅井家の将士は、自分たちの努めている^{どうかつてき}恫喝的な顔つきや槍ぶすまに、張りあい抜けを感じ合っていた。

案内する将について、藤吉郎は、一の門から中門までのかなり長い坂道を、至極、無関心にのぼって行く。

大玄関まで来ると、長政の一族で、また老職の任にある藤掛三河守が、迎えに立っていた。

「やあ、しばらくでした」

平常のあいさつに異^{ことな}らない気がするさである。

相識そうしきのあいだがらなので、三河守も、にこやかに、

「まことに、お久しいことでござる。こんなことになって、かか
るいでたちで、お眼にかかろうとは、夢のようでござる」

と、会釈をかえした。さすがに城門にいる将士の血ばしまなじりつた毗
とちがつて、この老将の面おもてには、そうさし迫つたものも見えな
った。

「三河どの。あなたとお眼にかからないことは、お市の方さまが、
御当家へお輿こし入れになられた時からですな。ずいぶん久しいもの
だ」

「さよう。あれ以来かもしれぬ。……あの折は、嫁君のお輿をお
迎えるため、それがしが奉行して、岐阜ぎふまで参りましたから」

「……あの日のめでたさや、上下のよろこびにひきかえて、きょうの御両家は」

「宿命とやらいうものでござろう。しかし、いにしえの治乱興亡ちらんこうばうのあとをみれば、これも武門としては、めずらしいことでもありません。……まあ、こちらへおいで下さい。ゆるゆるはおもてなしもできんが、茶など一ぷくあげましょう」

三河守は、さきに立つて、彼を庭園の茶室のほうへみちびいた。——その白髪ちやうだつの将のうしろ姿には、さすがにもう生死を超脱ちやうだつしているなど、うなずけるだけの落着きが見えた。

一棟^{むね}の数寄屋^{すきや}がある。

木^この間^まの路地を導かれて、そこの一室にすわると、ここにはまったくべつな天地がある。清楚^{せいそ}な自然と、幽^{ゆう}寂^{じやく}な茶室の規矩^{きく}にかこまれて、主客共に、血なまぐさいたましいから、しばし洗われていた。

折ふし秋の末。

そこらの木々の葉は、数寄屋のうちまで舞ってくるが、炉^ろのあたりに、床^{ゆか}にも、塵^{ちり}ひとつなかった。

「織田どのの御家中でも、近ごろはみな、茶に御熱心と伺っているが……」

などと和やかに雑談しながら、藤掛三河守は、釜に対して、柄ひ杓しやくを把とつていた。

藤吉郎は、彼の作法を見て、あわてて断ことわつておいた。

「主君信長はじめ、みなお嗜たしなみは深いが、それがしのみは、生来の無骨者、何も弁わきまえません。……ただ飲むは好きというだけのことで」

「結構じゃ」

三河守は、茶わんを置き茶せんをそそぎ、女性のような細心な点てまえ前を静かにつづけている。もとよりいかめしい武装のままである。

が、その鎧具よろいぐそく足にかためている手や体が、すこしも窮屈そう

に見えなかった。むしろさびた釜と茶碗としかないこの室にあつては、この老将の装束しょうぞくがひとつの華麗な道具にすら見える。

（よい者に会つた……）

と、藤吉郎は心のうちで、茶よりも、それをよろこんでいた。

——どうしたら城中のお市の方を助け出せるか。

この信長の悩みにたいして、彼も悩みを共にした。ここまでの攻略作戦には、もっぱら彼の智謀が用いられて来ただけに、その問題にも責任を感じていた。

いつでも陥おとそうと思う日に陥し得られるこの城だが、目的の珠し
玉ゆぎよくを、焼けあとの灰のなかに掻き探すようなへたをしてはな

らない。

しかも城主長政は、もう内外に決死を宣言しているし、夫人もおつとじゆん良人に殉じる覚悟でいるという。

四人の子まであるその夫人だけを、つつがなく奪取して、戦の成果もあげようということは、信長がむりな望みというほかはないのであるが——藤吉郎はその任務をいまは一身に負つてこれへ来ているのだつた。

「……お使者、不点前ふてまえでござるがどうぞ、お寛ぎくつろあつて」

三河守は、炉のまえから、茶わんをさし出した。

武者坐りのまま、藤吉郎は無造作にひきよせて、がぶがぶと、三口ほどに飲みほし、

「ああ、うまい。……きょうほど茶をうまいと思つたことはござい

らん。お世辞でなく」

「如何ですか。もう一ぷく」

「いや、渴^{かつ}は医^いえました。口中の渴は。……しかし心中の渴はどうしたら医えましような。三河どの、あなたは話せそうだ。ひとつ、それがしの相談あいてになつてはくれまいか」

「この方は浅井家の臣、其^{そこもと}許は織田方の使者。明らかな立場のうえで承ろう」

「長政どのに会わせてもらいたい。いかがであろう」

「その儀は、城門でお断りいたしてある筈。其^{そこもと}許もまた、長政どのに会いに参つたのではないと仰せあつたゆえ、お通し申したのじゃ。ここへ来ておことばを違^{たが}えるなど、使者として醜^{みぐる}しい弄^{ろう}

策。^{うさく} かまえてお会わせいたすことはできぬ」

「いや、生ける長政どのに会おうとはいわん。長政どのの靈に、信長の代参として、一片の礼拝を遂げもうしたい」

「詭弁^{きべん}はやめられい。たとえお取次いたしたところで、長政様が会おうと仰つしやる筈はない。この際、一ぱいの茶は、この方として最高な武門の礼を執^とつたつもりじゃ。恥を知るなら其^{そこもと}許きれいにここからお帰りなさい」

うごくまい。断じて。

藤吉郎は肚^{はら}の底でそう独り誓っていた。

目的を達するまでは！ と。

「……………」

で、彼は根氣よく黙っていた。弁舌の雄も、説く相手による。

——こう練^ねれている老将に、ヘタな饒^{じょうぜつ}舌は、策を得たものでない。

「……さ。お立ちください。お帰りの御案内いたそう」

三河守は、^{うなが}促した。

藤吉郎は、むツつりと、あらぬほうへ眼をやつて、うもすも答えずにいるあいだ、自分で点^たてた一碗の茶を、鷹揚^{おうよう}にひとり飲みほして、それらの道具なども、水屋^{みずや}に退^さげた後である。

「いや、勝手ながら、もう少し、ここへ置いておいて下さい」と、藤吉郎は初めて答えた。

うごかない。

いや、てこでも、うごくまい——と、する顔いろである。

すこし蔑むさげすように、藤掛三河守はいつた。

「いつまでおいであつても、むだでござろうに」

「かならずしも、むだではございません」

「この方のいま申したことに二言はない。ここにいて、どうなさるか」

「釜の沸たぎる音を聴いております」

「釜の……。はははは、茶もわきまえぬといわれたお身が」

「いやいや、まったく茶道さどうもなにも弁わえはいたさんが……。どうに

も、これは快こころよい音でござる。久しい長陣に、雄たけびや、馬のい

ななきのみ聞いていたせいか、甚だ、快いかぎりでござる。……

暫時ざんじ、ここに独坐をおゆるしください。そのうちに、篤とくと考えて
おりますれば」

「どう御思案あらうと、長政様へお会いさせ申すことは勿論、こ
こより先、御本丸のほうへは、一步もお通しいたさぬぞ」

——それには答えず、

「……む、ウむ。どうもよい音のするものだ。この釜は」

と、藤吉郎は、炉べりへすこし膝をよせて、しきりと感服しな
がら、とつこうつ眺めていた。

蘆屋あしやであろうか、古天妙こてんみょうの作であろうか、そんなことは、彼

の知識のほかである。彼がふと、おもしろく見たのは、古びた鉄か
肌なはだに浮いている猿の地紋であつた。人間か猿か、甚だあいまい

な一個の小動物が、木の枝に四肢をささえ、天地のあいだに、
傍若無人なその姿態と愛嬌を示しているのである。

——誰かに似ているぞ。

藤吉郎は、おのずからな微笑を禁じ得なかった。松下嘉兵衛
のやしきを出て、食も宿もなく、山林を逍遙して、いた時代の
自分が——ふと思ひ出されてきた。

次の間にでもかくれて様子を窺っているのか、もて余して、戸
外へ出てしまったのか、三河守はもうそこにいなかった。

「いや、おもしろい。おもしろいものだ」

釜と談合の恰好である。ひとりで首を振っていた。そうしなが
ら飽くまでも、うごくまいという算段を考えていた。

すると、どこかで、クツクツ笑うものがあつた。時には、嬉々ききと、べつな忍び笑いも洩れる。

どっちの笑いかたも、明るくて無邪気だつた。藤吉郎の耳が聞きのがすはずはなかつた。——じつと顔を数奇屋の囲いのほうへ向けた。

「……ほら。ほらネ。あんなに似てるだろ」

「ほんに、お猿のような」

「どこのお人だろ」

「きつと、日吉ひえのお使いさまでしょ」

ふたりの子どもの眼であつた。

計らざりき——藤吉郎が釜の地紋に友愛を感じていると、その

藤吉郎の顔をのぞいて、垣の外から興がっている若い者たちがあった。

「……おツ？」

怒ったのではない。藤吉郎は歓喜^{かんき}に衝^つかれた。

長政とお市の方とのあいだにありと聞く四人の和子^{わこ}。——そのうちの万寿^{まんじゅ}と茶々^{ちやちや}にちがいないと直感したからである。

にこ……と、藤吉郎はそこから笑^えみを送った。
すると。

垣のすきから覗^{のぞ}いていた万寿と茶々は、

「あら。笑^{わら}つてるよ」

と、ささやいて、もう一倍、ひくい声で、

「……お猿さんが笑った」

と、ふたりのうちの、どつちかがいった。

藤吉郎は、それを小耳にはさむと、こんどは、

「……めッ」

と、にらむ真似まねをした。

これは、笑つて見せたよりも、効果があつた。

万寿と茶々は、このおじさんくみ与やすし易しとみて、垣のあいだから、

ヒインと、馬がくちびるを剥むくように、齒を出して見せた。

それでも、笑わずに、藤吉郎がにらまえているので、ふたりも

睨みはじめた。睨めッこをしはじめたのである。

「やあい、笑ったぞ」

万寿も茶々もよろこんだ。藤吉郎は、あたまを搔いて、もつと、何かして遊ぼうという意味を、手真似てまねや顔つきで誘った。

「おもしろいおじさん……」

ふたりの子どもは、かれの手招きにつりこまれて、そつと柴折しおりを押してはいって来た。

「なあに？ ……。なにをするの」

「おじさん、どこから来たの」

藤吉郎は、縁を下りて、武者わらじの緒おをむすんでいた。その彼をからかい半分に、万寿が手に持っていた芒すすきの穂ほで、彼の襟えりもとをくすぐった。藤吉郎は、くすぐったさをこらえて、両方の足の緒をむすんでしまった。

おそろしく敏感な子どもの神経は、彼が身を伸ばした途端の顔いろに何ものかを読み取ったとみえて、咄嗟とつさに、意味もなく、逃げ出そうとした。

「……あッ」

むしろ藤吉郎のほうで、不意を喰ったくらいである。

跳びかかるやいな、彼の片手は、万寿の襟がみをつかんだ。

なお、左の手で、茶々をつかみかけたが、茶々は、ありツたけな声を出して、

「——怖いッ」
こわ

泣きさけびながら走った。

捕まった万寿は、おどろ愕きのあまり、声を出さなかった。

藤吉郎のからだの下に、あお向けに倒されて、その人の顔を、大空といっしょに、逆しまに大地から見あげた時、初めて、

「きやツツ！ ……」

と、悲鳴を発した。

かなた 彼方へ泣いてゆく茶々の声と、ここの絶叫を、誰よりもまつ先に聞いたのは、藤吉郎ひとりを数寄屋にとり残して、路地の外へ出ていた藤掛三河守であつた。

——何事？ と思つたにちがいない。ここへ駈けつけて見てからさらに、

「や、やッ？」

仰ぎょうてん 天してさけぶやいな、すぐに手は——ほとんど無意識に、

「おのれッ」

と、陣刀のつかをにぎっていた。

藤吉郎は、万寿のうえに、ふみ跨^{また}がつたまま、

「あぶない！」

と、却つて、相手の注意をうながすような、制止の声をかけた。
すんでのこと。

一 ^{いっさつ}颯の陣刀とともに、彼へぶつかろうとした三河守は、思わず足をすくめた。

藤吉郎の手もとを見たからであつた。万寿の喉^{のど}を一突きに刺して、その一命をとるに何の苦もない——彼の手もとと彼の眼にぎくとしたからである。

さすが沈勇な老将の顔も、鳥肌に変わっていた。白い鬢髪びんぱつはそ
そけ立つばかりである。

「お、おのれ、幼い御嫡子ごちやくしを捕え奉つて、な、なんとするぞ」
半ば、哭なくが如き声だった。三河守は、悔いと怒りにふるえな
がらつめ寄つた。

三河守のつれていた郎党たちであろう、かくと知つて、

「わッ、たッ、たいへん」

「みんな来ういッ」

「いで合え！ いで合え！」

声かぎり、絶叫し、手をふり、足を舞いして、急を告げた。

それと、また。

わんわん手放しで泣きながら逃げて行つた茶々の告げ口からも、このことは、中門から奥の丸まで聞えて、

「すわ」

と、まつ黒な武者群が、いく組にもなつて、駈けつけて来た。忽ちであつた。

万寿の喉のどに短刀を擬ぎしながら、あたりを睥睨へいげいしている異様な敵人のまわりには——文字どおり 甲かつちゆう 冑まなの「鉄桶てつとう」ができて

——それも藤吉郎の手もとと眼まなざしを恐れてか、甚だ遠巻きに——ただわいわい躁さわぐしか、なす術すべを知らなかった。

「藤掛どの。三河どの」

藤吉郎は、そのなかの一つの顔へ呼びかけた。

「どうなされた、御返辞は。——甚だ暴^{ぼう}な仕方でござるが、それがしとしてはかくするよりほか、主^{はすかし}を辱めぬ方法が見出せないの
でぜひもござらん。……はつきり、御返辞がなければ、万寿どの
を、刺しころしますぞ」

と、爛^{らんらん}々、大きな眼をして、ずっと見まわしながら、ふたたび、

「藤掛どの、三河どの。あなたは何のために茶を嗜^{たしな}んでおられるか。茶の真境は、ここではあるまいか。ついただ今、あなたから
学んだばかりだが、それがしはそう信じる……すでに、生きて還
ろうとは思わぬこの方に、あたりの犇^{ひし}めき合いは御無用である。
はなしは茶室のつづき、おん身とそれがしのふたりで足ること。

……お退^ひかせなさい。そこらの武者どもを、みなお退かせなさいッ。そのうえで談合いたそう」

「……………」

「なお、御分別がつき難いか。さりとは遅いお悟りだ。それがしだけを殺して、御嫡子^{ごちやくし}の一命を無事に救おうと召さることは、所詮^{しよせん}、難事でござろう。——それはちようど信長様が、この小

谷城^{おと}を陥して、お市の方様のお身だけは無難に助け出そうとなさっているのと同じでござる。……何とて何とて。万寿どのを無事におこうや。たとえ藤吉郎の身を鉄砲でお撃ちあらうと、せつなには、この刃が、御喉^{おんのど}もとを貫いておるであろう」

さつきから舌をふるっているのは彼ひとりだった。しかも懸河^{けんが}

の弁^{べん}である。

舌ばかりでない、眼もよく働く。いや五体の端までが、その雄弁とともに、八方の敵へ戦々と鋭敏な氣くばりを怠らないのであった。

「……………」

たれも手が出せなかった。

わけて三河守は、自分の責めの重大を感じているし、彼の説くことにも、だいぶ耳を傾けて来た容子^{ようす}だった。一時の驚愕をとりもどして、茶室で見せた彼の落着きになりかけていた。

「一同の者」

ようやく、彼は身をゆるがした。手を遠くへ振って、

「去れ、去れ。彼方へ退ひいておれ。——ここは三河守にまかせて。
——三河守が一身にかえても、若君にお怪けが我はさせぬ。各の部ぶ
署しょにもどつておるがいい」

と、云つた。

そして、藤吉郎へ向つて、ことばを改めた。

「のぞみ通り、多おおぜい勢のものは退のけた。このうへは、万寿さまを、
この方の手へおわたしなさい。左様な策はおたがいに避けて、信
義と信義をもつておはなししよう」

「ならぬ！」

と、つよく頭かぶりを振つたが、藤吉郎は一転語氣をかえて、

「——それがしは今、こういえます。長政どのの掌中の珠たまを奪とつ

たから。……しかし、信義と仰せあらば、何をか疑いましょう。

若君はお返しする。しかし、長政どのへお返ししたい。長政どの御夫妻にお眼通りの儀、かならず計らってくださいますか」

さきに退いた大勢の中に、長政も立ち交じっていたのである。

藤吉郎のことばを聞くと、子の愛に惹かれた彼は、自制を失つて、それへ駆け寄つて来るなり罵つた。

「長政はこれにおるが、何も知らぬ幼児おきなごの生命いのちを扼やくして、もの

をいおうとは、卑劣ないたし方。そちも織田家の一方の将、木下

藤吉郎というほどの者ならば、さような奸策かんさくはみずからに恥じ

たがいい。——ともあれ、万寿の身を、こなたへ渡したうえにて

物を申せ」

「才。長政どの、おられましたか……」

藤吉郎は、あいての血相にも関^{かか}わらず、いんぎんに辞儀^{ほどこ}を施した。——といっても、依然、万寿のうえにまたがつて、それへ短剣の先をさし向けたままにである。

「木下殿。お離しなさい。かくの如く、殿御自身、おことばのある以上は、御不足もござるまい。万寿さまの身を、それがしの手へ」

と、かたわらから藤掛三河守も声をふるわして云った。

藤吉郎は、それを横耳に聞きながしたまま、浅井長政の方を見つめていた。長政の蒼白な血相と眸^{ひとみ}へじつと、正視を向けながら、やがて長嘆して云った。

「ああ。……あなたにもやはり肉親の情愛はあつたのか。……可憐なものにたいする不愍ふびんをご存じであつたのか。そうとは、藤吉郎、すこしも知らなかつたのでござる」

「渡さぬかッ、おのれ、その幼い者を、刺すつもりか」

「毛頭もうとう、さような意志はない。……だが、親御たるあなた様に

も、なんらの情愛はおぼえぬと仰せあれば——」

「たわけたことを。親として、子を愛さぬものがあるのか」

「そうです、禽獸きんじゆうでも」

と、藤吉郎は、あいてのことばを裏書して、

「——さすれば、それがしの御主君信長が、お市さまを救い出したいばかりに、恋々れんれん、この小城ひとつを陥おとしかねているのも、

愚かしい沙汰とは嗤わらえますまい。……また、お市さまの良人であ
らせられるあなた様はどうか。信長様の弱点を覚さとつて、強しいて、
母子数人の可憐いじらしいものを、この城と運命を共にさせようとして
おいでになるではないか。それはちようど、今こうして、それが
しが、万寿どのを下に敷いて、御喉おんのどにヒ首ひしゅをつきつけながら、
あなたへ談じつけているのと同じことだ。……藤吉郎の仕方を卑
怯と仰せあるまえに、御自身の戦略を、卑劣でないか、残忍でな
いか、篤とく、お考えくださいませ」

云いながら藤吉郎は、万寿のうえから身を退のけて、抱き起して
いた。——ほつと眉をひらいた長政の顔いろを見るなり彼はつと
寄つて、その手へ、万寿をわたし、その足もとへ、両手をつかえ

た。

「心にもない先ほどからの狼藉ろうぜき、また非礼の罪、幾重にもおゆるしおき下されませ。——かような手段てだてをとりましたのも、何とかして、御主君の御みこころを慰め、ふたつには、武將の御最期として、すでに天晴あつぱれなお覺悟を示されながら、可惜あたら、浅井長政は血迷うて亡びたなどと、末代までの汚名をおのこしあらぬようにと……あなた様のおんためをも考えていたしたことに相違ございませぬ。何とぞ、微衷びちゆうお酌くみとり賜わって、お市の方様、ならびにお子様のおん身は、この戦場の外へお放ちくださいますように……。あわれ、すぐれたる武將には、人いちばい強いしとか聞く、大慈悲心にむかい申して、藤吉郎、かくのごとく、禱いのりまする。

私心なく、ただ御不愍^{ごふびん}なる女性^{によしやう}と、末長き御幼少^{おんかた}の御方^{おんかた}たちのために——良人たり父たるあなた様の大乗大愛を——かくのごとく禱^{いの}りまする、お継^{すが}りいたしまする」

彼は、敵将長政へ訴える気もちをもたなかつた。ひたぶるに、人のたましいへ向つて真情をのべた。彼が、胸に合掌して、長政のすがたを拝んだのも、決して、虚偽ではなかつたのである。自然に双^{ふた}つの掌^てが合わさつたのであつた。

「……………」

默然^{もくねん}、長政は、眼をつむつて、聞いていた。

両腕^くを拱^くんで。

がっしりと、両の足を踏んで。

そのすがたは 甲^{かつちゆう} 冑^{ゆう}の仏像のようだった。

藤吉郎は、合掌したまま、そのまえを立たなかつた。かれがこの城へはいつて来るとき公言したとおりに、生ける屍^{しかばね}の長政の霊へ、一片の回向^{えこう}をしているかの如きすがたであつた。

一心祈念するものと、一心よく死のうとするものと、二者の心は、その寸間に触れ合つた。

敵とか、味方とか、そういう隔^{へだ}ても掻き消え、長政が信長にだいていた感情やら反抗やら、あらゆる小さい妄^{もう}念^{ねん}は、ふと、彼のすがたや心から古蒼^{こそう}した胡粉^{ごふん}のように剥^はがれていた。

「永勝^{ながかつ}（三河守のこと）……」

「はッ」

「しばし木下殿を、どこぞに迎えて、もてなしておくがいい。――一刻ほどの別れを告げたい。……そのあいだな」

「お別れとは」

「夫人おくやら、子達と、この世のわかれをしたい。すでに、死を期して、生き葬式までした身ではあるが……生別は死別より辛いとか……。信長どののお使い、それはおゆるしあろうな」

「……えッ？」

愕がくと、顔をあげて、藤吉郎はそういう人おもての面を見つめた。

「では、何と仰ふしっしゃいます……。不肖ふしょう藤吉郎の言をおきき容

れ下さいまして、お市の方さま、和子さま達のおん身を……」

「夫人おくも子たちも、みな死の腕に抱いて、城とともに、果て終ら

んとしたは……長政が小さい量りようけん 見であつた。すでに死んだ身
と思ひ極めながら、なお浅ましい愛憎ぼんのうやら煩惱ぼんのうだけはのこして
いたのじゃ。……いま、そちにいわれて、思わず一笑をおぼえ、
みずから恥じ入るものがある。——まだ若いお市、幼い者たちの
行く末、くれぐれもたのみ参らすぞ」

「……身にかえましても」

藤吉郎は、大地へ額ぬかずいた。

せつなに、かれの脳裡のうりには、信長のよろこぶ顔が見えていた。

小我な欲望は、とどきそうなことでも得手えてとどかないが、忠節
からほとばしる真心なら、どんな至難と思われることでも貫ける
ものではある——ということを感じた。

「……では、後刻会おう」

長政はいい捨てる、本丸の奥のほうへ、大股にあゆみ去った。つづいて三河守は、改めて、彼を信長の正使として、客殿のほうへ導こうとした。

藤吉郎は、起ち上がった。彼の眉にも、ほつとしたような明るさが見えた。そして、三河守へこういった。

「おそれいるが、暫時、城外の味方へ、合図をいたすまで、お待ちくださいらぬか」

「……合図を」

三河守は怪しんだ。これは怪しむほうが無理でなかった。が、藤吉郎は、当然のように、

「さればです。……御主君信長のおむねをうけてこれへ参る折、
 こうお約束をして来たのでござる。——もし藤吉郎が一命をすて
 ても事のかなわぬ場合は、かならず城中より火気をあげて、破談^{はだん}
 のあいずを仕れ^{つかまつ}ば、殿にもその上には、最後の御決心あつて、い
 ちどに城へ攻めかかられますようにと。……また、首尾よく長政
 どのに会い得て事成るときは、携^{たずさ}えて参つた自分の小旗を、城中
 の高い樹に掲げます。いずれにせよ、それまでは兵をうごかさ
 ずに待機あそばすようにと——そう云い合せて参つたものです
 からな」

三河守はかれの周^{しゅうとう} 到^{しゅうとう}な用意に驚いた面持^{おももち}だった。いや、
 もっと驚いたのは、茶室の炉辺に、いつのまにか一個の狼煙^{のろしだま}玉

がおいてあつたことである。藤吉郎は、城外へのあいずをすまし、客殿へ通つてから、あとで笑いながら話した。

「もし、事成らずと見たときは、遮二無二、もういちど茶室までのがれて、あの狼煙玉のろしだまを炉のうちへ蹴こむつもりでした。いや、それこそ、とんだ茶の湯になるところでしたな。はははは」

さむらい集つどい

ぽつねんと、藤吉郎はただひとり置かれていた。

五十畳もある広間である。

ここに通されて、藤掛三河守から、しばしお待ちを——といわ

れてからもう一刻半ときもたっている。

「……長いなあ」

退屈をおぼえざるを得ない。ひと気もない大広間の格ごうてんじよう天井には、もう夕暮のかげが濃い。

ここの内は燈ともしび火も欲しい暗さなのに、外を見やると、城外の遠い山肌に、かッと、晩秋の落日が、茜あかねいろ色はに刎ねかえつていた。

彼のまえにある高脚たかあしの菓子うっわの器には、菓子はひとつもなくなつて紙だけが残っていた。

ようやく、人の跫あしおと音がした。

茶碗をさげに來た茶道衆の者である。

「籠城中のこととて、何もございませぬが、夜食をさしあげよとの、殿のおことばでございますれば、ただ今、粗膳そぜんをさしあげまする」

茶道衆は、客をなぐさめて、二カ所ほどに、燭しよくをおいた。

「あいや、こういう中、夜食の御斟酌ごしんしゃくなどにはおよばん。それよりも、藤掛三河どのお顔を拝借したいと、憚はばかりながら、これへお呼びください」

「かしこまりました」

茶道衆が立ち去るとすぐ、三河守が奥からすがたを見せた。ふた刻ときとたたない間に、十年も白髪を加えたように、その影には力がなく、瞼まぶたには、泣いたような痕あとさえ見られた。

「いや、なんとも、失礼をいたした。ただおひとり、置きはなしたまま、つい長い時刻を……」

「なんの、平常のお礼儀などにはいささかもお気づかいに及ばぬが、長政どのには、如何いかになされてあるか。また、奥方やお子たちのお別れは、はやおすましあられたか。……それが懸念でござる。日もはや暮れて参れば」

「ごもつともでござる。最前、殿にも潔くあのように仰せられたものの、さて、御生別のことを、御妻子にお告げあるとなると……さすがにの……」

老将は、俯向うつむいて、指がしらで、瞼まぶたを抑えた。

藤吉郎もふと眼を熱あつうして、その眼のやりばに困った。

「……わけても、奥方のお市の方様には、どうしても、良人のおそばは去らぬ、この城を出て、兄君信長の許へ帰るころはないと……綿々めんめん、御心情をおもらしあつて、いつお名残が尽きようとも見えませぬ」

「……むむ。さも……おざろうなあ」

「この三河へも、お訴えなさるのです。女子おなごは嫁ぐときすでに、このお城を墓とさだめて嫁かしたものをと——。その母御のおなげきや父君のおことばを、幼心おさなごころにも、もう茶々様などは、うすうす御理解あそばすので、共々、母君と泣き悲しまれて、なぜ、父君とわかれねばならぬのか、なぜ、父君は死ぬるか……藤、藤吉郎どの……おゆるしく下さい、尾籠びろうのていをお眼にかけて」

三河守は、懷紙で面をつつんでしまった。そして咳き入りながら泣き伏した。

君臣の情、もつともなと、藤吉郎は思いやった。まして長政の心中やお市の方の悲嘆は察するにあまりがある。ひと一倍、涙もろい藤吉郎は、忽ち、顔じゅうを涙で汚らしくしてしまった。何度も涙を^{はな}かんだり、天井をむいたりしていた。

——が、彼はここの一瞬に大事があることだけは忘れなかった。小さい愛情にひかれて使命を誤つてはならないと戒め^{いまし}た。涙をはらつて、こう要求した。

「お待ち申すことは約束だが、際限なくこうしてはおられん。お名残の時刻を限つていただきたい。何^{なんどき}刻まで——と」

「よろしゅうござる。……では、それがしの一存でござるが、こよい亥の刻いこく（十時）までの御猶予ごゆうよをねがいたい。亥の刻ともなれば、かならず御母子の身は城外へお移し参らせまする」

藤吉郎は否いなめなかつた。さりとして、そんな悠長な状況にないことはもちろんであつた。城外にある味方の意志では、長政の返答次第で、きょうの日没前にも、小谷城の攻略はかたづけてしまおうという予定をもち、全軍、満まんを引いて待機している際である。

その味方へは、昼のうち、城内から小旗をあげて、

（御救出のこと、成じようじゆ就しゆせん）

と、あいずはしてあるが、それにしても、時間は経ちすぎる。信長をはじめ諸将が、事の結果を、城外から知るよしもなく、

さまざまに思いまどつて、帷幕いぶくの異論や、行動に迷つて、紛々ふんぷんたる声にとりまかれて困惑している主君の顔が——藤吉郎には、こうしている間も眼に見える気がするくらいだった。

「……いや、御無理もない。亥いの刻こくまで、お待ち申そうほどに、ごゆるりと、お名残をつくされたがよい。それまでは、城内の御安穩は、藤吉郎がひきうけておりますれば」

彼の快い承諾になぐさめられて、藤掛三河守は、ふたたび奥へもどつて行つた。その頃もう宵の色は深かった。

小侍と茶道衆が、こもごも、彼のまえに来ては退さがつて行つた。戦場では見られない膳部ききょうや酒が饗きされた。

「お身方もせわしかろう。独りのほうが勝手でござれば、銚子ちようし、

飯櫃^{めしびつ}なども、ここへおいてお退^{さが}りください」

給仕の者を退けて、彼はひとりで酌^くみはじめた。薄口な塗りの杯から全身に、秋の沁^しみ入る気がした。

「……………」

酔い得ない酒だった。寒々と、ほろ苦くばかりある。

「いやこの酒もうまく飲めねばならぬはずだ。こういう間も人間の修行になろう。死んでゆくもの、生きのこる者、その差はどれほどか。一瞬ともいえるだろう。……長い長い、幾千年の時の流れから大観すれば」

彼は、強いて、からからと打ち笑うような気を持つと努めた。しかしふくむたびに、酒は心^{しんちよう}腸に冷たく沁みる。

どこかで、しゆくしゆくと、すすりなくのが、身にせまるような心地がする。

お市の方の泣き悲しむ様や、長政の面^{おもて}や、幼児^{おきなご}たちの無心なすがたや——どうも奥の様子が想像されてならなかった。

元来が、彼は多分に痴^ち愚^ぐな男である。その痴^ち愚^ぐが働^{はたら}きだすと、ひと事ながら、声をあげて泣きたい気もちがしてきた。

「……もし自分が、浅井長政の身であつたら」
などと、思い遣^やつたりした。

ところが、そう考えてから、ひどく気がかりとして来た。つねに妻の寧^ね子^ねにいい渡してある遺言を思い合わせたからである。

——もののふの常。

いづどこの戦野で果てるかもわからない。

おれが、討死したら。

そなたは、他家へ嫁^{とつ}げ。そなたが三十まえであつたらば。

が。年三十をこえると、色香^{いろか}はとぼしい。従つて良縁のさきも

狭い。だが分別はできてくる。人間、人生の見さかいも備わつていよう。

だから年三十すぎていたら、そなたは、そなた自身の分別で、よい道をえらべ。嫁^かせともいわぬ。嫁すなともいわぬ。

またもし。

そのあいだに、子を生^なじていたら、若くあろうと、年とつてからであろうと、子を主として将来の道をはかれ。女の綿^{めん}々な愚

痴にまような。何ごとも、母として考え、母として分別をとれよ。
「……そうだ、ひと身を思いやるほうが辛い。兵家に稀なことで
はない。お市の方は生きていてよいのだ。長政は当然、ここで死
ぬこそ華はなであろう」

ひとり呟つぶやいて、また一杯、唇にふくんだ。その一杯から、よう
やくふだんの味覚が感じられて来た。

いつか藤吉郎は眠っていた。といつても横になつてではない。
坐つたまま——あたかも坐禅ざぜんでもくんでいるようにである。こく
りこくり、時々あたまを低く垂れる。

彼は眠ることが、上手であつた。

人いちばい働くには、人いちばい有効で短い睡眠をとる必要が

ある。

逆境中、それを心がけていたのが、やがて戦陣生活でいよいよ鍛錬たんれんされ、いまでは眠ろうとすれば即座にどこでも眠れるし、その長短も、その場所も、随時随時に居眠る修養ができていた。

「……？」

そのうちに。

ぱちと、彼の眼は、鼓つづみの音でさめてしまった。

膳部も酒も、いつのまにか退さげられてある。

燭しよくのみ白い。

「だいぶ寝たな……」

一いっせん洗された頭のかろさと、疲れの去った肉体から、すぐそう

分るのであつた。

同時に、彼はなんとなく身をつつむ陽気を感じた。居眠るまえまでは、巨大な墓場のようだった城中の陰々いんいんめつめつ滅々なごな気が、一転して、鼓の音や、笑い声に変つて、どこやらに和やかな温かさすら漂ただよっている不思議を——急に発見したのであつた。

「はてな」

狐につままれたような気がしないでもない。

しかし、はつきりと、眼がさめてからは、なおさら事実であつた。鼓の音ばかりではない、謡うたうたう声もする。——もちろん遠くのほうで、微かにではあるが、どつと、笑うときなどは、はつきりと聞えて来た。

「奥の丸らしい」

彼は、人なつかしくなつて、大廊下へ出てみた。

ひろい中之庭をへだてた彼方^{かなた}の大殿に、無数の明りと、たくさ

んな人影が見える。そよ風は、酒のにおいを送つて来て、その風のまに、侍たちの手拍子が――

花は、^{くれない}紅

梅は、におい

やなぎは、緑

ひとは、こころばえ

人のなかの人

さむらい、われら

花の中の花

さむらい、われら

と、同音に歌っていた。

人生はかくこそ送れ。楽しみなくして何の人生ぞや。よしあす知れぬまでも。いや、あす知れぬ身なればこそ。

藤吉郎の持論である。陰気ぎらいで陽気をこのむ彼は、何か、ほつとこの世の祝福を見出していた。そしてわれ知らず、歌の聲につられて少しずつ陽気なほうへ歩いていたのである。

ばたばたと、忙しげに、侍たちが通る。多くは台所方の者らしい。大皿にもりあげた肴さかなだの、酒の瓶かめだのを、防塁の戦いみたいに懸命に運んでゆく。

いかにも陽気だ、どの顔にも、生命力が光っている。——いたいどうしたのだろう？ と疑われるくらいに。

「や。木下殿ではないか」

「才……三河殿で」

「広間にお見えなさらぬので、あちこち、探しておりました」

そういう藤掛三河守も、ぽつと酔を頬にもっている。ついさつきまでの憔悴^{しやうすい}は姿にもなかった。

「どうしたわけでござる。奥の丸のあの賑わいは」

「いや、お約束いたした如く、亥^いの刻^{こく}までが、家中一同にとつても、最後の最期。いずれは死ぬもの、死ぬなら華やかにと、殿長政をはじめ、将士すべて、すっぱりと気軽うなつて——さらば城

内にある限りの酒さけがめ瓶をあげ、さむらい集つどいせばやと云はいや、
あのとおりこの世の名残を酌み交わしているわけでおざる」

「して——かんじんな御夫人おくがたと和子わこたちとのお別れは」

「それも、兼ねて……」

三河守の眼もとは、酔いながら、またふと涙にうるみかけた。

——さむらい集い。

どこの家中でも、平常によくある宴である。ふだんの階級や君
臣の鉄則も、さむらい集いの座だけでは大まかにゆるされる。上
下一体、暢のびのび々と、生命を楽しませて酔い歌う慣わしであつた。

「なるほど」

藤吉郎は大きくうなずいて、

「こよい限りの君臣の死別と、こよい限りの御妻子との生別と、ふたつを併せての、さむらい集いでござったか。——そこまでに、長政どのの御心境もきまった上は、いかがでござろう。それがしも、亥の刻まで、ぽつねんと、鼠に引かれそうに居るのは退屈。——ご宴の末席に加わりたいが——いけませんかな？」

「されば、そのため、お探ししていたところでござる。殿にも、そういう御意にござれば」

「なに長政どのも」

「御夫人やお子たちを、織田家に託せば、あとあと何かにつけて、お世話にもならねば相ならぬと……。わけて幼い和子さまたちの行く末をお思いなされて」

「お案じあるな！——と、そう直接申しあげたい。三河ど、ご案内たのむ」

「さ、こちらへ」

あとに従つて、藤吉郎は奥の大広間にはいった。

満座の眼が、すべて彼にそそがれた。

酒気、堂にみちている。

もとよりみな 甲^{かつちゅう} 冑^{かう}のままだ。しかも、死を寸前に決してい

る人たちである。ともに死ぬ仲間であればこそ、同じ覚悟をすえている戦友であればこそ、和気あいあい、散り際^{ぎわ}の花のそよぐが如く、歓^{かん}を尽しあつていたのであるが——咄嗟^{とつさ}に、

「敵人！」

と、藤吉郎の顔にあつまつた眼というものは、たいがいな者ならば、身みの竦すくんでしまうほど、鋭い血走つた眼ばかりであつた。

「やあ、ごめんを——」

誰へともなく、藤吉郎は、こう大きくいったものである。

そして、それを会釈に、つつつとすすんで、長政を中心に、浅井一族のぎつしりとかたまっている上座のまえへ出て平伏した。

「それがしにまで、お杯をくださるとの仰せ、ありがたく、まかり出でました。なお、御幼少ちやくなんなお嫡男ひい、お三人の姫さまたち

のお行く末については、藤吉郎、身にかえても、お護りいたす所よぞん存ぞんにございますれば……畏れながら、それについては、いささかのお心残りも遊ばさぬように」

ひと息に云った。

もし、間を措まいて、恟々おどおどなどしていると、あたりの鋭い白眼が、たちまち酒気と敵愾てきがいしん心に駆られて、何をやり出すかも知れない——実に、間髪の危機といってもいい、殺気のなかに彼はいたからである。

「……たのむぞ、木下」

長政は、杯をとって、じかに彼のほうへさし向けた。

「慥しかと、たのまれましてござります」

杯をうけて、それといっしよに彼はもう一度云った。

「……御安心を」と。

「うむ」

長政は、満足そうだった。藤吉郎は、敢えて、お市の方と、信長の名には触れなかった。

その美しくて若い御方おんかたと、幼い姫たちは、かたわらにめぐ繞らした金屏風きんびょうぶのうちに、可憐なかきつばたの花が、池の汀みぎわに群れ咲いているように、かたまり合っていた。

藤吉郎は、その銀燭ぎんしよくのまたたきをちらと、眼のすみから見た。

さすがに、正視に堪えなかったのであろう。

つつしんで杯を長政の手へかえしてから、

「かかるあいだは、敵も味方もございますまい。さむらい集つどいの御酒をいただいたからに、小舞をひとつ、お眼にかけとう存ずる。

おゆるし下さいましょうか」

「なに、舞うとか」

長政ばかりでない、人々みな眼をみはった。

胆斗たんとの如しごと——ということばもあるが、この男の、何と身なり

も小さいくせにと、やや気をのまれたかたちであつた。

雛鳥ひなどりを庇かばう母鳥のように、お市の方は、子たちをみな膝に抱

えて、

「怖うない、怖がることはない。……母のそばにいやるからには」
と、ささやいていた。

長政のゆるしを得た藤吉郎が、起つて、満座の中ほどへ、つつ
つと進み出し、小舞を舞おうとした時だった。

万寿と、茶々が、

「あれッ」

と、母の膝に、しがみついた。——昼の怖い小父おじさんの顔を、
真正面まともに見たからである。

藤吉郎は、足拍子をひとつ、とんと踏んだ。とたんに手からさ

ツと日の丸扇子せんすが咲くと、

あまりの、徒然つれづれに

あまりの、つれづれに

門に瓢箪ひょうたんつるして

ながめ候えば

折ふし、そよ風の来て

あなたへ、ひよこり

こなたへ、ふらり

ひよこり、ふらり

ふらり、ひよこり

瓢箪ひょうたん つるして面白やの――

声も大きく、小舞歌をうたつて、他念なく舞い出した。

だが。その舞も終らぬうち。

ド、ド、ド、ドツと、城壁の一劃かくで、つるべ撃ちに銃砲が鳴つ

た。パチ、パチと旺さかんに応射おうしやし出したのは近くの音である。城

内と城外と、彼我一瞬に銃火を交わし始めたらしい。

「――しまった！」

藤吉郎は、扇子を投げすてた。

亥いこくの刻にはまだ至っていない。

けれど、それは城外の味方は知らないことである。

藤吉郎は、自分が二度目のあいずをしない限りは、総攻撃にはかかるまいと、多分に安心していたのであるが——ついに味方の帷幕いばくにあつては、諸将みなしびれをきらして、信長に、その悠長をなじり、また即座の行動を迫つて、とうとう総がかりに出てしまつたものらしい。

しまつた！

と、彼の投げた扇子せんすは、同時に、総立ちとなつた城将たちの足もとへ飛んで、それは、今まで忘れていた敵という観念を、はつ

きり藤吉郎のすがたに思い起させた。

「すわつ、よせて寄手が」

「卑怯。虚を衝いたな」

満座の将士は、ふたつに分れた。一方はどツと外へ駈け出し、一部は藤吉郎のまわりを取りかこんで、忽ち、彼を無数の陣刀の下に斬りさいなんで、これから死に出る血まつりにしようとした。

「だれが命じたツ。斬るなツ——その者を殺してはならん」

とつさ咄嗟、長政のおどろくべきだいかつ大喝を、彼の家臣たちは、むしろ

意外として、

「寄手の総がかりは始まりましたぞ」

と、喰つてかかるような顔してみな叫んだ。

答えもせず、長政は、

「小川伝四郎ッ」

と、さむらい達の中へ呼んだ。

「はッ」

と、返辞を聞くとまた、

「中島左近ッ」

と、呼びたてた。

ふたりとも、平常、彼の嫡子ちやくしや姫たちに附いている傳役もりやくで

あつた。

ふたりが、前へ出て平伏すると、長政はいよいよ早口に、次に

は藤掛三河守を近く呼び、

「三名して、夫人おくと幼児おさなごたちの身をまもり、木下藤吉郎を案内として、疾とく、城外へ落ちのびよ。すぐ行けッ」

と、いいつけた。

そして、屹きつと、藤吉郎のほうへ向つて、努めて、落着きを保ちながら、

「では。お頼み申すぞ」

と、いった。

その足もとへ、お市の方と、幼いものたちが、走りよつて、わツと泣きかけるのを振り払つて、すべての人々へ、

「おさらば」

云いすてるや否、長政は^{おおなぎなた}大薙刀を把^とつて、吠^ほえる闇夜の外へ、
駈^かけだして行つた。

未来^{みらい}の女^{によし}性^{しょう}

城廓の一方に、大きな火の柱が、ぐわうツと立ちのぼつた。駈
け向つて行つた長政は、思わず片手で顔を抑えた。何か、火^{かえん}焰の
翼をもつた木片が、熱風のつむじとともに、あやうく彼の顔をか
すめ、うしろへ飛び去つたからである。

「殿ツ、殿ツ」

「お供つかまつりますッ」

小姓の浅井於菊、河瀬丹三、脇坂左介などがあとにつづいて来た。

「於菊、袈裟は持ったか」

「持ちました」

「よこせ」

長政はそれをとつて、ひらと鎧の肩にかけた。

もうもうと濃い黒煙が地を這ってくる。もう眼前の事実だった。はや城内には、一番乗、二番乗、と名乗り続けて、われ先と争う敵の尖兵が入りこんでいるのである。

火は、本丸の館にも燃え移っていた。大廂の雨樋を奔る火の迅さといつたらない。長政は、そのあたりを潜つて来る一隊の

鉄てつかぶと 甲をみとめて、

「寄手だツ。いで」

と、ふいに横を襲つた。

赤尾新兵衛、浅井石見いわみ、そのほかの側臣や一族も、彼と前後して、敵へ当つた。

焰の下。黒煙の中。

甲かつちゆう 冑は鳴つた。槍と槍、刀と刀とは、噛みあい、喚わめきあつて、またたくまに死者と傷負ておいのみが、大地にのこる。

城兵の大半は、長政に従つてみな存分に戦い、それぞれ華やかな死をとげたという。あとの半数は、傷負ておいやら行方の知れぬものであつた。捕虜となつたものも、自分から降伏して出たのも、極

めて少なかったというのを見ても、小谷の城の最期は、越前の朝倉や、京都の公方家くぼうけのごときものではなかった。——彼を妹むこ智として選んだ信長の最初の眼は、決して誤ってはいなかったといえるのである。

——なお、その夜。

お市の方、また小さい子達を、戦火のなかから救出した藤吉郎と、藤掛三河守たちの苦心も、戦闘以上であつた。

寄手が、もう一刻半いっときはんも、彼の出て来るのを待っていてくれた

ら、やすやすと、城外へ連れ出されたのであるが、何分にも、本丸の館たちを出る時から、もう城内は火となり接戦となっていたので、四人の幼児を、護つて出るだけでも、たいへんだつた。

乳のみ児の末の姫は、藤掛三河守がよろいの上に背負い、次女の初姫は、傳役もりやくの中島左近が背に負った。そして万寿は同役の小川伝四郎がしかと背に結ゆいつけて立つたので、木下藤吉郎も、上の姫の茶々ちやちやに背をむけて、

「いぎ、わたくしへ」

と、すすめたが、茶々はいやがって、どうしても母のお市の方のそばを離れないのであった。

お市の方も、離しともないように、それを抱えて、うろうろしていた。藤吉郎は、ふたりをもぎ離して、

「お怪我けがでもあつてはなりません。たのむぞと、それがしへ仰せあつた長政どののおことばにたいしても。……いぎ、わたくしの

背へ、しつかりと」

やさしく宥^{いた}つてなどいられなかった。彼のことは丁寧でも、彼の語気は怖かった。お市の方は、茶々を抱いて、彼の背に託した。

「各、お支度はよいか。かならずこの木下のそばを離れぬようにして下さい。お市さま、お手を……」

藤吉郎は、背に茶々を負い、片手を出して、お市の方の手を引いて、まっ先にそこから走り出した。

お市の方も、転ばぬばかりに、つづいて出た。

けれど、藤吉郎に曳かれた手は、すぐ、無言のうちに、もぎ離していた。

そして、彼女は母らしく、あとやさきの子達に心をひかれながら、修羅しゆらのなかを、半ば、狂氣したように急いでいた。

とらごぜやま
虎御前山の陣地から、

北の上山田のほうまで本營をすすめて、

信長は、面おもてを焼くばかり近い小谷の落城の火を、じつと見まもつていた。

三面の山、谷間、みな赤い。

城は、巨大な熔鋳ようこうろ炉のように、雄おたけびの沸たぎりをあげている。

——その火花がやがて黒ずんで来て弱まる時、すべてのことは終るのかと思うと、信長は、

「……ばかなやつ」

と、妹の運命を、哭なかずにいられなかった。

比叡^{ひえい}全山の伽藍^{がらん}仏塔も、僧俗のおびただしい生命も、火中に見て、冷然たるものだつた信長の眼に、いまは涙がある。

比叡の殺戮^{さつりく}とは、くらべものにならない、たつた一人の妹のために。

知性と本能と、ふたつを持つ人間には、だれにも矛盾^{むじゆん}はある。だが、信長とすれば、比叡の焼討ちには、大きな信念があつた。あれだけの生命をころすには、あれ以上、無数な世の生命に、のちのちまでの幸福を誓いうるだけの信念を持っていたのである。要するに、大乘の精神をもつてしたので。

浅井長政にたいしては、なんらそういう大意義がなかった。長政が、小乗的な義理や感情で戦つたと同じように、信長の戦いも、

小乗的にならざるを得なかつた。長政さえ、小義をすてて、信長の大義を解してくれたらよかつたと、信長からはいえるのである。なぜならば、彼はおよそ長政にたいしては、最後まで、寛大と考慮の余裕を与えていたからである。

それも、程度がある。こよいはもう彼がゆるそうとしても、周圀の幕將たちがゆるさなかつた。甲州の信玄は死んだといつても、彼の諸將猛兵はなお健在である。しかも一子武田勝頼の俊英は、信玄以上という評さえある。

長嶋の門徒軍も決して、下火になつてゐるわけではない。ただ、信長の蹉さてつ跌をうかがつてゐるものだ。——遠く越前をさえ一氣に攻略しておきながら、こんな北きた近江おうみの一局部に、のめのめと長

陣をすえているなど、実に、愚といわなければならない。

こういう諸將の論や諫言かんげんの出る軍議の席では、信長も、お市の方のことなどを、恋々れんれんと口には出せなかった。

で、もつともよく、自分の愚かな一面も知っている藤吉郎を、
(きょうかぎりの使いとして)

と、城内へさし向けたわけであつたが、まだ明るい頃、吉報の合図があつたにかかわらず、黄昏たそがれても、夜に入つても、それきり杳ようとして沙汰はなかった。

「敵に計られたのだろう」

「殺害されたとみえる」

「この虚に、敵は何かきつと、策謀しているにちがいない」

寄手の諸將は、憤激した。また疑うのあまり、ひしひしと、城^じへ迫^{ようる}つて、口合戦をし始めていたりした。およそ夕刻頃には、すでに一触即発の危機は醸^{かも}されていたのである。

——これまで。

と、信長も思いきった。

そしてついに、総がかりの令を、発したのであった。

だが、そう決したのちも、藤吉郎を犠牲にしたかと考えると、
痛恨^{つうこん}にたえなかつた。

その痛恨は、併せて、お市の方のうえにかかつた。——あれほど、出城の機会を与えてやったのにと、彼女の貞節を、彼の肉親的な感情では、どうしても称^{たた}えることができなかった。

ところへ、黒おどしの具足をつけた一名の若者が、ひっ抱えている槍の穂さきが、ほとんど、信長の身に触れるくらい、向う見ずに駈けて来て、

「あッ。殿ッ」

と、急に立ちどまって、息を喘^{あえ}いだ。

「下におれッ」

「槍をうしろへ置かんかッ」

信長の周囲から睨^ねめつけられて、若者は、べたツと大地に坐つた。

「ただ今、主人藤吉郎が、ここへ参ります。おつつがなく、城中を出られて……」

「なに藤吉郎が、もどつて参つたと」

「はッ。はいッ」

「ひとりでか」

信長の訊ねようは急だつた。

若者は、はじめて気がついたように、自分の口不足を、あわてて云い足した。

「城内から、お市の方様、また小さい和子様たち、お幾人いくたりも背にしばつて、浅井家の傳人もりびと三、四名の衆とごいっしよに……」

「えッ……」

信長は、身を揺すぶつた。

「——相違ないか。見たのか、その方は」

「われわれどもの人数で、途中からお守り申しあげ、はや、焼け落ちる御城門を、驀^{まっ}しぐらに外まで駈け出しました。どなたも、いたくお疲れのていゆえ、安全なところで、しばしお水などさしあげておりまする」

「……ううむ、そうか」

「そのあいだ、寸刻たりとも、わが君におかれては、御痛念にちがいない、先へお触れ申しあげい——と、主人藤吉郎のいいつけによって、いそいで駈け参りました」

「そうか。ああ」

と、信長はなお口のうちでくりかえして——

「して、その方は、藤吉郎の家中で、なんという者か」

「こしょうがしら
小姓頭、堀尾茂助にございまする」

「ゆき届いた使い、大儀であつた。しばし休め」

「ありがとうございますが、いまなお合戦のまつ最中、御用のすみ
ました上は」

と、茂助はすぐあとへ取つて返し、遠い武者声のなかへ駈けこ
んで行つた。

「まったくの……天佑てんゆうじゃ」

信長のわきで、誰か、ふとい息と一しよにつぶや呟いた。柴田勝家で
あつた。

丹羽にわ、蜂屋はちや、佐久間などの諸将も、

「はからずも、およろこびごと、御満足にござりましょう」

と、口々、祝福した。

そのなかに、一脈の感情も、ことばなくながれていた。藤吉郎の功をそねむものと、いちど信長に断念をすすめて、総攻撃の期を早めさせた人々だった。

が、何しても、信長のよろこびは、蔽おほいようもない。彼の上機嫌はたちまち帷幕いばくを陽気にどよめかせた。如才ない柴田勝家は、賀を述べるに氣をとられて、誰もまだ氣のつかないうちに、

「その辺まで、お出迎えに参りましょう」

と、信長のゆるしを得、従者をつれて、駈け降りて行つた。――そこは石ころの多い沢の急坂きゆうはんにあたっている。

やがて、信長の待つ妹は、藤吉郎その他のものに護られて、坂

の下から、彼の仮陣屋のある高地へのぼって来た。一小隊の兵が、前に立ち、松明^{たいまつ}をかざしてくる。

その後から、藤吉郎は、茶々を背負つて、あえぎあえぎ歩いて来た。

信長は、何よりさきに、藤吉郎の額^{ひたい}に光っている汗を、松明のあかりに見た。

次に、敵の老将の藤掛^{ふじかけ}三河守^{みかわのかみ}と傳役^{もりやく}の人々が、各の背に、和子をおぶつて、上つて来た。

「……………」

信長は默然、その子たちを、ひとりひとり眼に迎えていた。しかし何の感情も彼の面^{おもて}にはまだうごき出さなかった。

——すこしとだえて、二十歩ほど間をおいてから、柴田勝家のぼつて来た。勝家の鎧よろいの肩に、白い手が懸かっていた。お市の方の手であつた。

彼女は、半ば喪そうしん心しんしていた。

敵將の夫人とはいえ、主君のお妹なので、郎党の手をかりては非礼にあたる——と、勝家は敢えて周囲に断つて、彼女の腕かひなをわが肩にまわし、一步一步もいたわりながら、いちばん最後に登つて来たのであつた。

「御陣所です。……お市さま。御兄君は、もう眼のまえにおいで遊あそばしますぞ」

勝家は、すぐ君前まであるいて来て、そつと彼女の腕かひなを、肩か

らはずした。

意識が回ると、お市はそのまま嗚咽しつづけた。

女性の泣きぬく声は、一瞬、戦陣の物音も奪ってしまった。あたりの諸将も、腸をかき撈られた。——が、信長のみは、どうしたのか急に苦りきっている。

あれほど愛して、実に、たった今し方までも、案じぬいていた妹であるのに——と、諸将は、彼が狂喜して、お市どのを迎えてやらないのが、不審でならなかった。

（何が御気色を損ねたか？）

藤吉郎すら、ふと解せなかった。

信長の側臣が、つねに苦しむのは、主人のこうした気心の変り

方である。その鋭感な顔いろを見ると、みな沈黙をまもり、沈黙の中に、ただはらはらばかりしているの、当人の信長も、容易にまた機嫌を直すことが出来かねてしまうのであつた。

その機微きびを読んで、氣むずかしく閉じられた信長の眉まゆをほぐす者は、侍臣のうちでもそう多勢はいなかつた。藤吉郎と、いまここにはいないが、お氣に入りの明智光秀ぐらいなものだつた。

藤吉郎も、しばらく見ていたが、だれもこの場合を和めなごようとする者もないので、ずいと、お市の方のそばへ寄つて、泣きあえぐ背へこう云つた。

「……さ、さ、御方おんかた。お側へすすんで、過ぎこし方のおはなしやら、このたびのお礼をも仰せなされませ。ただ、欣うれし泣きには

かり暮れておいで遊ばさずと」

「……………」

「どう遊ばしたものです。御兄妹の御仲ごきょうだい おんなかではありませぬか」

「……………」

——が。お市の方は、何としてもうごかなかった。兄の信長に、顔をあげて見せなかった。

明らかに、彼女はまだ、良人の長政を忘れかねていた。——長政を思うとき、信長は良人を滅ぼした敵将となり、身は、敵陣のなかに辱められてはずかしいる捕虜にひとしい心地がするのだった。

信長はひと眼見て、妹のところがすぐ分った。そして、妹の安全に満足するとともに、兄の大愛を解さない愚痴な女ところが、

抑えようもない不満となつて、何か、面倒くさい気もちすらジリジリ起つて来たのである。

「藤吉郎」

「はいッ」

「抛ほうつておけ。要いらざることをいわんでもよい」

信長は、つと床しょうぎ几ぎを立つた。そして一方の陣幕を払つて、

「……小谷も墜おちたな」

と、火の手をながめた。城を焼く火も、そのの喊かんせい声せいも、下火になつて、峰や谷には、残月のひかり白く、夜の明けるのを待つていた。

ところへ、一手の将と部下が、勝かちどき鬨どきをつつみながら駈け登つ

て来た。そして信長のまえに、浅井長政以下の首を披露した。

お市の方は、身もだえして泣き声あげた。母にとりすがって、子たちも泣き出した。すると信長は^{だいかつ}大喝を発して、

「うるさいッ。幼い者たちを抱いて、あっちへ行け。勝家」

「はッ」

「そちにあずける。お市も、幼い者たちも。……はやく眼に見えぬところへ連れてゆけ」

彼は、なんの矛盾も感じることなく、そう大声でいって、そして次に藤吉郎を呼びたて、

「浅井が城のあとは、そちに与える。あとの始末、施政、何かと心して守れよ」

彼は、落城を見とどけると、すぐにも岐阜^{ぎふ}へ帰るつもりらしい。
 お市の方も、泣く泣く麓^{ふもと}へ扶^{たす}けられて行つた。やがて、この女性^{せい}は、のちに勝家の室^{しつ}に嫁^かした。

もつと、ふしぎな将来を身にもつていたのは、その宿命の母とともに、戦火の山を降りた三人の幼い姫たちであつた。

すなわち長女の茶々は、のちに大坂城での淀君^{よどぎみ}となり、初^{はつひ}

姫^めは京極^{きょうごく}高次^{たかつぐ}の室となつた。そしていちばん末の姫は、二

度嫁して、二度良人にわかれ、三度目に徳川二代將軍秀忠^{ひでただ}に嫁いで、家光を生み、東福門院^{とうふくもんいん}を生む大幸にめぐり会つた。

母と妻

あくる年、天正二年の三月初めであつた。

寧子^{ねね}にうれしい便りが来た。いうまでもなく良人の藤吉郎からである。

折返し、母うえの御文^{おんふみ}、そもじの文、いつもくり返しくり返しよみもうし候

彼女や母から出した手紙にたいしての返辞とみえる。藤吉郎の手紙にはいつも妻や母をよろこばそうとする意志があふれているが、こんどの便りは、わけても、文字どおりふたりを狂喜させることだった。

今^{いまはま}浜のふしん、まだあら壁も所々ながら、母うえにもおい

そぎ、そもじにも久々にて会いたさ、待ちわびられ候えば、すぐ御したく、おうつりあるよう、そもじより母上へつたえ賜われかし、余よの事、近々の御見ぎよけんにゆずり、あらあら右まで

藤吉郎

これだけでは、何のことか想像もつきかねるが、この吉報が来るまでには、正月以来、幾たびか、良人と妻のあいだに、書簡の往復があつたものである。

——と、いうのは。

ここ久しく、藤吉郎は北きた近江おうみの山間に陣して、転戦また転戦、

やや小康を得た時でも、各地に奔命して、身に暇いとまもなかったが、
こんど浅井、朝倉の平定を機として、信長は、

（そちの家族どもも、近江へ迎えてはどうか）

と、初めて、彼の領土に、その永住を認め、また家庭を移すこ
とまですすめたのであった。

小谷の攻略については、何といつても、彼の勲功くんこうは、冠絶かんぜつ
していた。

けれど、その功にたいして、これまではまだ一将校にすぎない
藤吉郎へ、

（その城へ住め）

と云い、また、

（浅井の旧領のうち十八万石はそちに与えるであらう）

と、賞した信長の酬^{むく}ゆるところも大きかった。

のみならず、信長は、

（以後、木下の姓をかえて、羽柴^{はしば}と名のれ。丹羽^{にわ}五郎左衛門の一

字と、柴田^{しばたしゆりかついえ}修理勝家が一字をとり、羽柴と申すがよい）

と、姓さえ与えた。

丹羽、柴田のふたりは、どっちも織田家の重臣中の首席だった。その人物も、信長や藤吉郎の観^みている以上、世間では大きく評価している宿将である。

（ありがとう存じます。この後は羽柴筑前守秀吉と名のりまする）
彼にしても、不足のあるはずはない。筑前守に任ぜられたのも、

この頃のことである。一躍、大名の列に入り、所領しよりよう二十二万

石。——木下藤吉郎ではそれらしくない。そう信長は思いやつて改姓させたものかも知れない。なにしても、秀吉の擡頭たいとうは、譜代だいいの宿将とこの秋ときに肩を並べてしまった。

しかも彼は、小谷おだにの城に甘んじなかった。

（この城は、保守的だ、退いて守るにはいいが、進出には不利な地である。なおなおこの上にも大志をいだく主君に仕えながら、かような所に、殻からをかぶつてはいられない）

彼は、三里ほど南の湖畔にある今浜いまはまこそ、わが住むところと眼をつけた。

岐阜ぎふのゆるしを乞うて、すぐ修築にとりかかり、白堊はくあやぐらの櫓、堅

壁鉄門んべきてつもんは、もうこの春、でき上つていたのである。

（出来上つたら、すぐ今浜の地へ、家庭を移そう）

と、秀吉から疾とく便りしたので、彼の妻はもとより彼の母も、一日もはやくがよいと待ちわびて、幾たびか手紙で急せいでいたことが、ようやく、きような返辞となつて、洲股すのまたの留守の家庭にとどいたのであつた。

洲股の城はそのまゑに、当然、信長へ返上してある。秀吉の母と妻の寧子ねねとは、廓内やしきの一邸に住んでいたので、旅装もそう暇どらなかつた。

数日ののち、今浜から蜂須賀彦右衛門はちすかの一行が着いた。迎えの役としてである。老母と寧子ねねは塗駕籠ぬりかごに乘せられた。前後につい

てゆく將士の装いも平和である。百人にちかい行旅の列には、女人もあり童女もあり、沿道の畑からながめると実にきれいだった。「岐阜の御城下を通していただくことじゃ。そなたは秀吉の妻として、信長様にお目通りをねがい、日頃の御恩をよくお礼もうし上げねばなるまい」

前もつて、母からいわれていることである。寧子はそれがとも重任のこちがして、そのみが苦勞になつていた。——岐阜城へあがつて信長の前に出たら、身がふるえてなにもいえないのではなからうかと。

けれど。

その日が来て、母を旅舎にのこし、ひとり種々くさくさな土産みやげものを

携たずさえて、いぎ、岐阜の殿中へあがってみると、心がすわったというものか、取り越し苦勞はわすれていた。

それに、初めて仰いだ主君が、想像のほかで、どんな話も気さくにするし、

「そもじも、筑前の長い留守をあずかり、老母への孝養やら、何かと、骨折りであつたろう。いや、それよりも、淋しかったであらう」

などと親しみぶかく云いかけられたので、彼女は、自分の家も、この君の端につながる一家族であつたことに気がついて、すっかり打ち解けた気もちになった。

「めっそうもないおことば、ほかならぬ戦陣の留守、安あんのん穩で暮

してられるさえ、朝夕もつたいないこととぞんじておりますのに、さびしいなどと考へては、罰ばちがあたりましょう。ただお母かあ様には、はや御老年でございますから」

云いかけると、信長は笑い声にうち消して、

「いやいや、女ごころは女ごころ、包まいでもよい、さびしいのは当りまえじゃ。留守のさびしさを、慥しかと、噛みしめてこそ、持った良人のよいところも一ひとしお深く分るというもの。誰やらの連れ歌んがにも、下の句はわすれたが——

旅に出て妻ありがたし雪の宿

とやらあつたぞ。おそらく筑前も待ちわびておろう。それに今浜の城は新しい。戦陣の留守は長く辛かろうが、ふたたび家庭に

会えば、また新妻新にいむこ聾の頃の思いを新たにすることができ。

軍いくさびと人 人ならではの味わい得ぬよろこびといえような」

「まあ、そのような……」

寧子は、襟もとまで紅あかくして、両手をつかえていた。そぞろ、

十六の年が、想い出されているにちがいない。——信長はそう見ながら微笑した。

食膳きようが饗あけされた。朱の杯も添えてある。信長からそれをうけて、

ひと口、美しく飲んだ。

「寧子……」

笑いまじりに、信長はまた氣がるにいう。

「はい」

何ごとかと、寧子はひとみをあげた。ようやく正視することが出来た頃おいである。すると信長がいきなり云った。

「ただ、りんき愔気はすなよ」

「……はい」

何の気なく答えてしまったが、寧子はあとから、かあつと熱くなつた。というのは、良人の秀吉がいつか、自分でない美しい女性をつれて、この岐阜城にあがつたという噂をきき、ふと、ふだん口に出さないことを、誰やら側の者にもらした覚えがあつたからである。

「あれはな。筑前のことじゃ。——あれはちと、そのほうの行儀はよくないようだ。……しかし、ちやわん茶盃でも、あまりむきず無疵はふぜい風情

がない。たれにも一癖ひとくせはあるものよ。それも凡物の大疵おおきずは困りものだが、藤吉郎ほどな男は、数ある男のうちでまず少ない器うつわだろう。そもじはよくもあれを見つけたな。信長は平常から感じおった。いったい、かような男を生涯の持ちものと選んだ女子おなごとはどんな女子であろうかと。——それをきようここで出会うて、なるほどと思うた。筑前も好いたはずなれとな。……よいか、悵り気んきはすな、仲よく暮らせよ」

女性の心というものをこの殿はどうしてこうよくご存じなのだろうか。恐ろしい気もするし、また良人にとつても自分にとつても、頼もしい御主君ではあると、真実思われた。彼女は、うれしさや間まの悪さや、どうしていいか知れないような心地だった。

——ともあれ、こんなふうに、寧子の印象はよかつたし、御前の首尾しゅびも上乗じようじようであつた。

そして岐阜城を退さがる折には、とても身に持つてなど帰れないほど、莫大な賜わり物をもらつた。

目録だけを先にいただいて、彼女は城下の旅舎へ歸つた。そして待ちかねていた老母へいちばん多く語つたことは、

「信長様といえ、たれもみな震ふるい恐れるので、どんなお方やら

と思つておりましたら、世にも尠ないほどお優しい御主人でいらつしやいます。あんな優雅な殿が、馬上となれば、鬼神おにがみも恐れ

るようなお人になるのかと、思わず疑われました。お母様のこと
も、何かとごぞんじで、よい俵せがれをもち、日本一の幸せ者ぞと仰せ

遊ばし、またわたくしへも、筑前ほどの男は、海内かいだい幾人もおるまい、よい良人を選び当て、そもじも眼が高いことよ——などとお戯れたわむも仰つしやいました」

と、いうようなことだった。

老母も眼をほそめて、

「そうか。そうかいの……」

と、さも欣うれしげに聞き入った。

およそ名将といわれるほどの人物は、麾下きかの将士の心服をうけているばかりでなく、個々の将士の家族たちからも、頼もしい親柱として慕われもし尊敬をうけていたようである。もつともそれくらいな景仰けいこうをあつめていなければ、それらの最愛な良人や、

ふたりとない子を、自分の馬前で死を競わせることはできなかつたに違いない。それもただ華やかに散るだけでなく、死ぬ者も、あとに残る者も、ともにそれを歎びとし、誇りとしたことを見て、将たる人の平素には、戦略や政治以外にも、なみならぬ心がけを要したであらうと思ひやられる。

民衆の杞憂きゆうを知らない、また世間や人間を知らない、いわゆるお大名とか殿様なるものは、まったく泰平の永きに狎なれた末期の子孫のことで、信長の時代、実力がすべてを決した戦国の世では、そんな特殊人の存在はゆるされなかつた。義昭よしあきでも義景よしかげでも、また今川義元のごときでさえも、位置や名門に晏如あんじよとしていれば、たちまち時代の怒濤くつがえが覆して行つた。

だからこの時代に立つ一方の大將たる資格には、高い教養と位置と権力のほかに、庶民の実体がよく分っている者でなければならなかった。一面、文化人であるとともに、一面、野性人でもあることが必要だった。

旧態の頹^{たいはい}廃を一掃するにも、生々と新たな建設へかかつてゆくにも、そう二つの機能が、絶対な力だった。純粹すぎる文化人でもいけないし、純然たる野性だけでも成^{じょうじゆ}就^{ひと}しないことだった。

信長はどうやらその資格に適合した大將であつたらしい。

とにかく、寧^ね子^ねも秀吉の母も、それ以来は、一^{ひと}しお君恩をふかく感じて、夜も岐阜城のほうへ足を向けて寝ない——といったよ

うな心を真実にいだいて、それがまた母子のあいだでも、夫婦のあいだでも、自分が主人として家の子郎党をしつけるにも礼儀や情操の基本になった。

甚だしい乱世にも、平和面の社会や家庭の内部までは、さまで乱脈にならずにいたのも、個々の家庭や主従のうちに、そうした強固な情操と家風の美があつたからであらう。

——さて、母子おやこの旅はつつがなく、不破ふわをこえて、春の湖を、やがて駕籠かごのまえに迎えた。

その日今浜の賑わいは、今浜が始まって以来のものであつたという。いや、今浜という地名まで、秀吉が築いた新城とともに、長浜と改められた。町をあげての祝賀には、その意味もふくまれ

ていた。

たの
楽しみここにあり

春あけぼのの曙——。

湖水はほのかに、暁くれないの紅をうつしてはいたが、まだ所々、かすみ
みが深い、山は暗い。

「お目ざめ。——お目ざめですぞ。——お目ざめになられました
ぞ」

まだ白壁も真新しい長浜の城内では、はやくも、この有明ありあけを
燈ともし灯びがうごき出している。

いま。

秀吉の寢室の次から、宿直とのいの部屋や小姓部屋へ、いちいち声をかけながら、大廊下を表まで触れて行つたのは、ゆうべ寝ずの番にあたつていた堀尾茂助もすけだつた。

諸所の部屋部屋で、

「おはやいなあ」

「それッ」

と、起き出る気配がいちどにうごく。

虎之助も、起きていた。

ななつ七歳の時、手をひかれて、初めて洲股すのまたの城へ母と共に頼つて

ゆき、小姓として仕えてから九年、虎之助ももう十五になつてい

た。

ちか頃では、先輩の市松にも、なかなか負けてはいなかった。

福島市松はすでに二十歳^{はたち}をこえていたが、今も、

「^{おいち}於市どの。おいッ、於市どのツてば。——殿さまがもうお目ざめだぞ」

と、年下の彼に起されていた。

市松は、むつくり身を起したが、春眠^{アカツキ}曉ヲ覚エズ——といった

ように、渋そうな眼をこすりながら、

「まだ暗いではないか。雀みたいに、夜さえ明けると、よく躁^{さわ}ぐやつだ。あわてるな」

「じゃあ、寝ていたらいかがですか。殿さまはもうお起きになつ

て、きちんとしていらつしやるんだから」

「ほんとか」

いやおうなく、市松も衣服を着けて、

「どうして、今朝はこんなに、お早いんだろう。見ろ、まだ有明
けの月さえあるに」

「だつてきようは、すのまた洲股から御母堂さまや夫人おくがた様がお着き

になる日だろ」

「それにしたつて、長浜へお着きは、ひる午ごろというご予定ではな
いか」

「ご予約はそうでも、きつと、お心のうちで、待ち遠しくて、お
やす寝みになれなかったにちがいない」

「そんなことがあるものか。どんな戦場の中でも、御大将が寝なかつたことなどありはしない」

「それとこれとは、はなしが違ふよ。於市どのなどは、親不孝だから、殿のお気もちなどは、分りつこない」

「こいつめ、また朝から生意気な」

睨みつけたが、この頃では、於虎にたいして、その睨みもあまり効きめがない。

秀吉は、風呂が好きだ。一面、無精ぶしょうで身のまわりをかまわないくせに、湯にはいることは好きである。

何かにつけ、一風呂浴びようという。戦場へ出ても、長陣の時

などは、野原に坑あなを掘らせて、坑のなかに桐油紙とうゆしをしきつめ、それへ湯をいっぱい汲みこんで、浸ひたつたりした。

「この野天風呂の味はこたえられん。湯の中から青空を仰ぎ、飛ぶ鳥の腹を見ているのはいいものだ」

入浴ぎらいな者には、何がそんなにいいのか、気が知れなかった。思うに、彼の入浴好きは、お洒落しゃれや潔癖けつぺきからのものではなく、少年の頃、逆境と漂泊あかの垢ゆあにまみれて、ふた月も三月も、湯になど浴ゆみしなかったことはままあったので、その当時の慾望が、やがてあたり前に湯にも入れる身分になってから、いつとなく満された上に「好き」というまでに習慣づけられて来たものではなかろうか。

今朝も起き出ると、もう風呂場だった。

ばしやばしやと、鶉うが浅瀬で騒いでいるような音がする。好き
なかわりに怖ろしく早湯である。

「おふく於福、於福」

湯殿の中で呼びたてていた。

於福とは、例の茶わん屋の落ちぶれで、両三年前、湖畔の造船
場で人夫をしていたのを、秀吉に救われて、以来、横山城の庭で、
瀬戸物焼きなどしていた男である。

侍の仲間にはいつて、茶わんばかり焼いているのも能がなさず
きる。いちど戦場へ出て、拾い首でもして来いと、幾いくたび度か秀吉
にいわれたが、

——戦争ばかりは。

と、ふるえ上がった。無理にも連れて行くとからかえば泣か
ばかり謝あやまるのである。

だから四十面しじゅうづらをさげながら小姓組の於虎おとらや於市などからも、
臆病者臆病者と、のべつ擲揶やゆされているふうなので、秀吉はつね
に不愜ふびんに思い、庭から引き上げて、余り人に接しないでよい湯殿
番に召使つていたのであつた。

「お呼びでしたか」

「於福か。着物、着物」

「いま、お剃かみそり刀ととのを調えておりますが」

「顔か……。いや、上がってから剃そろう。はやく衣服をよこせ」

「もうお上がりで」

於福はくるくる舞いして運んでゆく。生来が好人物のほうなのである。あわてて秀吉のうしろへ廻つて、背なかを拭き、足を拭き、爪先まで拭いて、杉戸をひらき、その傍らにうずくまる。

「やあ、明け放れたな。天気は快いぞ^よ」

誰へいともなく秀吉は大声でいいながら外へ出た。

小姓の虎之助と市松のふたりが、彼の佩刀^{はかせ}をささげて、扉口^{とぐち}のそとに畏^{かしこ}まつていた。

「いま起きたのか」

「はッ。……ちと、寝坊いたしました」

「いや、けさは、わしが早かったのだ。髯^{ひげ}を剃^そろう、市松、鏡を

立てい」

「はい」

広い居間のすみに、鏡台をすえかけると、秀吉はみずから場所をさしずして、もつと明るい窓の下に置けという。

そこの書院窓には、あさひあかさ旭が紅く映していた。鏡をおくと鏡にもキラキラする。しかし彼はまぶ眩しさなどは意にもかけず、顔をしかめて、あご頬や顎を剃りはじめた。

彼は総体に毛深いほうであつたが、顎などは、幾日おいても、ひげ鬚が伸びなかつた。——というよりは、まだ生え揃わない感じである。精神的には急速に発達して来たが、肉体の发育は人なみより遅れている傾きがどうもあつた。そのせいでもあろうか、時々

彼は稚氣ちぎを演じる。幾歳いくつになつても、どこかに、世のつねの大人らしくないところがある。

「さ、よいぞ。剃刀は下げてよい。こんどは髪だ、市松、うしろへ廻つて、髪びんの根を締めてくれい、少々、髪びんだらいの水をしめして」

「お筭こうがいを拝借いたします」

市松は、主人のうしろへ坐り、秀吉の脇差に挿してある金象きんぞう嵌がんの筭がをかりた。

それを、鬢びんだらいの水にひたし、秀吉の髪を撫であげてから、
「よろしゅうございますか」

「よし、よし」

「もすこし、お髪の毛を、かたく締めましょうか」

「いや、そう固いと、眼じりが吊る。このくらいでいい」

「殿さま」

「なにか」

「きょうに限って、暗いうちにお目ざめ。そしていつにないおめかし。みな不審^{ふしん}がつておりまする」

「なにが不審。あたりまえではないか。日本一の恋人に会う日であるぞ」

「ははは。殿さまが、真顔をなすつて。あははは」

「市松、何を笑うか」

「でも。……いえ、そうお聞き遊ばしたなら、さだめし、夫人^{おくがた}さ

まにも、およろこびなさいましょう」

「妻のことをいうたと思うているのか。寧子^{ねね}は二番めじや」

「二番めという仰せは？」

「わしのいう第一の恋人とは、母者人^{はじゃひと}のことよ。わからんか」

「あ。左様でしたか」

「わしが寡^{やつ}れ顔などしていたら、苦労性な母者人はすぐ、せいで
もよい思^{おも}い遣^やりを子になさろう。子の寡^{やつ}れを見て、そう思うたら
もう、この新城の壮麗も結構も、女親の胸にはみな苦労のたねと
なるのみで、ここに住もうて、心から楽しんで下さるまい」

「おそれ入りました、そういうお考えとも知らずに……」

市松は、両手をついてから、秀吉のまえの鏡立を片よせて行つ

た。けれど、その市松よりは、秀吉のかたわらに、佩刀はかせを持って、ちよこなんと坐っていた虎之助のほうが、いまの主人のことばを、じつと心から聞き入っていたふうであつた。

ふと、秀吉は見て、

「於虎」

「はい」

「そちも会いたかろう。故郷ふるさとの母に」

「会いたくありません」

「なぜか」

「でも、私はまだ、殿さまのような手功てがらをたてておりませんから」

「ふん……ういことをいうやつ」

と、撫でもやりたいように虎之助のすがたを見て、

「そうだ、この長浜の城下に、塚原小才治つかはらこさいじという兵学者がおると聞いておる。近日、塚原の道場をたずねて、勉強に通え。精出して、修行しておけ」

と、いった。

虎之助は、欣うれしそうだった。そこへ近侍が、朝の茶を運んですすめた。秀吉は浴後の渴かつをおぼえていたらしく、すぐ飲みかけたが、何か、思い出したように、

「薄茶をくれい」

と、云いだした。

彼の家中にはまだ茶道衆さどうしゅうはいなかった。そういう閑人ひまじんは無

用であると思ひこんで召し抱えずに來たものである。ところが小谷の城中で、あの戦時中、ふと、一茶室に坐つて、自分とよく似た猿の地紋のある釜などを眺め入ったときから、急に、これはいものだと、おおぎよう大仰に感心したらしい。そう感じるとまた遮二無二、熱くなるのが、彼の性情でもあつた。

「はッ……薄茶で。心得ました」

たれが点^たてるのやら、その道の者はいないので、侍臣のうち、少々は茶^{ちや}筥^{せん}の持ち方ぐらい知っているのが、がちやがちやと掻きまわして来るにちがいない。

それでも、秀吉は、だいまんえつ大満悦である。主君の信長などのすることとは度々見ているので、茶わんを持つて、茶わんに礼をすること

だけは知っている。

「ああ、うまい」

大まかに、彼は飲んで、掌てのうえの茶わんを、しばらく眺めていた。

「これは横山城の庭で、於福が焼いた茶ちやわん盃わんだな」

「左様でございます」

侍臣は答えた。

秀吉は、とつこうつ、茶盃の裏を返してみたり、また下に置いてその姿など見入りながら、

「……。何となく面白い。やはりあの男にはあの男の天分がある
とみえる。於福を呼べ、於福を」

と、急に何か思いついたらしく、やがて湯殿番の於福が、恐る前へ来て坐るとすぐ、

「そちは今日から湯殿番はやめろ。どうもそんな職分は、そちの天性でないらしい」

と、いった。

於福は、小心な眼をみはつて、秀吉の顔を仰いだ。

何か粗相そそうでもして、役目を取りあげられたようにでも考えたらしい。気の弱い眼にすぐ涙をいっぱい溜ためた。

「はて、おかしな男、何を悲しそうにするか。わしは叱言こいごをいつたのではない。そちの天分をふと見つけたから、忘れぬうちに、そちに将来の行く途ゆみちを与えてやろうと考えたのだ。硯すずりを持って来

い」

「はい」

小姓が立つて、すぐ前におくと、秀吉は懷紙をとりあげて、無造作に、さらさらと手紙をかいだ。あやしげな当字あてじや仮名まじりで、書風も至つて稚拙ちせつであつた。

ついでに手文庫のうちから、なにがしかの金を取り出して、書簡とともに於福に与え、

「これを持つて、泉州せんしゅうの堺さかいへ行くがいい。かねは路用に。てがみは堺の千宗易せんそうえきというものに宛ててあるから、その宗易に会つて、身のふりかたを計るがいい。そちの天分を生かすように考えてくれるだろう」

と、教えた。

「では、お暇いとまを下さいますので」

「そうだ。おまえのために」

「ぜひもございません」

於福は、よろこばないのみか、手をつかえて、泣いている。天分天分としきりにいわれるけれど、彼自身、何のことか分らないのである。むしろ秀吉の温情から遠ざかることが、将来のことより、現実**に**悲しかった。

「ははは、わからんやつだ。立つ日はいつなと、氣ままにせい。べつに急せきたてるのではないぞ。ただ忙せわしくなると、わしが忘れるから、にわかに云ったまでだ……いや、うれし涙かしらぬが、

涙など見せるな、きようはわしの歡びの日だ」

彼は風の子のようにぷいと庭へ出てしまった。朝陽あさひは土いちめんにこぼれている。すたすたと本丸の奥の丘へ上つてゆく。一ひとつ叢らの林のなかに、古い神社がある。ほがらかな拍手かしわでの音が聒こだまする。

降りて来ながら、

「どうだ、きようの晴天は」

と、まるで自分が創作した天気のように、小姓や家来を顧みて誇った。

それから朝飯を食う。

箸はしをおくと、もうそこにいない。

武者溜りだまをのぞいて、若ざむらいたちへ、快活な声をかける。

何か、冗談でもいったとみえる。若ざむらい達さかが旺んに笑う。

「おいおい、厩うまやの者」

「はッ」

「馬はみんな元気か」

何十頭もいる馬までを、彼は家族のうちと心得ているらしい。

厩方の侍は、両手をつかえて、その健在を答えた。

「きようは、どの馬に乗って、母者人のお迎えに出ようか。どれ
どれ。草履ぞうりを出せ」

厩方を案内にして、自身、乗馬をえらびに出かけた。

細長い厩きゆうしや舎しやには、悍氣かんきのつよい軍馬がたくさん顔をそろえ

ていた。これもみな戦陣の功労者である。秀吉の顔を見ると、わかるのか、怖るのか、いなな嘶いたり、ひづめ蹄を鳴らしたり、さわ躁がしいこおびただと夥しい。

「や？ ……。なんだあの太鼓の音は」

秀吉は耳をたてた。馬がさわ躁ぐのもそのせいであろう。遠く城下町のほうで、太鼓や鉦の音かねがさか旺んに聞えはじめた。

「あの太鼓たいこ囃子ばやしはなにか？」

秀吉がいぶかると、うまやしゅう厩衆のひとりが答えた。

「城下の百姓町人たちが、きょうのお城入りを祝うとて、きのうから踊り囃子の稽古をしているのでございます」

「いつぞや見たあの踊りか。はてな、小谷から長浜へ移る折の、

入城祭りはやったでないか」

「いえ。今日のは、御母堂さまと奥方さまの、お城入りをよろこんでござりまする」

「きょうのわしの歓び。それはわしの一私事としておるが、領民たちまで、そのように飲んでくれておるか」

「かたがた、旅路から着くおふた方の眼をおなぐさめ申さんと、道には砂をまき、戸ごとには花見幕やら軒飾りをして、それは賑やかな由にございます」

「わしも、早く見たいな」

「まだお時刻までには」

「どうしてきようは、こう午^{ひる}まえの日が長いのであろうか」

「暗いうちからお目ざめでしたものを」

「あ。そうか」

まだ母に会わないうちから、彼はそろそろ子どもツぽくなり始めている。母と妻の駕籠かごは、もう湖を見ているであろう、もうどの辺りへと、想像していた。

「——間もなく御城下はずれまでお見えでございます」

城門へ先触れの一騎が告げて来る。その頃、彼はもう城門内に駒を立て、家中の面々およそ二、三百人、徒歩かちもあり騎馬もあり、
肅しゆくぜん然と、隊伍を作つて待つていた。

城門が開いた。

正月のように塵ちり一つない。幅のひろい道が城下町まで見とおし

である。

貝の音につれて、さんさん燦々、肅々、秀吉につづく隊列は流れ出した。その日の秀吉の服装はいうもおろか、小姓、近習以下、列のすそに至るまで、さながら絵巻を繰くるような美しさだった。

町中の往来には、犬の子も通っていない。金屏風きんびょうぶや作り花の軒が両側に見え、家先には、家じゅうこぞつて晴着をきて筵むしろに平伏していた。そして秀吉のてかてかした顔が行列のながれにつつまれて通ると、横町や裏辻のほうで太鼓ばやしと俗謡ぞくようの節だけが聞えた。

てんてこてん……

おん大将のお装束しょうぞくには

金糸赤地きんしあかじのよろい召し

よろい召しよろい召しよろい召し

銀のかぶとの

赤糸あかいとしめさせ

朝日にかがやく

海山に海山に海山に

お馬の先の

のぼりのだしには

金のひょうたん

ぴかぴかとぴかぴかとぴかぴかと

御馬のあしおと

たかく召されて

あつぱれ大将

おんたいしょう
御大将 御大将 御大将

いさみ進める

若武者ばらには

紫あやの母衣ほろかけて

母衣かけて母衣かけて母衣かけて

ご威勢たのもし

村々おさまり

五穀こくは成じょう就じゆ

大安心大安心大安心

平和の歌声はどよめいて、埃ほこりも瑞氣ずいきの虹に見えてくる。この俗謡は秀吉が小谷から居城を長浜にうつした時、領民がよろこびのあまりその入城の折に踊り狂ったもので、歌詞はもとより俚翁りおうか文字のない市人の作で拙つたないが、領民の真情は、おのずからその

張りあげる諸声もろこえのうちにこもっている。

「この辺でお待ち申すのか」

秀吉は促うながされて駒を降りた。松並木の見通せる城下口の道みちの辺である。そこに飯の休み茶屋が設けられていた。

「まだお見えなさらぬか」

彼はそこに憩いこいながら床几しょうぎに腰をすえているあいだも、いく

度となく軒先へ出ては、並木道を眺めやっていた。

やがて午近ひるく——彼方かなたから一列の人馬や駕籠が見えて来た。陽

は急に輝かしく、蝶の影のほか舞うものは塵もなかった。

「母上ははじやひとだな。母者人ははじやひとだな。……あの、前に参るお駕籠が」

伸びあがりつつ秀吉は待ちもうける。左右の家臣に何かいつて

いる顔つきなど、まるで他愛ない容子^{ようす}だった。でも慎んでいるのか、寧子のことはそう口に出さなかった。

「——大儀ツ、大儀」

彼が大声を発しながら足を前に踏み出したときは、行列は仮の茶屋のまえに停まり、先駆の蜂須賀彦右衛門が駒を降りて、秀吉のほうへ一礼をしていた。

その彦右衛門以下、大勢の供の者に、秀吉は大声で、道中の労をねぎらったのである。そして自分はすぐ、二つの塗駕籠の側へすすみ、

「寧子、元氣か」

と、まず妻へよびかけ、彼女のニコとほほ笑む顔を、久しぶり

に一目見ると、すぐ老母の駕籠わきへ寄つて、ひざまずいていた。「藤吉郎でございます。お迎えに出ました。母上、すこしその茶屋でおやすみ遊ばしてはいかがですか」

老母もにこりと顔を見せた。やわらかい春の日は、この人の胸にこみあげている幸福感と感謝をあざやかに見せていた。それだけで秀吉はもういっぱいな満足につつまれ、かつてのどんな楽しみも、この一瞬には及ばない気がした。人生の至上の楽しみは、今にあることを意識して胸に刻んでいた。

「秀吉どの、お手をおあげなさい。あなたはもう一国の主、あるじ路ばたの土に指をつかえることがありますようか」

むかしのように、膝へのせて、駕籠のうちへ抱え入りたいほど

な母性の愛をその眸ひとみにあふれるほど湛たたえながら、老母はかえつて、
こう躡たしなめるようにいった。そして、

「旅の道も、一里来ては休み、二里来ては憩いこい、彦右衛門やその他の衆が、よういたわってくれました程に、なんのつかれもおぼえてはおらぬ。すこしも早くそなたの新しい住居が見たい」

との希望だったので、秀吉は駒を招いて、馬上に身をうつし、老母の先駆をして、長浜の城へ導いた。

そのとき、城下町全体は、祭りのような賑わいに沸いていた。およそ貧しきも富めるも、老いたるも若いものも、城主の歡びを自分の歡びとし、秀吉の孝養を自分たちの親孝行のように、

「御母堂さまのお目にとまるのじや。お母堂さまのおなぐさみじ

や」

とばかり、辻々に花車屋台だしを押し出し、濠ほりばたには踊りの輪を幾つも作つて、城門がそこに見えながら、城門のうちに入るまでには、半刻はんときもかかつたほどであつた。

母と妻ともなを伴つて、北曲輪きたぐるわの一廓かくに新たに造つた住居を秀吉は

見せてあるいた。そこはうしろに伊吹連峰をのぞみ、前に大湖の春と四明ヶ嶽を見はらし、庭園の泉石せんせきには花木珍石を配し、どこと一点のいうところもない殿造りだつた。

けれど、老母は、ふとさびしげに、秀吉を顧みて云つた。

「畑がないのう。……ここの御本丸には、わしが菜や豆など作る畑地がないの」

秀吉は母の顔を見ているきりで、うなず頷きもしなかった。頷けば眼のなかの涙がこぼれ落ちそうだったからである。

また寧ね子ねは。

同じ本丸ながら遠いむこうの一廓に、べつな女性の住むらしい一屋根がなおあることを後に気づいていた。そして岐阜城へ立ち寄ったとき、主君信長がそれとなく云ったことばを思い出して、みずから深くいまし戒めていた。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（四）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年6月11日第1刷発行

2009（平成21）年12月1日第22刷発行

初出：「読売新聞」

1939（昭和14）年1月～1945（昭和20）年8月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第四分冊

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>